

# 『プリズムの瞳』 機動戦士ガンダムビルドダイバーズ

ビルダー林檎

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

僕達も、いつかは「卒業」しないとイケないのだろうか。

112039年日本。VR機器がより身近になった世界。総務院高校に通う高校生の神取彰人はVR機器を用いたフルダイブ式MMO「GBA」〃ガンプラバトルアドバンス〃内でのガンプラバトルで世界大会に出場した後、燃え尽きた日々を送っていた。彼がガンプラバトルで得た物。失った物。子供から大人になるにつれて手放さなければならぬもの。手放してはならぬもの。ビルダー達のほろ苦い青春が始まる。

# 目次

## 第一章 「First impression」

第0話 『始まりと終わりの境界線』 1

第1話 『ガン普拉バトル!』 6

第2話 『すれ違う2人』 15

第3話 『蜃気楼の少年』 26

第4話 『想いを胸に』 37

第5話 『それは舞い散る桜の様に』 57

第6話 『謹賀新年』 72

第7話 『砂塵の決闘』 89

第8話 『人形供養祭 前編』 104

第9話 『人形供養祭 後編』 121

第10話 『さよならを言う前に』 136

## 第二章 「Second world battle」

第11話 『鏡合わせの世界』 148

第12話 『邂逅』 165

第13話 『三者三様』 171

第14話 『旗艦ニュークリアス』 180

第15話 『君に会うために』 194

第16話 『真実』 204

第17話 『サイコ・デバイス』 221

第18話 『君の横顔』 232

第19話 『最後のピース』 248

第20話 『青空の彼方』 260

第21話 『得た者、失った者』 266

第22話『激突する宇宙』	276
第23話『命尽きるまで』	291
第24話『決意と別れ』	299
最終話『プリズムの瞳』	316
Ex. story…『After light』	
Side Story 『遅咲きの春』	336
Side Story 『あの日、あの時』	345
Side Story 『バトルフェスタ 開幕』	352
Side Story 『バトルフェスタ 閉幕』	372
最終章『Another world』	
最終章① 『総攻撃』	380
最終章② 『激突』	392
最終章③ 『産声』	402

## 第一章 「First impression」

### 第0話 『始まりと終わりの境界線』

厳しい冬の寒波が新潟を覆う。刺すような冷たい冬の風が頬を撫で、通学路を歩いている長身の少年がその風にぶるりと身震いをした。彼の吐息は白く体は震えたままだ。寒さから逃れるためなのか、少年は震える身に喝を入れ足早に学校へと足を踏み入れた。

——12月の冬、神取彰人《かんどりあきと》は将来を考えていた。

(今日も一日が終わったか……。)

終業を知らせるチャイムが鳴り響く。時刻は夕暮れ時、窓から差し込む夕陽が教室の中を赤々と照らしている中、少年は気怠げな様子で背もたれによりかかりながら今日1日を振り返る。

もはや入学以来ルーチンワークと化したいつも通りの授業が終わり、今は放課後なのだ。一般の生徒達にとっては勉学の予習復習に励む者やアルバイトや友達といった遊びに赴(おもむ)く者が殆どだろう。しかし少年はそういった意味において他の生徒よりも多少異質だった。特殊な部活動があるためである。

「技術情報部」

それは2029年に総務院高校に導入された部活である。インターネットや電子機器によるサイバー犯罪が増加しはじめて以降、子供達にもサイバー犯罪の知識を学ばせるためにと導入された部活なのだが、残念ながら教師陣が電子機器に疎かった。結果何を血迷ったかヴァーチャルリアリティ(仮想現実)を再生するVR機器を購入してしまったのである。

学校側としては機器を購入した以上、失態を公にしたくはない。か

と行って対処しないという訳にもいかない。いわゆる一つの妥協案として、部活動という納得できるようなそうでないような曖昧な理由で技術情報部を立ち上げたのである。

(まあ、そのおかげで俺は助かってるけどね…)

神取彰人。彼もまた総務院高校の1人の生徒である。長身に加え、艶のある黒髪と意志の強さを思わせる赤い瞳を持つ。その恵まれた容姿と人当たりの良さが幸いとして、クラスメイトからは概ね好かれていた。

(もうこんな時間か。部活に行かないとな。)

彼はふあ、と気怠げにあくびをしつつ椅子から立ち上がるその瞬間。ガラリと音を立てて教室の扉が開いた。彰人は何事かと思いい扉の方に顔を向ける。見ると出会い頭に2人の少年少女が固まっていた。

クラスメイトの桐谷 総一郎《きりや そういちろう》と天音 文香《あまね ふみか》だ。眠そうな時の顔を見られるとは。何とも嫌なタイミングだなと彰人は思ったのか、やや気恥ずかしそうな表情のまま2人を眺めた。

「彰人君。今日も眠そうだね。部活には行けそう?」

ほんわかとした気の抜けた雰囲気少女が話しかけてくる。この艶やかで長い黒髪を持ち、小動物を彷彿とさせる小柄な少女。彼女を一言で説明するならば、彰人の彼女である。その温厚そうな雰囲気、育ちの良さを表しており、彼女も彰人と同じくクラスでも人気があった。彼女は料理同好会に所属しており、この時間はそろそろ同好会が始まる時間のはずだ。

もう1人の大人しそうではあるが、知的な風貌の少年は彰人の数少ない親友である桐谷総一郎という。切れ長のきりりとした瞳に加えはつきりとした目鼻立ちを持ち、性格は不正を許さないと云うまさに品行方正を絵に描いたような男だったが、その一方で人と関わる事が苦手な不器用な一面も持ち合わせていた。

「うん。行く予定……これでも部長だからな。」

彰人は気恥ずかしそうな様子から立ち直ったのか、2人の顔を眺め

ながらもやや曖昧に答えた。

「あ、それと総一郎、また今日も夜まで勉強か？」

更に彰人は軽く付け加える。総一郎と呼ばれた少年が後手を組みながら冷ややかに彰人を見つめた。彼は技術情報部の副部長であり、彰人は部長という立場である。当初、技術情報部は他にも部員がいたのだが、退部する生徒が多くいたために現状は2人しかない。そのため、部員集めに苦心する2人だった。

「……僕も勉強は確かにある。だけど関係無いよ。やることはやるって決めたから。」

人形のように端正な表情を崩さないまま総一郎が淡々と答える。彼は父親が県内の脳外科医を勤めており、彼自身も将来は医療に携わる人間になろうと考えているらしい。この時期も本来ならば猛勉強しないといけないはずなのだが、彼も父親と同じく賢い。その総一郎が大丈夫なら問題はないのだろうと彰人は信頼していた。

「そうか。じゃああんまり遅くなってもなんだから、そろそろ部活行こうか。」

彰人のその言葉に2人は頷いた。教室から廊下に出た彰人は階段を登り3階へと向かう。3階は三年生の教室が割り当てられており、丁度その向かいに技術情報部の部室がある。

総一郎が持ってきた鍵で錠を外し、教室に入る。総務院高校の3階にある技術情報部は防犯のために最近鍵がかけられていた。どうやら最近是不審者が目撃されているから、その用心のためだという。(やつぱりこの雰囲気は好きだな。)

そう彰人は思ったのか、軽く目を細めながら教室を眺めた。机の上に置かれたVRの装置はスタンバイ状態であり、そこから覗くプラフスキー粒子によるぼうぼう……と青くぼんやりと輝く光を見ると、現実の煩わしい雑務や将来に対しての不安も忘れる事が出来た。だが、それが現実逃避であることに変わりはないという自覚もあった。

GBA《ガンプラバトルアドバンス》という仮想空間世界。近年、VR技術に加えプラフスキー粒子という特殊な粒子が発見されたことにより、従来のVRよりもさらにリアルな仮想空間を生成することが

可能となっていた。なお、この技術と粒子はイルミナカンパニーという一企業が独占しているらしい。

ふう。と彰人は一息ついた後、バックからごそごそと何かを取り出す。取り出したのはプラモデルだ。

「機動戦士ガンダム」という作品に登場するMS《モビルスーツ》と呼ばれる人型のロボットである。既に放送は何十年も前に終了しているが、過去にプラフスキー粒子を使ったプラモデルを戦わせる競技、通称ガンプラバトルの流行により今だにプラモデルが根強く販売され続けている。

彰人本人も作品の大ファンであり、幼い頃に作中に登場したこのキラキラと輝く機体が堪らなくかつこいと思えたのだ。

「彰人君。アカツキとデルタガンダムって豪華な組み合わせだよね。」  
総一郎は目を輝かせながらそう答えた。彰人は彼のこの表情が好きだ。普段とは違ういきいきとした表情。受験勉強を削ったとしても彼はバトルがやりたいほどの“病的”なガンダムマニアである。

普段は仏頂面の彼がバトルの時だけは心の底から楽しそうな顔を浮かべるのなど、他のクラスメイトは知らないだろう。

(ああ……総一郎。お前は本当にもつたいない。)

そう彰人は改めて思いつつも嬉しいのだった。脳外科の息子という境遇から周囲から過剰な期待を求められる総一郎。しかしそれは外面良く演じている彼自身であって素の彼では無い。

こうした素の自分をさらけ出せる環境に加えて瞳をきらめかせながらはしゃぐ総一郎の姿。自分に対してありのままの姿を見せてくれるこの友人を彰人は心底気に入っていた。

「そろそろ電気付けるね。」

文香はそう言った後パチリ、と部屋に取り付けられた電灯のスイッチを付ける。彼女は技術情報部では無く料理同好会の会長なのだが、部の立ち上げの際に彰人と総一郎が無理を承知で教師に頼み込み、同好会と部の教室を確保したのだ。

本来ならば同好会に部のスペースは与えられないのだが、特例が認



められた。そのため文香をはじめとする料理同好会もこの部には感謝しているのだった。いつもの3人が揃ってこの技術情報部は成立しているといってもいい。夕陽が窓から差し込み、部室内に穏やかな時間が流れる。

——GBAのホログラム生成装置が青白い光を放ち起動する。

第1話に続く

## 第1話 『ガン普拉バトル!』

青白い光に包まれ、頭にすっぽりと装置を被った彰人達がGBAの世界に旅立つ。あらかじめVR装置に記録させておいたMSのデータを入力。画面上にMS standbyと表示された後、次にバトルに使用するMSを選択する。

彰人が選択したのはオルタナガンダム。

彰人が父と共同開発したオリジナルのガン普拉である。HGUCのデルタガンダムとHGCEのアカツキをミキシングした機体であり、総合的な火力は他MSに劣るものの機動性能が高く、可変機構を備えている。

本来頭部が百式では無いオルタナガンダムは、可変する際に頭部アンテナを折りたたむ事で変形に対する問題を解決していた。更にオルタナガンダムには敵のビーム兵装を防ぐ耐ビームコーティングも備え付けられており、バトルでの生存性は高い。何よりも、彰人自身がこの金色に磨き上げられた機体を気に入っていた。

「……金メッキって綺麗でいいよね。」

総一郎が画面上に映し出されるオルタナガンダムの姿を眺め、その金色の美しさに感嘆の声を上げる。彰人はその言葉に対して軽く生返事をしつつ、画面に向き直り再度集中しなおした。

今日の2人が選んだバトルフィールドはフロンティアIVの内部だ。連邦軍の機体を援護しつつクロスボーンバンガードの機体を撃破するミッションである。このミッションは上級者向けではあるが、報酬が良いため中級者にも選ばれることが多い。生存させたジェガンの数だけ報酬が上乘せされるのだ。所謂“稼ぎ”ミッションである。

彰人達は画面に表示されるフロンティアIV内の風景を眺める。2人の眼下には街並が見えた。精巧に再現されたその風景は、ゲームとはいえど現実の風景と見間違えレベルである。何度も見た光景ではあるが、その美しい風景に目を奪われていると、遥か遠くから敵機で

ある甲冑を身に纏ったかのような風貌のMSが2人に迫って来るのが視界の隅に映る。

(来たか！——デナン・ゾンとゾンド・ゲー!!)

彰人は心の中で呟く。彼等がこのミツシヨンで何度も見た機体だった。西洋甲冑風の身体にガスマスクを合わせた異様な機体だが、彰人はこの敵機が嫌いでは無かった。

「流石に素早いな……だけどさっつ！」

デナンゾンとゾンドゲーがコンピューターに操作による一切の無駄が無い滑らかな機動を描きながら、ショットランサーを手にこちらへと迫る。ショットランサーの銃口が一瞬煌めくと同時に、ビームマシガンによる牽制射撃がオルタナガンダムとシビュラブリッツに向け放たれた。

マシガンの光の粒が二機に襲いかかる。オルタナガンダムはそれを上方に回避、総一郎の機体は下方に回避する。

本来であれば強力なビームによる攻撃を易々と弾くビームシールドを持ち、更に機動力も高いデナンタイプはオルタナガンダムが相手をするには不利。

だがしかし、しっかりと対策を練って来たと言わんばかりに3番のスロットを選択する。

「今日のために特製の武器を用意して来たんだぜ！」

彰人はデナンゾンから放たれるマシガンの銃撃を優雅に回避しつつ、余裕の表情を浮かべたままオルタナガンダムを空中で人型に変形させる。同時に背中にマウントされた黒金に輝く武装を両手で全面に構えた。

「——対艦粒子砲《ヴァルジキャノン》!!」

百式のメガバズーカランチャーとF91のヴェスパーを組み合わせて作成した高火力の武装。

一見大型で取り扱い辛いような武装だが、通常のライフルと同じく両手で保持する事が出来、取り回しに優れる。威力も高い反面、弾を撃ち切ればそれまでの使い捨ての武装であり、使用にはある種の割り切りが求められる。

特筆すべきは機動性を犠牲にしてまでも求めた火力だろう。ビームシールドすらも易々と貫く圧倒的な攻撃力、貫徹能力。更にF91のV・S・B・Rの様にビームのスピードや方向、威力も調節する事が出来る。

オルタナガンダムはバルジキャノンを構え、放つ。放たれた蒼く煌く閃光がゾンドゲーの胸を貫き火球へと変える。その火力はビームシールド越しに胴体を貫通した。なす術なく撃墜されていく敵機の姿に、2人の表情が和らぐ。

「機動力の高いデルタガンダムに高火力のランチャーの取り合わせ。流石のアイディアだね。」

「ZZガンダムみたいに、大量の武器を追加する必要は無いからな。イーゲルシュテルンと使い捨てのバルジキャノン砲、後はビームサーベルとライフルがあれば俺は充分だ。」

話しながらも彰人は攻撃の手を緩めない。輝きを放つ煌びやかなオルタナガンダム対して、桐谷総一郎が使用するのは漆黒に染められたガンダム。

「彰人にだけ任せてはおけない。シビュラブリッツガンダム!!行くよ！」

彼がシビュラブリッツと呼んだ機体はブリッツガンダムをベースに総一郎が改造した機体。ミラージユコロイドと呼ばれる一種の電子装置を使い姿を消すことが大きな特徴の一つである。

機動戦士ガンダムの世界ではミノフスキー粒子と呼ばれる電子妨害装置が働き、現実の戦闘機のドッグファイトとは異なり基本的に有視界で行われる。そのためたとえ姿を消せるだけだとしても戦略上有利になるのだと、以前総一郎は彰人に対して熱く語っていた。

敵がどんなに有効なビームシールドを持っていても、使えなければ意味はない。総一郎はシビュラブリッツが持つMSツダの対艦ライフルを改造して作成した狙撃用のライフルを用いて精密な狙撃を行い、ビームシールドの隙間を縫うように攻撃を仕掛けた。

敵を撃ち、弾薬が切れればミラージユコロイドで姿を消したまま音も無く近づき、コックピットにナイフを突き立てていく。

コックピットを貫かれ、まるで糸が切れた操り人形のように爆発せず墜落するデナンゾン。総一郎は表情を崩さないまま淡々と敵を落としていく。

ゾンド・ゲー達がシビュラブリッツのステルス攻撃の前になすすべなく次々と屍を晒していった。

オルタナガンダムが空を舞い、シビュラブリッツガンダムが編隊から逸れた哀れな敵機を狙撃する。数分間の戦闘の後、2人は目標の敵を全て倒し尽くした。しかも追加報酬となるジェガンも全機生存。素晴らしい戦果だ。

「よし。ジェガンも全機生存。総一郎、アシストサンキューな！」

「はいはい、お疲れ様。僕も無駄に弾を使わなくて助かるよ。」

フロンティアIVの夕焼け空に佇む2人。シンプルイズベスト。余計な動きをしない。無駄玉を使わない。これが二人のGBAにおけるポリシーだった。対人戦においては派手なオルタナガンダムが空を舞い敵の目を惹きつけ、その姿に気を取られた敵を総一郎のシビュラブリッツガンダムが狙撃し落としていく戦法を取っていた。この役割をはっきりさせた戦い方は、2人の勝率も安定する良い戦法でもあった。

バトルが終わり、2人はVR用のヘッドギアを外すとそのままメニュー画面からログアウトを選択。

無事にGBAからログアウトし現実の世界に戻ると、埃臭い教室が目に入る。あのゲームの中の美しかったフロンティアIVとの景色の落差に思わず溜息が出た。

「……楽しいな。」

野球部やサッカー部が外で汗を掻く中、こうして冷房が効いた部屋であそ……部活に励めるのは良いことだと彰人はぼんやりと考えていた。彼はヘッドギアについた汗を教室に置いたアルコール付きティッシュで丁寧に拭きあげる。

技術情報部という部活動の特権だろう。真面目にクレジットカード詐欺や不正アクセスといった架空世界、現実世界で行われる犯罪に

取り組み、その危険性を校内に向けて発表する時もあるれば、こうしてVRで遊ぶ事もある。技術情報部はこうした自由度の高い部活だった。

(ん?)

不意に、ガサガサと教室の外から聞き覚えのない音がする。咄嗟に彰人は不審に思った。本来この時間帯は人が通らない筈だ。通るとしても、同好会の生徒か見回りの先生のはずだが、この時間に来るのは珍しい。ならば何だろうと疑問に思い、確認の為に教室の外に出ようとするが。

「彰人君、次はこのミッションやろうよ。」

目を輝かせた総一郎に袖を掴まれ、止められてしまった。向こうにいる文香も音に気づいていないのか、呑気に鼻歌を歌いながら調理をしている姿が薄いカーテン越しに映る。

(まあいいか。)

どうせ物か何か落ちたのだろう。大したことも無いと判断して特に気にしないことにした。

二人が部活を始めてから数時間後、時刻は18時30分。楽しかった部活の時間が終わり閉校間近の予鈴が鳴り響いた。そろそろ帰る時間だ。

窓から外を見ると既に暗く、その早い日の沈み方は冬の様相を示していた。

「総一郎。今日はこれぐらいにしようか。鍵、先生に返してくるから、ちよつと待っていてくれ。」

彰人は総一郎に声をかけると、鍵箱から教室の鍵を取り出した。その動作と同時に、総一郎はそうだねと優しく返答しながら鞆を持つ。

「彰人君、総一郎君。二人とも帰るよー。」

2人が帰る支度を始めると、タイミング良く料理同好会の方も終わったのか、技術情報部と料理同好会を隔てるカーテンの隅から文香がひよこつと顔を出す。

「あと今日これ作ったから食べて。差し入れ！」

文香は彰人達に半ば強引に包み紙を渡した。猫が描かれた可愛らしい包装。彰人は受け取ったそれを丁寧に開ける。

「おっ！クッキーだ。美味しそうだな。」

包装を開けた中にはちんまりとした可愛らしいクッキーがあった。焼きたてのクッキーの香ばしいにおいがぷんと彰人の鼻をくすぐる。彰人のその様子に満足そうに笑いながら文香は言葉が続けた。

「2人は気づいてないだろうけど、今日は他の子が用事があってね。私しかないの。だから今作れるものならこれしかないかなと思っ  
て。」

そう言われるとたしかに、教室内は焼き菓子特有の甘いにおいが漂っている。バトルに夢中で気づかなかったようだ。

「……いつもありがとう。」

彰人達は照れ臭そうに小さな声で感謝を告げた後、一口食べる。ほのかに甘く、香ばしい。文香は手先が器用だ。こうして菓子を作るのが幼い頃から得意としていた。彼女が作ったクッキーは市販のクッキーよりも美味しい。サクサクと食欲をそそるような音を立てながら、あつという間に食べてしまった。

「文香……ありがとう。ご馳走様。みんな帰ろうか。」

クッキーの食べかすを取りながら赤い表情を隠しつつ、そう伝えるのが彰人にとっては精一杯だった。談笑しながら廊下を歩き、階段を降り、玄関先へと向かう。

「じゃあね。2人とも。風邪ひかないでね。」

「またな。文香。」

「文香さんも気をつけてね。また明日。」

文香と校門の前で別れた後、帰りのバスの車内にて彰人は今日のバトルについてぼんやりと考えていたが、集中できなかった。夕陽が差し込む車内で彰人の脳裏に先ほどの文香の眩しい笑顔が浮かび、それが頭から離れない。

「部活という大義名分は強いね。」

そんな中、総一郎が話しかけてくる。彼の柔らかくややウエーブがかかった黒髪が夕陽に反射しており、男ながらに可愛らしい奴だなど

彰人は一瞬動揺した。

「そうだな。」

彰人はまとまらない考え事を一旦辞め、総一郎の方を向く。思考のまとまらない頭で生返事をしつつ、さつき文香から貰ったクッキーの袋を破りまた食べ始めた。

(……)

さすがにちよつと可哀想だと思っただのか、彰人は残りのクッキーを総一郎にも渡した。さつきからクッキーが気になっていたのか、袋を渡された瞬間総一郎は嬉しそうにほころんだ。

「美味しそうだね、ありがとう。……でもさ。」

突然、先程とは打って変わったかのような寂しそうな表情を浮かべながら総一郎は彰人に顔を向ける。

(ああ。まただ。またこの表情だ。)

普通なら不審に思うが、彰人はこうした総一郎の表情の変化には慣れていて。慣れていたのでこそ特に突っ込む事もしなかった。

彰人と総一郎は幼稚園の頃からの幼馴染だが、彰人は両親の都合で一時期新潟から離れていた。

高校生になってから再び再開した総一郎は幼い頃と変わらず、時々こうした憂いを帯びた表情を浮かべる。彰人はそれも仕方がないと考えていた。

何故なら、そのきっかけは総一郎と彰人が小学校に上がる前に彼の母親が亡くなったからだ。

総一郎は母親が大好きだった。その母親を亡くしてから、総一郎は時折寂しそうな表情を浮かべる事が多い。

昔は天真爛漫で明るかった性格に影が落ち、人付き合いも少なくなつた。彼は元から内向的で友達も少なかったのだが、彰人は特に気にすること無くこうして交友を続けている。

女っぽい顔をしている総一郎は同級生からからかいの対象になる事も多々あり、その都度彰人ともう一人の友人で庇っていた。彼がこの表情を浮かべている時は大抵ふさぎこんでいる事が多い。変に考えなくて良いことまで考えているだけだ。と彰人はこれまでの経験



から勝手に予想していた。

「……どうした？」

そんな総一郎の様子を、さり気なく、気にしないそぶりで尋ねる。それは彰人なりの優しきだった。総一郎は一瞬言いにくそうに言葉に詰まった後、ゆっくりと言葉を絞り出すかのように口を開く。どんな言葉が出て来るのかと、彰人はぐっと身構えた。数秒の沈黙が流れた後、彼の口が開く。

「……彰人はさ、文香さんと付き合ってるけど、

一緒に帰らなくて良かったの？」

唐突に張り詰めた空気が抜け、思わずすっこけた。いや、実際にはこけてはいない。だが、その気の抜けた発言は彰人の心配や気遣いを壊すには充分だった。

「あのなあ、総一郎。考えすぎた俺が馬鹿みたいじゃないか。」

笑いながら親友の顔を見る。彼は頬杖をついたまま悪戯っ子のようにやけた笑みを浮かべていた。

「文香さんとは付き合ってるけど……その、なんだ。まだそんな関係じゃない。」

「でも彼女の方から告白したんでしょ。彰人はどうなのさ。気持ち的に。やっぱり嬉しかった？」

「文香さんはいい娘だよ。優しいし。のんびりしてるし。……顔も、まあ、可愛いし。ちよつとマイペースな所はあるけどな。」

「だがそこがいい？」

まあな。と彰人も彼と同じく窓枠に手を掛け頬杖をつきながら照れ臭そうに返事をした。その手が震えていたのを総一郎は見逃さなかったが、あえて追求はしない。

「どうも恋愛は苦手だ。何だ……女子を目の前になると上手く話せなくなる。」

彰人はこれと言った恋愛経験がないまま、悶々とした欲望を抱えた日々を送る高校生の一人だった。そんな彼が天音文香という気の優しい少女と付き合えたのは、宝くじに当たるくらいの僥倖といえよう。

「僕も。だけど羨ましいよ。」

同じく頬杖をついたまま羨ましがる総一郎。彼もまた純粋な男子であり、恋愛にはやや臆病なところがあつた。彼も昔から女子からの人気はあるのだが、本人が気づいていないというパターンだった。

そんな軽口を叩く二人を乗せた夕暮れ時のバスは、それぞれの帰路へと向かう。明日はどんな事をしようか。若い二人は期待に胸を膨らませていた。

第2話に続く

## 第2話 『すれ違う2人』

「皆さんに紹介します。イギリスから来た交換留学生のエリック君です。」

朝のHRにて担任の柘 春希《ひいらぎ はるき》先生(29)が淡々と伝える。彼は昔からこの高校の教師で、中々彼女が出来ないのが悩みらしい。噂によると、まだ未経験なのだそうだ。細身な体型に190cmという長身のため、女子生徒からの人気はあるようなのだが、彰人には特に関心は無かった。先生の隣には金髪に青い瞳を持つ男子生徒が立っている。その落ち着いた佇まいは高校生にしては妙に大人びており、特殊な存在感を放っている。

「エリック君は交換留学生として、我が校に来ました。彼は日本語が話せますが、それに甘んじず英語でも話せるよう君達は語学を研鑽すること。いいですね?」

(おお、日本語が話せるのか。ハイスペックな奴だな。)

柘先生の紹介を聞きながらも、彰人はエリックから目が離せない。身長は彰人と同じくらいだろうか。顔も整っている。よく観察すると完全な外国人顔では無く、ハーフの様な顔立ちをしている。

そうやって何となく観察を続けていたら、エリックと名乗る少年が不意に口を開き、そのまま自己紹介を始めた。

「はじめまして。エリックです。僕はイギリスのロンドンから来ました。ファミリーには両親と妹が一人います。趣味は音楽を聴くことです。1年間よろしくお願いします。」

その透き通った声は聞き取りやすく、聞く者の心を驚掴みにするには充分だが、ややたどたどしい日本語でエリックは話す。彼が話し終えるとぱちぱちと教室中から拍手が起き、彰人もつられて拍手をした。

その後、昼休みになり、案の定というか何というか、エリックの机の周りには女子が集まっていた。いや、光に集まる虫のごとく群がっていたという方が正しいだろう。彼はあれだけルックスが良いのだ。当然、女子の興味を引くには十分だった。

「エリック君は髪がきれいなんだね〜さらさらだ。コスプレとかしたらきつと似合うよ〜!」

その女子達に文香が混じりエリックの髪を触っている。文香はそんなつもりはないのだろうが、その様子は彰人を少しばかり不安にさせた。

(……いや、男の嫉妬は醜いとは思う。だけどさ。)

文香が自分以外の男にあの笑顔を向けることが我慢できなかった。たとえ彼女にその気が無くても、彼自身は見えていい気持ちはしなかった。

それは独占欲に基づく男のみつともない嫉妬ではあったが、ある意味では少年らしい健全な反応ともいえる。

我慢出来なかったのか、おもむろに彰人は椅子から立ち上がる。脇目も振らずにエリックに近づく。女子は何も言わず離れてくれた。ありがとな。と小さな声で彼女達に礼をいいつつエリックに正対。深呼吸をしていい放つ。

「エリックは、どうして日本を留学先に選んだんだ?」  
「Why?どうしたんだい。」

エリックが素っ頓狂な声をあげた。何の脈絡もない質問をしたせないなのか、彰人に疑問の目を向けた。恐らく、理解が追いついていない。目をパチクリとさせる彼の瞳は、きれいに澄んでいた。

(こうして見ると随分、睫毛《まつげ》が長いな。)

西洋の彫刻の様に彫りが深く整ったエリックの顔に思わず見惚れる。彼のさらさらの金髪は純粹に美しく見えた。同性でありながらふと触ってみたい……とすら思える程に魅力的だった。

「ごめん自己紹介が遅れた。俺は神取彰人。趣味はトレーニングと……部活。今は技術情報部の部長をやっている。よろしくな!」

「実はうちの学校での交換留学生って珍しくてさ。エリックが日本に来た理由って何か、聞いてもいいか。」

正直、その場凌ぎの口から出まかせではあった。同時に沢山あるはずの留学先に、あえて日本を選んだのか。その理由は気になってはいない。何かしらの意図が含まれているのだろうか。

「シキが、好きだから。」

「四季？」

何の迷いもなく答えるエリックに対し、彰人は予想していなかった答えに戸惑う。沈黙する彰人の前でエリックは言葉を続けた。

「日本の風景、文化、国としての成り立ち。そういうのが全部気になって、僕はそれを実際に自分の目で見てみたかった。というのは答えになるかい？」

「・・・そっか。」

彼の方から聞いておいてなんだが、特に意外な事はない。

（普通だな。確かに俺もイギリスとか外国の文化に興味がある。それと同じで、知的好奇心を満たしたかったからなんだろうな。）

腕を組みながら、一人で納得する。

（でもどっかで見たような気がするんだよな。）

このエリックと名乗る外国人はどこかで見たような覚えがあったが、どうにも思い出せない。確かな既視感はあるのだが、彰人はそれを確認することはしなかった。違っていたら嫌だな、という遠慮と、まだこの男に踏み込めない、という彼なりの警戒心があったからだ。

「これからよろしくな。エリック。」

「よろしく。彼女と話しこんですまないね。」

綺麗な瞳を閉じてウインクするエリックの姿に彰人は警戒を解いた。思わず手を差し出す。こうした分かり易いボディランゲージを好みそうに見えたからだ。対するエリックも彰人の意思を理解したのだろう。その手を握る。

がしっ！と力強く握手を交わした。嫌味の無い、爽やかな二人の握手に文香やクラスメイトも満足そうに笑った。

（お見通しか・・・なるほど、勘の良さそうな奴で良かったよ。）

この時ばかりは彼も純粋にそう思っていた。放課後、部活の案内を先生に任された彼は部室にエリックを案内する。勿論同じ部屋を使う文香と総一郎も一緒だ。四人で廊下を仲良く歩き、部室にたどり着く。部室に入ろうとすると不意にエリックが口を開いた。

「ハハハ？」

「ああ、ここは俺たちの部室。取り敢えず中に入った入った。」

エリックを中に入れる。背が高いのか、入る時に小窓に頭をぶつけて痛そうにしている。先程は椅子に座っていたから分からなかったが、エリックは彰人が思っていたよりも背が高いのかも知れなかった。

「エリック君大丈夫!？」

気をつけなきゃだめだよー。といいつつ文香が濡れタオルを渡しエリックの頭に当てる。

「すまん。まずは椅子に座っててくれないか。」

一言謝った後、エリックを椅子に座らせる。椅子に座ったエリックは辺りをきよろきよろと見渡しており、落ち着かないように見えた。(そういえば、ロンドンの学校にもこういう部活はあるのだろうか。)

ふと疑問に思う。技術情報部というか、コンピュータに関する部活はあってもおかしくないのだが。イギリスの事なんて全く分からない。

「あ。」

「ん。どうしたエリック?」

突然何か興味のある物を見つけたのか、素っ頓狂な声を上げるエリック。他の3人も驚いた様子だ。

「アキト。あれってガンダムかな?」

エリックは面白いものを見つけた!と言わんばかりに棚のガンプラを指差すと、やや興奮気味に聞いてくる。

「ああ、ガンダムだ…好きなのか?」

「実は父さんが日本のお土産で買って来て以来、僕も好きなんだ。日本にはやっぱり普通にあるんだね。」

「意外だねー。エリック君もガンダムが好きなんだ。」

文香がさも意外そうな表情を浮かべた。正直彰人も意外だった。まさかエリックがガンダムが好きだとは。何という偶然だろうか。でも確かに、機動戦士ガンダムWの様に、海外でも放送している作品はある。だからエリックが知っていても不思議では無いのだろう。

彰人はエリックが同好の士だと知って少しだけ嬉しくなった。

「じゃあ。ちよつとだけやって見るか、バトル？」

本当は表向きの活動であるVRや仮想空間に関する技術を見せるつもりだったが、興味があるならいいだろうと判断し、エリックをGBAのバトルに誘う。これを機に乗ってくれるといいな。そんな淡い期待を込めて。

「OK。」

無事に彼の了解も得た。その答えを契機に彰人達は機器を準備する。部屋はいつも整えていたから、準備なんてすぐに終わった。彰人と総一郎の几帳面さが報われた瞬間だった。

「おおーこれは素晴らしい。」

机の前に並べられた機器の数々を前にエリックがはしゃぐ。特にGBA用のVR装置が珍しいのか、感嘆の声を上げている。

「この装置に……よつと、このヘッドギアを機械に繋げて被ると、GBAの画面に繋がる。」

装置を持ちながら彰人がエリックに説明した。イギリスにもこういうのはあるのだろうかとふと疑問がよぎるがエリックの反応を見るにはじめての様だ。

「素晴らしいね」

目をキラキラさせながらヘッドギアを被りはしゃぐエリックは、2人の目から見ても何だか子供らしく見えて意外だった。こういうのをギャップというのだろうか。文香が可愛い……と零すのを彰人は聞き逃さなかったが。

（まあ、クラス的女子は喜ぶだろうな。）

複雑な表情を浮かべる彰人とそれを見て苦笑いする総一郎。2人もエリックに続いてヘッドギアを被りGBAにログインする。蒼い光が視界を覆い、現実世界から架空の世界へと意識が旅立つ。

「エリック、総一郎。二人とも準備は出来たか。」

GBAの中で巨大な電光掲示板がちかちかと光る。表示されるミッションプランを前に彰人が2人に確認を取った。後ろに立つ2

人は早くやりたいと言わんばかりに興奮した様子だ。

「ああ。僕は問題ないよ。」

「ボクもOK!」

「よし、それならやろう!」

彰人が画面を操作し、バトルに突入する。今回使用するガンプラは彰人がオルタナガンダム。総一郎はシビュラブリッツガンダム。ここまででは変わらない。彰人は肝心のエリックが何を選ぶのか気になり、彼の方を向いた。イギリスならGガンダムに登場するロイヤルガンダムだろうか。それか海外で放送されてあるウイングガンダムだろうと予想した。だが、その予想は大きく外れることとなる。

(エリックは……え?ベズ・バタラ?)

「べ、ベズ・バタラとは渋いね……エリック君。」

彰人と同様に総一郎が驚いている。思わず面食らった。2人が持つ数あるMSのコレクションの中からまさかフルスクラッチのベズ・バタラをあえて選ぶとは……。通にも程があるだろうと彰人は目を細めた。

「僕の叔父が昔ゲームで使ってた機体なんだ。」

「はは。叔父さん……詳しいんだな。」

気を取り直した彰人がバトルフィールドを選択する。今回のバトルフィールドは宇宙。前回の引き続きのミッションで、内容は機動戦士クロスボーンガンダムに登場する地球連邦軍の量産型F91と、ハリソン専用F91を倒すミッションだ。仲間にクロスボーンガンダムX1がいるおかげで難易度は比較的楽なミッションでもある。

「敵のF91の武器はビームがメインだから、オルタナガンダムと相性は良い。ベズバタラも木星の量産型特攻機ではあるが、基本的な性能は悪くないから大丈夫だろう。ビームアックスもあるから攻撃力もある。」

彰人が二人に説明する。総一郎とは何度もこのミッションをプレイしているから良しとしても、エリックはそうでは無い。そのため彼にもわかるように丁寧に説明した。

本来ガンプラバトルは対人戦が主流だったのだが、かつて“ブレイ



クデカール”という悪質なチートツールを用いたプレイヤーが多数いたために、GBAではミッション攻略型が大多数を占めている。しかも殆どが協力ミッションとなっている念の入れようだ。

ミッションの成功報酬も参加者に平等に配られ、強いプレイヤーも弱いプレイヤーも同様に報酬を受け取る事が出来る。これはガンブラバトルが塗装や表面処理といったリアルなガンブラの出来で性能が決まるため、こうした各ビルダーの技術力の差を埋めるために苦心して出来たシステムらしい。

「……よし。ゲーム始めるぞ。」

「ああ！2人ともよろしく！」

「o k i！」

二人の合意を得たため、彰人はハンドサインを作った。部屋の隅で待機していた文香に合図をしてスイッチを入れてもらう。

——ゲームスタート！

画面が切り替わり、真つ暗な宇宙が目の前に広がる。いつも思うのだが、これだけリアルだと宇宙恐怖症とか出ないのかと彰人はいつでも良いことを考えてしまう。

(宇宙飛行士とか本当尊敬する。俺は絶対無理だ。ゲームとかGBAの仮想空間なら大歓迎だけど。)  
「おっと。」

敵の量産型F91が急に迫って来たのでビームを回避し、振り返りざまにこちらのビームライフルを叩き込んだ。あっけなく爆発する量産型F91。正直難易度が高いミッションとはいえ苦戦はしない。他にも連邦のジャベリンが何回か迫ってきたが、その度にビームサーベルで叩ききつたり、バルカンでよろめいた所を蹴りとばして倒す。総一郎やエリックも特に苦戦する事なく敵を葬っていく。

「簡単すぎたか？」

「いや、こんなものだと思うよ。」

総一郎も即答する。やはり慣れているプレイヤーは強い。適切なブースト管理に硬直の消し方などをはじめ、そもそも素人とは動きが違う。更に対応能力も高い。敵の攻撃を回避しつつシビュラブリッ

ツガンダムがライフルが火を噴いた。

ライフル弾が直撃したジャベリンが火球に変わる。

「いい腕だな！」

「ありがと！彰人も悪くないよ。」

「悪くない？むしろ絶好調だよ。」

二人でそんな軽口を叩いていたら、ボスのハリソン専用F91が遠方から登場した。青一色に統一された機体が美しい。この機体は中々に手強いボスキャラクターであり、彰人達もこのミッションを始めた頃には何度かやられた事がある強敵だった。

「総一郎！エリック！F91のヴェスバーに気を付けろ！あれは掠っただけでもまずい！」

そうアドバイスしたのもつかの間、あるうことかF91はエリックのベズ・バタラに向かってヴェスバー発射の構えを取る。エリックに気付かなかったのは迂闊だったと彰人達は顔を青ざめた。

「まずい！ヴェスバーの直撃コースだ！」

総一郎が叫ぶ。二人で慌ててフォローを試みるがMEPEという分身能力を発動したF91を捉えるのは難しい。可変したオルタナガンダムでも簡単には追いつけないし、頼みの綱の総一郎も乱射されるヴェスバーを回避するので一杯一杯だ。そこら中に青い閃光を放ちながら無茶苦茶な軌道を描き続ける暴れ馬の様にF91が宇宙を駆ける。エリックも回避しているが、長くは持たないのではないか。そんな嫌な予感がした。

「エリック！」

F91の射線の真ん中に捉えられたエリック。

——やられる。二人が確信したのも束の間。

「ええ……？」

二人の前に信じられない光景が広がっていた。エリックが放たれた敵のF91のヴェスバーを全て回避した上に、正確にF91にビームを当てている。驚異的な速度のMEPEには反応するのがやっとではあるようだが、それでも対応が出来ていた。明らかに初心者動きとは思えない軌道《マニューバ》。

(エリックの奴、あれは苦戦しているというよりも寧ろ……。)  
オルタナガンダムのコックピットで、彰人は腕を組み彼を観察する。

「遊んでるね、あれは。」

考え込む彰人の隣で、総一郎が冷静に分析し言い放った。

「動きの一つ一つに無駄が無いし、反撃のタイミングも的確だ。かなりの手練れと言わざるを得ないね。」

(エリックが？あいつも同じ……。？なのか？)

「エリック！お前……。このゲームやった事があるのか？」

堪らず彰人は声をかける。何故黙っていたのか、少し心に引っかけりを覚えた。この変則的なマニューバは何処かで見た覚えがあったが思い出す事が出来ない。

「さあ、どうだろうね。」

エリックの声には余裕が感じられる。F91の執拗《しつよう》な追撃をすいすいと回避するその様相は明らかに初心者では無いようだ。ならば何故2人に対して初めての様に振る舞ったのか。彰人は不思議そうな顔でエリックを見ていた。

(こいつは何なんだ？)

素直な疑問が頭を占める。デジャブの様な光景が広がるが、考えはまとまらない。

「終わったよ。」

エリックの後方で爆散するF91。F91は決して弱い機体では無い。それを易々と倒す彼は何者なのか。バトル終了後、装置を頭から外し現実世界に戻る。堪らず彰人はエリックに尋ねた。

「エリック……。お前は。」

見知らぬ転校生。得体の知れない男。その男がにやにやと薄笑いを浮かべている。こいつは何なのか。本当にただガンダムが好きなのかの男なのか。それにしてもあまりにも不審な点が多い。

「アキト君はさ、真面目すぎるんだよ。」

肩に手を触れる直前。エリックが吐き捨てるかのように答える。その突然の声の変化に思わず手が止まる。彰人は部室の空気が急に

張り詰めた様に感じた。まるで真冬に水をかぶったかのような、池に落ちかのように背筋が凍る寒さ。彰人はそんな嫌な悪寒を覚えた。

視線をあげ、エリックの顔を恐る恐る覗き見る。

その顔は先ほど見せた柔和な表情では無い。侮蔑めいた表情を浮かべた知らない男の顔がそこにあった。その顔は怒りに満ちており心底軽蔑したと言わんばかりの表情だった。その表情を崩さずエリックが彰人に言葉を投げつける。

「まさか」世界大会準優勝者」があんなCPUの、しかも格下の敵に苦戦するなんて。がっかりだよ。神取彰人。」

氷のように冷たい目。敵意を持つ瞳。

(こいつ、俺を知っている?)

彰人はさつと後ろに下がる。嫌な感じがした。張り詰めた空気が更に緊張を増していく。

「本当の君はそんなものじゃない。……何があった?」

彰人のにじり寄り、問い詰めるエリック。その体は溢れ出しかねない自身の感情を必死で抑えようとしているのか、小刻みに震えている。その彰人を睨む表情には彰人自身覚えがあった。

(この視線を俺は知っている。射抜くような、非難するようなこの眼差し。まさかこいつは。)

「エリック。すまないが俺は……。」

「やめろよ留学生 《アウトサイダー》 喧嘩しに来たのか君は。」

不穏な空気を察知した2人の間に総一郎が割って入る。彼にしては珍しく怒りの表情を浮かべていた。総一郎のこめかみに血管が浮き出ている。

「彰人は」もう違う」んだ。巻き込むな。」

怒りを押し殺しているのだろう。彼なりに冷静に言っただつもりなのだろうが、圧力をひしひしと感じる。

「へえ? 僕に勝ち逃げしておいて、かい?」

その態度に怯む様子を見せない。寧ろ、挑発的な態度でエリックは総一郎に対し微笑みを浮かべた。

「や……やめなよ、みんな。エリック君も。」

見ていた文香も場をなだめようとする。しかしそれは返って逆効果だった。一瞬文香の方を向き巻き込んですまないとも思ったのか申し訳なさそうな表情を浮かべたが、さっと戻り彰人を冷たく一蹴するエリック。

「日本に来たら、答えが得られると思ったんだけどな。僕の見込み違いだったようだ。」

「お前は……オースティンか。エリック・オースティン。」

“あの時”を思い出した。

それは彰人にとっては二度と思い出したくない嫌な過去だった。過ぎたと思っていた過去。忘れてしまいたい出来事。彰人は驚愕の表情を浮かべたまま固まる。その表情からは彼の思考も感情も何も読み取ることが出来ない。

(そうだ。こいつは世界大会で俺が……。)

忘れられない記憶が、粘ついたタールの様に彰人の脳裏を過った。

第3話へ続く

### 第3話 『蜃気楼の少年』

エリックに睨まれたまま彰人は昔を思い出していた。蛇に睨まれた蛙の様に身体が強張り動かない。

「父親が亡くなった日」

当たり前だと思っていたあの日常が脆くも崩れ去ったあの日のことを。

その事件は彰人が中学生の頃に起きた。父の神取貴明が不正アクセス禁止法及び個人情報保護法違反の容疑より警察に逮捕されたのだ。

「父親が犯罪者なら、お前もその血が流れているんだろ！俺達を裏切ったのかよ！彰人!!」

彰人は仲間に胸倉を掴まれたまま壁に押し付けられる。穏やかだったチームメイトの表情からは裏切られた、という悲しみと怒りが入り混じった複雑な表情を浮かべていた。

オルタナガンダムには「ブレイクデカール」と呼ばれる一種のチートツールによる強化が施されていた。それは彰人自身も気付かないうちにはあったが、説明しても誰も聞いてはくれなかった。

——遠野 未来へとおの みらいへ

「未来を創る男」として時期メイジンとも噂される青年。

愛機のHiis（ハイエス）ガンダムを駆るガンプラバトルの頂点に立つ男である。そのプロとの戦いによりにもよって違法ツールを使用したとの容疑により彰人のチームは失格処分が下った。

更に数年間は大会への参加資格を剥奪。これまでの練習が徒労に終わった上に周囲から、そして世間から白眼視される立場になったのだ。しかもその原因は彰人である。チームメイトからの怒りのはけ口が彰人に向かうのは自然の流れといえよう。かつて共に戦った仲間からの心無い言葉が口に出され、その言葉が槍となって彰人の胸に深々と突き刺さる。

「どうせお前の親父が細工していたんじゃないのか？だからあんなに強いんだろ。普通じゃないもんなお前の強さは。」

「俺の、いや父さんのガンプラは……オルタナガンダムは関係無いだろう！」

彰人は仲間に弁解するも、聞き入れられる事はない。仲間“だった”者達からの冷たい視線が彰人の心を抉り、癒えない傷を残した。

「申し訳ないが、次回以降の大会には不参加でお願い出来ないだろうか？無論、無期限でね。一度でも疑惑がかかった者を世間は信用しないんだよ。それは解ってくれるね？」

当初、彰人は言われていた事が理解できなかった。世界大会への参加剥奪。それはガンプラを愛すもの達の憧れであるプロへの道を閉ざされたに等しい。

その言葉を聞くとや否や、彰人の表情はさっと青ざめた。

「チートツールなんて俺は使っていない！知らない！だからお願いします！俺はいいです！でもせめて仲間は信じてください。あいつらは関係ありません。参加資格を奪わないで下さい！お願いします！おねが……い……します。」

公式大会の廊下で涙ながらに頭を下げるも、その叫びは届かない。大会の公式関係者に冷たくあしらわれ、もはや彰人の心はぼろぼろに引き裂かれていた。

神取彰人は大会への無期限に及ぶ参加剥奪に加え仲間を失った。幸いだったのは、彰人のチームの仲間は彰人の巻き添えとして参加剥奪まではされなかった。彰人だけが一方的に悪者として扱われたまま、彼は公式のガンプラバトルから追放された。

更にその不幸はガンプラバトルだけにとどまらなかった。父親が違法ツールの製造と使用に携わっていて、警察に逮捕されて以来から彼の生活は大きく変わってしまった。後に冤罪だという事は立証されたが、世間の目は厳しいまま変わらない。

——神取 貴明《かんどり たかあき》彰人の父であり、彰人にガンプラやGBAでのバトルの基礎を教えたのも貴明だった。彼は現代にしては珍しく生真面目な男で、彰人が成人するまでは働くと伝えていた。しかし、仕事に向かう途中、駅のプラットホームから転落した少女を助けようとし、そのまま電車で轢かれ帰らぬ人となった。最

後の最後まで人のために生きた男だった。

更に悪い事というのは重なるものである。彰人の憧れの男、そして父と同じく自分にバトルを教えてくれた遠野未来がバトルの後、意識不明の重体となったのだ。次期メイジン候補の一人が倒れた事により、ガンプラバトル界限は大幅に求心力を失った。尚、彼は現在も都内の病院で植物状態との噂である。

未来はバトルの後に彰人に対しこう告げていた。この時、未来からすれば彰人が不正行為を働いたかどうかはまだわかりもしない段階だが、未来は彰人が不正をしただという事などは頭の片隅にも無く、ただ彼の潔白を信じていた様に彰人には映った。彼の目にはきらきらと輝いており、その瞳には嘲りや軽蔑の色が無かったからだ。

「彰人君！僕は君を信じるよ。だから、負けるな！いつか立ち直って僕とまた戦おう！」

爽やかな笑顔のまま、未来は疑うそぶりも見せず彰人に手を差し伸べる。彰人は申し訳なさのあまり、一瞬躊躇い、結局その手を取る事が出来なかった。彰人自身、今の自分にその手を取る資格は無いと思えたのだろう。

例え理不尽な理由とはいえ、自分が未来とのバトルを汚したことに変わりはないのだ。こうして彰人は未来と共にプロとして肩を並べる。という未来は閉ざされ、失われてしまった。だから未来の浮かべるその笑顔があまりにも遠くて、裏切ってしまったその顔を見ていると切なくて。心が張り裂けそうで。

発したかったはずの言葉が虚しく宙に消えていく。

(未来さん……ごめんさい。)

そんな言葉だけが頭の中をよぎっていた。父が亡くなった後、そして未来が倒れた後、彰人と母は住み慣れた家を引っ越した後に母の実家がある新潟へ引っ越した。

彰人が世界大会で少額ではあるが手に入れた賞金があったのに加え、彼が必死で勉強したかいもあってか、奨学金制度のある総務院高校に通うことが出来たのは僥倖と言えよう。

最初の一年の頃は毎日が得意でもない勉強に当て、辛かったが、気



晴らしに訪れたプラモ屋で幼馴染の桐谷総一郎とぼったり再開した  
ことにより彼の生活に転機が訪れる。高校生にもなつてプラモデル  
遊びが心良く思われていなかった頃だったため、彰人は驚いたと同  
時に嬉しかったのを覚えていた。

そんな過去を振り返り、再度エリックに向き合う。今の状況に付  
いて行けなくて、ふと物思いにふけてしまったのを反省し彰人は我  
に帰った。

「エリック、俺はもうガン普拉バトルだけをやってる訳には行かない  
んだよ。……好きだけど。」

彰人の弁明めいたもの言いは逆効果だったのか、エリックは尚も厳  
しい表情を崩さないまま彼を睨みつける。許せないのだろう。

「君を覚えていなかったのも謝る。だけど俺は……状況が変わったん  
だ。」

言葉を一つ一つ探るようにでしか伝えられない。彰人自身もこん  
なことでは伝えきれると考えてはいなかった。だがそんな言葉では  
エリックの失望をぬぐい切れるはずなど無い。

「関係ない。」

だからその弁明も一蹴された。あまりも呆気なく、彰人の言葉の揺  
らぎすら理解されないというのは、あまりにも悲しい。

「僕は……僕はアキトに会いたかった。あの強かったアキトに。君に  
憧れていたからだ！その強さに尊敬を覚えたからだ！だから日本に  
来た！……四季にも興味はあったけれど。」

(興味はあったんだ……。)

切羽詰まった状況にも関わらず悲しみの表情を浮かべ、本音を漏ら  
すエリック。そんな彼に対して文香は心の中で突っ込みを入れた。

「それが何だ君は……！ いや、ごめん。僕も少しクールになるべき  
だったね。」

これ以上話しても無駄だと感じたのか、エリックは彰人から視線を  
逸らす。もう話すことは無いのだと言わんばかりに。やはり失望さ  
れたのだと、エリックの様子から彰人は改めて理解せざるを得なかつ  
た。

「今日はありがとうアキト。君は覚えてなくても、久しぶりに君と戦えて僕は楽しかった。」

残念そうな表情を浮かべながらそう言い残した後、ドアを閉めてエリックは帰った。ぽつんと部室内に取り残される彰人たち。気まぐしい沈黙が部室内を漂う。

「え、えーとさ」

無言になる3人。何を話せば良いか、どう切り出すか迷っていた。まるで先の見えない霧の中を無理に歩く旅人のように。重苦しい空気が教室を包む中、先に沈黙を破ったのは意外にも文香だった。

「今日はしょうがないよ。彰人君も久しぶりに会ったんだろうし。エリック君もちよつと……理由が重いしね。」

「誰が悪い訳じゃないよー！」

「文香……。」

文香がフオローしてくれている。彼女は本当に純粹で優しい子なんだと彰人は改めて嬉しく思うと同時に彼女に対しての申し訳なきが勝る。自身の情けなさに嫌になり思わず視線を落とした。

「彰人君。」

その落とした視線を拾うかのように総一郎が真剣な眼差しで彰人を見つめると同時に2人に呼びかける。普段の彼からは想像がつかない。ある種の覚悟が固まった顔だった。

「突然だけど、今日は僕のうちに来て欲しい。文香さんも。」

否定を許さないと言わんばかりの強い眼差しに彰人達はただ頷く事しか出来なかった。

部活（最悪な雰囲気だったが）を終えた後、総一郎は市内にある彼の家に彰人と文香を招いた。理由は勿論ただ一つだ。あの留学生についてどうするのか話し合うためだ。

「入って、中にどうぞ。」

総一郎は2人を中に招き入れる。ちなみに総一郎の家に彰人と文香を中に招くのはこれが初めてでは無い。桐谷家と立派な表札が飾られた玄関を抜け、オートロックを開けて中に入る。長い坂道を上り、ようやく足を踏み入れる事が出来た。

何しろ高級住宅街の中でも一際目立つ家だ。最初の頃の2人は総一郎の実家の大きさにただただ驚いていた。脳外科の医者というのにはやはり金を持っているらしい。総一郎は彰人と文香を廊下を渡り、突き当たりにある彼の自室へと案内する。

「ほら、今飲み物持ってくるから、そのソファアに座って。」

部屋に入るなり、総一郎は2人をソファアに座らせた。高級な黒皮のソファアに一瞬躊躇うが、彼の言葉に甘えて2人は座った。

「ありがとう。総一郎君。」

「彰人、文香さん。僕は数分間いなくなるけど、変な事はしないでね？」

頬を赤く染める文香とワントンポ遅れて苦笑いする彰人を尻目に総一郎はキッチンに向かう。総一郎は本来冗談を積極的に言う男では無い。しかし、今は状況が違っていた。不器用な彼なりの気遣い。それが出来るくらいには総一郎と2人は仲が良かった。普段、彼が他人には見せないもう一つの一面といえよう。

長い廊下を歩きながら彼は思案する。

(それにしても、だ。あのエリックという男。僕も見た覚えはある。彰人の話からなんとなく似ているとは思っていたが、まさか本人だったとは。いや、それは良いか。まずは彰人と文香さんの心をほぐさないと。)

総一郎は台所で砂糖とココアとやや熱めのミルクを加えて配合したお手製のココアを作り部屋に戻る。本来は彼の妹が幼い頃に作ってあげたものだ。暖かい飲み物というのは人をリラクセスさせる効果があるらしい。ココアを入れたカップをトレーに入れ自室に運ぶ。

「エリック君のあの言い方は酷いよ。」

部屋に戻ると、文香が珍しく意見を言っていた。彼女の言葉には総一郎も概ね同意見だった。あの時を思い出したのか、一瞬顔が曇る。「あれは流石に唐突すぎるね。……はい、ココア。身体あったまるよ。」

総一郎のお手製ココアが入ったカップを二人に渡す。熱いので、渡

すときに少しだけ気を遣った。

「甘いものでも飲んで落ち着こう。」

「ありがとう。」

「総一郎は何でもできるな。」

彰人が父親譲りの優雅な動作をして、ココアを飲みながら総一郎を茶化した。教室にいる時の彼ではあり得ない光景である。彼の育ちの良さがこういった所で窺いしれた、そしてその所作は心を許した総一郎の前でしかやらなかった。

「で、本題なんだけどき。」

冗句はさておき、総一郎は本題の話を切り出す。

「2人はどうしたい？というよりも彰人はどうしたい。それが肝心だと思うんだ。」

正直なところエリックの話もわからないでもない。総一郎の目から見ても彰人のバトルセンスはかなり高い。その気になればプロゲーマーにもなれるだろうというのは、誰が見ても明らかだった。常人ではなかなか得ることのない才能を持っているながら、それを使わないというのは、エリックの指摘の通り傲慢なのかも知れないと総一郎は考えている。

彼の行動自体は幼稚な八つ当たりでしかないが、その点においてはエリックの苛立ちちは理解できた。ただその一方で、将来のことは彰人本人が決めることであり、部外者が口をはさむこともないだろうとも達観していた。

「もう一度聞く。彰人はどうしたい？聞かせてくれ。」

総一郎は真剣な眼差しで改めて尋ねた。彼の真意がどうしても知りたかった。

「俺か……俺はだな。」

対する彰人は頭をかきながら考えている。その迷い悩む様子はいつもの彰人の様子とは違っていった。恐らく、本気で悩んでいる。普段明るく面白い彼が、ここまで落ち込んだ表情を見せたのは久々だった。

「暫くは現状維持かな。」

沈黙の後、真剣な表情のまま彼はそう呟いた。

「は？現状維持だつて？」

予想外の答えに思わず聞き返す。苛立ちが含まれていた。総一郎にとつてその答えはあまりにも意外だったからだろう。普段の彰人にしてはあまりにも後ろ向きな発言に頭を抱えた。

「そう。現状維持。」

彰人はそうやって強引に言葉を繋ぐものの、彼の視線は迷ったままはつきりとしなない。その泳いだままの視線は総一郎や文香に向けられていた。

（……ああ、この目は父親が亡くなった後の彰人の目だ。君は僕や彼女である文香さんと一緒にいる時間を大事にしたいのだろうね。……それも分かる。理解出来る。その優しさを嬉しく思うよ。）

（だけど彰人、それは”逃避”なんだよ。）

親友の後ろ向きな発言に対しても失望はしない。ただ、その意見は本当に彰人の本心なのか否か、判断出来なかった。総一郎は優しい性根の持ち主だったから、あえて何も言わない。だが、本心であつて欲しくなかったのかも知れない。

（まずいな。言葉の選び方を間違えたか？）

一方で彰人は焦っていた。総一郎が腕を組み深妙な顔をしながら自分を見ていたからである。同時にどう答えるべきか迷っていた。確かにG B Aでのガンプラバトルは楽しいし、父や未来との思い出でもある。その父が亡くなってから、自然と遠のいていたガンプラバトルに再び誘ってくれたのも総一郎だった。

文香もガンダムは知らないが、理解してくれようとしている。恵まれてる環境と恵まれた友達。彰人にとつてはいつのまにかそれが当たり前になっていた。

（これではエリックにも呆れられるのも当然だ。俺はガンプラバトルをこのまま続けていいのか？）

だが答えは誰にも解らない。当の彰人自身も今は答えが出せない気がしていた。

「ああ、だが今はバトルだけ続けるのは……。」

「好きにしているんじゃないの。」

彰人のはつきりとしめない態度に豪を煮やしたのか、文香が発言を遮る。普段のんびりした彼女には珍しい行動だった。その様子に彰人が驚いた表情で彼女の顔を見つめた。

「彰人君が後悔の無いように生きられれば、きつとそれでいいんだよ。正しいとか、正しく無いとか、そんなの関係無いよ。」

「彰人君は私のこと大事にしてくれているでしょ？だから、趣味をやるなんて悲しい事を言わないで。そのままの彰人くんがいいから。」

真つ直ぐな瞳で彰人を見つめる。くりくりとした大きい瞳。吸い込まれそうな美しい輝きを放つ瞳に、彰人は鼓動の高鳴りを覚えた。

「文香……ありがとう。」

（決めた。難しいことを考えるのは後回しだ。くよくよ考えるのなんて、俺らしくないしな。）

彰人は深呼吸した後、2人の顔を眺めながらある種の決意を秘めて言葉を発した。それは彼なりのけじめのつけ方だった。

「俺、決めたよ。明日エリックと——バトルする。」

口に出すことではつきりと分かる。改めて理解できる。

“ガン普拉バトルで失ったものはガン普拉バトルで取り戻すべきなのだ”

きつと今はそれしかないのだと、彰人は確信めいた何かを胸に秘めていた。

夜も21時頃を回り、総一郎の家から帰る途中。彰人と文香は帰る道と一緒に歩いていた。帰る際、総一郎は二人が寒くないようにとカイ口を渡してくれた。ありがたいと受け取る二人。そのカイ口を二人はポツケにしまい、温もりを感じながら歩いていた。じんわりとした熱がポツケ越しに伝わる。

新潟の冬は寒い。頬を斬りつけるように風が冷たい。しかしその一方で文香とつなぐ手は暖かい。カイ口と文香の手、それらの温もりが彰人の冷えた心をゆつくりと暖かめてくれる。

「今日は特に風が冷たいね。」

無言のまま歩く彰人を気遣ってか、唐突に文香が口を開く。横目で彼女を眺めた。今日は気遣われてばかりだなと彰人は心の中で反省した。

「ああ。そうだな。寒くないか？」

彰人も声を掛ける。文香が寒そうに肩を震わせているのを見過ごさなかった。持っていたカイロを一つ渡す。

「ありがとう。でも平気。」

「さっきのことだけだよ」

「何？」

「文香も将来のこと考えているのか？」

彰人は尋ねた。

「私？私かあ……。」

文香も唐突な問いに考え込んだ。何を言うか、迷っている様子だったが、ふと答えた。

「高校を卒業したら大学の医学部に進みたいな。」

「……医学部か。文香なら大丈夫だよ。」

「そう。私は小児科の医師になって、沢山の子供の命を救うの。」

「……」私の弟みたいな子を減らしたい。それが私の目標。」

一瞬の沈黙。それは文香の恋人である彰人ですら、触れるのを躊躇う話だった。天音隼人。文香の弟。今もなお植物状態の少年。彰人は幼い頃の隼人の屈託のない笑顔を思い出し、切なさに胸が締め付けられる。

「君は立派だ。」

かろうじて言葉を絞り出す。彰人は隼人の話を出されると弱い。まるで、自分自身が責められている様に感じた。

「立派じゃないよ……でも。」

「そうありたい。とは思ってる。」

「ふふ。だから彰人君にはいつも優しいでしょ？」

悪戯っ子の様に上目遣いで彰人はをのぞき込む文香はかわいらし

かった。くりくりとした大きい瞳は先ほどと変わらず宝石のようにきらきらと輝いている。背も彰人よりも一回り小さく、側から見て幼く見える彼女でも将来のことを考えられている。

(俺は、俺はどうなんだろう。)

彰人は改めて自分が将来何をしたいのか。これから自分がどうしたいのか。それを考えようと決意したのか、ある種の憑き物が落ちかのような表情を浮かべていた。

「俺も、君をもっと大事にできるように……。」

「抱え込みすぎ。」

最後まで言えないうちに、彰人の唇にそっと口づけられた。彼女の柔らかい感触。暖かさ。文香の甘い匂いが鼻をくすぐる。彰人がその唐突な行動に対して為すすべなく呆けていると、文香は照れ臭そうに笑いながら柔らかい口調で言った。まるで歳下の子供をあやすかのような優しさを感じる口調だ。

「エリック君とうまくいくといいね。」

「……ああ。」

その無邪気な笑顔に彰人は耳まで真っ赤になるのをこらえながら、彼女の後姿を見送る事しか出来ない。彼のコートの中にあるカイロの温もりは、まだ暖かかった。じんわりと暖かいその温もりを感じながら帰路を急ぐ。その表情は明るく、柔らかい。

——冬の寒さなんて、少しも感じなかった。

第4話に続く。



## 第4話 『想いを胸に』

肌寒い十二月の朝、彰人は窓から差し込む光を眩しく思いながら寝惚け眼のままベッドから起きる。彼は幼い頃から朝に弱い性分とはいえ、最近はさらに倦怠感が抜けない。彼の表情からは拭えない疲労の色が見て取れた。制服に着替えた後に部屋を出て一階に向かうために階段を降りる。例え疲れていたとしても、格好だけはきちんとするのにも彼なりの流儀だった。

彰人の住む家は一般的な家庭に比べるとやや広い。父の貴明が昔、家族で一緒に住める様にと広い家を買ったらしい。居間に着くと母――神取 冬美《かんどり ふゆみ》がキッチンで朝食を作っていた。フライパンでウインナーでも焼いているのだろうか。肉が焼ける香ばしい香りが彰人の鼻につき、思わずお腹が鳴る。

「おはよ。母さん。」

「ああ、おはよう。彰人。ご飯食べなさい。」

「いつもありがとう。今度から俺も作るよ。」

「いいの。母さんはね、お父さんの分も彰人のために頑張るから。」

「……ありがとう。それじゃあ行ってきます。」

父を失って辛いのは母も同じなのだ。だからこそ、それを言われてしまうと、彰人の方からは何も言うことは出来ない。父が居なくなるだなんて、数年前は考えもしなかった。このまま彰人が大人になっても父とガンブラを続けて、いつかは孫の顔も見せられると信じていた。

しかし、それはもう叶わない。

朝食を済ませ、父の仏壇に手を合わせた後に彰人は学生鞆を持ち学校に向かう。

凍結した箇所が多く見受けられる新潟の冬道に何度か転びそうになりながらも、何とか学校に辿り着く。学校と家との往復。父が死んでも、仲間達から迫害されても、日々の営みは何も変わることはなく淡々と人生は続いていく。まるで川の流れの様に穏やかだが、同時に残酷な時間だった。

(これだから現実には救い難い……。て、これはカツコつけ過ぎかな。)  
幼い頃、彰人が好きだった小説のキャラクターの口癖が頭によぎる。過酷な状況で尚も己の意思を貫いた主人公の気高い姿に幼い頃は憧れたものだ。

(……現実はいつだって救い難い。でも、それが当たり前なんだ。)

父を失ってからと言うもの、いつしか彼はそんな達観めいた考えを持つようになっていた。たとえそれが彼自身を縛る鎖であり、その落ち着きようがある意味で周囲から大人になったのだと評されたとしても、未熟さから彼はその考えに気づく事はない。

(……エリッククに向き合わないとな。)

—— エリックク・オースティン

彰人が世界大会で戦った相手。向こうからすれば、わざわざ日本に来てまで会いたいと思ってくれた相手である。それなのに彼の顔すら覚えていなかった。エリッククの失望や悲しみが今更ながら胸を締め付け、自分の馬鹿さ加減に思わず自嘲する。

(……ほんと、最低だな。俺って。)

顔に雪がさらさらとふりかかり、その冷たさに顔を歪める。

「おはよう。」

玄関から校舎に入りそのままクラスに入ると開口一番、クラスメイト達と総一郎に挨拶する。クラスメイトも、何一つ違和感なく挨拶を返してくれた。

彰人は当初この対応を不審に思ったものだが、今はほんの少しだけ、慣れた。彰人の父親の事件を知っている人間も居るのだろう。しかしこのクラスのみんなは気にしないでくれているのか、それとも元から興味が無いのか。おかげで陰湿ないやがらせが無いのは彰人にとっては何れもの救いだった。だから学校生活で困ることは無い。

「彰人、昨日の件だけ。」

昨晩の疲れが残っているのか思考がまとまらない。宙を眺め、ぼんやりと惚ける。そんな気の抜けた所に総一郎が話かけてくる。両手を合わせていた。さも済まなそうにする彼のその表情からは、葛藤が見て取れる。

「ん？どうした。」

停滞した思考を再稼働させ、総一郎の方に顔を向けつつ彰人は尋ねた。余計な気はもう、遣わせたくは無かったからだ。総一郎の口から発せられた言葉は彰人にとっても意外なものだった。

「肝心のエリックが休みなんだ。」

なんと。エリックが休んでいる。昨日あれほどの啖呵を切ったのに。いや、啖呵を切ったからなのかは分からない。だが、彰人なりにどう彼と話し合うかを昨晚からシミュレーションして来た。下手をするともそれも徒労に終わるかも知れない。

(うーむ。昨日のことが原因だよな……?)

とりあえず席に座る。昨日の出来事を反芻し鬱屈とした気持ちを抱えたままHRが終わり、そしてあつという間に午前中が過ぎた。昼休み。相変わらず教室で文香と総一郎と昼飯を食べる。これだけはいつもと変わらない。

「眠そうだね。大丈夫かい？」

「彰人君。また夜眠れなかったの？」

二人が心配そうに彰人の顔を見合わせた。

「いや、大丈夫。そんな疲れてるように見えたかな？」

彰人も顔には出さない様にしていた様だが、誤魔化しきれていない。密かに憧れるポーカーフェイスにはまだまだ遠いようだ。

「彰人先輩は、抱え込みすぎなんですよ。もぐもぐ。」

咀嚼音。そしてごくんと飲み下す音。彰人からは見えない位置に居たから気づかなかったが、ふと聞き覚えのある声が聞こえる。

「雛が何で俺たちのクラスにいるんだよ……。」

「彰人さんが心配だったからです。」

愛らしい声が響いた。

「僕は反対したんだけど……ごめん。彰人。」

総一郎が申し訳無さげに彰人に視線を送った。雛美と呼ばれた少女は総一郎の隣に座っている。この小柄な体格に亜麻色の癖っ毛を持つ犬の様な少女の名は桐谷 雛美《きりや ひなみ》総一郎の妹である。

総一郎曰く兄妹仲はいいのだが最近距離が余りにも近過ぎると、兄の威厳を保つのに困っているようだった。

「お兄ちゃんが彰人さんのことが心配だって言うので、来てあげました。」

雛美はそう言うのと食べる手を止め、彰人に向かって薄い胸を張った。

「マジか……俺は後輩に心配されてるのか。」

「雛ちゃんは相変わらず可愛いよね。」

文香はそう言うって雛美の頭を撫でる。表情が優しい。2人の様子はまるで仲睦まじい姉妹の様に見えた。教室の隅からは尊い……という呟きが聞こえたが、無視。

正直な話、彰人としては身長的に2人とも同学年に見えるのだが、そのことについて深く追求するのも怖かったのでやめておいた。現実には非情である。

「で、その面倒くさい外人さんはどうなんですか？」

渋い顔をしながら唐突に雛美が発言する。その発言には怒りと不満が込められていた。先程の事といい昨日彰人が向けられた悪意に対して、彼女が不満を抱いているのは一目瞭然だった。

「雛ちゃん。そんな言葉使わないの。」

「むう。」

めっ。と雛美は発言をたしなめられると同時に、文香に頭をわしわしと弄られる。繰り返される微笑ましい光景に目を細めつつ、彰人は努めて慎重に考えをまとめた。

「その件だけどき、俺はエリックと話し合うつもりでいるよ。向こうはどうか分からんけど。」

少しでも雛美の不安を取り除こうと更に頭を働かせ答える。話し合う。というその答えに雛美は驚いたようだ。

「彰人さんマジ卍です。」

「また君は覚えてたての用語を使うんだからもう。」

ボケた雛美にツツコミを入れる。こうした雛美の冗談は少しでは

あるが、彰人の心を癒した。彰人は柔らかい表情を作り雛美に微笑みかける。

「流石に昨日のままなのは俺も嫌だしな。」

「エリックさんのことを覚えていなかった彰人さんも彰人さんですけどねっ！」

「う！それは確かに俺が悪い……な。」

狼狽える彰人。確かに周りのことを見ていなかった。彼らしくもない。

「仕方ないさ。世界大会とはいえ、一人一人の顔なんて覚えられるものじゃない。しかも外国人の顔なんてみんな同じに見えるものだ。」

総一郎が助け舟を出す。こういうさり気ない気遣い出来る男だった。

「お兄ちゃんもそれは酷いよ。人種差別反対。」

「私は2人の間の事は深く知らない。けど、真心込めて話し合いをすれば大丈夫だよ。きつと伝わるよ。エリック君も悪い人には見えなから。だから大丈夫。」

「彰人。あの某パイロットも対話の重要性は説いている。だから変に気負わずに行きなよ。」

「そうする。」

彰人は励ましてくれる彼らの言葉に勇気付けられた。嬉しかった。こう言った言葉を投げかけてくれることが。だが彰人自身、そうは言ったものの肝心のエリックが校内にいない以上、どうしたら良いものか途方にくれるしか無い。

（しようがない。放課後、柊先生に住所を聞いて自分で探すしか無いかな。）

……そう結論づけたその時、ふと机の中を見ると書き置きと思しき物を見つけた。封筒には彰人へと書かれており、気になり封筒を破る。

——今日の放課後、正門前で待つ。逃げるな。

とだけかかれた紙が入っていた。達筆ではあるが、そのぶつきらばうな書き方と内容から、差出人など誰かすぐに分かった。

(なんだこれは。午前中は全く気づかなかったぞ。あいつ、いつ入れたんだ。)

「か、書き置きとは……。」

その時代錯誤とも言える対応にみんなが渋い顔をする。

「直接くればいいのにー。」

手紙を見た雛がぶーたれた。文句を言っておきながら、書き置きをしたことを不誠実だと思っている様だ。

「仕方ないさ。あいつも顔を合わせづらいんだろう。」

チャイムが鳴り響く。どうやら昼休みも終わる時間が近づいて来たようだ。

「それじゃあ、私はこれで帰ります。」

雛美が椅子から立ち上がる。教室に帰るのだろう。

「また来てね。雛美ちゃん。今度はお菓子用意しとくから。」

「はい。その時はまたよろしくです。」

ペコ、と雛美は頭を下げた後に教室から出て行った。こういう律儀なところは総一郎と似てるなあとしみじみ彰人は感心するのだった。

退屈な午後の授業も終わり、放課後のチャイムが鳴る。今日も一日が終わったが、エリックのところに行かないといけない。鞆を持ち、教室を出て正門に向かう。

案の定、そこには書き置き通り正門で待つエリックの姿があった。腕を組み、金髪が風に揺れている。通りがかる生徒がひそひそと話をするが、気にはしていない様だ。

彼ははわざわざ車で送ってもらったのだろうかと彰人は予想する。何故なら、彼の後ろには黒塗りの高級車と黒服がいたせいだ。

(どうする?)

どうするも何も、選択肢など始めからありはしない。まさか黒塗りの車で来るとは思いもしなかった。彰人は彼の行動に内心呆れていた。彼なりの宣戦布告のつもりなのだろうか。それとも本当に何も考えていないのだろうか。全く判断がつかない。

「面白いな。」

とはいえ決闘《ガン普拉バトル》をを申し込まれたらそれに応える

のが筋だろう。深呼吸し、足を進めた。

「やあ、エリック君。」

彰人は意を決して外に出ると、エリックに手を振りながら近づく。向こうも彰人の姿に気付いたようだ。一瞬だけ空気が張り詰めるのが分かった。

「やあ、彰人君。」

エリックは仰々しい動作で此方に近づいて来る。やあ。という声には苛立ちと敵意が込められているが、彰人は他の生徒が遠目から心配そうに見ているのが気になり、あえて何でもないといい風を装う。「来てくれたんだね。いや、逃げなかったんだね。」

「まあな。」

「“また逃げる”のかと思ったよ。僕は。」

「前置きは良いさ。話《ガン普拉バトル》したいんだろ？」

「話が早いね。流石「元」準チャンピオン。」

「安い挑発だな。まあ俺は慣れてるんだけど？」

それよりもエリック君の下宿先を見てみたいな。」

「いいよ。さあ乗って。お城に案内するよ。」

黒塗りの車に乗る。車内は中々良い空間だが、出来れば違う場面で乗りたかったな。そんなくだらない事を考えてドアを閉めた。車内では嫌な沈黙が流れる。

(気まずいな……怒ってるのは分かるけど何か言ってくれよ。)

嫌な沈黙に耐えきれず、余計な思考ばかりが先走った。だが、語りかけるべき言葉を持ち合わせてはいない。彰人はエリックを眺めた。さらさらとした美しい金髪にサファイア色の瞳。そして長い睫毛。昨日見た彼の姿は変わらない。少しだけ、不機嫌そうではあるが。

彰人は更に考える。高級車、黒服、そして彰人に会うためだけに留学を選んだエリック・オースティンという男は彰人の想像以上に力がある事が分かった。だがそんなことは関係無かった。何処の誰だろうと、バトルする事に変わりはない。

数十分後、車のエンジン音が止んだ。到着したのだろう。彰人はエリックと共に車から降り、目の前の彼の家を眺めた。結論から言う

と、エリックの家は素晴らしい場所だった。下宿先とは到底思えない。家の外装を見るだけでも圧倒されそうだ。

「何を見惚れているんだい。」

「いや、何でも無い。早く案内してくれよ。」

家を見せた時、一瞬だけエリックの敵意が薄れた気がしたが、気のせいだろうと彰人は判断した。そのまま彼の後ろを歩き、大きな庭を越えた後に玄関へ辿り着く。2人は白く立派な扉を開き中に入った。外装からある程度予想はついてはいたが、内装も素晴らしいものだった。しかもメイドさんが案内してくれる。彰人は白と黒のツートンカラーを基調としたクラシカルなメイド服を見にまとった女性を眺める。なんの変哲も無さそうだが、その姿に少しだけ違和感を覚えた。

(ん？日本人……なのか。)

遠くからでもその艶やかな黒髪と小顔から日系である事が窺いされる。しかもかなりの美人だ。

その日系のメイドに案内されるがままに中を進むが、屋敷があまりにも広いため迷いそうになる。これは帰る時また送ってもらわないとだなあ。とつい呑気な事を考えてしまう。

「コンサ。彰人君。」

エリックがそう言った後に、彼の後ろに控えていたメイドさんがさり気無くドアを開けてエリックが中に入った後、彰人が続けて入ろうとする。すると突然、案内のメイドさんが彰人の腕をぐいと力強く引き、耳打ちをした。彰人は横目でメイドさんの顔を見ると見ると、やはり日本人だった。人形のように整った顔をしている。

「神取様……。坊っちゃんに付き合ってあげて下さい。」

圧力のある声が耳に響いた。彼女の無機質だが、エリックに対し気を使った発言に彰人は驚く。メイドというと、来客に対してあまりことういった踏み込んだ事はしないと思っていた。面食らったが、彰人は彼女の端正な顔を眺める。

「はあ。まあいいですよ。エリックの気が済めば。」

「お願い致します。」



「そう言い終えた途端、また表情がすん、と元に戻る。一瞬ではあったが、メイドと話を済ませた後に今度こそドアを開けて中に入る。」

「何回言ったか覚えてないが、広いな。」

「そう？普通じゃない？」

「その非常識さ、本当に俺を苛立たせるね。」

まあいいさと内心毒づき、彰人は部屋の中央にある装置に近づくと、彼も見覚えがある装置だった。

「これ、昔のプラフスキー粒子を用いたガンプラバトル用の装置だな。こんなものまであるのか。」

「そうサ。今のVRでは無い、正真正銘の純粋なガンプラバトルがしたくてね。」

「エリック。君は本当にバトルが好きなんだな。」

思わず感心した。素直にこれはすごい。彰人は少しだけエリックを見直した。ガンプラバトルなど、てつきりお坊ちゃんの気まぐれの腰掛けだと思っていたからだ。だがこの設備の力の入れようは一介の気まぐれでは無いと断じられる。

わざわざ旧式のプラフスキー粒子発生装置を購入し稼働できる状態にしているのだ。これだけでもエリックが本気でガンプラバトルを愛しているという事がありありと分かる。

「君もそうだったのにね。」

「え？」

「何でもない。始めようか。」

エリックがガンプラを準備する。彰人はエリックの言葉が気になったが、ガンプラを機器にセットする。プラフスキー粒子を用いた装置。所々に多少古さが残るが、この装置で戦うのは幼い頃以来だ。彰人にとっては多少なりともテンションが上がるのは否めない。

「MS……スタンバイ！」

「神取彰人！オルタナガンダム！」

「エリック・オースティン！シルベリアアストレイ！」

「Session……GO!!」

プラフスキー粒子が瞬き、視界が青く輝く。次の瞬間には画面上に

バトルフィールドが表示される。一瞬の遅延《ラグ》もない素晴らしい装置だった。

装置の動作速度の早さに一頻り感激した後、オルタナガンダムのブースターを点火させ加速する。辺りを見るにバトルフィールドは衛星軌道上の様だ。加速したまま眼前に迫るデブリを避け、無機質に移る宇宙を駆けつつ全周囲を索敵。いつ来るか分からないエリツクを警戒する。

（敵は何処だ？）

オルタナガンダムのディスプレイ上にはエリツクのガンプラはまだ表示されないが、油断は出来ない。

通常、プラフスキー粒子発生装置を用いた正真正銘のガンプラバトルは、そのガンプラの出来栄えから性能が決まると言ってもいい。表面処理、関節の保持力、塗装による耐ビーム性能、そして合わせ目処理による武装、機体の耐久性。全てガンプラの出来で決まってしまう。

そのため、新規のビルダーでは機体の性能差を埋めることができず、ガンプラバトルは徐々に衰退していった。それを一新したのがVRを用いた新しいガンプラバトルである。ガンプラに特殊なチップを組み込み、機械がそれを読み込むことによりガンプラを再現する。

無論、GPベースという機械に自身が作ったガンプラを乗せ読み込ませることにより、己のガンプラで勝負することも可能である。

この技術により、これまでガンプラに興味が無かった人も、元から興味があった人も同じ土俵で戦う事が可能となった。VRが無ければ、ガンプラバトルはマニアだけの閉鎖的な趣味となっていたことは想像に難くない。

彰人は想像する。これは正真正銘のガンプラバトルだと。全てガンプラの出来栄えで性能が決まる世界。幸い、彼のオルタナガンダムの完成度はあらゆる面において並みのガンプラを凌駕していた。

父から教わったガンプラを作る能力。そしてプロである未来から教わったガンプラの操作技術。

その二つが組み合わさった彰人と、彼が操作するオルタナガンダム

が強いのは道理であろう。

だからこそ彼は考えていた。エリックのガンプラの能力が分からない以上、迂闊に攻めるのは難しいのだ。愚策に等しい。まずは敵を観察、分析して対策を練ること。これが彰人がガンプラバトルをする上での最優先事項だった。

幸いオルタナガンダムには対ビームコーティングが施されており、ビーム攻撃による奇襲を受けても致命傷を負う可能性は少ない。

「彰人ッ！遅いぞッ！」

「ッ……！」

モニターに響く声に思考が寸断された。オルタナガンダムの真下から急加速、直上する機体。まさしくエリックの機体がサーベルを抜いて迫る。モニターの軸を合わせ重ねることにより、彰人のモニターではまるで機体が見えない様にする技能。

それを易々とこなすエリックは強い。一瞬で悟った。身に染み付いた動きで、一切の無駄なく彰人はオルタナガンダムを操作し、こちらも咄嗟にサーベルを抜き応戦。鏝迫り合う。居合切りに等しい動作だった。そしてこの瞬間的な動作が出来るのも彰人のガンプラの関節及び可動域が優れている証拠だった。

「腕が鈍ったんじゃないかなあッ！」

「言つてろよっつ！」

叫ぶエリックに対し彰人はサーベル越しにイーゲルシュテルンで反撃。ガンプラの装甲に弾かれるが、あえて同じ箇所弾を当て続ける。雨垂れ石を穿つ。彰人の攻撃はエリックのガンプラに多少のダメージを与えたようだった。

対するエリックもガンプラの脚部に搭載された隠し腕からビームサーベルを展開。オルタナガンダムの腕を斬り裂こうとするも、彰人に後方に加速されあえなく逃げられる。間一髪。反応が遅れていればやられていただろう。

攻撃を避けられ、行き場を失った機体が大きくたたたらを踏み隙を生む。その隙を突かれまいとエリックも後方に下がり体制を立て直した。

——睨み合う両機。

「そのガンプラ……！The・Oの改修型だな！」

「そうさ！あの時の雪辱！晴らさせてもらうよッ！」

エリックが距離を詰めるべくブースターを噴射し加速。機体を器用に操りながらオルタナガンダムへと迫る。ビームサーベルの数は隠し腕を含むと4本。観察するに接近戦特化の機体のようだ。

「こちらも接近戦は得意なんだよおッ！」

オルタナガンダムは腰から「刀」を抜く。青く輝くビームサーベルともう一本の黒く鈍い光を放つ刀だ。

「まつ！まさか……二刀流なのか!？」

その手に携えるのは美しく研ぎ澄まされた刀。まるで全てを拒絶するかの様な白く、鋭く、澄み切った彰人とオルタナガンダムの刃。

「羽々斬刀」（はばきりとう）

表面処理の上された滑らかな刀身には対ビームコーティングが施され、そこから更に丁寧にやすりがけされた鋭い切れ味を誇る実体剣。日本神話では八岐大蛇を打ち滅ぼした刀である。

この羽々斬刀は彰人が中学2年生の頃に作ったが、流石に設定を語るのが恥ずかしいと思っただのか、今日まで使わなかったのだ。

研ぎ澄まされたその刀身は、手で触れるとプラスチック製にもかかわらず薄皮が切れる。それほどまでに完成度が高く鋭い。生半可な装甲をバターののように容易く両断出来るまさしく彰人の懐刀だった。

「ならばこっちは四刀流だ!!」

「エリック！覚えておけ！四刀なんてのはな……!」

二機は接近すると同時に何度も切り結ぶ。短く高出力に形を変えたビームサーベルで牽制し、刀で追撃に切りかかる。まるで剣道の「型」の様にパターン化された無駄のない動き。そんな二刀を器用に扱う彰人に対し、エリックの機体はただビームサーベルを四本持ち、我武者羅に振るっているに過ぎない。接近戦特化という機体のコンセプトが似ていようとも、操縦技術の差から徐々に押し負けるエリック。

「扱いきれるわけが無いんだよッ！」

「くう！攻撃が速いッ！……だが！」

分が悪いと踏んだのか、エリックはオルタナガンダムから距離を置いた。そこに追撃を仕掛けるべくオルタナガンダムが両手で刀を上段に構えて斬りかかろうとする。

「こちらも切り札を使わせてもらおうさー！」

エリックがそう叫んだ瞬間、彼の機体から眩いばかりの光が放たれ一瞬目が絡む。瞬間的にThe. Oの外装を解き放っていった。が、それも彰人の予想の範囲内であった。強いプレイヤーがガンプラに複数の形態を持たせているのなど、常識中の常識だからだ。それはエリックとて例外では無かった。

「やっぱりあると思っただぜー第二形態ー！」

彰人は片目を瞑ることで強い光による視界不全からいち早く回復。隙について攻撃する。だがパージの隙を捉えるには至らなかつた。彰人の追撃をひらりとかわし、全部の装甲を脱ぎ終えると、エリック機がその本来の姿を現わす。

「パージしたらガンダムタイプって訳か。安直だな。」

「はっ！好きに言うといいさ！」

銀色に美しく塗装されたガンダムが目の間に現れる。その姿はアストレイ《王道ならざる者》タイプのようなだった。手に持つのはビームサーベルだが、MSの全長を易々と超える長さだった。だがその反面、刀身には太さは無い。出力を振り絞った細めのタイプの様だ。

どちらかと言えば、ターンタイプが持つサーベルに近い。「物干し竿」と呼ばれた刀を彰人は思い出した。擦ればいくらビームコーティングの装甲でも耐えられない。そう直感する。

「断言する。君のオルタナ(代替品)ガンダムでは僕のシルベリア(洗練された銀)には勝てない。」

「お坊ちゃんがいぶし銀を気取るなよ。」

「悪くないジョークだね。アキトに10ポイントあげるよ。」

「そんな面白いアキトには駄目押しにもう一つ。」

パージされた黄金の外装が集まり形になって行く。

「むー！」

彰人はその様子を訝しむ。鈍色のシルベリアアストレイからパージされたその姿は簡易的な人型……MSに似た姿に組み合わさっていく。

「The・Oってさ、後付けの設定でサイコミュが搭載されていたらしいんだよね。だからこうやって。」

MSがシルベリアアストレイの隣に立つ。銀色の美しい装甲をまとったアストレイが、オルタナガンダムを睨みつける。

その横には、主人を護るかのような黄金の甲冑騎士《ゴールド・クレイドル》が轡《くつわ》を揃えた。2機が強烈なプレッシャーを放つ。

「モビルドールの様に扱えるという事なのさー！」

ビシツと剣を横に携え、構えを取る二機。彰人はその美しさに見とれると同時に内心悔しがあった。『あの発想は無かった。』と。

「中々カッコいいじゃないかエリック。クソ、いいアイディアだ。これは認めざるを得ないな。」

「だろう？二刀流のMSが二機……!!」

「四つの剣を同時に扱えないなら、二機で分担して持てば良い。単純すぎる。だが今の俺には脅威だな。」

「察しがいいね。その状況判断の速さは心から尊敬するよ。だけど君は終わりサ。詰み《チエックメイト》なんだよ。」

二機のMSがオルタナガンダム迫る。羽々斬刀で何度か応戦するも、数の差を埋めるのは難しい。黄金のMDの方は対処が簡単だが、その隙を狙うシルベリアがうっとおしいことこの上なかった。一瞬の隙を突かれ、オルタナガンダムが「物干し竿」に片腕を切り落とされる。このまま、まともに相手をしたら負けるだろう。

『まともに相手したら』だが。

「いや、終わるのはお前だよ。エリック・オースティン。」

片腕を失ったにもかかわらず、彰人は自身たつぷりにそう言い放つ。その態度にエリックはたじろいだ。なんだこの余裕はと頭に疑問符が浮かぶ。

『接近戦特化の機体が片腕を切り落とされているんだぞ』

「何？いや、お得意のハツタリだろう？片腕の無いその機体で勝てる  
とでも思っ……！」

震え声で呟くと同時に、フツ……とエリックの視界から瞬間的にオルタナガンダムが消える。肉眼だけではない、モニターからも反応が消えた。一体、何が起きたのだろうか？とエリックは思考が遅れた。まるでミラーージュコロイドの類かと思うほどに。

「Shit!!何をするつもりなんだ？無駄な事はやめろ！」

姿が見えない彰人に焦るエリック。彼も正直な話これ以上の手を晒せないで、実はかなり焦っていた。これ以上何かやられたら負け。彼はそんな予感がしていたのだ。

残念ながら、その予感的中するのだが。

「エリック。何で俺のガンプラがオルタナ（代替）なのか教えてやるよ。」

声があると同時に、モニターと肉眼に何体いや何十体ものオルタナガンダムがエリックの眼前に迫る。その一体一体が刀を構えエリックに対し強いプレッシャーを発していた。目の前に広がる光景が信じられず、思わず後ずさりする。

「分身……だ……と？いや違う。これはF91の質量を持った残像——!!」

エリックは対策を練るため知識を総動員。どうにかしてこの場を切り抜けなければいけない。そう彼のガンプラバトルでの経験が語っていた。

（ヤタノカガミを展開した装甲を剥離させ分身するだけじゃあ無い。ビームを反射するヤタノカガミが分身……。）

「まさか……まさかまさかやめろ!!」

「悪く思うなよ。お前の機体には消えてもらおう！くらえええええつつ!!」

オルタナガンダムは大量の分身の中央に向け両脇に抱えたヴェスバーを放つ。光の線が太い閃光となる。放たれたヴェスバーの閃光がヤタノカガミに反射。更に反射した閃光がまた反射する。

ビームの乱反射だ。逃げ場など何処にもない。オールレンジ攻

撃などという生易しいものではない。ファンネルと違い、何処から攻撃が来るか全く予測できないのだ。リフレクタービットの様な効果を持つ八咫の鏡が雨嵐の様にビームの光を反射し攻撃する。分身体の中央に居た黄金のMDはビームの乱反射の直撃を受け爆発した。驚き、戸惑いの声を上げる。情けない声がコックピットに響き渡った。

エリックも何度か避けようと試みたものの360度からランダムに反射されるビーム攻撃など避けようが無かった。だが、装甲を削りつつも数度のビーム攻撃を避けるエリックの実力は確かだった。

失意に項垂れるエリックに、無慈悲にもBattle endedと無機質なナレーションが彼の敗北を告げる。

「どうだエリック!!名付けてプリズムコンセントレートだ!」

彰人は(聞かれていないが)一応解説する。彼自身この技を閃いた時は興奮のあまり寝付けなかったのだ。無言になるエリックに意気揚々と高説を垂れた。

「この技を使った後は耐ビームコーティングが全部剥げるから、敵からビーム攻撃を受けると即死する。だから余程追い詰められない限り使わない。」

「……だけど、効いたろ?」

「……クウウツ!!完敗だ!!!」

仮想空間でのバトルが終わり、現実に戻される2人。  
「いいバトルだった。エリック。」

彰人が笑顔を浮かべながら満足げに言う。真正正銘の心からの笑みだった。本当にガンプラバトルを楽しんだ者が浮かべる笑顔。その笑顔を見るとエリックは胸が強く締め付けられる様に感じ、その場に跪いた。

「な……。何故だ!」

「エリック?」

「何故そんなに強いのに!君は!!バトルから居なくなっただんだ!!」

「君の背中を追いかけていたかった!君とこうやってもっともっともっと戦いたかった!!なのはどうして!!」



「……親父が死んだんだ。」

「p a r d o n ? (何だつて?)」

「親父が死んだんだ。だから、バトルだけをやるわけにはいかなかったんだ。……親父の代わりにさ、家族を守らないといけないからな。」

彰人の言葉にエリックの表情がサツと青ざめる。そんな事は知らなかったと言わんばかりに。

「そんな……それは本当なのかい。彰人？」

「ああ。言つてなかった俺も悪かった。」

「そんな……ああ神よ……。そんなの辛すぎるじゃないか。それを僕は……僕は……。」

跪いた姿勢のまま涙を浮かべたと思つた途端、号泣するエリック。止め処なく涙が溢れ、時折彼の嗚咽が漏れた。

「僕は何てことを！何も知らないで、君に辛く当たつて！本当にすまない。僕もパパが居なくなるなんて考えられない！彰人、すまない！」

「いや、いいんだ。」

「いや良くない！僕は君になんて謝ればいい？何で埋め合わせしたら良い？」

「エリック。だつたら一つだけ、いいか？」

「W h y (何?)」

涙と鼻水でぐずぐすになった顔を向けながら涙声でエリックは彰人に尋ねた。

「今日のバトルは楽しかった。だから。」

“また、もう一度バトルしような”

その言葉を聞いたエリックが号泣して喋らなくなってしまい。彰人がどうしたら良いか考えていたところ、部屋の隅に待機していたメイドさんがこちらに近づき、唐突に話かけて来た。

「彰人様。こちらに。」

「はい？」

メイドにまたも腕を引つ張られる。意外と力が強い様だ。華奢に見えたのだが。

「エリック様は、あまりご家族と会われる機会が無いのです。ご両親は仕事で忙しく……。」

「なるほど。」

「坊っちゃんだけが唯一の楽しみとされていたのが、祖父と遊ばれていたあのガン普拉バトルでした。彰人様の話も、イギリスに居た頃からされておりました。」

彰人は腑に落ちた。だからあの執着だったのかと。それほどまでにガン普拉バトルが好きだったのだ。〃本気で怒るくらい〃に、わざわざ日本に来るくらいに。その気持ちは彰人自身も覚えがある事だった。

(それを俺は……。俺は、俺の方こそ。)

これほどまでに関心を抱いてくれたこの男に彰人は先程とは違い、好感を抱き始めていた。こいつも同じ〃ガン普拉バカ〃なのだ。初めて彰人はエリックを理解できた様な気がした。それは理屈ではない。国境を超え、時代を超え同じガン普拉という趣味が繋いだ奇跡だと思えた。

「色々と気を回してくれていたのですね。その、ありがとうございます。」

彰人も礼儀正しく頭を下げる。

「いえ、私はエリック様が喜んでいただけたらそれで構いませんから。」

メイドは彰人のまっすぐな視線に動揺したのか、少しだけ頬を染めながらそう言って微笑む。どうやらこの人もエリックとの絆があるに違いなかった。

「彰人様。坊っちゃんはあぁなると治るのに時間がかかりすぎます。時間も時間でしょう。今夜は送りますので帰られてはいかがでしょうか。」

「分かりました。エリックも明日学校に来るでしょうし、今日はお暇させていただきます。」

改めて一礼すると、また別のお迎えの人に案内される。エリックはあのメイドさんが対応するのだろう。どうやら迷子にはならなくて済みそうだ。

彰人は心の中でちよっぴり安堵した。

——数時間後。

「寒っっ!!」

時間は経って夜の22時。夜風が吹く中、少し肌寒さを感じながら彰人は文香と電話をしていた。話をする彰人の声は明るい。文香も彰人のその声の明るさを感じ取ったようだ。

「だからみんな言ったでしょ。何とかなるって。」

「ああ、丸く収まったみたいでよかったですよ。」

「それはきつと彰人君とエリック君だから大丈夫だったんだよ。」

「え?何でさ。」

文香の言葉が気になった。彰人とは違い、文香はエリックとほぼ初対面のはずだが。

「だって彰人君達みたいにな、ガンブラを好きな人に悪い人いないもんね。」

「総一郎君も彰人君もエリック君もみんな、悪い人には見えなかったよ。」

「何だそれ。純粹ということかい?」

「私さ、人に対しては不思議と直感が働くんだよね。」

「だから、エリック君も悪い人じゃないって心で分かったんだ。」

「そうなんだ…:文香はすごいな。」

「それ、バカにしてない?」

「いや、本音さ。」

そう。彼の本音だった。文香は一見天然に見えるが、人の本質を見抜く力は誰よりも優れている。付き合ってから改めてわかった事だった。彼女を好きになって良かったと、心から安堵する。

「今日も遅いからまた明日な。」

「うん。おやすみ彰人くん。」

「ああ、おやすみ。文香。」

ぷつりと電話を切る。正直名残惜しい気持ちはあった。しかし、明日もまた学校があるのだ。寝なくてはならない。“これだから、本当にこれだから”

「現実には救い難い。が、悪くもない。」

吐く息が白い。十二月も後二週間で終わる。彰人は風邪をひかないように早足で部屋に戻るのだった。

第5話に続く

## 第5話 『それは舞い散る桜の様に』

——12月末。路面に降り積もる雪が遅い冬の訪れを告げる。

彰人は相変わらず変わることの無い日常を過ごしていた。あの因縁めいたエリックとのバトルから数週間が過ぎてからというもの、以前とは違い。打って変わったかのように彼とは良好な関係を築いている。築いているつもりなのだ……が。

「彰人お〜！放課後また遊びに行かないかい？」

技術情報部のみんなも誘ってさあ〜！」

昼休み、彰人が椅子に座って昼食を食べていると、エリックが満面の笑みを浮かべながら近づきベタバタと彰人の身体に触れる。

（流石にこれは気安くし過ぎじゃないか？まあいいけどさ。嫌じゃないし。）

あのバトル以来、どうもエリックは彰人を親友と見なしているらしい。手のひら返すと評しても良い唐突なその態度は若干の困惑を彰人にもたらしたものの、彼の気安さは嫌いではなかった。

彰人は他人から素直に好意を寄せられる機会はこれまで限られていたし、また好意を寄せられたとしても、“ガンプラ”なんて特殊な趣味が合う人間なんてそういるものではない。

だから、エリックの無邪気さや好意を受け取れる。受け入れることはできる。それは彼の表情から複雑さが消えているのが何よりの証拠といえた。

（時々、うっとおしいけどな。）

「彰人様。申し訳ございません。彼は子供の頃から寂しがり屋なのです。」

椅子に座ったままの彰人に対し、フォローをするかの様に耳打ちしてくる椿。少し、距離が近い。言葉と共に彼女の吐息が耳に触れてこそばゆいのか、彰人は顔を背ける。

彼女は本来禁止されているはずの香水を僅かにだがつけていた。健康的な女の匂いと香水の香りがぷんと鼻をつき、それが彼を少しだけ官能的な気持ちにさせる。彰人がエリッククの屋敷で出会ったメイドさんこと雨宮 椿（あまみや つばき）も偶然か運命のいたずらか、彰人たちと同じクラスに編入した。

一般的にショートボブと呼ばれる短く纏められた黒髪は文香と同じくらい艶やかで美しい。やや意志の強さを感じるつり目も魅力的に映る。このような西洋人形を彷彿とさせる大人びた容姿から、彼女は一見歳上の大学生くらいに見えるが、実は彰人たちと変わらず若い年。

これは彰人や総一郎にとっては意外だった。女は男よりも精神的な成長が早いというが、彼女を見てみるとその節は一理あると改めて納得させられるなど彰人は理解していた。椿は普段は学生を演じてはいるが、彰人とエリッククが一緒の時はこうしてエリッククのメイドとしての顔を覗かせる。椿は無表情のまま黙々と弁当を食べる。

「ふふ。今日のお弁当も上手にできました。」

椿の人形の様な端正な顔がほころぶ。

（至福そうな顔で卵焼きを食べる姿を見てると、どうもこの間のクールなイメージと違うな。・・・無愛想に見えて、案外表情が豊かなんだなこの人も。）

そしてその大人びた外見とは裏腹の無邪気さは、エリッククと同じものを感じさせた。恐らくは似た者同士なのだ、彼女もエリッククも。その仲の良さから2人はそういう仲なのかと疑問に思うこともある。しかし当の彰人にそこまで聞く勇氣は無かったし、邪推するのも彼の趣味では無かったのでやめていた。

「で、メイ・・・椿さんも来ますか？そろそろ冬休みにも入りますし。みんなで遊びに行くなら行きましようよ。」

総務院高校も来週から冬期休みに入る。どの道、冬休みは勉強するか遊ぶかの二択なのだ。かくいう彰人自身も冬期講習が控えている。だが彼も折角の冬休みを単語帳との睨めっこで終わらせるつもりもない。ガンブラの改修か新しいガンブラを作るか、そんな他愛も無い

ことを考えていた。

「彰人様、私も遊びたいのは山々ですが、何分仕事がありますので……。」

申し訳ございません。と椿さんは頭を下げた。彼女の動作の一つ一つが優雅で丁寧である。それが仕事によつて培われた能力なのか、元々備え持つものなのかは判断できない。ただ、立派だ。と彰人は感心した。

（仕事って普段何をしているのか気になるけど、いきなり聞いたら失礼だよな。）

彼女の仕事ぶりに想いを馳せる。潔癖といつてもいいその姿勢はまさにお手伝いさんでもあり、優秀な秘書のようだ。こんな美人に支えられるエリックを羨ましいと思っているのか、彰人は無邪気に笑うエリックを眺めながら眉をひそめた。

「そうですか。なら仕方がな……。」

「ええ!? 椿は僕達と遊びたく無いのかい?」

「エリックお前なあ。」

しつかり者の椿とは違い、エリックは時々空気が読めないというか、やや理解が遅い所がところが見受けられる。こういう所が坊ちゃん気質と呼ばれる所以なのだろうか。日本人とは根本的に価値観が違うのもあるだろうが、日本で暮らす以上その鈍感さは危険である。彰人がやんわりと制止しようとする、椿がそれを優しく手で制止した。

「坊つちやま。申し訳ございません。」

一瞬の間を置き、椿はまた頭を下げる。その姿を見て、やはり彰人はこの人はすごいなあと感心するのだった。退屈な午後の授業が終わり放課後。彰人は技術情報部に足を運ぶ。やや老朽化がすぎる扉を開け部室に入ると、総一郎が机に向かって勉強している姿が目に入った。

（……あいつが部室の中で勉強するとか珍しいな。いつもは勉強する時、受験はもう始まっているからってすぐ家に帰るのに。）

部室内はストーブが焚かれており、暖かい。そんな中、総一郎は真

剣な様子で1人机に向かっている。何をしているのだろうかとふと気になり、声をかけた。

「お〜い。総一郎。ここで勉強なんて……っておい！これ模型雑誌だな。」

なんだ。勉強してると思ったら遊んでいたとは。彼も息抜きしたのだろうか。総一郎が読む模型雑誌をぱらぱらとめくると、そこにはHGペーネロペーの特集が組まれていた。

「ああ。彰人か。いや、たまにはいいだろ？」

特に悪びれる様子は無い。ニヤリと不敵に笑みを浮かべている。何度も言うが、彼はこうしただらけた姿を他人に見せることは少ない。

「普段のお前の姿を見てたら、誰も文句は言わないさ。……言わせないしな。」

彰人はそう軽く返答し、ふう。と一息ついた後、ここは無理に突っ込むのも手間だと判断し椅子に座る。背中にストーブが発する温もりを感じ、それが心地良い。

「ねえ、彰人。」

「ん。どした？」

「来週ペーネロペーのHGが出るんだけど、買うべきだろうか。」

「ん〜。あれでかいらしいからな。でもいいんじゃないか。模試が終わったら時間もあるし。」

「うん。」

「なあ。総一郎」

「大人になるってなんなんだろうなあ。」

「どうしたのさ急に。」

「いや、来年は受験で、順調にいけば進学だけどき、大学生になっても俺たちこうして遊べるのになって思ってる。」

「一般論で語るなら、大学生は時間があるんじゃない？遊べるさ。寧ろ遊ぼうよ。」

「うん。だけどき。」

「なんか、俺は大人になるって言うのがよく分からなくなった。」



「話がよく分からないんだけど。」

「ん。いやすまん。何でもない。」

「確かに僕たちは後3年で成人。でも、そんな急に大人になれるなんて、僕は思っていない。」

「妹の雛美が20歳になって社会的に大人の女になるのですら、僕は想像出来ないんだぞ。」

「だよな。」

「僕は仕事しても、大人になっても、僕が僕であることには変わらないと思うよ。勿論、彰人もね。」

「……そうだよな。」

そう言った後、総一郎は黙ったきり何も言わない。照れ臭いのだろうか。彰人も売店買ってきた雑誌を読む。部室内には穏やかな時間が流れていく。ストーブの温もりだけでない、暖かく和やかな雰囲気。この空気は総一郎が醸し出しているのだろう。彼のおっとりした性格の賜物と言える。

彰人がもしもあのまま総一郎と出会わなかったら、こうして部室にすることも無かつただろう。彼は嬉しそうに総一郎の横顔を眺めながら、こうして親友と過ごす何気無い時間が好きだった。

「なあ、総一郎。」

だから彼は、そんな親友に対する感謝の言葉を告げる。昔の彰人ならば考えもしなかったこと。頭の片隅にも無かつた言葉。それを今素直に表すことが出来た。

「俺たち、卒業しても会おうな。」

まだ先の高校卒業後を見通して。大人になった自分は想像出来ないし不安でもある。

「もちろんさ。」

そう目を細めながらやや照れ臭そうに話す親友の顔は、彰人の胸を暖かくさせた。その時、雰囲気壊すかの様にガラガラと音を立てて教室のドアが開く。何ごとだろうと2人が扉の方に顔を向ける。

「あの一。ごめん。2人とも。」

「うう。なんか男同士の友情に割って入るようでごめんなさい。」

入るや否や、すまなさそうに頭を下げる文香。

この様子だと、話を聞かれていたのだろうか。盗み聞きではないだろうし、別段不快に思うことも無い。だから普通に話すことにする。

「文香？いや別にいいよ。」

「天音さん。同好会はどうしたの？」

彰人と総一郎がほぼ同時に応える。この時間、いつも一番に同好会に来る文香にしてはやや遅い時間だった。何かあったのだろうか。

「今日はおやすみな。会長権限でね。」

そう話す文香はいつもと違い、どこか嬉しそうな表情をしている。

「実は2人に紹介したい人達がいるの。」

入って。という彼女の言葉と共に現れたのは。

「お兄ちゃん！彰人さん!!」

「雛！来たのか。でもどうして。」

文香の後ろからひょいっと現れる雛美。こういう小動物めいた動きは何処から習得したのだろうかといつも不思議に思っていた。

「今日は生徒会の仕事が早く終わって暇だったので、お兄ちゃん達の部室に遊びにきました。」

彼女はそう言って柔かに笑った。可愛い笑顔だった。雛美は生徒会に所属しており、忙しいに決まっているのだが、彼女もやはり総一郎と同じで優秀だ。

常人ではこなすには厳しい量を器用にこなすのだ。総一郎の容姿をそのまま女の子にしたかのような姿。当然可愛らしく、一部の男子からはカルト的な人気を誇るらしい。

「なるほど。」

彰人は軽く答える。

「それならお兄ちゃん達が青春の話をしていたからちよつと入りづらくなつて……。」

うつむきながら申し訳なさそうに話すその姿を見ると少しだけ虐めたいという嗜虐心(しぎやくしん)を煽られるが、理性で抑える。彰人は可愛いものを見るとどうしても弄りたくなる性分だった。

「ごめんね。本当に邪魔するつもりは無かったの。」

「あ！雛美ちゃん以外にもいるのよ。入って。」

「フフ、男同士の友情とは美しくて良いじゃないか。」

部室の外から聞き覚えの声がある。

「おま……エリック！いつの間に行ったんだよ！」

彰人の問いかけには答えず、文香達の後ろから堂々と優雅に部屋の中へ入ってくるエリック。

「実は先程から居たのですが、気づいていませんでしたか？」

「雨宮さんまで！仕事はどうしたのさ。」

「仕事……生徒会の仕事なら先程雛美さんと一緒に終わらせてきました。何か？」

（そうか。学校にいるときはそういう設定なのか。）

瞬時にそう判断し、深く問い詰めるのをやめた。

「そういえばそうでしたね。」

「彰人君、雨宮さんは同年代だから丁寧語じゃなくていいの。しつかりしてるから大人に見えるけどね。」

文香が不思議そうな顔でこちらを見る。確かに、同年代なのに丁寧語というのも変か。

「ああ、そうだな。」

「雨宮さんは真面目だし頭も良いんだよ。すごいよね！見た目も話の方も大人っぽいし。」

文香が嬉しそうに、楽しそうに椿の事を話す。人を褒めるのが心から好きな彼女の様子は、見ていて和んだ。

「いえいえ、私はこうした方が話しやすいだけですから。」

そう謙遜する椿の表情も柔らかい。この短期間で打ち解けたなら大したコミュニケーション能力だと思う。これも仕事なのか、それとも彼女の“素”なのか、どっちなのだろうかと疑問に思ったが、どちらでも良い事だと判断し思案を辞めた。

「そうサ。椿は出来る女で、僕のパートナーさ。」

「エリック先輩と椿さんが知り合いというのも驚きましたよ。」

椿を褒めるエリック。雛美もこの間まではボロクソに言っていたはずだが、今はわだかまりは無いらしい。悪いことでは無い。しか

し、相変わらずこの2人の関係性は特殊だと彰人は改めて思った。エリックは雇用者だから良いとしても、椿さんはメイドという立場もあるだろう。ストレスが溜まるはずだ。

そのため彰人は珍しく気遣うことにした。

「遊びに来たなら、みんなで人生ゲームでもしようか。」

棚から人生ゲームを取り出す。こういう時に備えて買っておいたのだ。携帯ゲームが発展した現代においてもボードゲームの楽しさは変わらない。みんなで遊ぶならこういった通信を必要としないゲームも楽しいものだ。と彰人と総一郎は前に話した事がある。

「あー懐かしいですね人生ゲーム！昔お兄ちゃんとも良く遊んだよね！」

真つ先に食いついたのはやはり雛美。彼女はパアツと表情を変えようと、総一郎に同意を求めると、

「ああ、そうだな。懐かしいな。」

雛美に同意を求められた総一郎は一瞬間があつた後に懐かしそうに、どこか寂しそうな複雑な表情を浮かべてながら答えた。

「決まりだな。なら、今日はみんなでボードゲームをやろう。」

彰人は強引すぎたかと反省しつつもボードゲームを広げる。

「男3人、女の子3人の6人か。僕と彰人が準備をするから、みんなはちよつと待つてて。」

「総一郎、合わせてくれてありがとな。」

「ん。何が？」

「なんでもねーよ。」

言葉を使わずとも通じる総一郎の頭をわしわしと撫でる。彼も柔らかなく艶のある良い髪質をしており、撫でるとよく手に馴染む感触がある。

なんやかんやで数分後。人生ゲームの準備が整った。ボードを囲むように座る俺たち6人。

経験者が少ないため、彰人がGM（ゲームの進行役）を務めることにした。

「じゃあまずルールを説明する。」

開口一番、彰人がきりりと表情を引き締めてこのゲームのルールを説明する。

「ルールは簡単。ルーレットの数だけコマを進めて、最終的にお金を一番持っている人が優勝。」

「途中結婚とかイベントがあるから、その時はまた説明する。」

「ふむふむ。日本のボードゲームにはモンスターとかいないんだね。」

エリックが感心したように頷く。イギリスにはTRPGというボードゲームの文化があるようだが、彰人はそちらの方面には疎い。

「エリック、このゲームはまた違うのですよ。資本主義という概念は“モンスター”と言えるのかも知れませんが。」

「ここら、今はルールを聞くのが先だよ。」

文香が話を脱線しないように気遣ってくれる。

彼女のこういう時のフォローも的確だった。

「…順番は、エリックが最初で、次に雛。椿さん。文香。総一郎。俺の順番だな。」

「むう。お兄ちゃんには負けたくない。」

「雛美は昔からゲームになるとムキになるからね。僕も兄として負けられない。」

「じゃあ、エリック。ルーレットを回してくれ。」

「了解サ。それっ！」

ルーレットを回すエリック。目は…：8。なかなか良い数字だった。

「お先に失礼する。て、あれ？就職失敗？なんだこれは。」

「言い忘れていたが、この人生ゲームはハードモード（就職氷河期仕様）だ。」

彰人は無表情のまま説明書を読み、淡々と答える。人生ゲーム（ハードモード）は実際に販売されているボードゲームだ。通常の人生ゲームではお金を得た、良い企業に就職したなど、プラスの要素があるのに対しハードモードではマイナスの要素が大目に配置されている。その為、いかに借金を背負わないかが攻略の鍵となるのである。

なぜこのゲームを買ったのかって。それは楽しいからに決まっているだろう。とは彰人は後に語る。

「Hard mode!？」

エリックが驚きのあまり声をあげる。発音が良い割にちよつと裏返っているのが面白かったのか、総一郎が珍しく腹を抱えて笑っていた。

「いや人生ゲームにそういうの求めてないから！」

雛と笑うのを辞めた総一郎が即座に突っ込む。兄妹揃ってとても突っ込みのキレが良かった。

「おいおい。エリックがツツコミを入れるのは分かるが、総一郎が入れるのはおかしいだろ。俺と一緒に買ったのに。」

「僕は普通のだと思っただよ！」

「まあいいじゃないですか。お兄ちゃん達。」

「雛美はこんなゲームノーコンテニューでクリアしてやりますよ！」

腕をまくりながら雛美が得意げに答えた。

「それ別の世界の台詞……て、おお！雛！大手の上場企業に就職したじゃないか！凄いで。ゲームだけど。」

「リアルでも大企業に勤めたら安泰なのに……。」

雛美がぶつぶつとぼやきながら手遊びをしている。

その様子を見た椿がふつと品良く笑い、

「中々やりますね。では次は私が。」

と喋りながらルーレットを回す。

「ねえねえ。雨宮さんはもし将来就職するなら、何の仕事が良いのかな？」

文香が尋ねる。

「そうね。私は強いて言うなら、転しよ……。」

「あー!!!楽○シヨップね！楽天シヨップ!!安泰だよね！ねえ椿さん!!」

「え、ええ。そうよね……。」

彰人は椿さんに近づき、耳打ちする。

「何自分からバラそうとしてんですか。」

「いけないわ。ついあの娘の前だと本音が出そうになるのよね。」  
しまったと言わんばかりに椿は手を口に置きながら答えた。

「バレると厄介なのは分かります。」

「どうやらあの冷静沈着な椿でも、文香の天然ワールドには引つ張られるらしかった。」

「2人とも何を話しているのさ。ささ、次は椿の番だよ。賽をふりたまえ。」

「ええ。……あら、ホームレスになってしまったわね。」

「ホームレスは職業とは呼びませんよ!?!」

「充電式のタイプの……。」

「それはコードレスです!!」

「この空間、カオスに満ちているな。」

総一郎が遠い目をしている。彰人もいいかげん突っ込むのが疲れてきたので、なんとかかこの場を諫めてもらいたいと切実に願っていた。なんやかんやで時間は進む。ゲームも終わる。

(ゲーム途中、エリックが子供を4人ももうけるのはまだ良い。)

(だが俺が株取引で破産した挙句、10億の借金を受けた時に総一郎の奴が爆笑したのはマジで許さん。)

気になるゲームの順位はなんと、

1位 天音文香

2位 エリックオースティン

同率3位 桐谷雛美 神取彰人

4位 桐谷総一郎

5位 雨宮椿

……以外だった。運が絡むゲームとはいえ勝負運の無さそうな文香が一位をもぎ取るとは誰も予想だにしていなかった。

「やるな、文香。」

皮肉無しの、彰人の心からの賞賛だった。

「えへへ。」

満面の笑みを浮かべながら素直に喜ぶ文香。

(可愛い。)

…彰人はこの笑顔に弱いのだ。彼女の笑顔には不思議な力がある。

「彰人が10億の借金背負った時はこれで負けはないと思ったんだが。」

「ああ、俺もまさかりーンホースで使徒を倒せるとは思わなかった。」

「使徒迎撃による謝礼金100億はチート過ぎるよ。天音さんの総資産2兆はもはや国家予算並みだし。」

「えへへ…運が良かっただけだよ。」

「火星の土地がまさか値上がりするとはね。」

「あれは反則サ。椿なんか見ろ！東京の一等地を持っていたのに、コロニー落として全て灰になったんだぞ。」

「それは私の不徳でした。情勢を読み間違えたのです。」

「あ、あの…私三位になつて言うのは何ですけどこの人生ゲームやっぱりおかしくない？」

「何を言うんだ雛美。この部屋にあるゲーム（主に彰人が買ったものだが）でまともなものなんてあるわけ無いだろう。」

「うう。兄がそれを言うのは情けない…。」

「なんか俺も馬鹿にされた気がするぞ総一郎？」

彰人はちよつとムツとしたのか、思わず総一郎にくっついてかかる。が、総一郎は大業な動作でやんわりとかわす。

「よしなに。」

「ディアナソレルじゃ無いんだから。」

分からないものには本当に意味の分からない返答。だが、それがガンダムマニアである総一郎なりのジョークである事は彰人も理解出来た。

「はあー。でもやっぱり楽しいよな。大人数で遊ぶの。」

ソファに寄りかかりながら、彰人がやれやれと体を伸ばしながら話す。

「いつもは彰人君達と私だけでもんね。」

文香も同意した。もともと広くない部屋に2つも活動をしているのだ。部屋の広さに厳しいのは明らかである。部員が少ないのが



せめてもの救いだった。

「そうなのですか……いえ、そうなのかしら。皆さんはもつとお友達がいそうなイメージがあるけれど。」

「友達はたくさんいるよ。ただ、特に親しいのが3人だけ。」

「そうなのかい？ボクも社交的な方じゃないが、日本人はあまりにも内向的な人が多い気がするよ。」

「雛は友達といえるのも楽しいですが、先輩たちといえるのも楽しいですよー。」

「……それなら、今日からみんなは情報技術部の一員にならないか？予算的な意味で。」

彰人は一瞬間を置いた後、声を張って言う。唐突な発言に部室内のみんなの視線が集まった。

「メンバーも実質俺と総一郎の2人だったし、これを機に増やしてもいいだろう。」

「唐突だな。」

「でも人が多い方が楽しいよね。私は同好会との兼任でも大丈夫。雨宮さんや雛ちゃんはどうかな？」

「時々の参加で良いなら、私は構いません。」

「うーん。雛もいいですけど、生徒会の仕事もあるので、いつも参加は無理ですけど、名前だけなら。」

「部の兼任は内申点も上がるんじゃないか？」

「入ります。」

「雛らしいな。」

「彰人もはつきり言う。」

「お上（内申点）には逆らえませんか。」

照れ臭そうに話す所も、中々可愛気がある。こういう雛美の素直さを買っていた。こうした“あざとさ”も彼女が愛される所以だろう。

「エリックは？無理には言わないけど。」

「そんな！彰人！ボクが君の頼みを断ると思っっているのかい？」

「ボクも入らせてもらうよ。そしてまた、君といつでもバトルがした

い。ガンプラでもそれ以外でもね。だから、入部をするサ。」

「椿もいいよね?」

「はい。私も構いませんよ。」

「決まりだな! 我が部に新たな部員が3人も入ったぞ!」

「なら、入部の申請手続き書は僕が書いて柗先生に提出しておくよ。」

総一郎が髪をなおしながら言う。

(こいつの事務処理能力は光るものがある。)

事務系が苦手な彰人に対して総一郎は優秀だった。やはり地頭の  
違いだろうか。

「なんかなし崩し的に入れられた感があるのは気のせい? 私って押し  
に弱い?」

見ると、雛が珍しく頭を抱えている。

「いいじゃない雛美さん。優しいお兄さんも一緒にいるのよ。」

見かねた椿がさり気なくフォローを入れた。柔らかにそう話す椿  
からは大人びた女の余裕が感じられた。

「...まーいいですよ。そのかわり! 生徒会が忙しい時は手伝っても  
らいますからね!」

どうやら話がまとまったみたいだ。何だかんだいっても、人が多い  
のはいい傾向だろう。

(来年も部員が入ってくれば安泰なんだけどな。)

彰人は心の中でそうごちながら、ボードゲームを畳む。12月の優  
しげな夕陽が窓から教室内を照らす。彰人は黄昏時のこの時間が好  
きだった。

ガンプラだけじゃない。こうしてゲームでみんなと遊ぶ楽しさや  
繋がりが嫌いではなかった。願わくば、この関係が卒業まで続いて欲  
しい。

——もう、失いたくない。

孤独を愛していた中学生の頃とは違う。彰人は、他者との繋がりを  
心地よく感じ始めていた。もうすぐ今年が終わる。来年はどんな年  
になるのだろう。そう期待に胸を躍らせながら、彰人はみんなの顔を  
嬉しそうに眺めていた。

第6話に続く

## 第6話 『謹賀新年』

「あけましておめでとう！」

毎年の決まり文句となるこの言葉だが、一年を無事に過ごせたという意味では、良い言葉だ。去年は波乱に満ちた一年だったが、今年は彼らにとってどんな年になるのだろうか。

——1月1日。新しい年が明けた。

雪がうつすらと降り積もる護国神社の境内の中で、彰人は振袖姿の文香を眺めていた。鶺鴒色（ときいろ 薄いピンク色のこと）の振袖を着た晴れやかな姿を見ていると、いつもの制服姿とはまた違った魅力がある。身体は冷え切っているが、先程飲んだ甘酒がほんの少しだけ温めてくれた。

「明けましておめでとう。彰人くん。」

文香の涼風のように爽やかな声が、彰人の胸に響いた。彼女の声には、不思議と相手を落ち着かせる効果があるような気がした。

「ああ、おめでとう。文香。」

「今年も良い年になるといいね！」

「そうだな。良い年にしよう。」

（……駄目だ。可愛い。）

ちよつと目を合わせるだけでも顔が赤くなってしまふ。いつもの見慣れた制服姿とは違い、着物姿の愛らしい彼女の姿を直視出来ない。柄に合わないが頬を染め横を向き、ちらりと横目で彼女を見る。

「どこ見てるの？」

「うわっ！」

いや、何でもない。慌てて彰人は口でそう装うが、恐らく勘の良い文香にはバレているだろう。彰人のその慌てぶりを見て、少しだけ文香は喜んだ様に見えた。

「うふふ。この振袖可愛いでしょう。お婆ちゃんが昔着てた着物なんだよ。」

着物の両袖をつまみ、愛らしさを発揮する少女の無垢さと可愛らしさに、彰人はやられていた。

(いつもここで動揺するから、からかわれるんだ。……ここははつきり言うしかない。)

「ああ、(着物が)すつごく綺麗だよ。」

だが、彼もやられっぱなしの情けない男ではない。だから自分が思い描く最大限に真面目な表情でそう言い放つ。ここまで堂々としていれば流石にからかわれないだろうと彼は予想していた。だがしかし、文香の反応はそんな彰人の矮小な予想を超えていた。

「……え？あ。う、うう。」

言葉に詰まり、一瞬の間を置いた後にかああああという擬音が入りそうなくらいに文香の顔が赤く染まる。耳までがリンゴの様に赤い。驚きの表情を浮かべたまま固まって動かず、言葉がまとまらないのか、口だけが動いた。

(……そんな反応されると、俺も困る。)

意外だった。いつもからかってくる彼女の予想だにしない初々しい反応に、彰人も思わず顔が赤くなり体が固まる。そういえば、こうして素直に彼女を褒めたことなんて無かったなと彰人は反省した。

「……あ、ありがとう。」

文香は素直に褒められたのが余程気恥ずかしいのかそっぽを向いた。対する彰人もどう話かけるか迷い考えあぐねていた。2人の間に沈黙が続く。

「そっ……そうだ！この後は総一郎達も来るらしいから、先にお参り済ませて、ついでに御守りも買おうぜ！買おう！うん。それがいい！なっ？」

「……うん。」

彰人が気まずさに耐えきれず無理に話を切り上げると、先に境内に向かつて歩く。彼は女の子と付き合うのがそもそも初めてのせいなのか会話でも行動でもリードするのは苦手だった。というよりもうしたら良いのか全くといいほど分かっていなかった。そのためレディファーストだなんて器用な真似は夢のまた夢である。

(———だけど！いやだからこそ！頑張りたい！)

改めて彼はそう心の中で誓った。それは彼なりの飾り気無い

真っ直ぐな気持ち。今彼の目の前にいるこの女の子はどんな女優やアイドルよりも綺麗だと心の底から思っていた。

(……やっぱ、大事にしよう。)

彰人は改めて思う。ガンプラも好きだが、やはり第一優先は文香にしよう。年頃の少年が、少年なりに考えそう決めるには十分だった。もしも彼がいつかガンプラをやめる時が来るとするならば、それは文香や、将来できる家族のためだろうという確信が彼の中であった。

彰人達が境内に歩みを進める一方で、桐谷総一郎は神社の中を1人眠たそうに歩いていた。人混みに疲れたのか敷き詰められた砂利道に足を運び、立ち止まるとふう。と一息ついた。

(はあく〜眠い！眠すぎる。眠すぎ晋作かって！)

年末は片付けに勉強にと忙しいのに加え、紅白は雛美がリモコンを離さなかったせいで、総一郎の好きなボクシングが見れなかったためである。その事を思い出すと、少しだけ神経が高ぶるのを感じた。

「お兄ちゃん。眠そうだね。」

「ふあーあ……誰のせいだと思っっているんだ。」

「最後の方ボクシング見れて良かったじゃない。」

「10分しか見れなかったし、また雛美がジャニーズに変えただろう。教えてくれ雛美！僕は後何回、嵐の年明けに流れるlove so sweetを聞けばいい？君は何も答えてはくれない。」

「うっ！それはごめんなさい！」

桐谷家は広いためテレビも複数台あるのだが、やはり居間にある大型のテレビで見たい。後、妹に所有権を明け渡したくないと言う兄としての意地が彼にはあったためである。

「ほら、そんな下らない話より参拝に行くぞ。」

話を一方的に打ち切り、雛美よりも先に歩く。境内に着くと、どうやらまだ彰人達は来ていないようだった。

(いや。折角の初詣に彼女と2人きりで来ているのを邪魔するつもりは無いんだけどね。)

どうも彰人も文香もみんなワイワイするのが楽しいらしい。総一郎とは真逆のタイプである。総一郎も本来人付き合いは得意では

ないし、妹の雛美が居なかつたら女子とも話をすることは無かつたらう。

彰人もクラスの女子からはカツコ良いよね！と言われていている反面、生真面目な性格なせいで女の子との付き合いに慣れていない。

妹の雛美も本来は友達がいるはずなのだが、その友達とお参りに行った方がいいんじゃないかと以前話すと、女子にも色々あるんだよ。と返された。どうやら、あの妹にも色々悩みがあるらしい。

神社内を観察すると、やはり境内は人でごった返している。対応するアルバイトの巫女さんも大変そうだ。

(行ったことはないけど、コミケの売り子さんもあんな感じなんだろうか。おや……?)

その対応する巫女の中に見覚えの顔がある。巫女姿だが、一人だけ本当に神聖な雰囲気をつつした黒髪の少女の姿を見つけた。

(あの顔は……)

早足でその見覚えのある人物に歩み寄り、思い切って尋ねた。人嫌いな彼にしては珍しい行動だった。

「ねえ、間違っていたら申し訳ないんだけど、もしかして君は。」

「私は今忙しいのだが。女に声をかけるなら相手を……。おや、君は総一郎じゃないか。」

「……沙雪。」

「久しぶりだな。まさか、君の方から声をかけてくるなんてな。珍しいこともあるのだな。」

腕を組みながら総一郎を睨む少女。その整い過ぎた顔立ちはまるで物語に登場する王子様の様だ。彼女の燃えるように赤くて強い意志を感じる瞳。それが、はつきりと彼を見つめている。総一郎自身もこの目には、幼少の頃に何度か泣かされたものだ。

——そして、同時に強く惹かれていたことも。彼は少しだけ、思い出した。

記憶の片隅に、沙雪の笑顔がよぎる。悪くない思い出だった。

「君も相変わらず元気そうだね。」

総一郎が変わらない沙雪の姿に安堵しつつ、言葉を投げかける。そ

れは彼女に対する皮肉では無い。

「私は元気だ。面倒なこと多いがな……雛美もいるのか。」

雛美の姿に少しだけ沙雪の顔が曇る。しつかり者の沙雪とどこか抜けた雰囲気を持つ雛美。二人の仲は良い、と断じられないのが総一郎は少しだけ悲しかった。

「あはは……。ど、どうもです沙雪さん。お久しぶりですー。え、えへへ。」

気まずそうに雛美が沙雪に声掛け愛想笑いを浮かべた。いつもの彼女の天真爛漫の笑顔がぎこちない。

(雛美は昔から沙雪が苦手だったな。そういえば。)

表情が強張る妹の顔を横目に、目の前の少女は言葉が続けた。

「雛美、君も変わらないな。この男の妹にしては愛想が良い。」

その愛想の良さは皮肉なのかどうなのか総一郎に推し量る事は出来なかったが、妹の気持ちも組みつつ総一郎は言葉を返した。

「僕は人嫌いなだけさ。」

「私と同じだな。私も……人間は嫌いだ。」

沙雪がそう言い終えると、嫌な沈黙が流れる。総一郎も気を遣って何か言葉をかけようとするが、中々良い話題が見つからず考えている中、雛美が総一郎の腕を掴んだ。

「あ、あはは。おにいちゃん。私ちよっとお花を摘みに行つてきます。」

雛美が脱兎の如くその場から逃げるように去る。この場から離れたい気持ちは分かるが、沙雪に失礼じゃ無いかと総一郎は心の中で少しだけ妹を叱った。

「……避けられているようだな。」

沙雪が少しだけ悲しそうに俯く。彼女は気が強そうに見える反面、こうした繊細さも持ち合わせていたのを思い出した。そして、この彼女の背反する面は彼自身も嫌いでは無かった。

「沙雪のせいじゃない。」

沙雪を慰める訳では無いが、その気持ちを受け止めることにした。彼の言葉の裏の意図を沙雪が呼んだかは定かでは無い。だが、その言



葉に沙雪は俯いた顔を上げた。

「済まない……なあ、君達も参拝に来たのだろう？なら少し時間はあるか？」

「ああ。構わないよ。」

彰人との約束が頭をよぎるが、この状況をそのままにはしたくなかった。だから総一郎はそう告げられた後、沙雪に神社の中にある一室に案内される。彼も子供の頃に、何度か茶道の習い事で訪れたことのある部屋だ。畳張りの部屋の中は清潔に保たれており、かすかにお茶の良い香りが彼の鼻をくすぐる。

(ここはあの時と同じままか、相変わらず懐かしい匂いがするな。)

部屋の中の匂いを吸い込むと、やはり良い香りがした。彼はこの部屋が醸し出す雰囲気は好きだった。和室、沈黙、日本特有の美しさ。それら全てに彼は幼い頃から惹きつけられた。

「そこに座るといい。」

沙雪が指定した座布団に座る。総一郎が触ると、座布団も丁度良い固さであり、座っていて嫌な気持ちにはならない。こういった細かいところも昔と変わらない。変わらない気遣いが、嬉しかった。

「懐かしいな。この場所。」

「そうだな。君がよく足を痺れさせていた場所だ。」

「そんなこともあったね。」

「母は何度か足を崩して良いと言ったのにもかかわらず、君はこれが作法だからと聞かなかつたな。だが……」

「それが嬉しかった。」という小さい呟きは総一郎には聞こえなかった。

「あはは……恥ずかしいな。そんな事覚えてなくてもいいじゃないか。」

「どれ。私が久々に茶をたてよう。」

沙雪は素晴らしい終えると、さっと立ち上がり準備をする。棚を開け、中に置いてある茶葉を取り出した。その動作の唐突さに総一郎は驚いたが、特に言及することは無かった。

「……え？そんな、いや、それじゃあ貰おうかな。」

どうしたんだ急に。と総一郎は一瞬訝しんだ。

沙雪は幼い頃もあり社交的な性格ではなかった。むしろ総一郎と同じく神経質で人嫌いな性質だったはずだ。友達も少なくまた彼女自身も友達を作らない性格だった。その沙雪が人の為に茶を立てようだなんて、彼が知る幼い頃の彼女のイメージとは大きく違っていた。そんな総一郎の思惑を知ってか知らずか、沙雪は無表情のまま淡々と茶を立てている。

総一郎は子供の頃から気の強い彼女が苦手だったがその一方で彼女と彰人に守られていたのを思い出した。だから総一郎は彼女には頭が上がらないはずなのだが、小学生の頃に彰人が転校したと同時に彼の方から遠ざけてしまった。それは、総一郎が女の子に守られるのが嫌だったからだ。

「僕は……弱くない！だから君なんていらさない！」

別れ際、総一郎にそう言い放たれた時の沙雪の表情が脳裏から離れない。

(あの時、初めて女の子を泣かせた。僕は最低の男だな……。)

今にして思えば彼は幼稚過ぎた。甘すぎた。本来は沙雪に会うのも本当は気まずいはずなのに、なぜ自分はわざわざ声をかけたのだろうか。1人考えていた。

「出来たぞ。作法は、覚えているな？」

「……ありがとうございます。」

作法は身に染みている。思案を辞め、彼は作法通りに腕を持ち上げ、茶を飲む。一息つくると茶室内に静かな時間が流れていることに気づいた。相変わらず沙雪は苦手だが、この穏やかな時間は嫌いではなかった。

「君だけだ。ちゃんとした作法を守ってくれるのは。」

ふいに、俯いた表情のまま沙雪がぼつりと漏らす。

「そうなの？」

「そうだ。彰人もこういうのは苦手な手合いだったからな。その点君は昔から繊細だな。」

「君がほめてくれるなんて。」

改めて総一郎は驚いていた。彼女は気が強く人の不正には厳しいが、反面褒めることは少ない。その事に総一郎自身も苛立ちを感じるものがあつたが、守られているという手前、その感情を飲み干すことしか出来なかつたのを強く覚えていた。

「昔は子供だつた。私は自分の気持ち素直に表現できなかつた。」  
「今は出せているの？」

疑問が思わず声に出る。しまったと思つた。

「……昔よりはな。」

だが沙雪は失言めいたその言葉にも動じず、軽く流した。

「そうだ。茶だけでなく菓子もあるぞ。食べるか？」

「なら、それも貰おうかな。」

「待っていてくれ。」

また立ち上がる沙雪。立ち上がった瞬間。ふわつとした良い香りがした。香水ではない。かといって茶葉の香りではない。若い女の肉体が発する健康的な香り。その懐かしい香りは母が亡くなり、女に対する免疫がないまま育つた総一郎にとって母以外で初めて嗅ぐ女の匂いだつた。

「ツ……!!」

（だめだ。いけない。僕は匂いに弱い。だがこんな時に……!!）

密室、うら若い男女が2人、押し倒しても誰も来ない、気づきはしない。妹も離れている。意識しだすと同時に、彼自身も思わず下半身が熱くなっていくのがありありと分かつた。海綿体に血が滾るあの感覚。女を抱きたい、という本能に訴えかける強い欲求。

（馬鹿か僕はツ……幼馴染だぞ。あの男女の沙雪だぞ。いくら久々に会うからって……）

（沙雪に気づかれるわけにはいかない……!!）

下半身の熱を必死に抑えるために総一郎は考えた。本能は理性で抑えれば良いのだ。幸いにも、今彼がしている姿勢は正座。下半身の膨張をうまく隠すには最適な姿勢だつた。だが。

（まずい!!足が痺れてきた……!!）

急転直下、最悪なタイミングだつた。足が痺れ、体がうまく動かさ

ない。仮に姿勢が崩れれば、この怒張した下半身を見られてしまう。それは最悪のシナリオだった。万が一見られたらキモチ悪がられる。嫌われる。変態扱いされる。など股間だけでなく、嫌な想像が膨らむ。

(静まれ！鎮まれ……！僕のサンドロック……！)

心の中でいくら唱えても静まらないものは静まらないのである。そこに追撃をかけるかの様に、沙雪の足音が聞こえてきた。

「子供の頃に君が好きだった立夏亭の菓子だ。おや……どうした？」

最悪な事というのは重なるものである。まさに総一郎が足の痺れにより変な体勢をしていたその時を目撃された。

(沙雪……今は来たらだめだっ！)

総一郎は新年始まって以来神に祈った。僕を今すぐ鎮めてください。と。そして願わくば彼女にばれませんようにと。

「おいおい、また足が痺れたのか。」

そんな総一郎の葛藤など知るよしの無い、無表情な紗雪の顔が優しく緩み、すたすたとこちらへ近づいてくる。

「痺れたら崩しても良いと言ってい……うわっ！」

繰り返すが、悪い事というのは重なるものである。畳の縁に躓いた(つまづいた)沙雪の体が、大きくよろめき、総一郎の方に倒れる。更に悪い事に、沙雪の体が総一郎の体を押し倒す形となった。

(……な”あ”ッ!!)

当然、押し倒された総一郎に沙雪の体の温もりと女の匂いが膨大な情報量となって総一郎に流れ込み脳裏を支配する。沙雪の柔らかい胸元が、総一郎の身体に押しつぶされるかの様に圧着される。彼の下半身はそれはもう、傍目から見てもはや隠しようがないくらいに大変なことになっていた。

「う、いたたた……。総一郎っ！大丈夫か？済まない。」

「あ、ああ、大丈夫だよ。なんともな……」

言葉とは裏腹にまったく大丈夫では無かった。目の前に沙雪の顔がある。美しく整った顔、白い肌。着物から覗く彼女の柔らかな胸がちらりとのぞき、更に彼女の吐息が彼の体に触れる。総一郎はもう限

界だった。しかし。

「さささささ、沙雪こそ、大丈夫？」

彼も一見、平静を装って沙雪を気遣う。にこりと笑顔を浮かべ、なんでもないとわんばかりに。

(よし！これで誤魔化せば……。)

「ああ、私はいじよ……な、ななななななッ!!」

駄目だった。脳が処理仕切れないのか、真っ赤になったまま固まり言葉が出てこない沙雪。沙雪の体に総一郎が密着している状態なのだ。隠しようが無かった。

「きつ、君はっつ！わわわわ私に何をっつ？」

「沙雪、おっ！落ち着いて話を聞いて欲し……」

瞬間、視界が飛ぶ。ビンタされたのだろうと冷静に頭は働いていた。ビンタされた瞬間、頬に強い痛みを感じたと同時に総一郎は達した。快感だった。それは彼が生きてきた中で感じたことの無い強い快感だった。この時の体験は今後数十年に渡って彼の性癖を歪めることになるのだが、それはまた別の話である。

「ばっつ！馬鹿!!君はっ！私をそんな目でみ……い、いたたたた!! あっ、足がっ!!」

沙雪が足首を抑えてその場にしゃがみ込んだ。

余程痛いのだろうか、呻き声を上げながらうずくまっている。

「沙雪！だ、大丈夫か！」

「駄目だ!!つつてしまった!!」

「とっ！とにかく、横になるんだ。今冷やすものを持ってくる！」  
「す、すまない。」

達した後、気怠いながらも冷静さを取り戻した体に鞭打ち、流しの方へ行く。この建物の間取りを覚えていたのは幸いだった。手拭いを取り水に浸す。そのまま沙雪の方に向かい脚を冷やしてやる。

「沙雪、手拭いを持ってきた。脚を冷やすよ。」

「ま、待て、痛みで上手く体を動かせない。触っても良いから、着物をまくって直接当ててくれないか？」

「はっ。」

「いいから、早くしてくれ！」

「あ、ああ！」

劍幕に押されつい頷く。総一郎は持ってきた手拭いを一旦置き、着物に手をかける。あまり見ないようには努力したが、脚を冷やす時に、沙雪の細く美しい足首を目の当たりにした時、その官能的な景色に頭がくらくらとした。が、総一郎少年は社会性も分別もある少年だったから、極力、沙雪の足の痛みが治るように努めた。

数分後。

「落ち着いたかい？」

「ああ、ありがとう。だいぶ良くなってきたようだ。」

「……なら良かった。」

「おい、総一郎。」

「何？」

「その、何だ。あー、その……君の方も落ち着いたか？」

怪訝な顔で沙雪が尋ねる。勿論それは別の意味があるのだが。

「そ、それは。」

顔を青ざめる総一郎。殺される。と体は瞬間的に防衛本能が働く。この恐ろしいほどの殺気を放つ女に不覚にも自分は欲情したのだと総一郎は恥じた。

「さっきのは……私も悪かった。君も男なのだから仕方ない。私の不注意だった。」

「だが、私をそういう目で見るのはよしてくれないか。」

良かった。殺される事は無いと総一郎は安堵した。それとは裏腹に、部屋に気まずい沈黙が漂う。

「ごめん。」

「謝ることじゃない。ただ、その、ちよつと驚いただけだ。」

「僕もどうかしていた。」

「仕方ない。……そういうことだ。」

「……君は私が嫌いではないのか？」

「嫌い？どうして？」

「彰人が転校した時から君は私を避けただろう。」

「……避けていないと言ったら嘘になるね。」

「そうか……。」

「だけど、それは君のせいじゃ無い。僕が君に守られていたのが不甲斐なかったからだ。あの頃は女の子に庇われるのが……情けなかったからだ。」

「だけど今の僕は子供の時とは違う。背も伸びたし、勉強だって他の奴には負けない。だから……変わった筈だ。」

「そうだな。君は変わった。」

「そんなに昔の僕は弱かった？」

「あの時の君は肌の色も白く、腕は棒切れの様に細い。申し訳ないが、私は君を守るべき対象としてしか見ていなかった。」

「……それはお気遣いありがとう。と言っておくべきなのかな。」

冷静に言い放たれたのがやはりカチンと来た。プライドの高い総一郎にとってはどうしても納得は行かない。やはり自分はこの女にとっては格下だと思われていたのだろうと理性が判断する。守る存在、それは総一郎にとっては自身の誇りや今までに築きあげて来たものを全て否定されたように感じた。

「……ありがとう沙雪。お茶、美味しかった。」

彼は苛立ちを隠しながらそう言っ座布団から立ち上がり、そのまま踵を返して帰り支度を整えようとする。

「待て。話を聞いてくれ……今の君は、昔の良いところはそのまままだ。礼儀正しく……あんな事があっても、逃げずに手当てしてくれた。」  
そう言い終わると。穏やかに微笑んだまま総一郎を見る沙雪の目は子供の頃から変わらない。綺麗で澄んだ目をしていた。

(この瞳……?)

見るものによつて様々な色を見せる瞳。幼い頃に読んだ絵本で知った。彼女も、彰人と同じ瞳を持っている。ルビー色の美しい瞳。そしてその瞳が映し出す総一郎の顔は、かつての幼い日では無く、成長した現在の総一郎の姿だった。

(……僕にとって特別な人は、みんな同じような瞳をしているのはなぜだろう。)

総一郎の中の怒りが静まっていく。と同時に、彼女の事を冷静に見れる自分があることに気付いていた。

「ごめん。僕は、君のことを誤解していた。ここまで話をするとともに



思っていなかったから言うよ。今の君も、昔の強いところはそのままだけど、雰囲気が柔らかくなった。」

「……それは、ありがとう。」

沙雪は気まずそうに視線を外した。

「昔は嫌いだった。でも……今は違うよ。」

「少し茶を飲むだけのつもりでいたが、ここまで腹を割るとは。」

「またも気恥ずかしそうにまたそっぽを向く。これ以上この空気には耐えられない。今日はもう帰るとしようかと、総一郎は考えた。」

「私も君と話が出来て楽しかった。また来るといい。私は休日、大抵はここにいます。君が来たらまた茶を立てよう。」

「また来るよ……約束する。」

「だが総一郎。」

「？」

「へんなことはもう、無しだぞ。」

耳まで顔を赤くしながらそう途切れ途切れに話す彼女は、昔の男女の顔ではなかった。

(……可愛いな。)

総一郎はこの時初めて男女と呼ばれたこの少女を、沙雪を“可愛い

“と思った。

幼い頃には考えもしなかった感情。互いに腹を割って話し合う事で、彼女を少しだけ理解出来たような気がした。

——数時間後。

「で、俺と文香との約束をすっぱかした挙句、沙雪といちやいちやしてたのかい？総一郎クンさあ。」

怒りを抑えているのか、瞼をピクピクとさせながら彰人が詰め寄ってくる。まずい。彰人が機嫌が悪い時は大抵瞼をひくつかせるのだ。普段彰人は怒ることはないが、怒ったらやばい。「彰人は怒らせてはいけない。」これは子供の時から沙雪と総一郎との共通認識だった。

「すっ！すまない！彰人！本当にごめんなさい！」

土下座。彼にとってそれは最高の誠意を示す姿勢だと思っている。ぴくりとも動かない不動の姿勢のまま答えた。

「いや、いいんだよ総一郎。俺も文香と一緒にいれたし。三越でガンブラの福袋も買うことが出来た。」

三越の袋をぽんぽんとさする。だが声色は怒っているのが伝わって来る。

「ただね。せめて一言あつて欲しかったんだよ。結構心配したんだからな。お前のこと。やっぱり大事だし、雛美も心配してたんだぞ。」

「すまない。」

総一郎は土下座のままちらっと彰人の顔を見る。

(やっぱり怒ってるよお〜！)

臉をひくつかせながら彰人のお説教が続く。

新年早々、総一郎の受難はまだまだ終わらないようだ。

一方その頃、エリック邸。広い部屋の中で、雨宮椿は一人困惑していた。目の前にいる男、エリックが正月であるにもかかわらずガン普拉を弄っている。何故？と椿はただただ困惑していた。

今日は彼女も休みであるため、エリックの世話をする事はない。だが、椿は日頃の習慣からついエリックの一挙一動が気になつていた。ガン普拉を作るため、ランナーにゲート処理を施し更に組んだ機体にはやすりをかけて丁寧仕上げている。その姿はさながら仏を掘る仏師のように見えた。

「椿。あけましておめでとう。」

こちらに気づいたのか。一言そう伝えるとまたガン普拉に向き合う。

「あけましておめでとうございます。あの……エリック様。今日は元旦ですし、初詣に行かれてみては。」

「ああ、初詣は日本の宗教行事だろう？申し訳ないが、僕は日本人じゃない。僕が興味あるのはアキトと戦う事サ。だから、みんなにとって特別な日であってもガン普拉の調整はかかさない。」

「左様ですか。」

なら、もう言葉は不要だろう。椿はエリックのこういう意思が強い所は認めていた。エリックの事を気に入らなければ、こうしたメイドの仕事も仕事としてでしかなさず事は出来ない。エリックのガン普拉好きは充分知っている。だから、彼の趣味に口は出すまいと椿は考えていた。

(次こそボクがアキトに勝つ。)

エリック・オースティン自身は、神取彰人との再戦を望む。いつか彼に勝つために、戦うために最高の機体を作る。だから大好きな餅も食わず、ひたすらにガンブラ作りにいそしむのだ。エリックの決意は固かった。

新しい年が始まり、各々が新しい関係を築く。出会いを得る者。出会いを深める者。新しい闘いに向け闘志を燃やす者。今年は彼らにとってどんな一年になるのか、それは誰も知る由がない。だが一つ言えるのは、彼等ビルダー達にとっては、またガンブラ漬けの一年になるのだろう。それはそれで、悪くない一年になりそうだ。

第7話に続く

## 第7話 『砂塵の決闘』

2040年。1月7日。年が明け、新たな一年が始まる。

彼等の行方はどうなるのだろうか。彰人や技術情報部のみんなにとっては、どんな一年になるのだろうか。技術情報部は新たな年の訪れに期待していた。

退屈な始業式が終わり、3人は部室を訪れていた。今年初の部活動に少しだけ胸を躍らせる。部室に入るや否や彰人と総一郎の2人はGBAにアクセスするための準備を、料理同好会の文香は機材の点検に移る。彰人は机の上に置いてあるヘッドギアを手に取り、埃を払った。総一郎も同じく機材を丁寧に拭きあげた後、GBAにログインした。

「もうすぐ作戦領域だね。彰人君。」

GBAにログインし、攻略エリアであるジャブローに向かう2人。今回は亜熱帯のジャブローエリアを選択した。真下にはジャブローの鬱蒼とした森が辺り一面に広がる。所々に見えるのは連邦軍のトーチカだろう。無機質な砲台が2人の機体を狙うが、オルタナガンダムと総一郎の新たなガンプラ。サイコ・ツダの射撃によって破壊された。唐突に総一郎から無機質な音声通信が入る。

サイコ・ツダは総一郎がシビュラブリッツに代わる機体として作った。ツダをベースにサイコザクのバックパックと武装が揃えられている。ビーム兵器は無いものの、火力は十分だった。なお、リミッターが解除されており速度を出しすぎると自壊する恐れがある。

ここはツダとして譲れないという総一郎なりの拘りだそうだ。武装は豊富な一方で、耐久性はやはり量産機ということもあり、凡庸なステータスに納まっている。精密な射撃を得意とするシビュラブリッツに対し、制圧射撃を得意とするのだそうだ。

話は戻り、GBAの中では本来ならば通信は音声だけでなく顔も写せるのだが、彼曰くSound onlyという響きが最近は気に入る。

ているらしい。そのため彼との通信は専ら音声のみである。

昔はボタンを押すとよろしく願います。前に出ますなどの簡単な文章が表示されるだけだったらしい。しかしその結果迅速な連携が取れず、対戦後にファンメッセージで脅迫まがいの予告通知が送られて来たりパイロット同士で殴り合いをしたり機械をバンバン叩いたり、トラブルが多発したのだそう。

現代では犯罪を未然に防ぐ目的でこの会話も録音されるらしい。しかしプライバシーの配慮は無いのか。というまともな抗議から、会話を聞かれるなんて恥ずかしい。などの乙女チックな抗議まで多数あったようだ。その結果、無機質な機会音声として今の通信があるにいたる。

(だけどこのゲームにプライバシーも何も無いよな。)

民度はあまり高くは無い。だから仕方の無い措置であると2人は達観している。

「作戦領域？なんだそれ。」

彰人は取り留めない考えを一旦中断し、総一郎が言う作戦領域という聞きなれない単語を思わず聞き返す。

「あ、作戦領域ってのは僕が今考えた。本当は攻略エリアね。」

あっけらかんと悪びれなく話す。

「…なあ、お前ってさ、本当ゲームになると性格変わるよな。」

彰人は若干呆れつつも、総一郎のこういう年相応の一面が見れるのはやはり嬉しかった。

「ん？何か言ったかい？」

良く聞こえなかったのか、彼が聞き返す。

(難聴系主人公かお前は。)

彰人もそう心の中でツツコミをいれるが、口には出さなかった。

「何でもねーよ。ほら、もうそろそろ着……。」

瞬間、真下から閃光が走りサイコ・ツダを貫いた。無慈悲な一撃に総一郎が作り上げた努力の結晶が、塊が、爆散しジャブローの空に散っていく。

「ああっ！そんな！苦勞して作り上げたサイコツダが……。」

突然の事にショックを隠しきれない総一郎。それも当然である。この攻略エリアは基本敵からの攻撃はありえない。その理由として攻略エリア外で倒したとしても、昇格のポイントは加算されず、むしろ減点されるからであった。

加えて、最悪違法プレイヤーとしてアカウントを凍結されるリスクがあるからだ。仮に相手が初心者でルールを知らないにしても、攻略エリア外からわざわざ一機だけを狙い撃つだろうか。答えは否である。

「総一郎……！なんだ。下に反応がある？一体こいつは……。」

機体の接近を知らせる警告音と共に、真下の密林地帯から浮上してくる機体。特徴的な外見。まるで大型の甲殻類を思わせる異質な機体に目を見張った。全体的に赤と黒で配色されており、機体のデザインから推測するに宇宙世紀ではない。無論CEでもない。

(これはまさか。)

「見つけたぞおっ!!」

そんな彰人の考えをかき消すかのようにねっとりとした声が響く。気色悪いな。と彰人は生理的な嫌悪感を覚えた。

「やっと見つけたぞああああ。」

急接近する敵機体。凶体の割に速い。咄嗟にオルタナガンダムは何発かビームライフルを撃ち込むが効果は無いようだ。外見から推測するにIフィールドかアンチビーム装甲を搭載しているのか。反応する暇すら与えられず敵機体から伸びた何本もの触手じみたマニピレーターに機体を拘束される。

「くっ！動けない!!」

やられる！と咄嗟に判断したその時。

敵機体のパイロットがモニターに映る。

(なんだこいつは?)

……全裸の男だ。全裸で長髪のおよそ正常な人間に見えない異質の風貌の男がそこにいた。歳はいくつだ…?若そうにも見えるし30過ぎと言われても納得出来るような不気味な男。

「やっぱり可愛い顔した男の子じゃないか…。」

またねっとりとした声で話す男。気色悪い。

「くうく疲れしました！感動の嵐！ここまで努力が実った！僕はやり



遂げたんだけ！」

興奮した様子で全裸の男は彰人に一方的に話を続ける。話が通じない相手だと彼は一瞬で悟った。

(なんで全裸なんだ。変態なのか。というか俺の顔がなんで分かるんだ?)

彰人は焦りの色を隠しきれない。それもその筈である。このガンプラバトルをはじめ、基本VRゲーム時は相手の顔や声は聞こえないように設定ができる。彰人も当然フレンド登録した総一郎と文香の声しか通じないはずだ。なのに何故か男は話しかけている。独り言でしかあり得ないが、相手の男は確かに彰人の顔を認識しているようだった。

困惑する彰人を他所に男がまたも口を開く。

「独り言じゃないよ。ちゃんとして君の焦る顔や周辺の様子もバッチリ見えるよ。制服が可愛いね。高校生かなあ。ふふひつ。近くに見える女の子と男の子は君の友達なのかい?その様子を見るとさっきのザクかな〜?」

「ザクじゃない!ツダだ!!」

撃墜され一人悔しそうに呟く総一郎をよそに、彰人は言い様のない不安に駆られた。

(こいつ…俺の顔だけじゃない。この部室の様子まで見えるのか?)

「あつ。あつ!怖がらないでね。ちょっと生の男子高校生とお話したいただけだから!凄いでしょこのイービスアルケー僕が頑張った作っただよちなみに今君と会話してるこの様子も動画に生配信中でこのまま君を僕のウミヘビで電気ショックさせてリアルタイムで

VRにも電流流して全世界の人々に君のトロ顔を晒してあげるからね。今君のGBAのアカウントも吸い出してロックかけたからログアウトしても逃げられないしその君の可愛らしいお顔を世界中の変態に見せてあげるまで終わらないからね。リアル生の男子高校生の電気ショックを受けた顔なんてそうそう見れないし最高のアイドルとして僕が君をプロデュースしてあげるよ。」

(…いつはまともじゃない。機体が動かないのなら…！)

話を最後まで聞かず、彰人はオルタナガンダムの背中に装備した遠隔兵器のビットを咄嗟に起動させる。レギルスを参考に試験的に作ったものだが、試すには今しかない。敵もこちらを拘束している以上はたとえ機体が動かなくとも、このマニピレーターさえ壊せば勝機はある。そう考えていた。

「あれれ〜。そのガンダム。背中にビットが付いてるんだ。だけど電気ショックに耐えながら使えるのかな？」

MS本体に搭載されたウミヘビがオルタナガンダムに巻きつき、電気ショックによる攻撃が始まる。

(…何だッ？身体が痺れる!?ゲームなのにな?)

疑問に思うが、身体に強い電流が走り考えがまとまらない。操縦どころでは無い。身体が強張り、立っている事すら難しくなって来た。

(…！)

せめて声を出さないと堪えるが電気ショックでビットが制御出来ない。やはり身体が痺れる。何故なのか。搭乗者の脳波によって動くビットは敵の不意を付けるという利点がある一方、意識を集中しな

いと使用出来ないという弱点がある。

まさに今電気ショックにてその弱点を狙われており、滅茶苦茶な機動をするビット。これではマニピレーターを狙うどころかまともな飛ぶのすら厳しい。

(駄目だ……ここで諦めたら……人生が色々な意味で終わる。確かに。だが、何故ゲームの中の電撃が体に……?)

意識が限界に達しつつある。為す術はもう無いと諦めかけたその時。突如頭上から青い閃光が降り注ぎ、そのままオルタナガンダム本体を拘束していた敵機体を貫いた。

閃光に貫かれ落下していく敵機。Iフィールドを貫くほどの圧倒的な火力に二人は呆然としていた。

敵機体のパイロットが惜しそうに口を開く。

「また君か。壊れるなあ……。まあいいや、次こそは……。」

心底悔しそうにそう言い残した後、大きな轟音と共に敵機体は爆散した。

ジャブロー上空でオルタナガンダムと真正面に対峙する見たこともない機体。頭部に備えられたアンテナの形といい、すらりと伸びた脚部といいこの機体は……ガンダムタイプだろうか。

頭部には大型のVアンテナ。肩は青く滑らかに塗装されている。さらに背中には大型の羽根の様なバックパックが搭載されていた。武装も良く観察するとビームスマートガンにも見える。先程の光はこれだろうか。

「まさか……Sガンダムの改修型？」

総一郎が考えを口に出したその時。相手のパイロットがまたも通信を飛ばした。

「良く分かりましたね。」

モニター越しにどこからか声が聞こえる。2人は当たりを見渡すが、やはり何も無い。細工をされている様には感じなかった。

「半分は正解ですよ…。半分は、ですが。」

冷たい口調で淡々と話すその様子は、教師が生徒に教えを説くのに似ていた。

「君も……その機体は特に弄ってはいませんね。完全なオリジナルでは無い。原作をフルにリスペクトした機体！なんと素晴らしい！S E E D系列なのが宇宙世紀至上主義者の私にとっては不満なのですが。」

先ほどの相手と同じく、一方的に畳み掛けてくる。思わず動揺する2人。

「彰人、敵のペースに吞まれちゃ駄目だ。」

その時、調子を取り戻した総一郎が彰人に話かける。念の為に音声通信では無く、彰人の隣に立ち直接耳打ちで伝えているのだ。

「相手が何してくるか分からないが、あの機体、僕も見た事が無いタイプだ。気を付けて。」

「申し訳ない。私は……ああっ！いきなり攻撃してこないで下さいっ！」

ついイーゲルシュテルンを撃ってしまった。敵のビームスマートガンに亀裂が入る。まだ電撃のショックが残っているのだろう。手が震えて上手く動かない。

「やめなさいーふうー。えっと、どこから話しましたかね。そうです。貴方を攻撃した不審者ですが、ここら辺では有名な変態だから気を付けて下さい。何でも潰した機体のアカウントから個人情報を読み取るらしいです。そしてその個人情報誰かに売るか本人を脅すかで金を荒稼ぎしているそうです。あの様子では違法な動画を配信していたらしいですね。良くてアカウントが凍結されるか、最悪取り調べされるでしょう。いやそんなことはどうでもいいのです。何よりも私が許せないのは……。」

また長々と話をしてくる。この人、話すのが好きなのかな。とにかく助けてもらったのなら話を聞こう。そう彰人は考えるも、警戒は解かない。

「可哀想なのはあのゲテモノ改造された下品なアルケーです。よりもよってイージスとミキシングされるとは……。あ、ちなみに私の機体ですが、さつき半分正解と言いましたが、何が原作かわかりますか？」

分からない。と彰人は一瞬考えた後に、答えた。こういう時は相手が求めている答えを言うのが正解なのだろうと判断したからだ。その答えはどうやら合っていた様だ。男は嬉しそうに答えた。

「……ガンダムREONです。といっても雑誌じゃあない。漫画原作でEX-Sを改良したMS。原作の漫画はもう何十年も前ですが。今時古参のガノタでも知らない方が多い。」

はあ。と彰人は生返事で答えた。

「ここまで説明したのも、君が絡まれてたのが可哀想だったのと、君の機体が原作をリスペクトした機体だったので嬉しくなったからです。」

もしかしてお邪魔でしたかな？」

いや、助けてくれてありがとうございます。と素直に彰人は彼が出来るかぎり丁寧に答えた。

「おい。相手のペースに呑まれてるよ彰人。」

小声だが、通る声で総一郎から叱責が飛ぶ。余程のさつき不意打ちで爆散したのを根に持っているらしい。

「何年か前のプラフスキー粒子を用いたガンプラバトルでは変な拳法を使ったり、バカスカビームを撃てばいいという機体が主流だったようですが……」

「私はそういうのは違うといたい！ガンプラバトルが自由とはいえど超えてはいけないラインを考えていたんだけど！ガンダムじゃなかったら別にどの作品でもいいだろ？良くないのだそういうのは！ガンプラバトルはガンダムの設定に則った機体で勝負するべきだろう!!」

豹変したように一気に捲したてる相手。

(な、なんだか普通じゃ無いぞこの人も。)

「お…落ち着いて下さい。」

彰人は震え声で精一杯伝えた。しかし彰人は分かっているなかった。こういう相手には意見してはいけないのだ。落ち着かせようとする彼の浅はかな目論見は失敗した。

「あああああああ！もうやだあああああ！」

バルカンで損傷したビームスマートガンを投げ捨て幼児の様な怒号をあげながらビームサーベルを抜いて襲いかかってくるREON。モニター越しに殺気を発露させているのが分かる。

「最近のGBA殺伐としすぎだろ……動物園かよ。」

総一郎も思わず呆れる。溜息が聞こえた。彰人は威圧されながらも百雷に着剣されたサーベルで応戦。切る。突く。避ける。さらに小刻みに移動しながら何度も斬り結ぶが、何かがおかしい。罅迫り合いになっても手応えが無いのだ。

(なんだこいつは……?)

防ぎきれなかった敵のサーベルにより、斬られている感覚がある。対してこちらの攻撃は不自然なほどまでに避けられている。体の震えだけじゃない。剣撃が逸らされている？

「彰人、こいつはさつき昔の機体の改修型だと言っていた。もしかすると、インコムに砲塔ではなく直接サーベルを搭載している可能性がある。サーベルは一本じゃ無いはずだ。接近戦は避けた方がいい。」

「……そうか。それなら今度こそビットで気を散らすぜ！」

オルタナガンダムは前面に展開したフロントバーニアを噴出させ咄嗟に距離をとりビットを展開しようとする。しかしビットはぴくりとも展開せず無反応。不自然なまでに「反応」しなかった。

(……こいつは！電子戦装備か!!)

総一郎が慌てて叫ぶ前に相手がぶつぶつと呟く。

「ビットだけではない！ファンネルやドラグーンなどは使わせない！これがアンチファンネルシステムなのです。」

“AFS”（アンチファンネルシステム）

ガンダムREONに登場する特殊兵装。ローゼンズールのサイコジャマーのシステムを引き継いでおり、ファンネルをはじめとする脳波で動く兵器、サイコミュ系列の兵装を無効化出来る。

「はああつーこれで終わりですよ。」

距離を詰めるREON。勝利を確信したのか、インコム也不可視化も解いている。恐らくはエネルギーを節約するためか。舐められたものだ。その傲慢さは彰人は苛立たせた。インコムに搭載したサーベル一本。両手で携えたサーベル一本。

インコム・サーベルは見た限り自由自在に動くがこれまでに何度も斬り合っても予備のサーベルを出す気配はない。恐らくは元々射撃に特化した機体であり格闘戦は想定していないのか。つまりサーベルは合計2本だけの可能性がある。

——なら勝機はある。

（ビットが使えない……？いや、逆に考えるんだつ！ビットにはもう頼らない！こいつは純粹に格闘戦で倒す！）

はあ、と大きく深呼吸し彰人は覚悟を決めた。

体の震えが止まる。取り回し辛い百雷をREONに投げ、その隙にオルタナガンダムの予備のサーベルを一本。さらにもう一本腰に携えた羽々斬刀を抜刀する。ビームサーベルと実体剣の二刀流の構えだ。

（決める……！）



集中。狙うはコックピット。金色に輝くオルタナガンダムが走る。インコムが迫る。避けずにわざと機体のヤタノカガミを集中展開させた右肩に当てインコムの勢いを殺す。有線部分をイーグルシユテルンで撃ち落とす。有線部分が千切れ落ちるインコム。こちらに突き出されたサーベルを羽々斬刀で捌くが、捌ききれず斬られる。空中に右腕が飛ぶ。だが構わず左腕のビームサーベルを振るう。

(そこだっ！)

一閃。REONの胴体を溶断する。勝利を確信したのも束の間。REONの頭部が異常なほどに蒼く輝く。

(……あの武装は！)

まずいと判断し一瞬飛ぶ。だが遅い。頭部から発射された蒼く煌めく閃光。ハイメガキャノンにより両足が蒸発した。発射された閃光がジャブローのジャングルを焼いていく。煙を上げながら樹々が燃え広がり、ジャブローの湿原地帯を赤く染め上げる。

(先程の青い光の正体はこれかっ！)

だが。彰人はさらに一枚上手だった。着地点には先程投げた百雷が落ちている。ライフルに弾倉は入ったまま。オルタナガンダムは着地した後左腕のサーベルから手を放し百雷を掴んだ。そのまま弾が撃ち切れるまでREONに向かって引き金を引き続ける。

敵がさらに防衛兵装を有していたならば、勝ち目はもはや無い。しかし勝てる手段があれば、最後まで諦めない。暫くすると全弾撃ち尽くしたのか、百雷の発射音が止んだ。

百雷の先端部から排出された粒子の残滓と煙が晴れた後には……そこにはもはや原型がもはや判別不可能な、ただの残骸が転がっている。

た。

彰人は勝つたのだ。

(はあー……。はあー……。)

息が荒くなる。危なかった。先程のMSとの連戦に加え、両方ともまともな機体とパイロットでは無かった。それが余計に彰人の精神を疲弊させるのだ。

「彰人は強いね。またビットが封じられた時は今度こそ負けたと思っただけ。」

一瞬でもパートナーを信じてやれなかった総一郎は自分と彰人両方に対して申し訳ないと反省した。

「いや、俺も変なのに絡まれやすいな。悪い。捲き込みまっつて。」

素直に謝る彰人。

「その。なんだ。サイコ・ツダは、もう使えないのか?」

申し訳そうに心配する彰人。彼のその優しさを感じつつ。

「いや、大丈夫だ。問題無いよ。また新しいのを作ればいいさ。」

彼はなんて事ないよと言わんばかりに軽く返した。

しかしサイコ・ツダは彼にとって自信作だったのだ。本当は血涙を流したいくらいに悔しかったのだろう。口調で伝わる。

だが気を抜き警戒を怠ったその結果、イージスアルケーに瞬殺と言ってもいいほど勝負にならなかった。しかしその心の内は彰人には内緒にしようと、総一郎は密かに思った。

第8話に続く

## 第8話 『人形供養祭 前編』

1月中旬。

未だに肌寒い風が吹く新潟の冬は、厳しい。校内の生徒達の吐く息も白く、まだまだ防寒具が欠かせない。新潟は寒い。特に総務院高校は海岸沿いに近いせいかな冷たい潮風が吹く。頬を突き刺すようなこの風は毎年生徒の体調を崩す事に定評がある。だが反面、校内が暑いくらいに暖房を炊くので、それで帳尻を合わせているのだろうか。

技術情報部はあの悪夢のようなバトルが終わり、暫くの間平穏な日々を送っていた。

結局あのバトルで何故彰人の体に電流が流れたのかは謎のままだった。振動があるならともかく、電流が流れるなんて普通ではありえない。機械の異常だと当初2人は思ったが、特にこれといった異常はなさそうだった。体に異常はないかどうか、念の為に県内の医者にもみてもらったが、詳しい事は不明だった。

(何だったんだ?…俺の気のせいにしてはあまりにもリアルだったけど。)

他にも教室の中を隅々まで調べたところ、小型のカメラとマイクが何台も見つかった。あの男は事前にカメラを仕込んでいたのだろう。しかし何故と疑問に思う2人。

相手の様子からすると明らかに彰人を狙っていたが目的がよく分からない。あれ以来、文香や総一郎に危害が及ばないように一緒に帰るなど気をつけている。後、彰人がこの話をエリックに伝えた時、彼はいつもの澄まし顔を崩し、こういった。

「君や君の友達は絶対に僕が守る。」

そんな格好つけた台詞を吐いた後、彼は暫くの間学校に来ていない。噂によると、警察にもエリックの知り合いがいるらしく、ストー

カー被害と不法侵入の両方で犯人を探しているらしい。頼りになる。彰人は素直に嬉しく思っていた。

しかし未だに犯人の痕跡すら見つかっていない。それだけが、不可解だった。

「不審者の事案として報告はしておきます。彰人君も十分に気をつけるようお願いしますよ。」

そう言っただけで担任の柘先生も心配してくれたが、犯人が分からないというのは不気味なものだ。対処しようにもその対象はなく、雲をつかむかのような無駄な足掻きだけが彼等に出来る唯一の抵抗だった。

「で、何で護国神社に来てるのさ。」

部活が終わった後、彰人は総一郎と一緒に護国神社に足を運んだ。初詣の時もここに来たが、あの時は良かった。それが今や影も形もわからないストーリーカーに悩まされている。本当に人生は救い難いと彰人は内心困り果てた。

「神頼み。」

返答に困ったのか、彰人がぶっきらぼうにそう言い放つ。するとあからさまに総一郎は呆れた顔を浮かべ、じとりとした視線を彼に向けた。

「はあ、放課後どこに行くと思えば……君にしてはあまり理に適って無いね。」

彼はがっくりと肩を落とし、落胆の表情を隠さない。総一郎のその様子に少しだけ彰人はむくれた。

「そりや俺だつて意味がないってことは承知だよ。ただ、全く犯人の痕跡が掴めないんだ。焦るさ。」

「たしかに。あの記録がバトルデータ残ってればまだしも、何一つとして証拠が残っていないなんてね。」

「ああ。でもなんか嫌だよな。GBAやガンプラバトルが犯罪に使われるのってさ。」

「同感だ。」

自らが慣れ親しんでいるガンプラが犯罪に使われているというのは、彼等の心に幾許かの影を落とした。拭えない嫌悪感に腹も立つ。皮肉にも、サイバー犯罪を防ぐ方法を教えるはずの技術情報部がそのサイバー犯罪に翻弄されていた。なす術なく二人は宙を仰ぐと、その視線の先に見覚えのある人物がこちらへと歩いてきたのを見つけた。

「おや、2人とも、学校帰りか。珍しいな。」

境内からこちらへと歩いてきたのは、偶然にも沙雪だった。彼女の美しい黒髪が風になびく。総一郎がだらし無い顔をしながら彼女に見惚れて居るのに対し彰人は苦笑を浮かべながらまた視線を沙雪に戻した。

「沙雪。」

名前を呼ばれた少女が改めてこちらに真っ直ぐな視線を向ける。代々続く護国神社の長女。だが時期の神主には決してなれない少女。何やら正月に総一郎と何か一悶着あったようだが、そのことについて沙雪に尋ねようとするやと急に彼女は赤面し、それ以上は詳しく話して

くれなかった。

(まさか、総一郎?)

何かいかがわしい事をしたのかと予想がついたが、何しろ相手が沙雪のため、“どこまで”なのか想像がつかない。そのため迂闊に総一郎を弄る事が出来なかった。

「こんな夕暮れ時に来るとは、何か御用なのか？」

彰人の内心の疑問を他所に、沙雪は一体何をしに来たのだと言わんばかりに2人を見つめた。どうやら純粹に疑問を持つているようだ。その射抜くような視線に総一が顔を背けたため、彰人が説明をするこ  
とにした。

「ああ、実はさ。」

彰人たちはこれまでの経緯を話した。

「なるほど。」

腕を組み、沙雪が考え込んでいる。

「そういった話なら、私にも心当たりがある。」

「マジで!？」

「要はそのバトルのデータをサルベージするか、再現ができれば良いのだろうか?」

「……そうなんだけども、それが出来ないから悩んでいるんだぞ。」

「父の知り合いにそういったG B Aや接続機器に詳しい方がいるのだ。」

「すごい！流石神社の人は顔が広いね！」

「まあな。ただ、その方は来月の人形供養祭に来られるから、それまでは会えない。すまないな。」

「人形供養祭？ああ、あのお焚き上げのね。」

「ふふ、お焚き上げだけじゃあない。君達の趣味にも通じているぞ。」

「？」

「この神社では、君達が心を込めて作った人形……ガンプラも吊っている。プラスチックなのでお焚き上げは出来ないがな。」

「マジで!?!」

本日2回目のマジでだった。2人が驚くのも無理はない。まさかガンプラまで対応しているとは。供養祭の対応のはば広さに二人は驚いた。

「父の知り合いは亡くなった方のバトルの記録を集め、それをAIに学習させることにより、本人と同じ機体や闘い方でバトルが出来るらしい。らしいというだけで、私も詳しくは無いが。」

「なるほど。そんな人なら、解析できないバトルのデータのログも解析できるかも知れないね。」



話を聞いて、総一郎が腕を組んだまま考え込んでいる。沙雪の顔の広さに尊敬の念でも抱いているのだろう。少しだけ彼の瞳が輝きを増しているのが見て取れた。

「それなら、少しは光明が見えてきたな。」

彰人も沙雪の言葉に素直に頷いた。

「時間がかかる……だから来週まで待ってくれ。」

沙雪はきつぱりと言った。

「助かる。沙雪、ありがとうな。」

「礼を言うのはまだ早い。」

沙雪はにこりと和やかに微笑んだ。彰人は意外に感じた。何故なら、沙雪の笑顔を見るのだからなんて数年ぶりだったからだ。

(こいつ、こんな風にも笑えるんだな。)

彰人は彼女の表情の変化に驚くとほんのすこしだけ暖かな気持ちになる。無表情に近いほどに頑なだった沙雪の幼い頃の思い出が脳裏に過ぎった。

彼女の柔らかい表情を見れるのは従兄弟としても嬉しかった。しかし一方で、総一郎が難しい顔で沙雪を見ているのに気づく。やはり2人の間には何かがあったのだろう。だが、あえて深くは追及しない。

その後、総一郎や沙雪と別れ家に帰ると、彰人は早々に文香に電話をかけた。どうしても話をしたかったからだ。

「文香。あの件なんだけどき、どうやら犯人特定の可能性はありそう  
だ。」

「あの時は怖かったよ……危ない事だけはしないでね。」

「俺は大丈夫だ。それよりも文香は大丈夫か？何か変なことになって  
いないか？」

「私は大丈夫。それよりも、沙雪さんの話なことなんだけど。」

「亡くなった子の記録バトルデータも再現できるって本当？」

「俺も実際には見てないけど、技術的には充分可能なんだってな。」

「そうなんだ。……なら。」

文香は言いにくそうに迷ったのち、ぽつりと言葉を投げかける。

「弟の隼人はやとのデータも復元って出来るかな。」

思わず絶句した。彼女の発言に対し彰人は言葉が見つからない。  
無意識の内に手で頭をかいた。

“亡くなった子のデータも再現できる”

文香がそれを言うということとはつまり。そこまで考えたと同時に  
彰人はすぐさま脳裏からその考えを捨てた。

「文香、それは。」

怒った方が良いのかどうか分からない。判断して良いことなのか

もはつきりと答えられる術も、資格も、彰人は持ち合わせてはいない。

「ううん。ごめん。隼人は違うよね。」

「……諦めたら駄目だ。特に家族は。」

「そうだよ。でも。」

“待っているのって、辛いよ”

諦めたかのようにぼつりと言葉を漏らす彼女の声を聞くのは切なかった。

——天音隼人《あまねはやと》

文香の弟にして、今年で16歳になる。“生きていれば”だが。彼は死んではいない。“植物状態”なのだ。元々体が弱く入院がちな隼人。貴明が事故に遭い入院していた時、彰人は隼人と会った。

当時の隼人は小学生6年生で、よく一緒にガンプラで遊んでいたのを思い出した。数あるMSの中でも、特にムラサメが好きな変わった少年だった。普通の子供はみんなジャスティスだとかストライクフリーダムがこぞって好きなのだが、彼は違っていた。彰人は一度、何故MSの中でも量産機で弱いとされるムラサメを選んだのか疑問に感じ、尋ねた事があった。

「弱いムラサメでも、みんなで力を合わせれば悪者のガンダムだって倒せるんだ。カガリさんのアカツキと一緒に戦うところもかつこよかった！だから、僕はムラサメが好きー」

心底楽しそうな笑顔を浮かべる隼人の目は輝きを放っていた。マニアックな奴だなと彰人は当時心の中で笑ったが隼人は本当にガンダムの世界観を愛した少年である事に疑いは無い。

「いつかまた元気になったら、彰人お兄ちゃんオルタナガンダムと一緒に空を飛びたいな！オルタナガンダムも、アカツキのパーツが使われてるんだよね！」

「ああ、俺も楽しみにしてるぜ！」

屈託無く笑う隼人の顔を見たからこそ、彰人はガンプラバトルを辞めることが無かったとも言えた。

(……あいつと一緒に空を飛びたかった。いつか飛べると信じていた。)

そんな隼人がガンプラバトルの最中に意識を失って、数年が経つ。植物状態のまま寝たきりの隼人を見るのは辛かった。彼は今も病室の中で眠っている。彰人と文香が初めて出会ったのも、あの病室だった。眠ったまま動かない隼人を見るのは辛い、文香は彰人以上に辛い思いをしたに違いない。

「家族が諦めたら、もう終わりなんだよ。文香。」

彰人は父の亡骸を思い出し、涙が滲む。しかし隼人はまだ死んではないのだ。それだけは事実だった。

「わかってるよそんなこと!!」

普段の彼女にしては珍しく、突然声を荒げた。その声に一瞬彰人は驚くものの、恋人同士とはいえど、決して触れてはいけない彼女の琴線に触れてしまったのだと考え強く反省する。

「急に大声出してごめんね。でもね、やっぱり辛い。隼人はいつ目が覚めるの？いつまで待てばあの子は帰ってくるの？」

「私は……もう分からない。分からないの。」

「俺の方こそごめん！無神経だった！」

「私こそごめんなさい。……もう切るね。おやすみなさい。」

「ああ。おやすみ。」

電話を切り、ベッドに横になる。彰人自身どう言葉をかけて良いの  
か分からない。あの行き場の無い怒りや悲しみは、父を失った時と同  
じだ。かつての彰人が経験したことだった。仮に隼人が目覚めたと  
しても、彼に居場所はあるのだろうか。

隼人は今も小学生のままなんじゃないかとか、嫌な思いばかりが彰  
人の頭をよぎる。

（駄目だ。俺まで諦めたら。あいつには約束を守ってもらわないとい  
けない。）

そんなとりとめの無い事を考えているうちに、彰人は眠りに落ち  
た。夢の中で、彰人は隼人と遊んでいた。病室の清潔な空気の中、V  
Rヘッドセットを被った彰人と隼人が、GBAの空でオルタナガンダ  
ムとムラサメガンダムを可変させそのまま空を駆ける。

——空は自由だった。

色んなしがらみも、彰人の傷ついた心も、隼人の無邪気な笑顔を見  
ていると癒された。

「なあ隼人。」

「彰人お兄ちゃん！なんですか？」

「お前、ガンダムは好きか？」

「はい！勿論です！」

「なら良かった。ほら、可変機構を持つムラサメガンダムは、普通のMSと違って立体的な戦い方が出来るのが強みなんだ。」

彰人が楽しそうに可変機の戦い方を隼人に教える。父や未来から教わるばかりの彰人が、こうして歳下の少年に物事を教えるという行為は、彼にとつては新鮮な事だった。そして隼人も、彰人が心から好きだったからこそ、素直に彰人の言葉を信じた。

この頃からすでに隼人はガンプラバトルの才能を開花させていたが、体が弱いこともあり、バトルが出来る時間も限られていた。その事がすこしだけ二人は不満だったが、遊んでいるうちはそんな瑣末な事はどうでも良かったのだ。

「こら隼人。遊ぶのも良いけど、体もおさなきや駄目よ。」

「はい。お姉ちゃん！」

「はは、隼人はお姉ちゃん子なんだな。ええと。」

「私は文香、天音文香だよ。はじめましてだね、彰人君。いつも弟と遊んでくれてありがとう！」

これが、彰人と文香の初めての出会いだった。

隼人とガンプラが、こうして彰人と文香を繋いでくれた。

その事を思い出すと同時に、彰人は夢から覚めた。その瞳からは涙がとめどなく溢れていたことに気づき、苦笑すると同時に手で拭いた。

一週間後、彰人達は神社に集まっていた。要件はもちろんあの事だった。

「来てくれたか。」

沙雪が正装で迎えてくれた。美しい着物姿だ。その凛とした姿は素直にカッコ良いと思えた。

「エリック以外、全員集合だ。」

沙雪の前に集まる彰人達。その言葉に少しの淀みもない。

「それは良かった。祭は人が多い方が良い。」

「ああ、それに彰人、この方がこの間話した神城啓司（かみしろけいじ）さんだ。さあ、どうぞ。啓司さん。彼が話した彰人君です。」

紹介された神城啓治かみしろけいじという男が沙雪の後方から現れた。長身で爽やかそうな男だった。

「神城です。よろしく。」

そう名乗る神城の声には歳上特有の傲慢さや嫌味を感じない。好感の持てる声をしていた。更に整った顔立ちに、清潔感のある短髪。年齢は36歳だそうだが、外見はそうは見えない。柘先生と同じ年くらいに見える。きつと、若い頃はモテただろう。

「君、柘の生徒なんだってね。あいつ、意外に教師やれてるんだな。」

懐かしそうにくすくすと笑う姿も様になっている。

「柊先生とはお知り合いなのですか？」

文香が尋ねる。俺も気になる。担任の柊先生もイケメンなのだが、あまり深くは知らない。だから少し気になり、尋ねた。

「ああ、知り合いというか、ライバルの弟……かな。ふふつ。昔はあいつヤンチャで、教師って柄じゃないと思っただけだね。」

神城は昔の思い出を懐かしそうに話した。知らなかった。柊先生にもそんな一面があったのか。彰人は驚くと同時に柊の一面を知れて嬉しかった。

「ああ、話が逸れたね。調べて欲しいんだらう？ バトルデータ 記録を。もちろん良いよ。ただしね。」

「彼らとバトルに勝ったら。というのはどうかな。」

神城さんが目配せすると、後ろから見覚えのある金髪の男と、知らない男が歩いて来た。

「エリック……と、誰？」

エリックは良いとして、その隣に立つ少年は知らない。誰なのだろう。彼を良く観察すると寒がりなのか白のパーカーの上に黒のダウンジャケットを羽織っている。まるでフルアーマーの様な姿だった。背丈は少し低い。165cmくらいだろうか。いかにも、“変わり者”といった風貌の少年だ。驚いていると、その少年は突如自己紹介を始めた。

「初めまして。彰人さん。技術情報部の皆さん。僕の名前は峯岸燈夜《みねぎしとうや》です。普段は登山部として活動していますが、ガン



プラバトルも嗜<sup>たしな</sup>みます。今日はどうぞよろしく。」

そう言い終わると、ぺこりと頭を下げてる。この整った顔の少年は、随分と礼儀正しいようだ。2人は好感を抱いた。

「燈夜は強い。この人形供養祭には他のプレイヤーも大勢来ていたけど、僕と燈夜で全部倒した。残るは、君達だけなのサ。」

「いえ、たまたまですから。エリックさんもお強いですし、僕の活躍なんて殆ど無いに等しいですよ。」

燈夜と名乗る少年は口ではそう言っではいるが、彰人は見抜いていた。こいつは生粋のバトル好きなのだ、眼の色が物語っている。もっと強いやつと闘いたい。そんな闘争心に燃える目を持っている。そして彰人はこんな目をする男が心から好きだった。

「なら、早速戦おうぜ。俺は早くやりたい。」

「奇遇ですね。僕もです。」

どうやら燈夜も彰人も臨戦態勢の様だ。

(バトルから一歩引いていた時とは違う。最盛期の彰人の目だ。これは期待できるかもしれないな。)

総一郎も彰人のそんな変化に気づく。瞼をびくびくとさせるとは、彼の癖だった。

(ミッション攻略型とは違う対人戦か！中々相手がない彰人にとって、手応えのある相手だと良いのだけど。)

「ふむ。話はまとまった様だね。僕が想像した通りの展開だ。みんな

バトルが好きなんだね。」

神城が懐かしそうに目を細めながら呟く。

(この人も昔はバトルをしていたのだろうか。)

彰人は気にとめるが、深くは詮索しない。

「男達の闘いか……悪くない。装置を起動しよう。入るといい。」

沙雪の案内に続き、境内の中に入る。大きな会場の中にこれまた大きな装置がある。

(おいおいこれ、エリックの家にあるのよりでかいんですが。)

心の中で彰人は驚く。目の前には巨大なプラフスキー粒子用のガンプラバトル再生機器に加えバトル用に調整されたVRのヘッドギアが並べられていた。更にはAI再生機器も有る。恐らく大会用に作られた装置だろう。

「なんなんだこれは。これまでのガンプラバトルの技術すべてが使われているじゃないか。」

「この設備はすごいね。」

これほどの規模の機材は彰人も総一郎も見ることが無かった。

「凄いだろう?。」

神城が誇らしげに言う。

「みんな、男の子はバトルが好きなのさ。だから僕は、こうした機器を取り扱う仕事に就いた。この年になると、反射神経とか体力が衰えて、色々現役とはいかないからね。その代わりというわけじゃないが、若い子の思い出に残るバトルを支えたい。」

胸を張って装置を見つめる神城は頼り甲斐のある大人に映る。自分の仕事に誇りを持っている人の目をしていた。

「さあ、みんな。準備は良いかい？」

神城がまるで、生徒に語りかけるかのような優し気な声で彰人達に問いかける。

勿論彼等の答えは一つだった。

「はいー！！」

神城の声に対してモデラーガンブラバカ達は威勢良く応じる。

「うん。いい返事だ。」

神城はその返事を噛み締めるように、心底嬉しそうに頷く。

「頑張って彰人君。」

文香もエールを送ってくれる。各人がVRのヘッドギアを装着して、準備が整った。会場一杯にプラスキー粒子の青い輝きが広がる。

——祭りが始ろうとしていた

続く

## 第9話 『人形供養祭 後編』

祭りが始まった。

彰人チームは、

神取彰人（オルタナガンダム）

桐谷総一郎（シビュラブリッツガンダム）

対するエリックチームは、

エリック・オースティン（シルベリアアストレイ・改）

峯岸燈夜（ペーネロペー（HWS））

峯岸燈夜は、昔から装甲を厚く持った機体が好きだった。これは彼が幼い頃、山で遭難した際にたまたまその時寒さをしのげるだけの分厚い服と大量の食料を持っていたおかげで、数日間生き延びた経験があつたからであつた。軽装は身軽な分、継戦能力が低く生き残れない。敵を倒す事に特化し、無駄を削ぎ落としていった彰人や総一郎と違い、彼のポリシーは「いかにして生き残るか？」だつた。故に彼はペーネロペーを選んだ。

機動力の高さに加え、フライトユニットを兼ね備えた分厚く堅牢な装甲。ファンネルミサイルなどの実弾誘導武装によるIフィールド、GNフィールド対策。そして、大型ビームサーベルによる近接戦闘能力の高さ。更にコックピット周辺にはIフィールドを常時展開させており、不意打ちにも対応出来る。

フライトユニットが損傷した場合、フライトユニットそのものをパージする事も可能。

その過剰とも言える兵装の多さは、燈夜に戦略上の選択肢を増やした。いかに強い相手だとしても、敵の動きを観察する時間を稼げれば対策できる。これが彼のバトルにおける姿勢だつた。

燈夜は開幕と同時にペーネロペーの肩部からビームを放つ。避ける彰人と総一郎。そこに追撃にファンネルミサイルを撃ち込んでい

く。オルタナガンダムは変形しファンネルミサイルかわす一方、総一郎のシビュラブリッツはサーベルによる切り払いでミサイルを捌(さば)いた。両機とも戦い慣れた歴戦の勇士を彷彿とさせたが、そんな事は燈夜も承知の上だった。

「二機が離れました。エリックさんは彰人さんをお願いします。僕は総一郎さんと。」

「了解サ。」

エリックはそう軽やかに返答すると、銀色に輝くシルベリアアストレイ・改を反転させ、彰人の方へ迫る。その機動の早さに圧倒されつつも、燈夜はもう一機のシビュラブリッツと対峙する。

大きい。燈夜は飲み込まれそうになるのを抑えた。HGのブリッツをベースに作られたあの機体は、ペーネロペーに比べ圧倒的にサイズは小さい。しかし、その機体が放つオーラから目が離せない。

(この人は強い。油断したら……負ける。)

燈夜は本来自信家ではあったが、敵を冷静に分析できるだけの賢さも持ち合わせていた。でなければ、登山家としてもビルダーとしても評価はされなかつただろう。燈夜はペーネロペーをブリッツの真上に上昇させると、ありつたけのファンネルミサイルを撃ち込んだ。放たれたファンネルミサイルが唸りを上げてシビュラブリッツに襲いかかる。

(姿が消せるブリッツに、この大型の機体では不利だ。ここは範囲攻撃で地形ごとまとめてなぎ払う！)

暴風雨を思わせるファンネルミサイルの波状攻撃。一発一発が地形を削り、抉り取っていく。

(捌ききれぬはずがない。体勢を崩したところに、ビームを撃ち込んでやる！)

ペーネロペーの猛攻は一向に止まらない。

並の人間なら避けきれるものではない。仮にこの攻撃を耐えるには燈夜と同じ堅牢な装甲を有したフルアーマーの機体か、ファンネルそのものを止めるAFSを搭載した機体しかありえない。

しかしあろう事か総一郎は一步もその場から動かず、ファンネルミサイルの猛攻を凌いでいた。凌ぎきっていた。迫り来るミサイルをビームライフルで落とす、イーゲルシュテルンで落とす、その二つでも駄目ならビームサーベルで切り払って行く。全くといっていいほど、態勢は崩れない。

これまで装甲で耐える闘い方をして来た燈夜にとって、それはあり得ない光景だった。彼の理解の範疇を超えていた。

(……有り得ない。トランザムでも無いのに?この動きは何だ!)

腰に携えた煙幕<sup>スモークデイスチャージ</sup>弾を放つ。煙に巻かれ見えなくなるシビュラブリッツガンダム。

「そこだっ!!」

燈夜は肩部のビームキャノンを発射する。駄目押しに更にライフルを撃ち込む。既に先ほどの攻撃で総一郎が立つ場所以外はクレーター状の穴がいくつも空いており、逃げるには空を飛ぶかクレーターの中に入るしか無い。

燈夜はそのどちらかの可能性に掛け、ビームを放つ。仮に宙を飛んだなら残りのファンネルミサイルを。クレーターに隠れたならビームキャノンによる制圧射撃で倒せるはずだと考えたのだ。

しかし。

(……ッ!?)

ペーネロペーの眼前に迫る大きな影。

煙が晴れたと同時にシビュラブリッツがロケットのような速度でこちらに向かってくる。構えたランサーダートの先端がペーネロペーのコックピットに迫った。

燈夜は焦る。反撃しようにもファンネルミサイルでは機体に誘爆し、ビームキャノンは近すぎて当たらない。

(くそおおっ！)

フライトユニットを瞬間的にパージし、フライトユニットに手持ちのビームライフルを撃つ。誘爆。

巨大な爆煙がシビュラブリッツを包む。

いくらあの総一郎でも、この爆発ではただでは済まないはずだ。しかし燈夜は油断しない。フライトユニットが外れた姿。オデュッセウスガンダムのスラスターを吹かし後ろに退避させる。それは万が一の保険だった。

オデュッセウスガンダムには危険に備えストライクガンダムの装甲をオデュッセウスガンダムの装甲の上に貼りつけておいた。これによって仮組みではあるがフェイズシフトを搭載させている。更にコックピット周辺にはIフィールドもある。流石にフライトユニット装着時の機動力は無いが、装甲も出力も第五世代MS以上の性能は有している。手負いのMSならばやれる筈だ。

しかし、爆煙から突如伸びて来たワイヤーがオデュッセウスガンダムの腕に絡みつく。電流が流れる。

「うあああああッ!!」

複合電磁式装甲——フェイズシフト装甲の機能が電流によって停止する。

燈夜は作戦が見破られていたと悟ると同時に、勝機を失ったことを悟り絶望し項垂れた。



「燈夜君。」

不意に、モニターから総一郎の声が響く。

「いい闘い方だね。」

片腕のシビュラブリッツガンダムが此方へ歩いてくる。観察すると右腕はちぎれている上に各部は大幅に損傷していた。

「さっきのは危なかった。恐ろしい火力を持つMSだ。流石はペーネロペー……やっぱり僕も欲しくなったよ。」

シビュラブリッツの膝からニードルが放たれ、オデュッセウスガンダムに突き刺さる。バランスを失いその場に崩れ落ちるオデュッセウスガンダム。

「くっ……僕に勝ったつもりだとも？」

悔しかった。それは、燈夜がガン普拉バトルで初めて抱く感情だった。自慢のフルアーマーがここまでボロボロにされるのは、屈辱だった。

「そうだ。君のその機体はもう抵抗出来ない。終わりなんだよ。」

「悪いことは言わない。そのペーネロペーは高かっただろう？ここでやめるんだ。」

優しい声でそう語りかける総一郎。

「くっ……それでも！」

それでも、燈夜は諦めなかった。勝負を途中で降りるといふのは彼のポリシーとする事では無かった。圧倒的な実力差を肌を感じながらも、ガンプラバトルに対する誇りは失いたく無かったのだ。

「僕が諦めたら……駄目じゃないですかっ！」

そう言い放つと頭部バルカンでワイヤーを切り離し、シビユラブリッツを睨みつける。

「そうだよ。ビルダーなら当然の事だ。」

シビユラブリッツも腰からビームサーベルを抜く。  
じりりと放たれる赤色の光が、静かな殺意を物語る。

「彰人君も君も、強いビルダーはみんな、往生際が悪いな。敵わないや。」

総一郎はどこか寂しそうな、だが嬉しそうな声色で話した。

その声に疑問を抱く余地など燈夜には無い。

——次の攻撃で決着が着く。

「最後まで、諦めない!!」

両足には先程シビユラブリッツが放ったニードルが突き刺さり中破。満足な歩行は望めない。しかし、総一郎も満身創痍ならば相打ちには持込めるはずだと燈夜は微かに期待するしか無かった。

一方その頃、彰人とエリックは言葉も交わさなまま、互いに斬り合っていた。刃が重なりビームサーベルのミノフスキー粒子が散っていく。

オルタナガンダムがゴウ……とブースターを噴射すると同時に変

形。更に加速する。加速したままにエリックのシルベリアアストレイをマニピレータから伸ばしたビームサーベルで斬りつけようとする。が、叶わない。対するエリックも彰人の一撃離脱の斬撃に合わせ、器用にビームサーベルを振るいその攻撃を防ぐ。

二機の光の剣が何度も鏝迫り合う。

その光景は科学技術が発達した宇宙世紀の戦闘にしては、いささか奇妙であった。さながら旧世紀に登場した武士の果たし合いであった。

元来、起動戦士ガンダムに登場するMSとは人の動きを模倣とした機械であった。

足があればAMBACにより縦横無尽に宇宙を飛び、地上では悪路を駆け、腕でライフルやサーベルなどの道具を扱い、頭に搭載されたセンサーで物を見る。これはMSが宇宙で活動するという前提がある以上、宇宙服の延長としてMSが開発されたからである。汎用性のある巨大な人型機械。それが「ザク」と名付けられた最初のMSを契機に、今日まで進化したのである。

MSの進化は様々であった。

武器を追加し攻撃力を高めたもの。

装甲とスラスターを進化させ機動力を高めたもの。

サイコミュなどの特殊な兵器を使い戦闘の歴史そのものを変えたもの。MSは目の前の敵を討ち亡ぼすために、発展を遂げてきた。しかし、オルタナガンダムとシルベリアアストレイの両機はそうしたMSの発展からはやや外れていた。

—— 極端なまでの近接戦特化。

射撃兵装を極力減らし、重い装甲を切り詰め、その減らした装甲の代わりにビームコーティングやフェイズシフトなどの特殊な装甲を搭載。更に機体各所に備え付けたスラスターによる機動力の向上と運動性の向上に突出した機体。かつての第1次世界大戦や今日に至る戦闘では、射撃兵装こそが戦争の要であり必須装備と言えた世界において、この両機は戦略上愚かだと言えた。

だが、ガン普拉バトルは戦争ではない。

極端な話ではあるが、MSに重装甲を付けた上に射撃兵装を充実させれば、ある程度敵と対等に渡り合えるが、そんな戦闘は楽しくない……というのがG B Aのガンプラバトルで遊ぶプレイヤーの意見だった。極限に運動性が高められた両機の近接戦闘はただ美しかった。その無駄が削ぎ落とされた美しさは戦争とは程遠いガンプラバトルという「遊び」であるからこそ体現出来たとも言えた。

(楽しいな……！)

エリックとの斬り合いの中で、彰人は闘いの高揚感を再び思い出していた。あのフルアーマーの少年にも興味はあったが、自信たっぷりエリックと闘いたいという彼自身の闘争本能が優った。

彰人はオルタナガンダムを人型に変形させると同時に装甲を剥離させその姿を増殖させる。

(十にして一……！一にして十……！)

彰人は集中するとプリズムコンセントレートを使用する。多数のオルタナガンダムがエリックを囲む。数多もの虚像がシルベリアアストレイに斬りかかるが、実態はないため斬りつけることは出来ない。だがそれで良い。隙を生み出せば良いのだ。勝負を決めよう。そう判断したのもつかの間。シルベリアアストレイの体から何十本もの短刀が射出され、オルタナガンダムの虚像を打ち消していく。

「やっぱり、同じ手は食わないよな。」

「前回の戦いから、ボクが反省してないとも思ったかい？」

「いや、どんな手を出してくるか楽しみだった。」

「彰人ならそう言うと思ったサ。」

更にシルベリアアストレイから追加装甲であるゴールドクレイドルをパージする。パージされたパーツはMDにはならず、地上に落下していく。

「……パージ？ああなるほど、身軽にしたのか。いい判断だな。」

「ボクは、もつともつと君や君達と高みを目指したい。」

「同感だ。」

両機が刀を構え対峙する。何度も何度も飽きずに刃を交える。まるで、子供のチャンバラの様な遊びに興じる二人は心から楽しそうな表情を浮かべていた。もつと続けたい。終わらせたくない。長い斬り合いが続く。だが、終わりというものは当然やってくるものである。

電力低下によりビームサーベルの出力が落ち始めてきた。後数回斬り合えば互いにビームサーベルは使うなくなるだろう。

「そろそろ、このお祭りも終わりだな。」

「ああ、君達が途中参加したのが本当にもつたい無い。」

「祭りつてさ……最後は派手に締めるよな。」

「ああ……そうサ。」

言葉はもはや必要無かった。ただ目の前のライバルを倒したい。自分が相手よりも優っていたいという純粋な男の願いがそこにあった。

行くぞ……と二人は言葉を交わした後、金と銀の両機が発する光

が、熱が互いにぶつかり合い大きく爆ぜた。その光と熱は祭りの締めくくりを飾るに相応しい大きな花火の様であり、美しい光景だった。

——Battle ended

無機質なナレーションと共に世界が切り替わる。

華やかな祭りは終わり、現実へと引き戻される。

「みんな、お疲れ様だったね。」

ぱちぱちと神城さんが拍手してみんなの健闘を讃えていた。その姿に全員が思い思いの表情を浮かべながら自身の戦闘の余韻に浸る。

「両チームともいい勝負だった。」

「凄かったよー。私には良くわからないけど。」

文香も沙雪も満足そうな顔でみんなの顔を眺めた。二人とも、ガンダムには興味はないのだろうが、何か楽しそうにしているのだという雰囲気だけで十分なのだろう。

「どっちが勝ったんだ?」

彰人が待ちきれない、という表情で沙雪に尋ねた。彼はエリックとの闘いに集中してたせいか、総一郎達の様子を知らない。

「僕達の負けです。」

沙雪が答える間もなく、燈夜が淡々と答える。その顔は晴れやかであつた。

「僕のファンネルミサイルが避けられたのも、フェイスシフト装甲が見破られていたのも、はじめての経験でした。」

その声色には多少の悔しさが滲んでいたものの、確かな興奮が混ざっている。

強いプレイヤーに会えたことへの興奮、自分の全力を出し切れたことに対する充実感が表れている。

（自信家に見えたが、意外と素直に自分の負けを認められるなんてな……きつと、こいつは強くなる。）

そう期待できる何かを感じ取れる。彰人は燈夜の今後が楽しみになった。

「それで、エリックと俺は……相打ち？」

エリックの方を向き、彰人は一応尋ねておく。

「ふふ……どうやら決着はまた次になりそうだ。」

楽しそうに答えるエリック。言葉に片言が混じらなくなってきた。

（正直……今回は危なかった。）

だが、彰人は切磋琢磨出来るいいライバルを持てたと嬉しそうな表情を浮かべる。もう、全国に対する未練などは少しも感じられなかった。いい意味で憑き物が落ちたのだらうという事が窺い知れる。

「彰人。燈夜君は中々強かったよ。危ないと思う場面も何度かあった。」

総一郎が乱れた髪を直しながら話す。

「総一郎さん。彰人さん。エリックさん。神城さん。」

「今日は本当にありがとうございました。また機会があれば闘ってもいいですか？僕のGBNのIDを教えるので。」

「ああ。勿論だ。」

「ボクもチームプレイは久しぶりだったからネ。良い経験が出来たよ。」

「別に構わない。」

「ありがとうございます。」

そう言い終えると、深々と頭を下げた。こうして一つの勝負が終わり、ガンプラという絆で紡がれた仲間が増えていく。

（決めた。）

みんなの楽しそうな顔を見て彰人は心が決まった。

（俺、バトルを続けよう。辞めなきやいけなくなるその時まで。）

夕暮れの空を見上げながら、彼は心に誓った。あの後に沙雪が彰人の話をまとめ、例のバトルデータを神城が再現してくれる事になった。ただデータは本社に持っていかなければならなかったため、1・2ヶ月はかかるらしい。

（これであるの事件は何とか進展しそうだ。）

目の前で轟々と燃え上がる炎が彰人の顔を照らす。彼はお炊き上



げの火を見ながらぼんやりと考えていた。このまま全てが上手いくといいな。そんな楽観的な事を。

「彰人君。」

ふいに、声が聞こえた。

「……………文香。」

ふわりとシャンプーの柔らかく甘い香りがすると思ったら、隣に文香が居たことに気づく。考え事に集中しすぎて気がつかなかった。

「どうした?」

「うん。最近あまり彰人君とお話し出来てないな。と思って。」

「そうかな。」

「このお炊き上げの火……………綺麗だね。人形に込められた想いや、厄を引き受けてくれた人形を祓うためなんだって。」

「なんかいいよな……………情緒があつて。」

「うん。……………本当に綺麗。」

パチパチと薪が燃え、時折火花が上がる。美しいと思った。不意に、肩に重みがかかる。見ると、文香が寄りかかってきていた。頭を彰人の方に乗せている。文香は感慨深げに目を細めながら火を眺める。その瞳には寂しさが浮かんでいたが、彰人は追求して良いのか迷っていた。

(人形供養……か。)

隼人のムラサメは供養には出さなかった。死んでいないものを供養するのはおかしいと思ったからだ。いや違う。彰人は文香に隼人の事を聞くのが怖かったからだ。互いに無言のまま時間だけが過ぎる。彼は一層の事この細い身体を押し倒して、全部有耶無耶にしてやろうかとも思ったが、やめた。

「なあ、文香。」

「何？」

「次の休みの時さ、またお祭りがあるだろ。二人で行かないか？」

「私が断るわけな……」

文香が言い終わらない内に彰人は文香の体を引き寄せてキスをす。彼女は拒まなかった。唇の柔らかい感触と熱と愛おしさを感じながら、彰人はどうしたらこの子の心を埋めてあげられるのだろう。寂しさを紛らわせてあげられるのだろうかと考えていた。

それは、ガンプラバトルよりも将来の不安よりも、ずっと重い実感となって彼の胸を強く締め付ける。この寂しさや悲しみも全て燃えて、灰になって空に昇ってくれば良いのに。彰人は叶いもしない期待を胸に抱きながら、ただ赤々と燃える祭りの炎を眺め続けた。

「あの二人を見ると、何かもやもやするんだ。」

境内に寄りかかりながら、総一郎は誰に聞こえるでもなく一人呟いた。その声には不貞腐れた感情が見え隠れする。

「君がそんなことを言うなんて珍しいな……嫉妬か？」

独り言が沙雪の耳に入る。

「うん。多分ね。」

そう答える総一郎の顔は、不機嫌さを隠し切れていない。

(なんであんなにも、二人は素直になれるんだ……。)

この時、彼は生まれて初めて他人に対して嫉妬という感情を抱いた。彰人と文香のキスに対してでは無い。他人に対してあんなにも心が開ける彰人と文香に対する憤り。それはかつて他者に対して無関心を貫いていた彼にとっては、経験したことのない感情だった。黒い嫉妬心と自分に対する憤りがせめぎ合う。

「……そうか。君も変わったようだな。」

そして、総一郎の心境の変化を感じ取ったのは、同じく人嫌いな性質の沙雪であった。皮肉にも人嫌い。という互いの性格が、2人を磁石の様に引き寄せる。

本来の2人には程遠い出会いであり、それは正に奇跡と呼べるものだったが、ふたりはそれに気づくほど大人では無かった。

〃人形供養祭〃

ここに若者達の夢の跡を告げる、そんな一つの祭りが幕を閉じようとしていた。

次回に続く。

## 第10話 「さよならを言う前に」

2月上旬。人形供養祭が終わってから数週間。

冬の厳しさが緩み、暖かな春の兆しが見える中、彰人はある決意を固めていた。

(今日はずいぶん……文香と。)

一線を越える。少年から漢になる。手を繋ぎ、キスをするだけの淡く清い関係から大人の階段を登る行為。それは、思春期の少年にとって一世一代の大業。寝間着姿から私服へた着替え、私服のポケットの中に避妊具を潜ませる。

(避妊具か……はは、まさか、これを使う日が来るなんてな。)

思わず自嘲する一方で胸の昂りは抑えきれない。彼女への欲求だけで心の中は一杯だった。髪を整え普段あまり使わない整髪料を薄く塗る。下着も新しく清潔でカッコ良いものを選ぶ。今日で勝負を決めるためだ。

「行ってきます！母さん……おっと、その前に。」

廊下から玄関へと向かう前に、立ち寄る所があった。  
(行ってきます。)

父の仏壇の前に手を合わせ、祈る。遺影の父は穏やかに笑っていた。もしも父が生きていたら、文香を連れてきていたなら、父はどんな反応をしただろうか。喜んでくれただろうか、それとも、驚いただろうか。……その答えを、もはや知る術は無い。

(父さん……どうか見守って下さい。)

息子が精一杯努力を果たせる様に。と。そんな、切なる願いを込めて彰人は父を想った。玄関を開け、外に出る。彰人の顔は決意を秘めた男の顔をしていたが、それでもどこかあどけなさが残っていた。

“午前10時新潟市内”

“マリンピア日本海水族館にて”

(……早く来ないかな。)

彰人は待ち合わせの水族館の前で待つ。時間は合っているはずだが、彼女の姿はまだ見えない。

(俺の私服、変じゃ無いよな?)

心配になって鏡を見る。長身に黒髪、服は白シャツにジーンズ姿。一般的な男子高校生の私服ではあるが、彰人は疑心暗鬼に駆られたのか、見れば見るほど不安が込み上げる。彼が不安がっていると、遠くから、見覚えのある姿が映る。

「おい。お待たせ！彰人君。」

彰人が待ち焦がれていた文香が現れた。

(……ッ！)

はっと息を呑む。彼女はいつもの長い黒髪をポニーテールに束ね、服も春らしいものに合わせた明るい色調に整えている。可愛い。綺麗。素晴らしい。どう表現したら適切なのか分からなかったが、兎に角……彰人にとってはまた彼女の新たな一面を垣間見た瞬間だった。彼は模試でA判定を取った時や、総一郎が部室でHGのペーネロペーを完成させた時とは比較にならないぐらいに強く感動を覚えていた。「お、俺もたったい来たよ。」

既にキスも済ませた仲ではあるが、こうして一線を超えると決意した後だと中々顔を直視するのが恥ずかしい。彰人は文香から顔を背け照れ臭そうにしながらも言葉を絞り出した。

「じゃあ、行こうか。」

言い終えると、水族館に向かって歩く。緊張のあまり顔が強張るのをこらえ、デートに集中することにした。

——水族館の中に入ると、そこは楽園だった。

館内のイメージは、まさに海、水中。ガラス越しに魚やイソギンチャクなどの可愛い海の生物が所々に展示されている。

「なんか、可愛いな。」

「可愛いね。ほら、見て！イソギンチャクの中にクマノミが居る！」

「ああ、生物で習った……確か、共生だっけか。」

イソギンチャクとクマノミは共生関係にある。クマノミはイソギンチャクのために餌を運ぶ、イソギンチャクはクマノミの隠れ場所を

提供する関係だ。

「違う生き物同士でも、共に生きて行けるんだな。」

「ロマンチックだよな。」

何か文香が考えこんでいる。その仕草は普段のほほんと牧歌的な彼女にしては珍しい様子だった。

「文香……12時からイルカショーやってるんだって！一緒に見ようぜー！」

が、彰人はその意図をあえて察する事はしない。今日は楽しいデートなのだから、楽しませるのは彼氏である自分の役目だから、と。

「……うん。」

楽しい時間が過ぎる。彰人にとっては本当にあつという間だった。あの後、2人はイルカショーを見たり、愛くるしいペンギンの散歩を見たり、触れ合いコーナーでウニに触ったりした。ウニは痛かったが、イルカやペンギンは可愛かった。

（ふう〜。今日は文香も楽しめたみたいで良かったぜ。）

沈んだ顔の彼女なんて、彰人はもう見たくはない。ただ今日は文香を楽しませたかった。

その一方で、ある不審な男が2人の様子を眺めていた。

「こちらは問題無い。ああ。全て順調そうだ。」

水族館の外……ある住宅のテラスから館内を望遠鏡を覗き込み、2人の様子を伝えるためか、電話で誰かと話す男がいた。天体観測用といてもいいその望遠鏡は恐らく特注品なのだろう。更に男は全身黒づくめの格好で、非常に怪しい。

「……なあ総一郎。これは俗に言うストーカーでは無いのか？私はどうかと思うが。」

と、そこにもう一つの影がさつと現れる。

「何を言うんだ沙雪！あの彰人と文香さんがデートをするんだぞ！」

「気持ち分かる。だが……君が急にこんなことをするなんて、どういふ風の吹き回しだ。」

やけに楽しそうに見える総一郎の姿は、沙雪が知る彼の姿では無

かった。

「……いや、あのさ。何か気になって、ね。」

しどろもどろになる点もおかしい、と沙雪は不審がる。総一郎は根拠の無い行動をする男では無い。そういったある特殊な意味では、彼女はこの人嫌いの幼馴染を信用していた。

（まさか……文香が好きなのか？いや、総一郎が友達の子に手を出すとは考えられないが。）

思わず心が揺らぐ沙雪。

（いや、何故困惑する？）

はっと息を飲む。小首に添えていた手が固まる。

別に総一郎に誰が好きでもいいはずなのに。関係無いはず、なのに。

（この心のざわめきは何だ？）

胸がずきり、と傷んだ。同時にあの忌々しい正月の出来事を思い出してしまう。あの生真面目で女に興味の無かった総一郎が自分に“あんなこと”をしたのだ。幼馴染では無く女として見ていた。その事実が沙雪にとって衝撃的な体験だった。女として見られた事実が屈辱的だと思うと同時に、不思議と不快では無い。

（私が総一郎を……いや有り得ない。）

神社の家の長女として、誇りを持ち生きてきた自分。恋愛や結婚など先だと思っていた。日々の神社の仕事を全うすることこそが自分の誇りだった。その誇りがあったからこそ、先月の人形供養祭だって成功させることが出来た。

幼き日の総一郎の顔と、目の前の精悍な男に成長した総一郎。二つの顔が重なる。沙雪はその光景から目を逸らした。

「沙雪？どうした。二人が移動する。ついて来て。」

「……すまない。考え事をしていた。」

「今日の君は変だな。大丈夫かい？顔も赤いし。」

心配そうに覗き込む総一郎。その顔が余りにも真剣で、頼もしく思えて、たじろいでしまう。

「だ……大丈夫だ。」

動揺を悟られたく無いから、彼の顔から目を逸らさず精一杯の強がりをする。沙雪の表情の変化は側からみれば誰もが分かることだが、総一郎は気づいていないように思えた。

「なら良かった。じゃあ行こう。」

「ああ……しかし何処に行くつもりだ？」

「“色街”だよ。」

「馬鹿!!どこに連れてくつもりだ!」

一点の曇りもない真剣な顔で答えた総一郎の顔が、沙雪によってまたビンタされたのは一瞬だった。

ガチャリと電話を切れた。恐らく沙雪に切られたのだろう。心の中で合掌する。総一郎の電話の相手……エリック・オースティンは暗い自室の中で腕を組みながら神妙に考えていた。モニターには楽しそうに遊ぶ彰人達の姿が映る。

エリックは手元を持っていたサイダーを一口飲む。

甘い。甘さは頭を刺激してくれる。

「2人が動いたか……。」

真剣なエリックに対し、彼の後方では椿が何やってんだこいつ?といわんばかりの不審げな顔でエリックの横顔を眺めていたが、彼は気づかない。

「エリック様。」

椿は、苛立ちを抑えながら努めて冷静に主人の名を呼んだ。

「ああ、どうやら始まったらしい。」

「彰人様たちは、やはり。」

「ああ、彼等はボーダーラインを超えるつもりさ。」

「なんと!!……非常識な。」

椿は非常識なのは貴方のことも言っているのですよエリックと意図せず言いそうになる口を、慌てて手で押さえて自制する。

「プランBに切り替える。」

「……承知致しました。」

「椿。ボクのクレイドル（ドローン）の用意を頼む。」



新潟市内某所。通称色街。ホテル街でもあるこの場所は、高校生が大人になる場所として有名な場所だった。総務院高校、秀知院新潟高校、国立帝皇高校。

この色街はそれぞれ偏差値60を超える秀才達が集う性のトライアングラーの中心にある。

この場所は国のエリートが集うホテル街であり当然監視も厳しい。淫行や客引きなどは厳格に取り締られる一方で学生同士の繋がりには半ば黙認されていた。何故なら少子高齢化の深刻な進行のためである。国の年間出生率が70万人に近い現在、労働力を移民に頼りつつある日本では、エリート層の養成や出生率向上に繋がる事は是が非でもしたい。が、公にもしたくないと言うこの市の歪んだ方針だった。そんな大人達の歪んだ思惑はさておき、

「文香……行こう。」

「うん……彰人君。」

ここにもいざ大人にならんとする若者達がいた。手を繋ぎ、空を睥む。目の前に広がる帝国ホテルは外装な地味ながらも立派で、彰人にとってはこれが大人というもの象徴を表しているように見えた。当然金銭的な面での負担は大きいのだが、どうしても安っぽいラブホテルには行きたくなかった。

人生の中で初めて最初の初体験なのだから。

意を決して中に入る。今日は地元の大学生という設定だ。咎められても大丈夫だと思いたい。ホテルの中は外見通り広く、清潔だった。普段G B Aにダイブして休んでいるホテルも当然ゲームであるので綺麗にはされているのだが、このホテルはそんな仮想空間よりも清潔だった。彰人はロビーに入ると早速受付に足を運び部屋の確認をする。

「神取様ですね。ではこちらに住所とサインを。」

「はい。」

震える手で住所とサインを書く。横目で受付の表情を伺うが特に変な顔はしていない。行ける。そう彰人は確信した。

「お部屋は7階の2号室になります。料金はお帰りの際に支払ってい

ただきます。ではごゆつくりどうぞ。」

簡単な説明の後に「07-002」と表示されたキーカードを渡される。2人はそのまま無言でそそくさとロビーを抜けエレベーターに乗り、部屋の前に立つ。驚いたことに、エレベーターの内装も部屋のドアノブも金色に統制されていた。その色はオルタナガンダムの金色よりも高級感があり、この金色参考にしようかなと頭の隅でふと考えたが一蹴する。

今は目的が違う。集中しなければならない。

「うわあ。綺麗だよ彰人君!」

「文香。」

はしやぐ文香を後ろから優しく、強く抱きしめる。

突然過ぎたか?と一瞬後悔したが、湧き上がる衝動を止められなかった。彰人も健全な男子だった。

「俺は君が……好きだ、好きだから……。」

彰人の吐息が彼女の背中に触れた。同時に、文香の柔らかい体の感触と温もりが彰人の身体に伝わる。

「……いいよ。でもまずシャワー浴びたいな。私、汗かいたから。」

ぱつと彰人の身体を振り払うとシャワー室に向かう文香。ぽつんと取り残される彰人。

「あ……。」

一緒に入ろうとか、他に色々と言うべき言葉があったかなと思案したが辞めた。彰人はおとなしくベッドに腰をかけ爪を切ることにした。これは彼が技術情報部の男子のみんなと相談しあつた最低限のマナーだ。

「技術情報部 性の掟」

1. 女の子の体を傷つけないべからず。
  2. 変態プレイをするべからず。
  3. 避妊は確実に行うべし。
  4. ムード作りを怠るべからず。
  5. 身体の手入れは怠るべからず。
- そこから下はもう。覚えていない。これはよくよく考えてみると

ガン普拉バトルと同じであった。試合前の機体のセッティング。バトルフィールドの下見。バトルのイメージトレーニング。これらのガン普拉バトルで培ってきた経験は幸いなことに彰人の私生活にも役立てられていた。彰人は爪を切り、やすりで丁寧な磨きあげる。次に股間——実射の時に不具合を起こさないか確認。特に異常は無い。男子の沽券に関わる。次に顔——表情も崩れていない。鏡を見て顔もキリリと整える。瞳も濁っていない。綺麗な光を放ち瞳に自分の顔が映る……？

(ん?)

何かがおかしい。一瞬だがこれまでに見たことのない景色が瞳に映っている？気のせいだろうか。瞬きをしてもう一度見る。うん。特に異常はなさそうだった。何だったのだろうか。

「お待たせー！次彰人君入って。」

そんな事を思案していると、文香がとシャワー室の扉を開け出てきた。

「ふふ……いいお湯でした。」

おいおい。お風呂では無くシャワーだろうと彰人が突っ込みを入れようと振り向く。すると。

「おわっ！」

思わず後ろに飛びのく。そこにはタオルを羽織ったまままだが生まれたままの姿の彼女がいた。

「どうですか？彰人さん？んー？顔が赤いですな？」

恥ずかしそうに、だが悪戯っぽい笑顔を浮かべながら少しずつ近づいてくる。彰人にとってその光景は仮想空間よりも生々しい“現実”そのものだった。

「これは……刺激が強すぎるな。」

「でしよう。」

頑張つてダイエットして来たんだよ。と彼女はニコニコ笑顔のままだが、声が上がっている。いつもの様子のつもりなのだろう。彼女は部屋の中の椅子に座る。椅子に座った彼女の白い足が、健康的な肉付きの肢体が目に入って何ともやり場に困った。

「ていうか文香さん。俺もちよつとシャワー浴びてきます。」

「……うん。待ってます。」

「何で丁寧語なのさ。まあいいや。」

シャワー室に入り念入りに身体を洗う。お湯が暖かい。

「はあく。」

彼女の身体をいぎ目の前にすると全くイメトレは役に立たなかった。そのぐらい衝撃的だった。初めてGBAにダイブした時の空よりも衝撃的な光景だった。

「いやいやいや!!男の俺がしつかりしないと駄目だ!」

キュッと蛇口を閉め、バシツと顔を叩く。身体を吹くためにタオルを取る。身体を拭く。うん。俺も運動してて良かったなと彰人は安堵する。こんなこともあるうかと鍛え続けたこの体。これなら文香も嫌がらないだろう。彰人は無駄毛も処理すると、部屋の外に出る。

「お待たせ。」

「あ。お帰り。」

「風邪引いちやうから早くこつちおいで。」

文香がちよいちよいとベッドに招き入れる。

(うくん。なんか俺が想像してた行為と違うな。もつとこう、映画で見た感じでダンディに誘えたら良かったんだが。)

手招きされ、光に集まる虫のようにふらふらとベッドに引き寄せられる。ベッドは男女が寝れるように設計されているのか大きく、広い。こうして彰人と文香が寝そべっていても全く窮屈に感じないのは凄いなど彰人は考えていた。

(……じゃなくて!)

彰人は身体を横にし文香と対峙する。先程と違いまじまじと身体をみる事は出来ない態勢なので、彼女の裸体に圧倒されることも無い。ただ、彰人の身体はもう臨戦態勢に入っていた。後はどうするか。

「……私、胸無いでしょ。」

「え?」

「男の子は……胸の大きい子が好みなんだよね。」

「いや、そんなの人それぞれだし。俺は君の身体……好きだな。いや体って言うとそのなんていうか表現は良く無いけど……でも好きだよ。」

「……ありがとう。私も彰人君の身体好きだよ。細いし腹筋割れてるし。あの美術の教科書で見たミケランジェロの彫刻みたいね。」

耳元で彼女が囁く。こそばゆい感じだ、と彰人は吐息を肌で感じながら、彼女の身体を眺めた。

「彫刻ってそんな……でも、ありがとうな。」

彼女の髪を撫でる。美しい黒髪に、シャンプーの甘い香りが優しく鼻をくすぐった。官能的な椿の匂いとは違う、優しく、心が落ち着く様な香り。

「……ふふ。ねえ、私達ってなんか似てるよね。天然なところとか。」

「えっ、そうかな？俺も天然？文香だけじゃなくて？」

「あっ、ひどいなー。彰人君も天然だよ。」

彼女のクスクス笑いが、部屋に響いた。

「そうなのか。」

彰人は、彼女の髪を撫でる手を、下へとずらす。

汗ばんだ肌が、手に吸い付いた。その感触があまりにも愛おしく、壊れてしまいそうなほど危なげだった。彰人は、上半身を起こし文香に覆い被さる。

「……だけど。俺は今も、どうやって君を襲うかそればかり考えているんだよ。」

押し倒された彼女の瞳が、不安げに揺れている。

彰人の額から落ちた汗が、ぼつりと彼女の胸に垂れた。滑らかで綺麗な肌、甘い香り、細い身体。

理性など、とうに頭から吹き飛んでいる。

「彰人く……。」

言い終わらないうちに文香にキスをする。本当の恋人同士がする様な深い、深いキス。キスをすると同時に強く抱きしめる。心も体も離れない様に。両手を繋ぐ。

「俺は……君が好きだ。」

「嬉しい……っ！」

そこからはもう、本能にまかせるままだった。

文香の白い肌と柔らかな感触と体温。

それが……神取彰人がこの世界で見た最後の光景だった。

微睡みの中、彰人は不思議な夢を見ていた。

青い空、広い草原の中にそびえ立つ巨大な城。

城下町には子供達があちこち走り回り、大人達が注意する。平和な光景だった。しかし不思議だ。変な夢だなあと彰人はぼんやり考えていた。更に不思議だったのは、彰人がその喧騒の中心にいるにも関わらず、誰も彼の姿を認識していない様だった。不審に思い誰かの身体に手を伸ばすもすり抜けてしまう。声を上げ誰かを呼ぶも誰も応えない。

(なんだ？俺は透明人間になってしまったのか。変な夢だな。)

瞬間。巻き上がる爆音。それまでの平和な光景が一変し、城下町は火に包まれる。あちこち逃げ回る人々も炎に身体を焼かれ、苦悶の声を上げながら死んでゆく。これは何なのだ。理解できなかった。

更に上空からは光線が飛び、黒く鈍い光を放つ人型の機械——MSが人々の命を蹂躪していく。マニピレーターに握りつぶされ、脚で踏み潰され、放たれた光線で蒸発していく。それは戦闘ではない。一方的な虐殺であった。気が触れたのか、自分の引きちぎれた腕を持って彷徨う人。

下半身が無くなり、既に絶命しているはずの恋人に必死で救命措置を取るもの。息子の名前を叫びながら息子をかばい、MSの対人機銃で蜂の巣にされ生き絶える親子。城から翼の生えた何機ものMSが応戦しようと攻撃を仕掛けるも、黒いMSに敢え無く撃ち落とされる。その羽の生えたMSでは、殆ど抵抗になっただけだった。

だが、そんな一方的な虐殺は突如潰えることになる。城下町の彼方から、こちらへ向かってくるMSが見える。赤い翼が生えた紅龍の様な機体が強襲をしかけた。

その機体は空中で人型に変形すると同時に黒いMSをライフルで狙撃、見事に撃破した。城下町で爆発させまいとコックピットのみを狙っている。

それは不思議な光景だった。その紅いMSは理不尽に殺された人々の怒りを体現しているかの様だった。

(あのMS……何だ？怒っているのか?)

全身から蒼い光を放ち、可変すると同時に見たことも無い軌道を描きながら次々と黒いMSを落していく。圧倒的な強さだった。ライフルで狙う、撃つ。離脱。一切の無駄な動作が無く、ただ敵を葬っていく。敵の攻撃はカスリもしていない。そのMSは被弾もせず、全ての敵MSを殲滅し終えると、その紅龍は人型にゆっくりと変形していく。

人型になったその姿は意外にも彰人が見覚えのある機体だった。

(あの機体は……そんな馬鹿な……?)

彰人が驚き固まっていると、頭に声が響く。その声には聞き覚えがあった。懐かしい声だ。

が、その名を呼ぶこと無く彰人の意識はそこでぷつりと途切れた。誰にもさよならを言う前に、神取彰人という1人の人間の意識はこの世界から姿を消した。

まだ冬が終わり気候も暖かくなり始めた、そんな何でもない春の1日だった。

## 第二章 「Second world battle」 e」

### 第11話 『鏡合わせの世界』

そこは、見たこともない世界だった。

気がつくと、ベッドに横になっていた。ひどく身体が重い。身を起こし、周囲を見渡した。彰人の目の前には石造りの暖炉に、木製の椅子と机がある。暖炉からは暖かな火が焚かれ心地良い。部屋は良く観察すると畳7畳半ほどの広さであり、

外国の城の客間。というのが彰人の印象だった。

(外国に来たみたいだなあ。本当に変な夢だ。)

しかし当の彰人はまだぼんやりと夢うつつだった。ふいに、ドア数回叩かれる。この世界のノックなのだろう。ノックの後、1人の女が部屋に入ってくる。その姿をまじまじと見ると、彰人は驚きのあまり声を失った。部屋に入ってきたのは明るい紫色の髪を束ねた女、いや少女だった。大きな黒目がちの美しい少女。

「昨日は良くおやすみになりましたか?」

澄んだ声で少女が尋ねる。

「…君は?」

と、呆気に取られる彰人。

「ああ、失礼致しました。私はフランと申します。」



フランと名乗る少女は彰人の前にかすず傳く彰人は動揺した。無理も無い。状況についていけるわけが無いのだ。

「あのさ。」

「はい？どうかされました？」

「……まず、ここ何処？君は誰？」

「長い話になりますが、よろしいでしょうか。」

それは本当に長い話だった。まず始めにここは日本、いや地球では無いこと。彰人はあの城下町に倒れていて保護されていたこと。彰人を保護したのはあの紅いMSのパイロットだということ。MSのおかげでこの国は発展した事。彼が話を聞いた中でも特に驚いたのが、

「オルタナガンダムじゃないか……。」

目の前には彰人の愛機であるオルタナガンダムが格納庫の中に立たされていた。まるでG B Aの中のオルタナガンダムの様に、本物そのものの姿だ。

「彰人様。単刀直入に申し上げます。」

「私共の国をどうか救ってください。」

「はっ。」

「私共には貴方様と、騎士様しかいないのです。」

「騎士様？」

「はい！あの圧倒的な黒国に立ち向かうには、貴方様達のお力が必要なのです！」

「はあ。」

正直、現実的な話ではなかった。意味不明とも思えた。テレビゲームの世界じゃあるまいし。こんな夢を見るなんて疲れているのかな。と彰人は疑心に満ちていた。

「フラン。もう良い。下がれ。」

凜とした声が後方から響く。

「騎士様。お戻りになられたのですね！」

「ああ、後は僕が話をする。」

後ろから来た男とフランが話をしているようだ。その男の顔には見覚えがあった様な気がするが、思い出すことができない。

フランが下がると、騎士と呼ばれた長身の男がこちらへ歩いてきた。大きい。圧倒されそうになった。身長は180cmはあるだろうか。その長身の騎士は彰人の前に立ち、彰人を眺める。懐かしそうに、それでいてどこか寂し気に目を伏せた。その様子は何か語りかけようと言葉を探しているかに見えた。

一方で、彰人はこの男をどこかで見た覚えがあった。

(いつだった？可変機構を持つMSを使うプレイヤー？)

彰人が疑問に思い呆然と立ち尽くす中、不意に男が涙を流す。流れた涙が止めどなく溢れ落ち、石造の床を濡らした。

「ど、どうしたんだ！大丈夫か？」

思わず心配し男に近づく。男は一瞬の沈黙の後、言葉を絞り出す。

「……やはり貴方なのですね。長かった……！本当に長かった。彰人さん！」

一言一言に重みのある、存在感のある声。この声に彰人は聞き覚えがあると同時に、兄さんと呼ぶこの瞳で確信を得た。

「まさかお前。〃隼人〃なのか!？」

驚愕の声を出す彰人。

「はい……！はい！本当にお久しぶりです。姉さんは元気ですか？寂しがつてはいませんか？」

「ま、待て！ちよつと落ち着こう！な!!」

涙を流しながら話すこの男、「天音隼人」は生きていた。地球とは別のこの世界で。話をまとめるとこうだった。あの日、彰人たちの世界で隼人が意識不明になったと同時に隼人はこの世界に来たらしいのだ。

そこからは毎日が地獄の様な闘いの毎日が続いた。黒国と呼ばれる正体不明の敵が隼人の住む赤国に攻めてきたのだ。恐ろしいことに敵は侵攻にこの世界ではあり得ない技術のほずであるMSを使っていた。

一方的な殺戮が何日も続いたという。MSなどという見たことの

無い兵器になす術なく蹂躪される人々、奮戦虚しく、殺される味方。そんな中、隼人と彼の駆る可変機構型MSであるムラサメだけが敵を倒していった。

「目的は分かりません。ですが、僕はこの国を守る為に日々闘って来ました。」

そう語る隼人の顔は、もう彰人が知っていた頃の隼人の顔では無い。あちこち傷だらけの本物の戦士の顔がそこにあった。

その顔には、怒りと悲しみが深く刻み込まれておりかつて彰人が見た幼かった彼の無邪気さは失われていた。

当時の赤国は隼人のムラサメ以外にMSを保有しておらず、日に日に国土を侵略されていったようだ。かろうじて近年MSムラサメの量産化体制が整ったものの、やはり黒国が使うMSには敵わないのだそうだ。

「他の国とは同盟を組んでいないのか？」

彰人は尋ねた。他に同盟国があるのなら、少なくともまだ戦えるのではと思ったからだ。

「はい。あります。この国以外には、他に白国。青国があります。我が国と三国間で同盟を組み、黒国と徹底抗戦を続けていますが、勝利を収めたとはいいがたい状況が続いています。」

「なんか、RPGみたいだな。」

「僕も最初はそう思っていました。」

最初は隼人も帰りたかったと思っていたそうだ。ただ、自分とムラサメを守る為に何人もの仲間が死んだ事。自分にしかムラサメを起動できないこと。フランを守りたいと思ったこと、それらの要因が重なる

り、この世界にとどまる決意が芽生えたのだという。

だが悪い事に他国のMSとは半ばライバル関係にあり、完全に共闘しているとは言い難い。こうしている間にも他の国が侵略され、命を落としているものがある。

この状況の中で、日に日に隼人は彰人達の世界の事を忘れていったらしい。それは悲しい事だったが、仕方ないことではあった。大好きだった姉のことも、向こうの友達のこと、彰人のことも、全てが戦争の中ですり減り思い出が薄れていく。

「でも僕は……この国に恋をしたんです。人々の期待と、僕自身がこの国の人々を守りたいという願いが、まだムラサメを動かしているのです。それに、あの大好きだった英雄——ガンダムになれるのなら、僕もガンダムになりたいと思つています。正直、こうして言葉にするに恥ずかしいですけどね。」

「ああ、あと彰人さん。面白い事に、僕らの世界のプラスチキ粒子を用いた機体の事をこちらの世界では“ガンダム”と呼ぶそうです。変ですよ。MSなんて無かった筈なのに。」

「どうやら“向こうの”世界ではなんてことはないプラスチックの塊や粒子が、こちらの世界では軽く、頑丈で、加工しやすい高級な工業物として認知されているらしい。」

「そうか……でもそれなら尚更おかしい。」

「はい。全く辻褃がありません。」

かつてはMSが実在したのに、MSとその運用方法だけが人々の記憶から消えてしまったかのようだ。

（そんなことが有り得るのか？まさか、月光蝶でも実在しているのか

?)

「僕の推論ですが、何らかの理由で過去にあったMSの技術が封印されたのでしよう。……更に言えば黒国の代表も恐らく我々と同じ世界の人間でしようね。目的は分かりませんが。」

「異世界物では異世界から来たもの同士が対立するというのが、全く同じだな。この世界も。」

「はい。ただ、私のこの話は彰人さんだから話せるのです。フランも国王様も、異世界が本当にあるとは信じてはいません。だから僕もここまでの推論は明かせませんでした。」

「だろ。無理に明かせば、それこそ怪しまれて殺されるのがオチだ。」

「はい。だから彰人兄さんが来てくれて良かった。本当に良かった！オルタナガンダムもある。」

「彰人兄さん！お願いします！僕と一緒にこの闘いを終わらせて下さい！」

真剣な眼差しだった。一つの曇りもない射抜くような、どこか縋るような瞳。

その瞳に映る彰人の答えは決まっていた。隼人の吸い込まれそうな澄んだ瞳を見つめながら、彰人は言葉を返す。

「もちろんだ。隼人。この闘いを終わらせて、地球に帰ってお前は文香と会うべきだ。」

「……はい！」

隼人の一瞬の間が気になったが、深くは追求はしない。どのみち隼人は1人では行くあてがないのだ。なら、やれる事をやるしかない。そう考えていた。部屋から格納庫に移り、彰人はオルタナガンダムのコックピットに座る。

「驚いたな。まんまGBAと一緒だ。」

VR空間とリアルという認識の差はあれど慣れ親しんだ愛機の特徴は一緒だった。これなら問題なく動かせるだろう。

「はい。私もムラサメを見たときは驚きました。」

隼人は子供の頃に眠っていたムラサメを起動させ、敵のMSを何機も撃退したそうだ。それから数年間、この国を守る盾として戦い続けてきた。

それがどれほど過酷な戦いだったのか彰人は知る事は出来ない。聞くのも酷な気がしたからだ。ただ、仲間が少しづつ居なくなっていくのは寂しい。そう隼人は俯きながら言葉を漏らした。

彰人はオルタナガンダムを起動させる。次に隼人もムラサメガンダムも起動させる。二機の紅と金のMSが赤の国の空を優雅に飛行する。

「夢が叶ったな。」

「ええ。ただこれが平和な時だったらどれほど良かったか。」

長い間、空を飛び続けていた。すると雲の切間を縫い、遙か遠くから黒い影がこちらに向かってくるのが分かる。

「敵か。」

「流石ですね。やはり分かりますか。」

三機の黒い影はこちらに近づくとその形がはっきりと分かる。黒の国らしい黒色のMS。

(これは……ガフランだな！だが何故？)

彰人は目の前に迫る敵機を判別する。ガフラン。.. 機動戦士ガンダムAGE” に登場したMS。その竜のようなMSは原色から黒いカラーリングに塗り替えられていたせいか、よりMSらしからぬ異質なデザインに見えた。

(敵の正体といい、まるでAGEだな……つと！)

生憎、ガフランの弱点は知り尽くしている。彰人はオルタナガンダムを急上昇させガフランの背後を取り、ガフランのキャノンが取り付けられている構造上脆い背後から一気にビームサーベルを突き入れる。爆発するガフラン。残り二機もこちらにねらいを絞ったのか迫ってくる。が、それが良くなかった。

隼人のムラサメガンダムが上空から強襲しその手に握られたビームサーベルがガフランを切り刻む。

腕を切られ、足を切られ、丸裸のコックピットにビームサーベルを突き刺す。哀れみを覚えるくらいに一方的な闘いだった。

「やるな。隼人。」

「彰人兄さん程じゃありません。といよりも、この敵の機体を僕は知らないのですが、兄さんはご存知ですか？」

「ああ。後で詳しく教えるよ。お前が知らないガンダムをな。」



「新しいガンダム！それは楽しみです！」

目を輝かせる隼人。隼人のこの目は昔から変わらない眼差しだ。と彰人は懐かしく思った。

戦闘を終え、赤国に備えてある滑走路に降りる。MS形態で降りても良いのだが、緊急事態エマーシジョンの時はMA形態で発進できる方が便利なのだという。ここはGBAとは異なっていた。やはりここは異世界という本物の世界なのだ。彰人達はMSから降りると、城から降りてきたフランが手を振って歓迎しているのが見えた。

「彰人様、ハヤト様。本当にありがとうございます。」

フランは2人の傷一つない凱旋に対し、心から嬉しそうな顔で2人を眺めた。こうしてみると、目が大きく、童顔に見える。一体歳は幾つなのだろうと彰人は不思議に思った。こんな少女が何故隼人と一緒に戦うのだろうかという当然の疑問も湧いた。

「なあ聞きたいんだけどさ。」

「はい？」

「何で隼人が騎士なの？別に他の人は普通に隼人様ー！とか、赤龍將軍！……って呼ぶのに。君だけ騎士様と呼んでいるのは何でなのかなと思って。」

「そ、それは。」

彰人の言葉に対し、フランは痛い所を突かれたと言わんばかりに、後ろ手を組む。視線が泳ぎ、もじもじと恥かしそうな態度を取った。その態度は、年相応の少女の姿だった。

「彰人兄さん。それは僕から伝えるよ。ささ、今は国王様の所に案内するから付いてきて。」

隼人は話を軽く流すと、城に向かって歩き始める。その後ろを黙って歩くフラン。だが彰人は理解できた。彼女が隼人に向けるその熱い眼差しを。

(なるほどなあ。)

何となくあの2人の関係が分かってきた。これは面白い物を見てしまったぞ、とにやにや笑いを浮かべるのを止めないまま、彰人も隼人について行く。

城の中に入り、広場を抜け、階段を昇って王の部屋に向かう。扉の前には護衛だろう。数人の屈強な男達が門の前を警備していた。隼人の姿が見えると、何も言わず後ろに下がり扉を開く。

国王様との謁見はなかなか緊張した。50代くらいの威厳ある髭を蓄え、王座に座るこの老人はまさに国王という感じがした。国王の前に隼人と彰人が並び、国王が口を開くのを待つ。

長い沈黙が続くが、国王は口を開かない。

どうやら、視線で彰人を見定めているのか。その視線に彰人は多少たじろぐ。だが彰人はこの国にとって敵ではない。まずはそれを信じて欲しいなという思いで彰人は一杯だった。

長い沈黙を破り、不意に国王が口を開く。

「彰人殿。この度はこの国に来ていただき、誠にありがとうございませう。」

威厳のある声だった。聞くものを落ち着かせるような静かだが力のある声。権力者が持ち得る力であった。更に国王様が頭を下げる。慌てて彰人も頭を下げる。その態度はどうやら正解だったようだ。

国王が言葉を続ける。

「現在我が赤国は、貴方も知つての通り、黒国からの侵攻を受けています。」

「……単刀直入にいいましょう。貴殿には我が国の矛となっていただきたい。オルタナガンダムといいましたかな？我が国はあれが是非にも欲しい。あのモビルスーツは十分な戦力になる。どうですか？無理にとはいいませぬが。」

国王の目が彰人を睨む。背後の男達が武器を構えるのを気配で感じた。国王の声には確かな脅しが含まれている。断ればどうなるか予想はできたが、断る理由などない。

（まあ、断る理由はないな。）

まだこの世界に慣れているとはいえない。この世界の存在そのものを疑っているところもある。だが隼人がいるのだ。自分も現実世界に帰らなければいけないのだ。

「そのお話。謹んでお引き受けいたします。」

彰人は深々と頭を垂れる。やらなければならないことは既にわかっていた。国王の緊張が解けたのか、柔和な表情を浮かべた。背後の男達も安心した様に殺意が和らぐのを感じる。本当は気の良い奴等なのだろう。

色々あったが、国王との謁見が終わり彰人は隼人達と食事を取った後に与えられた個室に戻った。埃っぽいベッドに横たわりながら、考えをまとめる。

外を見ると、すっかり日が暮れていた。月明かりと簡素なランプの光が部屋を照らす。

（一先ず、この国の現状は把握した。次に他国の状況を知らなければならぬだろうな。）

そのため、彰人は心の許せる隼人と、その従者フランを予めこの部屋に招いていた。ココ、コン。という独特なノックの音が聞こえると、彰人はドアを開き2人を招き入れる。

「隼人。フラン。この国の現状は理解した。黒国や他の国の情報が知りたい。」

木製のテーブルに地図を広げ、彰人は隼人とフランを交互に見るとにかく敵と戦う以上は情報が欲しい。戦争の基本は情報戦なのだ。隼人が質問に応えようとするが、フランが手でやんわりと押さえた。

どうやら説明するのは自分の役割であると心得ているらしい。

「それについては私から説明します。」

と、フランが木版を持ちながら答えた。

「現在、この大陸で確認されているのは我が赤国。我が国に正対するかの様に黒国があり、我が国の西側には青国、東の国には白国があります。国力としては黒の国が最も大きく、赤、青、白の三国を合わせても黒国の方が国力、技術力共に勝ります。」

「確認されているMS……彰人様方がガンダムと呼ばれるタイプのMSは彰人様のガンダムを含め計五機。各国に1機ガンダムタイプというMSが存在しています。強力な能力を有してはいますが、黒国のガンダムは特に強力です。」

「僕も何度か黒国のガンダムと戦った事がある。」

ただ、僕も見た事が無いタイプだ。正直、対策が分からない。」

「なるほど……なら二人とも、各国のガンダムタイプの特徴を出来るだけ教えてくれ。」

「ええ。では、引き続き説明いたします。まず始めに赤国のガンダム。隼人様が駆るムラサメですが4国の中のガンダムで唯一可変機構を有しており、機動力は他国の追隨を許しません。しかし我が国の技術力では部品の生産が追いつかず、性能は遺憾ながら低下していると思われる。」

「次に青国。この国は両肩に青い翼を生やしております。更に機体の周辺に球形の青色の粒子を放ち攻撃を防ぎます。特に特徴的なのは、機体が赤く輝くと目にも留まらぬ速さで動き、武装の火力も上昇する事が確認されています。」

「第三に白国。この国のガンダムは防御に特化した性能を有しています。見た目は白く丸い。ふざけているかの様な外見ですが、一度も敵の攻撃で機体に傷がついた事が無いという報告を受けております。装甲だけで無く特殊な膜ペイルのような物を纏っているようです。反面火力は低く、量産型のMSと火力は変わりません。敵対しても脅威度は低いでしょう。」

「最後に黒国。この国のガンダムはなんといいですか……見た目が変

わっています。足は棒きれのように細い。対して肩からは大きな8枚の羽を宿しています。腕は手というよりも、巨大なしなる剣をそのまま腕に固定しており近づくのは容易ではありません。更に全身の至る所に火器が搭載されており、背後から奇襲したMSが振り向く間も無く撃破されています。」

「これだけであれば脅威ではあるものの、撃破は可能です。が、この黒国のガンダムについてはまた特殊な兵装を持っております。……傷を負わせても傷が治るのです。それも瞬時に。」

「……コックピットを貫いたはずなのに、何度も何度も立ち上がるんだ。あれは不死なのかと思うくらいに。初めて闘うのが怖くなったガンダムだったよ。」

隼人が悔しそうにつぶやく。

（不死。そんな機体がいるのか？思い当たるのはナノマシンやDG細胞だが？）

彰人にも心当たりはない。マニアの知識を総動員してもそんな特徴を持つMSはいない。不死といえばいることはいるのだが、8枚羽というのも分からない。4枚羽であればクシャトリアが該当するが、もしかするとそもそもMSでは無いのかも知れないと彰人は推測するしか無かった。

「8枚羽か。俺も心当たりはないな。」

「残念です。手がかりになると思ったのですが。」

がくりと気を落とす隼人。無理もない。手がかりが無いというのは不安になるものだ。それにしても、支離滅裂な話には違いなかった。

異世界。見たことの無いMS。実際に死者が出る世界。頭がこんがらがりそうだ。

「ひとまず、他国の情報は分かったよ。」

「同盟を組んでいるなら、黒国のガンダムを倒せるかと思ったんだがな。だが、自己再生する機体では、資源に限りがあるこちらの側が不利だ。最悪撃破される可能性がある。」

「はい。オルタナガンダムや彰人兄さんのガンダムの知識なら倒せる

ヒントになるかもと思いましたが……いえ。オルタナガンダムがいるだけでも大きな戦力になります。しかもオルタナガンダムはまだ存在を他の国に悟られてはいない。」

「今朝のガフランも倒しましたし、目撃者もおりません。万が一の切り札。として彰人様とオルタナガンダムには待機していただきたいのです。」

「分かった。隼人。フラン。今日はありがとう。」

「ええ、僕も貴方に会えて心強い。ではフラン？」

「はい。それでは今夜はこれにて失礼致します。」

彰人様、隼人様、おやすみなさいませ。」

椅子から立ち上がると、部屋から出て行く隼人とその後ろに続くフラン。

(恋人同士っていうよりも、なんか兄妹みたいで微笑ましいな。)

状況は変わらない。元の世界に戻る方法も分からないし、黒の国の動向も気がかりだなと彰人は考える。

(初めてきた場所なのに、繋がりは無いはずなのに、何こんな真剣になってるんだろ。俺は。)

いや、違う。この世界は隼人の居場所なのだ。彼が命がけで守り抜いてきたもう一つの現実なのだ。

今日のガフランも隼人はあっさり倒した。腕も悪く無いどころか、あの立体的な機動を生かした戦い方は彰人が過去に彼へ教えた戦い方だった。彼は強い、それも嬉しく思う。彰人にとって隼人は家族だ。だから彰人はそれに応えるつもりでいた。

その頃フランの部屋では、フランが髪をまとめ寝る支度を整えていた。部屋に備えた鏡に映る自分の体。10歳の頃に隼人に命を救われ、今日まで彼の従者として働いてきた自分。

(楽ではなかったな。)

実際のところ、フランは彰人のことを信用はしていない。が。

(ハヤト様のあの嬉しそうな顔は……初めて見た。)

隼人の端正な顔がほころぶのは、可愛い。と思えたのだ。彰人のことはまだ良くは分からないが、隼人の事は心から慕っていた。10代

の少女にはその感情が恩義から来るものなのかどうか、判断できなかった。

(何を考えているの。私は。あの人の駒にならないといけけないのに。従者でも嬉しすぎるくらいなのに。)

両手で頬を叩き、考え直す。

(……駄目。望んじやいけない。許されない。)

フランははあ。と溜息をつく。鏡に背を向けベッドに横たわる。疲労の色が見て取れる。慣れない事務の仕事が続き、目の下にはクマが出来た。が、休んでいる暇は無い。前任者や他の経験者はみんな死んだか、黒の国の影響が及ばない場所に逃げたのだ。黒の国に情報と引き換えに亡命した者さえいる。

そんなギリギリの中で、フランが全てを投げ出さなかったのは隼人の存在が大きいと言わざるを得ない。自分の身を呈して自身を救ってくれた人。

隼人の事が好きなのか、それとも純粋に恩義を感じているだけなのか。判別がつかず、少女の心は揺れ動いていた。

場面は変わり、黒の国の某所。夜。

砂漠の中央に、聳え立つ黒金の巨人。

その名前も分からぬ機体から男が一人降りる。

若くは無い。かと言って衰えてもいない。

虚ろな瞳には生気が感じられず。白髪混じりの黒髪に濃い髭面。お世辞にもしようきとはいいがたい容姿をしていた。

——その男が笑っている。ただ笑っている。

男は天を仰ぎ、次に黒色の巨人を眺める。

それは殺すという目的に特化しつくされた、人を模した巨人。機体の各所からは蒼い光が煌々と瞬いている。それを満足げに目を細めると、男は誰に聞かれることもなく一人呟いた。

「やっと会いに来てくれたんだね。アキト君。」

——夜は終わらない。

第12話に続く



## 第12話『邂逅』

赤国 某所にて

(なんなんだこのモビルスーツはッ!?)

黒国のガフランのパイロットは焦っていた。楽な作戦のはずだった。赤国の住民を適当に殺害し帰投する作戦。この作戦が終わった翌日には休みが取れ、家族とアリアンへ遊びに行く予定があった。だが、既に彼の部隊は彼を残し全滅。彼のガフランもほぼ満身創痍だった。なのに敵のMSには傷一つ付けていない。いや、付けられなかった。

(MSの性能が、戦力の差だとしても言うかッ!?)

認めん！認められるものかッ!!)

——黒国で紅龍と呼ぶ紅い機体が空を舞う。

ガフランの我武者羅な銃撃をひらりとかわし、反撃。ガフランの右腕と尻尾が両断され爆発する。

——紅龍が吠える。

機体の各所から蒼い光を放ち、更に加速。なすすべのないガフランを切り刻み、コックピットだけを機体から切り離す。もはやそれは戦闘ではなかった。武人が演武を舞うかの如く悠々と敵を葬っていく。そこには一切の気負いも恐怖も躊躇も無く、そのまま残ったコックピットにビームサーベルを突き入れ、敵を火球に変えた。

(……そんな馬鹿……なっ!!!)

蒸発したパイロットの無念が儂く空に散る。それを意に介さないムラサメガンダム。その姿は恐ろしくも美しかった。天音隼人とムラサメガンダムの前ではもはや並みの機体では相手にならないと言うことは明白だった。コックピットの中で、隼人は心の中で呟く。

(最近になって、また攻撃が激しくなっている?)

命のやり取りの後、高ぶった神経を落ち着かせるため呼吸を整える。人を殺していると言う実感は嫌なものだった。心を蛆虫が這いずり回るかの様な気色悪さ。慣れるものではない。昔は敬愛するキラヤマトのように、不殺の誓いを立てていたが、止めた。

まさか生き残ったパイロットが自爆するなどと言うことは、幼い頃の隼人の想像が及ばないところだった。爆発に巻き込まれた人間の飛び散った肉片と、内臓の生暖かき。血の匂い。

その凄惨な光景は少年を早熟させるには充分だった。同時に彼の健やかな精神を歪ませるのにも充分だった。殺して、殺し抜いて、4年。

何人を殺したのか、何人殺されたのかはもう覚えていない。未だに戦いは終わる事はなく、ただ命が浪費されていく。殺した相手にも、殺された味方にも家族や友人がいたはずだ。

黒国に対する憎悪よりも、どうしたらこの戦いを終わらせる事が出来るのか。為すべきことは何か？隼人は毎日の様に考えていた。

そんな終わりのないライフエンスの中で、彼は二つの希望を見つけた。

一つはフランという名の少女。

彼女は隼人が12の頃、たまたま救援に向かった村での唯一の生き残りだった。村人たちの焼死体に囲まれながらも死を選ばず、強い意志を感じさせる瞳を持つ少女を見た時。隼人は泣いた。女の子の前で泣きたくなかったが、泣いた。悲しくないはずなのに、涙が止まらない。

この世界での彼が流したはじめての嬉し泣きだった。生きていくくれてありがとう。と泣きながら強く抱きしめた時。フランの華奢な体には、生きたいという強い意志と熱が溢れていた。

次は彰人という隼人の憧れの存在。この二つは、隼人にとって希望だった。彼にとつて、決して壊されてはいけないものだ。侵されてはならないものだ。思考を一時やめ、隼人はムラサメガンダムと共に赤の国へ戻る。オルタナガンダムがいるとはいえど、留守にしておくのはまずい。機体を反転させようとモニターを確認するが、モニターには新たに敵機の反応が写っていた。

(この反応は……まさか?)

此方に接近する青い機体。

(……ッ!)

隼人は慌てて機体を上昇させ回避行動をとる。敵の機体は、青国のガンダムタイプだった。

(なんてタイミンクの悪いッ！)

敵のガンダムがムラサメに向かいビームライフルを放つ。正確な狙い。コックピットを狙った明確な殺意のある攻撃。

隼人はムラサメガンダムを變形させ、青の国のガンダムへお返しとばかりにビームライフルを撃つ。一発が命中しダメージを与えたようだった。攻撃を当てられたことに激昂したのか、ビームサーベルを抜いてムラサメガンダムに迫る敵。隼人もビームサーベルを抜刀し青のガンダムと立ち会う。互いに振るったビームサーベルが鏝迫り合い、ジリジリと粒子を散らしていく。

その時、接触回線から相手の声が聞こえた。

「退屈そうだなあッ！赤いのオツッ！」

粗野な少年の声がコックピットに響き渡る。

「……小狼！今は僕達がこんなことをしている場合じゃないだろう！」

隼人も接触回線を用いて、内心焦りながらも冷静に少年に言葉を返した。

「うるせえ!!こっちはなあ！毎日雑魚の相手ばかりでつまらねえんだよ！」

「遊びだど？僕は遊びでMSを動かしているわけじゃない！わかれよ!!」

ムラサメガンダムは相手の機体に蹴りを入れ、機体同士の距離が開く。

間髪入れずイーゲルシュテルンで牽制射。

「小狼！黒国が迫っているんだぞ！数百人も人間が死んでいるんだぞ！お前も青国の王子なら分かるだろ！」

「ああ、知ってるさ。あの国には苦戦してるからな。だからこそ、青国<sup>俺達</sup>はお前のところの国とも同盟を結んだ。」

「だがな、だからこそMSで暴れまわることが出来るのさ！楽しいだろ？戦いつて奴はっ!!」

小狼と呼ばれる男のガンダムがビームライフルを乱射しながら迫る。隼人も怒りを抑えつつビームサーベルでその攻撃を弾きつつ再度正対する。なんて事はない。勢いだけの大局が見えない坊やの攻撃が当たるものではない。あれは玩具を与えられた幼子だ。と隼人は改めて呆れていた。このような若い男が仮にも王子だというのは青の国にとつては大きな損害だろうということは容易く想像できた。「ああ、楽しいな。」

吐き捨てるかのように隼人が呟く。彼の胸にはまぎれもない怒りが込み上げていた。戦いを楽しむものは隼人にとつて全て敵である。「だがこれは遊びじゃない。命のやりとりなんだ。」

ビームライフルを放ち、ムラサメガンダムを變形させ急接近。更にビームサーベルで青国のガンダムを切りつける。ダメージが通ったのが感触で分かった。

「うおっ!？」

狼狽える小狼。無理もない。可変機構を持つムラサメガンダムの立体的な攻撃に慣れている人間は、この世界では彰人以外には居ない。目では追えても思考と反射が追いつかないのだ。

「小狼。このまま退け。でなければ上からビームサーベルを突き入れる。」

ビームサーベルを構えながら、脅しを込め冷たい口調で警告。

「……舐めんなよ。」

瞬間。機体が赤く発光する。加速する敵の機体。

(これは？報告にあった反応か！)

距離を取るが、小狼の方が早かった。あつという間に距離を詰められビームサーベルで斬られるムラサメガンダム。右腕が第二関節から千切れ飛ぶ。左手に持つビームライフルで何発か攻撃を当てても、どうやら致命傷にはならないようだ。

頭部のイーゲルシュテルンで更に牽制。しかし青の国のガンダムの表面にかすり傷を負わせる程度だった。

(速いッ!? ストライクフリーダムでもここまででは?)

報告を受けるのと、実際に目の当たりにすると違う。隼人が対応出

来る速さを超えていた。まるで光の様な速さで迫る青のガンダム。「ほらほらどうしたあつ！さつきまでの威勢は？押され気味じゃねえのかあ？」

赤い閃光がムラサメガンダムを襲う。上下左右360度全方位から迫る攻撃。3倍以上の速さで迫る敵のガンダム。

(素早いが……3倍の速さで迫るならこっちも対応を変えるだけだ。)

可変し、後方へ加速。小狼から距離を取る。当然追ってくる小狼。「逃げんなよ！」

「馬鹿だな。愚鈍な君なら当然追ってくるだろうとは思っているさ。」

可変したムラサメに対しては、流星に立体的な攻撃は出来ない小狼に対し機体後部のビームキャノンを放つ。追ってくる時は一方向からしか迫れないのだから、狙いは容易だった。

「うおお！危ねえな！」

小狼も易々と当たるほど愚かでは無い。この戦いにおけるセンスは流星だった。

「次は殺すよ。小狼。」

「いやあくおつかないねえ！騎士様は。」

「だけどさ、舐めてると……容赦しないぜ？」

静かな殺意を込めて小狼が言い放つ。対して相手にしてられないと隼人は呆れる。こんな人間と同盟を組まなければならないとは。

(黒国と同じくらい厄介者だな。)

今度こそ抹殺するつもりでライフルを発射する。コックピットを狙った一撃。当たれば即死だろう。当たればだが。だが、そのライフルは意外な人物に防がれる事となる。

二機の間我突然割って入る白い機体。その機体を二人はよく知っていた。

接触回線から若くあどけない声が響いた。

「だつ！駄目ですよ。二人共。ボク達は仲間じゃないですか。喧嘩したらいけないですっ！」

「カイン少年か。良くないな。男同士の戦いに割って入るのは。」

「ああ、お前が出る幕じゃねえさ。下がってな。危なえから。」

「だっ、駄目です。下がりませんよ。ボクは三国同盟の長ですから！」  
幼いながらも必死さが伝わる声。二人は戦意喪失。勿論、悪い意味  
でだ。

「はあ……」

続きは今度だな。と二人は思った。こう言うところのタイミング  
は何故か同じだった。

第13話に続く。

## 第13話『三者三様』

——赤の国 城内 作戦会議室にて

MSでの戦闘じやれあいを済ませた小狼と隼人、カイネの三人は赤の国の城内に集まっていた。城内は丁寧ていねいに清掃が行き届いており、質素とはいえど一国の城としては立派に見えた。

(赤の国か……。来るのはあの時以来か?)

小狼は赤の国に来るのは久々だったが、特に懐かしさを感じる事は無かった。ただ早く退屈な話を終わらせたいという気はしていた。

長い廊下を通ると、突き当たりにある部屋に辿り着く。部屋の中にはまた簡易ながらテーブルと椅子が配置されており、会議室。というには充分であった。その会議室の中には黒髪のハヤトに似た男と紫髪の少女が佇んでいた。小狼達が来た事に気づくと、その男が口を開く。

「それで、その二人が例のパイロットなのか。隼人。」

「はい。そうです。遺憾いかんながら。」

男の問いに対し、心底不服そうに隼人が答える。

「なんだハヤト。お前、不満なのかよ。それよりもコイツは誰だ?」

「はじめまして。青国、白国のガンダムパイロット。遠いところからお越し頂き誠に恐縮です。」

「俺は神取彰人。2人にはアキトと呼んで欲しい。俺は隼人の幼馴染で、今はこの赤国の参謀を務めている。よろしくな。」  
淀みなく彰人が答えた。

(似ている……この小狼という男、総一郎の奴に。性格は正反対だが……。)

彰人は小狼の顔を眺めながら、不思議に感じた。小狼は総一郎と同じ顔だったからだ。一つ違ふとすれば、瞳だけは赤い。武人らしいその姿は、総一郎とは全く違うものだが、どこか総一郎と似たような何かを持つ男だなと彰人は考えていた。

「御託ごたくはいいんだよ。で、アンタが俺たちを黒国に勝たせてくれるってののか？」

「ああ、その通りだ。詳しくはフラン。君から説明を頼む。」

「承知いたしました。」

紫髪の女、フランと呼ばれた女が前に出る。小柄だが、気の強い女だと小狼は思った。彼女のその姿には自信が溢れており、側から見ても優秀そうに見えたからだ。芯の強い良い女に違いないと小狼は察していた。

「まず初めに、皆様によってもらいたいことを説明致します。それは――」

彼女の長い説明が始まった。

数時間後、作戦会議の後の帰り道、小狼とカイネはとぼとぼと赤の国の道を歩いていった。作戦決行前の観光に務める二人の少年。すらっとした長身の小狼と、小柄なカイネ。側から見ると仲の良い兄弟のように見える。2人の周囲には側近が数名囲んでいる。恐らく、暗殺防止の為か、それとも別の意図があるのか。



「はあ、疲れましたね。小狼さん。」

カインがやれやれと体を震わせる。本当に疲れたらしい。

「俺は長い話はどうも性に合わん。カインは分かったか？」

「ええ。要は再生する敵の機体の破片やパーツを奪取してこい。ですよ。ね。」

——黒国のMSは自己再生能力がある。

小狼とカインもハヤトも、あの能力にはだいぶ辛酸を舐めさせられたものだ。何度傷つけても、コックピットと思わしき部分を傷つけても、立ち上がる黒の巨人。腕に取り付けられた巨大な刃物も厄介だ。赤国や青国のガンダムでは迂闊に近づけない。なんとも面倒な相手だった。だから、その黒国の機体を分析するために部品や装甲を剥がしてもってこい。という意図も理解できた。

「単純だが、分かり易い。俺のガンダムでぶった切って、カインは破片を回収し、後はハヤトの機体で逃げる。殺せねえのが癪だが。」

「倒すのは次の楽しみに取っておきましょうよ。」

ああ。と生返事を返しつつ小狼とカインは赤の国をぶらつく。体の弱いが頭の切れるカインと体は強いが考え事が嫌いな小狼。ガンダムに乗って数年。二人は良いコンビだった。

その二人の後方から彰人達が何やらひそひそと話をしている。

（あの二人とは絡まなくて良いのか、隼人？）

2人を囲む護衛達に気を遣い、遠くから3人で相談する。

(嫌いではありませんが、馬が合いませんから。)

隼人はこの時初めて嫌な顔をした。心底、面倒なのだろう。

(でもお前そんなんじゃないや駄目だろ。行っってきたよ。)

(ハヤト様。私からもお願い致します。)

(……分かった。僕も大人になろう。)

彰人とフランに促されるまま、隼人は二人の元へ向かう。あまり気は進まないが、共に戦う仲間なのだからコミュニケーションは取るべきかも知れないと、隼人は律儀に考えているのだろう。

隼人は後方から声をかける。その声に護衛がさつと離れた。ガンダムパイロット同士の会話は認可されているらしい。

「赤国はどうだい？二人とも。この国は紅葉が綺麗なんだ。」

隼人が声をかけると、あからまさまに小狼が警戒する。腰を深く落とし、左手を前に構えて威嚇の態勢を取った。対する隼人も小狼の間合いには近寄らない。腰に携えた大太刀に手をかけて、いつでも抜刀できる体制になっている。

「お前……。」

隼人のその態度を見て、小狼も構える。明らかに敵視している証拠だった。

「あわわ。ハヤトさん。ど、どうも。」

一色触発の2人を前にカインが怯えている。挨拶も震え声だ。

「小狼。」

「何だ。ここでやろうつてののか?」

「違う……その、なんだ。」

刀から手を離し、頭をかきながら困ったように隼人が答える。  
隼人も、小狼との接し方に悩んでいるようだった。

「黒国を倒したら、今度は本気でやりあわないか。お互い全力でさ。」

真剣な眼差しで隼人が答えた。

(そうじゃないだろう隼人!?)

コミュニケーションとは挑発の事ではない。咄嗟に彰人が止めに入るうとするが、対する小狼の答えは意外なものだった。

「ふん……そんな事か。まあいい。」

(乗るのかよ!)

どうもこの世界の人間は、特殊な考えを持つらしい。と彰人は蹠踉めき痛む頭を抑えながら理解した。脳筋の会話は疲れる。と感じてしまうのは、可笑しいだろうか。

「や、やめてくださいいよお。仲良くしましょうよ。」

と、カインが情けない声を漏らした。カインも彰人と同意見の様

だった。

「勿論、カイン少年もだ。」

「ええっ!?!ボクもですか?」

「良かったじゃねえかカイン。お前のガンダムも対空戦にもっと慣れた方が良いいぜ。俺のガンダムみたいにな。」

ガンダムツアーリとは、青国の機体なのだろう。聞き慣れない名前に、彰人は耳を澄ませた。

「うう、そうですけど。ボクのガンダムフルシオンは防御に特化した機体です。」

「また聞き覚えのない名前が聞こえた。フルシオン、とは、白国の機体か。守りに特化した機体とは思えない名前だと彰人は思った。」

「いいから!それに、お前とお前のガンダムが強くなれば、……白国の民も守れるぜ。もつとな。」

小狼は気が乗って来たのか、カインにまくしたてた。どうも、小狼といい、隼人といい、カインには優しい様だ。いい緩衝材になっているのだろう。本人の気苦労は兎も角。彰人は少しばかりカインが可哀想に思えた。

「なら、やります。でもその前に。」

「あの黒のMSは何としても倒す。」

「俺様の国の民を無意味に殺した償いはさせる。」

「ボクたち、この点に関しては同士ですよね?」

「その通りだ。」

「……良かった。ならやっぱりボク達は仲間です!」

「それは違う」

「ええく!!」

(あの三人。ある意味でフランの報告通りだな。)

と、彰人がフランに耳打ちした。

(ええ!ハヤト様の大事な御友人です。)

友人、というニュアンスはやや外れていたような気がしたが、彰人は突っ込まなかった。

(……仲間がいるなら俺も安心だ。)

(ふふ。アキト様は、まるでハヤト様の本当のお兄様の様ですわね。)

後ろ手を組んだままフランが笑顔で問いかける。あの険しかったハヤトが、戦いの中で優しさを塗り固めてしまったハヤトが久々に笑顔を見せたのだ。この1ヶ月の中でフランは、彰人を信頼しつつあった。彰人の事は知らないことも多いが、少なくとも敵では無いだろうと理解していた。

(ああ、近いな。いや、本当に隼人は俺の可愛い弟だよ。)

そういいながら目を細め三人を見守る彰人。その様子は我が事のように嬉しそうに見える。隼人のことを一番に心配していたのは彰人

だったからだ。あの小さかった隼人が大きくなり、仲間もいる。12歳の頃に比べ、隼人も成長したのだなあと改めて感じていた。彰人はフランの目を見つめて答える。淡い翡翠色の瞳が彰人を映す。澄んだ目をしていた。

「フランは俺の義妹だしな！」

フランを見つめたまま、さらりと言い放つ。彰人なりの冗句だった。

「……私は、ハヤト様のことをそのようには見ておりません。」

辿々しい口調でそう言葉を続けるフラン。内心、尊敬はしているし憧れてはいるが、ハヤトの事を好きかどうかと聞かれれば、まだ分かっていなかった。答えられなかった。ただ、ハヤトの瞳に見つめられると、胸の鼓動が高鳴る。それは事実だった。

「本当に好きならさ。」

「はい？」

「好きっていいなよ。生きてるうちにさ……なんてな。」

にかっ。と悪戯っ子の様な笑みを浮かべた顔。その子供っぽい表情にはフランは見覚えがあった。

(なるほど……きつとこの方も、ハヤト様と同じなのですな。)

生きていてくれてありがとう。と強く抱きしめられた時の事を思い出す。あの時のハヤトの熱が、死人同然になっていたフランに再び熱を灯した。彼女だけではない。黒国に滅ぼされかけていたこの国

を持ちなおしたのもハヤトだった。

ムラサメガンダムとハヤトは、この国の象徴なのだ。反抗と希望の象徴。怒りの体現者。それはまさしく、“ガンダム”が人々の希望や夢や理想を体現する兵器としての有り様を示していたのと同じ。それは祈りに近いのだろう。ガンダムという名に込められた、静かな祈り。

---

黒国との再戦は近い。

次回に続く

## 第14話 『旗艦ニュークリアス』

「これはすげえ！」

「小狼さん。はしやぎすぎですよ！気持ちはわかりますけど。」

白の国旗艦 「戦艦ニュークリアス」のブリッジにて、ガンダムパイロット達ははしやいでいた。無理もない。窓の外にはムラサメガンダムの量産改良型 “アキサザメ” が50機 青の国の量産型MS “ナラワシ” 50機 白の国の量産型MS ニベアル50機。計150機が各国の随伴艦に搭載され、更に彰人本人によって改良された各国のガンダムがニュークリアスの格納庫に収まっていた。

ムラサメガンダムは完全修理に加え、ビームサーベルを出力の高いフリーダムのラケルタビームサーベルに変更。

ツアーリガンダムは太陽炉（この世界ではなんと呼ばれていたのかは分からない）を追加でもう一機。

ガンダムファルシオンには脚部にブースターを追加して、更に背面に超大型のランチャーを追加。火力面の底上げを図る。

どれも彰人が持っていたパーツから作スクラッチったものだが、効果はありそうだった。更にガンダムパイロットには内緒で面白い装置も取り付けておいたと彰人は語る。

「あの怪しい兄ちゃんもやるよなあ。まさか俺達のガンダムも改修するとは。」

「信じて良かったですよね。」

と、カイネが満面の笑みを浮かべながら小狼の隣に座る。

「ああ、これを見せられるとな。流石に認めざるを得ねえな。」



ニユークリアス内のシートに座りながら、小狼はカイネの顔を眺めた。

「彰人兄さんはすごいだろう?」

後方から、歩いて来たハヤトが2人に声をかけた。その声には、抑えられない興奮が滲んでいた。ムラサメガンダムにもファンネルミサイルが追加で搭載されていたからだ。その火力の向上は目を見張るものがある。

「すごいです!」

「俺様の機体を弄ると聞いた時はどうかと思ったがな。」

「予想以上だろう?」

「ああ、悪くねえ。」

「ガンダムパイロットの皆様。一度ブリーフィングを行います。席について下さい。」

と、フランの声が通信越しに響いた。

「我々三国同盟はこれより、黒の国のMSの謎を解くべく只今から黒の国に攻め入ります。」

「作戦名は 〃 黒影落とし 〃 我が三国同盟の民を虐殺する黒の国のガンダムの謎を解き、更に黒の国の戦力を叩きます。」

「本作戦が成功の暁には、これまで防戦一方だったこの戦況を変えることが可能です。」

「みなさまガンダムパイロットには、黒の国のガンダムの相手をして頂きます。他の量産型には、こちらの量産型をぶつけ、敵のガンダムタイプを孤立させるのが目的です。無理はなさらぬ様に。」

「ようやく、ぶっ叩けるって訳だな！」

小狼が拳を震わせる。武者震いが止まらないらしい。戦いたくてうずうずしているしているようだ。本当に戦うのが好きらしい。

「あくまで黒のガンダムの分析がメインとはいえ、あえてそれを悟らせないために各国の量産型MSも派遣するとは……。」

ハヤトが腕を組んで考え込んでいる。

MS150機とは思いつつたものだ。本国にまだ100機ばかりMSを置いたとはいえ、このMSが全滅した場合の損害もかなり大きい。リスクの多い作戦だった。

「だからこそです。ボク達が頑張って作戦を成功させましょう。」

「ああ、そうだな。」

「レーダーに感あり！前方に敵MS多数！」

オペレーターの声が響く。どうやら来たようだ。

「おいでなすつたな！」

小狼が臨戦態勢を取ろうとするのを抑える。

「いや、まだだ。量産型の相手は量産型に任せる。僕達は黒の国のガンダムの相手をしないといけない。」

「そうです。消耗は抑えないとですよ！」

「チツ……分かってるさ。」

随伴艦の発艦ラッチからMSが次々と発進していく。量産型といえど、これだけの数があるのだ。部隊展開さえ済んでしまえば、易々と破られない。

発艦したアキサザメが編隊を組んで空を飛ぶ。どうやら最初の部隊がガフランとの戦闘に入ったようだ。爆発音、閃光。発せられる戦闘の音が耳に響く。時折ニュークリアスにも被弾するのか、ブリッジがその度に揺れた。もどかしい時間が流れる。

「我慢だ、我慢。」

小狼が暴発しないよう、隼人と彰人が諫める。小狼の焦りと苛立ちが募るのが傍目から見てもわかった。

「……」

無言で腕を組んだままの小狼。何ともつまらなそうに見える。ニュークリアスが戦場の空をひたすらに進む。もう少しすれば黒の国本国に到着するだろう。

その際も随伴艦から何機もMSが発艦し、艦載機はもはや3分の1までに減っていた。発艦したMSがどうなったのかは、もう確認しようがない。生きていれば帰り際に拾えるだろうが、そうでなければ……。

戦うという道を選んだ以上、しようがないことではあった。これは命のやり取りであり、向こうの遊ガンブラトルびとは違う。

「見えた！黒国本国だ！全員ガンダムに乗れ！」

彰人の号令で3人はガンダムに乗りこむ。

「神取彰人。オルタナガンダム！出るぞ！」

彰人はそう言い放つと、オルタナガンダムで先導を切るように発進する。

「さて、鬼が出るか蛇がでるか……。」

「……どきどき。」

「全員、死ぬなよ！まだ死ぬべき場面じゃない。」

「「おう！」」

力強い言葉の後に各国のガンダムが発艦して行く。オルタナガンダムの後にはムラサメ、ツアーリ、ファルシオンの三機が続々と出る。

「金色のガンダムだど？」

彰人のオルタナガンダムのカラーに驚いたのか、小狼が不思議そうな表情のままモニター越しにオルタナガンダムを眺めた。

「なんでも、あのアキトさんの機体だそうですよ。」

ツアーリガンダムの回線からカイネの声が響く。

「金か！派手だが、良い色だな。悪くねえ。」

小狼は彰人とオルタナガンダムに満足しながら、ツアーリガンダム

のブースターを点火し加速した。黒の国の青く晴れ渡った空を4機のMSが舞う。ニュークリアスは後方で援護射撃を行う。後方からニュークリアスの艦砲射撃が開始され、主砲からビームの火線が空を焼いていく。

数十分後、4機が飛び続けていると、遠方に見覚えのある影が映った。例の黒いガンダムか。その黒い機体は無言のままライフルを片手で構え、同時にこちらへと射撃してきた。当然だが、その様相は明らかに敵対の意思がある。

「各機散開！作戦の目的を忘れるな！」

「了解！」

三機がフォーメーションを組んで黒のガンダムと正対する。ライフルを回避した後、ムラサメガンダムがビームライフルを放ち、次にツアアリガンダムがGNミサイルを放つ。黒のガンダムはミサイルを腕に取り付けられているブレードで一閃。ミサイルを全弾叩き落とした。やはり強い。

しかし三国同盟にも策はあった。相転移粒子を纏ったファルシオンが爆風を縫うかのように突撃。

体当たりで黒の国が持っていたライフルを破壊。そのまま黒のガンダムの後方へ加速する。黒のガンダムもその巨大なブレードを振るうも、三国同盟の機体は上手くそれを回避していく。掠りもしなかった。

(こいつら強いな。流石は歴戦の勇士。)

三国同盟の強さと言うものを改めて感じ取る彰人。あの巨大なブレードには圧倒されたが、あの三人は器用に攻撃を回避していく。

(だがあの8枚羽根が気になるな……？何の能力を持っている？)

「うふ。うふふふふ。強いね。君達は。」

「流石だよお〜ガンダム君達。」

(ツ!?この声は!)

彰人はこの声に聞き覚えがあった。ぞくり、と寒気を覚えた。鼓膜に響く気色悪い声。あの時のあいつだと瞬時に把握する。

「お前っ!お前が何故ここに居るんだ!答えろ!」

彰人の焦りが思わず声となる。何故、向こうの世界の奴がこの世界にいるのか?純粹に疑問が浮かんだ。

「うふふ。彰人君。やっぱり君もこの世界に来てくれたんだね。嬉しいよ。」

三国同盟の機体の攻撃を捌きつつあの男が答える。あの男が喋るたびに苛立ちが募るのが分かる。こいつは、殺さなくては。

「教室に盗聴器を仕掛けたのもお前なのかつ!」

「流石彰人君。勘が鋭いね。そうさ。だけどそれだけじゃない。バトルの最中に感電したろう?ありえないはずの痛みを感じだろう?君もそのムラサメガンダムに乗る子も——僕と同じなのさ。」

「隼人も!?だが何故そんな事をする!何故お前達は虐殺を続けるんだ!」

「僕達が殺しあうことなんてないよ。僕達は同じ瞳を持つ仲間じゃないか。それに、黒国から虐殺の命を受けているのは僕じゃない。」

もつと」

言い終わらないうちに黒の国のガンダムにツアーリガンダムのビームサーベルが突き刺さる。熱が装甲を焼き、コックピットと思われる部分に空洞が空いた。しかしその傷口も瞬時に治っていく。構わず、ツアーリガンダムはそのままビームサーベルで黒の国のガンダムを切り裂く。攻撃が功を成し、黒国のガンダムの身体の一部である先程ライフルを構えていた右手を奪い取る事に成功した。

「作戦目的は達した！小狼!!」

「応よー!」

ツアーリガンダムが右手を放り投げムラサメガンダムに渡す。作戦達成だ。

「ああ、折角彰人君とお話出来たのに、お前ら邪魔するんだ。そうか。死んでくれないかな。」

喜ぶのもつかの間、黒の国のガンダムが背部から信号弾を打ち上げると、たちまち数千はあろうかと言う数のMSが彰人達を囲った。とてもじゃないが、逃げ切れる数ではなかった。

「君達の量産型MS。あれは悪くないけど、僕達黒国の態勢を甘く見ていたね。こちらはガフランならそれこそ10万はだせるよ。で、どうする?続ける?」

(くっ!いくらなんでも数が多過ぎる。これでは強行突破は無理か……?)

画面上に映る機体に押し潰されそうになり、隼人は心の中で悔しがった。

「あわわわわ。まだこんなに数を用意できるなんて。」

一方、カインは戦意喪失しつつあった。

「まだだ！諦めるな！まだこちらは3機。敵が何台居ようが国に帰るんだ！」

隼人が檄を飛ばすも、不可能であることは百も承知だった。

「あくお前らしいよそんなの。無理だろ無理。僕達はそっちの戦艦だって落とすのは容易なんだよ。だからさ。取引しない？」

「お前らを見逃してやる代わりに、彰人君をくれないかな。」

「何だと！」

隼人がいち早く反応する。嫌に決まっていた。兄の様に慕う彰人を売り渡すなんて真似は出来るはずが無かった。その答えすら男は一蹴する。

「ああ、いいからいいからそういうのも。彰人君は傷付けないし。どうせお前らアレだろ？この僕のテンペストを分析しに来たんだろどうせ。やるよ。そんなもん。好きだけ分析しろよ。」

「は？お前えらの大事な機体じゃねえのかよ？」

小狼が訝しむ。当然の反応だった。

「いらんよ。お前らではどうせ解析なんぞ無理だ。それよりどうする？ここで無理にみんな死ぬか。僕の要求を飲むか。答えは一つしか無いと思うけど？」



「隼人、みんな。ここは下がるんだ。俺が何とかする。」

目を瞑り、意を決する彰人。このままでは全滅は避けられない。みんな死ぬ必要はないと判断し、言い放つ。

「彰人さん！駄目ですそんな！」

「いいからいう通りにしろ！みんな死ぬんだぞ！可能性をゼロにするな！」

「彰人さん……」

「こちらは要求を飲む。俺を連れていくいい。」

黒国のガンダムに向かい合い。はつきりと伝える。こちらの完敗だったが、まだ生きていればやり直しがきくと踏んでいた。彼等ならやりとげると確信していた。

「流石彰人君は話がわかるう〜！いや〜感動の嵐だね。仲間のために身を呈するその姿！カッコいいよ！」

その声には明らかに勝ち誇った色を感じ不快だったが、背に腹は変えられない。

「茶化すな。早く連れて行け。」

「彰人君〜。君はやっぱり優しいね。うんいいよ。さあ、オルタナガンダムと一緒においで。僕達の国へ。」

「分かった。だから3人には手を出すな！」

「いいよー!!僕は手を出さない。」

「……………僕は、ね。」

先程までの人を食ったかのような声色では無く、途端に冷たく、人を蔑むかの様な話し方をする。周辺の空気が凍ると同時に、圧倒的な殺意が彼らを覆った。

嫌な予感がしていたのが、的中してしまったと隼人は感じた。

「ほら、そのゴミ共と戦艦はお前達の好きにしろ。全員殺しても構わん。」

先程まで困っていただけのMSの挙動が変わる。敵意を剥き出しにした野獣めいた姿。ガフランの頭部のスリットマスクから覗く眼差しが怪しく光る。同時に、生魂の閃光が隼人達に襲いかかった。

「くそつ。やはり数が多過ぎるツ!ざっと1000体以上はいるぞ。」

「あわわわわ。ボク達もうおしまいですつ!」

「馬鹿ツ!諦めるなツ!」

そうやって話している最中にもガフランから放たれるビームライフルによる閃光が止まない。その度にシールドで受け止めたり、回避するが、全滅は時間の問題だった。

「彰人様ツ!ハヤト様ツ!」

「フランツ!君達だけでも逃げろっ!この数はツ!」

ハヤトが叫ぶ。

「嫌ですッ!!私だけ逃げてそれでどうなるんですかッ!」

ニュークリアスの艦砲射撃で弾幕を張りながら、フランが叫んだ。必死に弾幕を貼り戦艦を守っているが、厳しそうな事は誰の目からも明らかだった。

「フランツ!僕の言うことが聞けないのか!」

逃げて欲しい。そんな思いを口に出せず、強い口調で叫んだ。

「聞けませんッ!!」

「おいっ!お前ら。話を聞け!まだ俺達は死んでねえ。ここは俺が突破口を開いてやる!」

「たった1000体だ!俺達……嫌、俺ならやれる。お前らは邪魔だ!!」

覚悟を決めたのだろうか。大太刀を構えながら、小狼が力強く言い放つ。

そのぶつきらぼうな言いようが彼なりのケジメであることも、隼人は理解していた。

「小狼ッ!君はまさかッ!」

だからこそ彼の意図を汲んだハヤトは驚きの声を上げた。自己犠牲などしない男だと思っていたのに。自分のことしか考えていないと評価していたのに。昨日まで敵だと思っていたのに。隼人の中で、小狼に対する想いが変わっていく。

「うるせえ!!しゃべっている暇はねえぞ!この数、この状況……俺にとっては最高の晴れ舞台だ!思い切りやらせてもらうぜ!!」

「トランザム————起動!!」

叫ぶと同時に、ツアアリガンダムの機体がこれまでに無いくらいに赤く強い光を放つ。トランザム。強力だが、パイロットの消耗や機体のダメージは避けられない。この満身創痍の状態で使用すれば確実に機体が崩壊する諸刃の剣だった。

「はっ!最高の戦場に、華を添えさせてもらうぜ!」

ビームサーベルを構えたツアアリガンダムが空をかける。瞬きの暇もなくガフランを次々に落としていく。正に無敵とも言える程のスピードだが、それは消えかけの蠟燭の火の様にも映った。強力だが、実際はいつまで保つかは誰にも分からない。

「小狼さん!」

「……行くぞカイネ!あいつの覚悟を無駄にするな!逃げるんだ!」

「一度本国に戻る!撤退だ!」

ニユークリアスを守りながら後方へ下がっていく隼人達。そのボロボロの状態で、果たして生き残れるかどうかは分からない。

「うふふ。彰人君の大事な仲間達。生きて帰れるかな〜!」

「お前……!」

「おっと。大人しくしなよ。動いたら、本気であいつら皆殺しにする

よく！これだけ戦力に差があるのにさ、何で僕達が殲滅戦を仕掛けな  
いか分かる？分からないか。」

「お前……まさか、遊んでいるのか？」

「うふふ〜！どうだろうね。」

黒の国のガンダムに牽引されるオルタナガンダム。絶望的な気分  
になりながら、彰人は黒国へと連行されていった。

続く

## 第15話 『君に会うために』

春の暖かな空気が去り、また寒い風が吹き始めた。彰人が眠ってから、もう二週間が過ぎようとしていた。異世界では無い。彰人達が生きる世界での話である。進展しない状況に対し、総一郎は悶々とした毎日を過ごしていた。

(本当に君ってやつは。)

冷たい病室の中で、総一郎はベッドに横たわる彰人の顔を覗き込む。眠ったまま起きない親友を見るのは辛い。桐谷脳外科病院に彰人が運ばれてからは、毎日があつという間に過ぎたように感じた。

彰人は天音隼人と同室のベッドに寝かしている。何故か。それは二人の病例が似ていたからだ。彰人が病室に運ばれた時、文香もその場に居たのだが、現実を受け止められないのか、ただ呆然と立ち尽くしている。運ばれる彰人の顔を眺めるだけだった。その様子は普段の明るい彼女から想像もつかない。何かを諦めたかのような、糸が切れたかのような、悲しい表情を浮かべていたのを覚えている。以来、彼女は学校を休んだままだ。

彰人を最初に発見したのは総一郎と沙雪だった。

あの日、文香と彰人がホテルに入っていったのを見た。あまり想像はしたくなかったが、そういう事なのだろうな。と理解出来た。文香から電話が来た時、総一郎は思わず耳を疑った。

「総一郎君。お願いがあるの。彰人君がね……起きないの。私、どうしたらいいかな。」

病院へ運ぶ際にはなるべく大ごとにならないようにエリックに電話する。彼に頼み込んで車を手配してもらった。その努力の結果、彰人はホテルに行ったという行動を知られず、咎められることなく、こうして桐谷脳外科病院にいる。学校にも上手くエリックと総一郎で

彰人が倒れたと担任の柘先生には伝えた。

だが当人達の心の傷は浅くない。

今にして思えば、あの時点で文香はおかしくなったのかも知れない。彼女は普段はぼんやりしているように見えても頭の回転が速い。そんな彼女が次の行動を考えられないという事に違和感を覚えた。

文香の様子が気になりあの後、何度か彼女の家を訪れた。念の為に沙雪も一緒に連れて行ったが、文香の様子は総一郎達の予想以上になくなかった。いや、寧ろ悪かった。

「私の大事な人は、どうして私の前からいなくなるんだろうね。」

誰に対しても優しく明るかった彼女が、今は暗い部屋に閉じこもっている。その痛ましい姿を見るのは、なまじ普段の彼女を知るだけに辛かった。

沙雪も今はそつとしたほうが良い。とアドバイスをくれたが、そんな事は総一郎も分かりきっていた

次の日の放課後には学校でエリックと会った。彰人の容態をエリックに伝えると、彼は残念だ。とだけ言い残す。案外あっさりとした反応だった事に無性に腹が立ち衝動的にエリックの胸ぐらを掴む。

「何するのサ。やめようよ。総一郎君。」

「……君は。君のその反応は何だ！ガンプラバトルが出来なくなったら彰人はお払い箱か？答えるよ。」

瞬間、世界が裏返る。エリックに投げられたのだ。同時に全身に痛みが走る。鈍く、重い痛みだった。どうやら体を打ち付けたらしい。

「そんな訳ないだろ。馬鹿なのか、君は。」

彼の冷たい言葉が総一郎に突き刺さる。

「今の君は冷静じゃない。頭を冷やすべきだね。……椿、行くうか。」

「……総一郎君。」

「ごめんなさい。という椿の申し訳なきげな言葉が背中に突き刺さる。投げかけられた柔らかい言葉が、返って辛かった。」

（何やってるんだ……僕は。）

悔しい。と痛みが残る中思った。何も出来ないでいる自分自身に腹が立つ。好きだったはずの掛け替えのない風景が変わって行く。

技術情報部も代理で総一郎が部長にはなったものの、あまりやる気が起きず活動らしい活動はしていない。供養祭の後に完成させたHGのペーネロペーだけが部室に虚しく飾られている。

（君の存在は、君自身が思っていたよりもずっとずっと大きいんだよ。）

回想を辞め、ベッドの側で彰人の髪を撫でる。彼の髪とは思えないほどごわごわとしていた。寝たきりにより体が弱り、さらさらとした艶が少しづつ無くなっていくのだ。これからは点滴を始めとした彼の介護もこの病院でしなければならぬ。容態が良くなればいいのだが、隼人の前例があるため楽観は出来なかった。

（僕がやらなきゃいけないのは分かっているんだ。だけど、君が起きない場合の時も考えないといけない僕の気持ち分かる？）

（一緒に卒業するんだろ。卒業しても会うんだろ？約束は守れよな。）



「僕にもやれる事があるはずだ。」

病室の中で考える。元からコミュニケーション能力に自信は無い。だが総一郎は彰人のために出来ることは何でもやりたい。そう決意していた。

幼い頃から病院を継ぐ為に学び続けていた自分。これまでは趣味も無く、友達もいなく、周囲を下に見ることで精神の安定を図っていたが、彰人との出会いが総一郎を変えた。「ガン普拉」という趣味を得る事で彼も趣味を通じて次第に友達が増え、妹の雛美とも話すようになったっていったのだ。

彰人とガン普拉との出会いは今の総一郎を形成する重要な要素であり、総一郎自身もその事は強く自覚していた。

「彰人君。結局僕は何も出来ないかも知れない。君が起きる方法なんて全く想像がつかない。だけどね。」

「僕は、どうしても君を助けたいんだ……。」

ふと、涙が頬をつたい床に落ちる。気づかない内に泣いていた。人の為に泣くのは、母が亡くなって以来だったか。総一郎は涙を腕で拭い、改めて決意を固める。この日から彼の長い戦いが始まった。

（おにいちゃん……。）

そして、その様子を雛美もこっそり見ていた。普段の兄の様子とは違いどこか大人びたような姿に雛美の目には映っていたが、それを総一郎が知ることはない。

手始めに総一郎は似た病例である天音隼人の調査から始めた。だが患者個人のカルテを見るなど、例え院長の息子だとしても許可は降りない。しかし彼は勝手に病院のパソコンから隼人の個人情報を探

べる。重大な違法行為だが、躊躇は無かった。誰にもばれないように調べ続けて数週間。隼人と彰人の症状を調べて分かったことがあった。

まず二人は植物状態と呼ばれる脳死の状態で“無い”こと。脳波が異常数値では無く通常の数値、つまり起きている状態と時々眠りに就いた時の数値を出すこと。時折、「反射」と呼ばれる行動を取ることに。

要約すると、脳死による植物状態では無く脳は生きている。目をつぶったままなのに、脳が起きている状態だということ。こんな病例は総一郎も聞いたことが無かった。

(どういう事なんだ？確実に寝ている状態なのに、脳は起きている。脳波も正常というのはおかしい。現に寝ているのに。)

確信がないが、彰人に近づき耳元で囁く。全く意に介さないが、手を握ると体がピクリと反応を示す。まるで起きているかのように。

(分からない……。)

とにかく何でも良い。今は手がかりが欲しい。文香に倒れる前の様子を訪ねようと思ったが、やめた。友人の初体験を、しかも彼女に言わせる真似はしたく無かったからだ。だから彰人の従兄弟である沙雪からさりげなく聞いてもらうことにした。女同士の方が話しやすいこともあるだろうからと判断したためだ。

更に放課後、技術情報部の部室内を調べる。彰人はあの時体に電流が流れたと言っていた。だから何かヒントになるようなものがあるかも知れない。いや、あつて欲しいと総一郎は願っていた。

部室の中を探すうちに、あるものを見つけた。

“それ”が結果として総一郎の願いを叶えることとなる。

「失礼します。」

「やあ、総一郎君。どうかしたのですか。」

総一郎は担任の柘先生に会うために生徒指導室に足を運んでいた。生徒指導室の中は清潔で、丁寧に書類が並べられている。柘の几帳面な性格が表れていた。

「総一郎君から話があるなんて珍しいですね。ひとまず、そこに座って下さい。」

柘に促され、ソファに腰掛ける。話とは何かと不思議そうにこちらを見る柘。その瞳は生氣に満ちており、

——彰人と“似た”ような意志の強い瞳をしていた。

呼吸を置き冷静になる。少し落ち着いたところで、思い切つて話を切り出した。

「先生。単刀直入に伺います。先生は彰人に何をしたのですか。」

「……うん？話が見えませんか。」

と、柘は目を丸くさせた。

「先生ですよね。技術情報部の部室にカメラや盗聴器を仕掛けたのは。」

すると、途端に柘の雰囲気が変わつたのを総一郎は見逃さなかった。これまでの穏やかな雰囲気から一転、柘は冷たい眼差しを総一郎に向ける。

「ほう？・どうしてそう思ったのですか？」

その射抜くような瞳に怯まずに言葉を続ける。

「技術情報部は本来教室に鍵をかけています。中は高価な機材がありますし、何よりこの総務院高校は不審者の侵入による学校の評判の低下を恐れている。」

「その技術情報部の鍵を管理しているのは部長である彰人と先生の他にはいません。料理同好会も部では無いので、教室の鍵を開けるには先生に許可を得るしか方法はありません。マスターキーもある事はありませんが、これは教頭先生が管理しており更に管理簿冊は校長の管轄にあります。部外者が無断で持ちだすのは難しい。」

総一郎は言葉を途切れさせない。

「続けたまえ。」

「鍵を持っているのは先生です。更に技術情報部が扱う機材は他の高校には無い特殊な機材です。仮に不審者が教室に侵入しても、盗聴器をばれないように教室内に仕掛ける。また機材を弄るには、相応の知識を持つ人間に絞られます。」

「最初は不思議に思いました。何故そもそも先生が教室内に盗聴器を仕掛けるのか。わざわざ電流が流れる様に細工をするのか。ここからが本題です。」

「先生は最初から——彰人が目的だったのでは無いのですか？」

「ふむ。なるほど総一郎君。君の意見は面白いですね。君は医者よりも寧ろ小説家に向いてるようです。」

話をはぐらかそうとする柘。

(これくらいでは駄目だ。もっと確定的な証拠をぶつける必要がある……！)

ここで引き下がれば、彰人はもう戻れない。そんな気がしていた。総一郎は部室内で見つけた“あれ”を使う。

「先生は、昔のオーブンに僅かながら”録音機能”があるのをご存知ですか？いや、知りませんよね。」

「何？」

柘が目を見開く。どうやら食い付いたようだ。

「料理同好会で使用しているオーブンですが、オーブンにはクレーム対策や事故が起きた時に備えて、メーカーが僅かながら録音、録画機能を付けているものもあるんですよ。勿論そんなオーブンなんて今は少ないですし、何よりも数分ぐらいしかデータの保存はききません。」

「しかし、あのオーブンで文香さんはクッキーやお菓子を度々作っていました。料理同好会の他の会員もオーブンを”稼働”させていました。」

「試しにオーブンの中を調べてみると面白い内容が保存されていますね。……聞いてみますか？」

「……君の目的は何ですか？」

柘がやれやれと言わんばかりのジエスチャーをし、

ソファから立ち上がり、窓の外を眺める。

「……やはりですか。ここからは僕の推論なのですが、先生は“この世界”に来てから何年目なのですか？」

「ほお。すごいですね君は。そこまで分かるとは。この世界にも頭の切れる子がいたものです。」

心底驚いた顔をしながら、総一郎の方を向く柊。  
その瞳から目を逸らさず言葉を紡ぐ。

「先生。あなたの目的は僕には分かりません。方法も分かりません。ただ、彰人は返して下さい。それが叶わないのなら、この記録を警察に持ち込みます。教師が盗聴器を仕掛けた。とね。良くある話になりますよ。この世界で職を失うのは先生も避けたいはずですよ。」

「だがそれをすれば彰人君はもう戻れない。永遠に  
ね。それは君も解っているのでしょうか？」

「いえ。その点も解決済みです。貴方のことを良く知っている人が居ますから。先生の事を話したら、昔の事を色々教えて下さいましたよ。」

「……なるほど、神城ですか。あの男とも繋がりがあるとは盲点でしたよ。モデラー同士は気があうと言ったところですか？」

柊は茶化すかのように笑いながら話す。

その挑発的な態度に腹が立つが話すのはやめない。

「……そうです。彰人と僕達がガンプラを好きで無かったら、貴方には確実にたどり着けなかった。一生彰人を探す手段が分からないま

ままでした。」

「陳腐な話ですが、僕らがガンプラを愛していたから、ガンプラを好きな人たちがいたから、真実に近づけたのです。」

「はあ……. . . . . 他にもプラモデルのおもちゃに足をすくわれるとは。やはりモデラーという生き物とは私も縁が深いようです。」

「良いでしょう。正解のご褒美として、総一郎君にはこの世界の真実を教えてあげましょう。」

この世界の真実。と柘は言った。それは薄々総一郎も予想してはいたことだ。しかし流石にそれはあり得ないと、頭から切り捨てた内容だった。

続く

## 第16話 『真実』

「この世界の敵を倒さないと、世界が滅ぶ？」

それはあまりにも支離滅裂な話だった。

黒の国に連行された彰人を待っていたのは、過酷な拷問でも無ければ尋問でも無かった。数日間独房に捕らえられた後、面会として黒の国の男が彰人の独房を訪れた。案内された部屋の中、薄暗くカビ臭い部屋の一室で見知らぬ男と机越しに向かい合う。彰人の目の前にいる男は黒の国の諜報員だという。そしてこの目の前にいる男も、彰人達の現実世界から来たと言った。

「馬鹿馬鹿しい。」

「本当にそう思いますか？」

「当たり前だろ。こんな訳の分からない話……！」

彰人は心の底から馬鹿馬鹿しいと思っていた。どうもこの男の話によれば、この世界には災厄が降り注ぎ、それによってこちらの世界は滅ぶと同時に向こうの世界も同規模の災害によって地球は人が住めない惑星になるといふのだ。

どうにも胡散臭い話だが、目の前のこの男はその説を信じているようだ。

「貴方は何故この世界に来たか分かりますか？」

「勝手に質問を変えるな。突然来たのだから知るわけないだろう。」

「そうですね。では、近しい人を亡くしたり精神的に大きな動揺があった時、何か変わった風景を見ませんでしたか？夢のようである現実があるような光景です。」



「心当たりはあるが、それが何の関係……。」

「結論から申しませう。私や貴方や終様の様に特殊な瞳。見る者によつて様々な世界の色を写す瞳。世界を観測する瞳。」

「仮に”プリズムの瞳”とでも呼びませうか。これを持つものは世界を渡る能力を秘めています。それこそ刻を渡ると言われるガンダムのNTのようにね。」

「——っ?」

「貴方は初代ガンプラバトル大会の優勝者をご存知でしょうか。ビルドストライクガンダムとその機体が纏う青色のプラフスキー粒子を。」

「その人なら名前と機体だけは知ってる。実物のガンプラをプラフスキー粒子で動かしてバトルする旧ガンプラバトル。そのチャンピオンだよな。今みたいなのはGBAとは違う。本当にアナログな頃の。」

「なるほど。ご存知でしたか。ではそのチャンピオンがもしも”異世界の者”だとしたらという説もご存知ですか?」

「そんな訳ないだろ。確か初代チャンプである二人は優勝の後公式のバトルを引退した筈だ。イオリ・セイも純粋な日本人だ。」

「ええ。そうですね。ならばその引退理由として初代チャンプのコンビの一人であるレイジがこの世界に戻ったから。というのは?」

「更にこの世界のMSの基本原理がガンプラをモデルにしていたとしたら。我々の世界のプラフスキー粒子搭載機がこの世界では”ガン

ダム」と呼ばれていたその理由も辻褄が合うとは思いませんか。」

「しかしそれは君の推論でしか無いだろう?」

「証拠ならここにございますよ。」

「これは……まさか!そんな馬鹿な。」

思わず言葉を失う。男がモニターに表示したこの世界の宇宙にある物体。これは彰人やその他大勢のガンダムマニアが良く知っているものだった。

「スペースコロニー……なのか?」

宇宙に浮かぶ筒状のスペースコロニー。本来ガンダムという空想世界に登場するはずの巨大な建造物がそこにはあった。

「ええ。そしてこのコロニーは地球に落ちます。」

「……何故だ。何の必要があつて?いや、そもそもこの世界にコロニーがあるなんて。何処の国にそんな技術があつたんだ。」

「あの日。アリアン国の王子がこの世界に帰還したあの日から、この世界はおかしくなり始めました。」

諜報員の話は支離滅裂な内容だったが、その筋は理路整然りろせいぜんとしていた。

アリアン国の王子が再びガンプラバトルをやりたいと、アリアンを中心としてMSの開発が始まった事。プラモスキー粒子を応用したコロニーを建設し、アリアン国とコロニー内でMSを用いたガンプラバトルを模したバトルイベントが流行った事。当然プラスチックな

んで無いために、この世界ではプラスチックによく似た素材を用いてMSを作った事。王子亡き後そのガンプラバトルに使用されたMSが次第に軍事に用いられた結果、各国が独立を宣言し出した事。数十年に及ぶ戦争の後、MS開発技術は封印されたが黒の国が再びMSを開発し各国を統合しようとした戦争を始めた事。

「戦争というものは、人を歪めます。」

男は淡々とした口調で語る。

「本来、人を楽しませるはずのガンプラやガンプラバトルが時代を経るごとに次第に曲解され、今では人殺しの道具と成り下がっている。」

男は尚も語り続ける。

「ガンプラはそんなことのためにあるんじゃない。」

彰人は男の言葉を遮る。それ以上聞きたくはなかった。父との思い出でもあったガンプラが、この世界では戦争の道具として使用されている事実彰人はショックを隠せない。無邪気にガンプラで遊んでいた隼人が、やむを得ないとしても人を殺してしまった事も彰人の心に深い影を落としていた。

「仮にその話が本当のことだとしよう。だがコロニー落下を仮に阻止したとしても、戦争は終わらないんじゃないのか?」

「終わらないでしょうね。」

男は少しも迷う事なく、はつきりと言い放つ。

「既にこの黒国を始めとして、各国は戦争による憎しみに囚われ始めています。我々の世界でいうところの第一次世界大戦のように。」

「大量殺戮兵器も今はまだ有りませんが、このまま技術が進めば開発に至るのも時間の問題でしょう。」

「詰まるところ、この世界に平和はまだ訪れない。生物兵器、化学兵器、核兵器といった大量殺戮兵器の登場による仮初めの平和を甘受している我々の世界以上にです。」

「そんなの、そんなのは……なら隼人は。」

隼人やフランだけではない。この世界の人間は現実の世界と同じ過ちを繰り返すというのか。また血が流れると言うのか。彰人は憤る。拳を強く握った。溢れ出る怒りを抑えきれない。

「なら、あの男やお前達は何なんだ！こんな世界で満足なのか!?この世界にいたらいつ死ぬかも分からないんだぞ！」

咄嗟に、男の胸ぐらを掴む。理解出来なかった。

「そうですね。確かに、この世界にいたら死ぬのかもしれませんが、強いと言うなら……。」

「……命を奪う時というのは元の世界では得られない快感なんですよ。本当に、本当に充実感がある。」

男は焦点の定まらない虚ろな瞳を浮かべ、更に陶醉した口調で話す。

「元の世界では人を殺したら捕まるでしょう？だが、この世界では英雄です。戦争？平和？それが何になるのでしょうか。僕は僕が幸せならそれで良い。」

気が触れたように話す男の声色には、聞き覚えがあった。かつて彰人が戦ったあの男の声。周囲の者のことなど考えない一方的な声色。

「お前だったのか。あの時のガンプラは……！」

「おや、今更気付いたのですか？ 鈍い人だ……。」

「情報には感謝する。が、やはり俺はお前らの考えは理解できない。お前達は異常だ。」

彰人は男の目を見ながらはつきりと言った。

「貴方が思うよりは健康です。しかし残念です。貴方のような優秀な人材は貴重だったのですが、仕方ありませんね。」

男は腰から銃を抜き彰人に向ける。対する彰人も怒りを抑えられなかった。例え撃たれたとしても、こいつだけは許せなかった。技術や知識があるのにも関わらず、戦争にそれを使う。それは利己主義エゴイズムそのものだ。

彰人が男に飛びかかろうと構えたその時だった。男の後ろの扉が突如破られ、勢い良く飛び込んできた男が手に携えていた大太刀でそのまま流れる様に斬りつける。一瞬の出来事だった。斬りつけられた男の胸からは鮮血が溢れる。

「があっ！ 嘘だ！……ぼ、僕は、僕はこんなところで死ぬ訳がな……。」

男は苦痛に顔を歪めながらも、尚も銃を撃とうとするが、その腕ごと断ち切られた。

「……！！」

なす術なく、男はその場に崩れ落ちる。ピクリとも動かない。出血

多量によるショック死なのかは分からないが、どうやら絶命したよう  
だ。

「危ねえ所だったな。」

大太刀に着いた血を振り払いながら、小狼が淡々とした口調で答え  
た。

「小狼……！お前、生きていたのか！」

「ああ？すつとぼけんなよ。お前だろ。俺の機体<sup>ツァーリ</sup>あんな機能を付けた  
のは。」

ガンダムツァーリ（ツァーリとは皇帝、君主の称号）はダブルオー  
ザンライザーをベースに作られていた。だが、こちらの世界の知識不  
足なのか、オーライザーの脱出機能が正常に機能していなかったた  
め、彰人が手直したのだ。

恐らく、トランザムを使用した後にオーライザーの脱出機能が働い  
たのだろう。

「あーあ。つたく。華々しく散ろうとした矢先に水をさされたぜ。だ  
が感謝する。お前の調整は完璧だった。」

小狼は頭を軽く下げた。彼なりの礼儀なのだろう。

「小狼……その、ありがとうな。」

その様子を見ながら、彰人も礼を述べた。

「へっ！礼を言われるのはここを出てからだな。」

「ああ！」

「ああ、後お前の機体も見つけたぜ。金ピカだから直ぐに分かった。」

「マジで!?!お前すごいな！」

扉を開け、小狼の誘導に従いオルタナガンダムがあるとされる格納庫へと急ぐ。途中何度か襲撃にはあったが、その度に小狼が太刀を振るい敵を薙ぎ払っていく。彰人もあの男の銃を持ってきてはいたが、まだ生身の人を撃つのは抵抗があった。

「ここだ！」

格納庫の中でオルタナガンダムを発見。二人は何度か銃撃を受けるも、無視して走り続ける。オルタナガンダムのコックピットに小狼と乗り込み起動させる。幸いな事に中身は弄られてはいないようだった。

「動かすぞ！」

「行け！アキト！」

オルタナガンダムのフェイスマスクが赤色に輝く。メインスイッチを点火し起動。イーゲルシュテルンで格納庫に穴を開け、強引に脱出した。

金色の獅子が檻から解き放たれ、空を駆ける。小狼が後部に乗っているために、強力なGがかかる可変形態は使えないが、MS形態のままでも飛行に支障はなかった。

改めてオルタナガンダムの素体であるデルタガンダムのポテンシャルの高さを思い知らされる。黒国の城下町が見える。赤国と比べると規模が大きい。街全体には活気があるように見えたが、今はそれどころでは無い。彰人はペダルを踏み込み、オルタナガンダムを加

速させた。目標は赤国だ。しかし突如、視界が黒く染まる。空の彼方から迫る黒の機体。

(やはりそう易々とは逃がしてくれないか。)

彰人は唇を噛んだ。

「小狼。少し揺れるぞ。」

「気にすんな。俺は大丈夫だ。全力で行けよ!!」

黒国の機体——ガンダムテンペストが姿を現した。

「現れたか。黒の機体。」

「駄目じゃ無いかあゝ！僕達の国にいないと！」

「そこをどいてもらうぜ。コロニーを壊しに行かないといけないんだな。」

「うふふ。あいつから話を聞いたんだね。その様子を見るとあいつを殺したんだろ？彰人君が仲間になれば百人力なのになあゝ！」

「俺はお前らに協力する気は無い。例えば目的が一緒だとしてもな。」

「なら、僕達は敵同士だね。……さようなら。彰人君。」

「お前の方こそな。」

殺意と殺意がぶつかり合う。彰人は羽々斬刀とビームサーベルを抜きガンダムテンペストに迫る。ガンダムテンペストも腕の固定型



ブレードを伸ばしオルタナガンダムを叩き斬ろうと腕を振るう。あれだけの質量が直撃すれば即死だろう。だが彰人はあえてブレードをビームサーベルと刀を交差させ受け止める。受け止めると同時にオルタナガンダムのブースターを吹かし剣の勢いを殺す。ブレードの動きが止まった一瞬を見逃さずイーゲルシュテルンでガンダムテンペストを攻撃。傷が入るガンダムテンペスト。しかし傷が瞬時に治っていく。やはり少量の傷では効果は無いようだ。ならばと彰人はブースターを一瞬止め、ブレードを回避。ガンダムテンペストは更にブレードを振り回し続ける。

まさに暴風雨名を冠するに相応しい動きだった。

リーチの長いハイロングブレードが上から下から右から左からと、縦横無尽にオルタナガンダムを狙う。それらの攻撃の軌道を読み器用に回避する彰人。ガンダムテンペストも強力なMSであることは間違いない。だが彰人の駆るオルタナガンダムも異常な動きだった。世界大会出場選手の純粋な操縦技術の前にはガンダムテンペストも捉えきれない。

(こいつ、エリックや父さんに比べたら全く駄目だな。射撃の腕も総一郎には届かない。)

これまでに戦ってきたビルダー達の顔が頭を過る。色々なビルダーがいたが、共通していたのは、ガンダムに対する想いや自身のガンプラに対する愛着だった。彼らに比べれば、目の前に対峙しているこのMSなど対した敵では無い。

(なっ……何故だ。これまでの彰人君の動きじゃ無いよ！)

焦りを覚えつつ攻撃を緩ませない。兎に角オルタナガンダムを近付かせまいとハイロングブレードによる攻撃を続けるガンダムテン

ペスト。だが腕に取り付けたビームマグナムによる射撃も掠りもしない。

男にとつても、オルタナガンダムの動きは未だかつて経験した事がない。ただ速いだけではない。攻撃が当たる前から予想され避けられる。自慢のナノマクロフアージの自己回復によつてオルタナガンダムのイーゲルシュテルンは致命傷にはなつてはいないのが幸いだった。

(でもハイロングブレードが当たりさえすれば君は終わりだ。それに……えいやっ！)

ガンダムテンペストの背部に取り付けた8枚羽を起動させる。その1枚1枚が独立した大型のファンネルから更に小型のファンネルが多数射出される。

8枚羽とは見た目の通りファンネルである。ただしガンダムテンペスト本体とは違い、自己再生機能は無い。大型のマザーファンネルから小型のチルドファンネルを発射する。数百個のファンネルがオルタナガンダムを囲み、ビームを発射する。

(うふふ。これで終わりだよ。彰人君。楽しかったな。)

勝利を確信したが、目の前には信じられない光景が広がっていた。オルタナガンダムが空を舞っている。対ビームコーティングされた機体で被弾を最小限にしているだけでは無い。羽々斬刀やビームサーベルを自由自在に振るいファンネルを次々に落としていく。イーゲルシュテルンでファンネルを落とし、ビームサーベルを投げそこにビームライフルを撃ちビームを拡散させファンネルを多数落とし、ファンネルを鷲掴みにしファンネル同士の同士討ちをさせるなど、ありとあらゆる方法でファンネルを攻略していく。

(ファンネルなんて多数の敵に囲まれているのと一緒にだ。だから集団

戦の戦い方をすればいい。」

彰人は父と遊んでいた時にそう教わったのを覚えていた。ビームコンフューズ、ファンネルジャック、飛び道具によるファンネル狙撃。ガンダム世界のファンネル対策は多種多様だった。

彰人はその一つ一つを丁寧に実行しているに過ぎない。ファンネルの数が何個あるうと関係無い。オルタナガンダムはファンネルを駆逐し終わると、ガンダムテンペストに向き直り更に攻撃を続ける。ガンダムテンペストもハイロングブレードを馬鹿の一つ覚えのように繰り返し振るうが、当たらない。

(こいつ、あれだけの子機に囲まれているのに無駄がねえだ?!)

小狼も振り回されるコックピットの中で見る光景を信じられないでいた。

オルタナガンダムがガンダムテンペストの懐に入りハイロングブレードの根元を切断する。ハイロングブレードが自重を支えきれず、ブレードが千切れ落ちる。オルタナガンダムは咄嗟に背中一刀とサーベルを格納すると千切れ落ちたブレードを両手で掴み思うがままに振るう。横っ面を叩くようにガンダムテンペストの胴体にブレードを力の限り叩き付けた。

殴られたショックによりボロボロになるも、再生機能により再生を始めるガンダムテンペスト。だがブレード部分はその大きさから再生に時間がかかるようだ。オルタナガンダムはその隙を見逃さない。何度も何度もハイロングブレードをガンダムテンペストにぶつける。今までの怒りをぶつけるかのように。

殴られ再生する。殴られ再生する。その繰り返しだ。攻撃の速度は加速度的に増していき、ガンダムテンペストも自慢の再生が追いつかず次第に原形を留めなくなっていく。バラバラの破片があちこちに転がっていく。

「よし。こんなもんでいいかな。」

「なっ……！お、お前、まさか!？」

引きつった顔で小狼が彰人に問う。

「いいパーツが沢山手に入ったぜ。帰るぞ、小狼。」

オルタナガンダムは駄目押しと言わんばかりにガンダムテンペストをとことんまで破壊し尽くすと両腕に破片を拾い集めそのままその場を離れる。

(なるほど……！いつは、キレさせない方がいいな。)

歴戦の勇士の小狼すらも引かせる強さだった。小狼はこの時ハヤトが何故アキトを慕うのか、その理由が理解できた。

原形を留めていないガンダムテンペストのコックピットの中で、男は興奮していた。

(やはり彰人君は強いなあ〜！僕のテンペストがここまでボロボロにされちゃうなんてね！)

衝撃でバラバラになった男の身体が再生していく。砕けた骨が、流れた血が、引き裂かれた四肢が元に戻って行く。

(あのコロニーは、彰人君達に丸投げするでしょう。その後で僕は……うふ、うふふふ。)

赤の国。城内。静まり返る城内で、突如フランから彰人が帰って来たという知らせを聞き、隼人は飛び上がるくらいに驚いたと同時に嬉しがあった。

(彰人さんが帰って来たのか！)

フランに構わず彰人の部屋に走って行く。

「彰人さんつつつ!!帰って来たんですね!ご無事でしたか!!」

部屋に入るなり、隼人が彰人に飛びつく。

「お、おう。……声でかいぞ隼人。今は夜なんだから抑えろ。」

隼人の肩を掴んだ。がっしりとしたその身体に似合わず、隼人の声が震えていた。

「彰人兄さんっ!!無事でよかった!良かったあ……」

その場にへたり込む隼人。後方にいたフランが何事かと血相を変えながら部屋に入る。

「騎士様。もう!時間帯をお考え下さい!城の者達はみんな寝ております!」

彼女は隼人にきつく言い放った。

「あ、ああ。ごめんフラン。よいしょつと。」

その場に立ち上がると、隼人は深呼吸をした。

「彰人さん。すみませんでした。でも、本当に帰って来てくださって嬉しいです。フラン。君も嬉しいだろう?」

「……………は、はい。嬉しいですよ。」

少し、間があった。

「あく〜ごめんなフラン。2人きりの時間をお邪魔しちゃって。」

彰人は両手を前に出しながら、済まなそうに謝る。冗談のつもりなのだろう。

「もう！彰人様はすぐそういう冗談を仰る！」

膨れ面をしながら、フランは彰人に憤った。

「お、お前ら……俺を忘れてねえか？」

部屋の隅にぽつんと取り残されていた小狼が、珍しく抗議の声をあげた。

「あ、何だ小狼も居たのか。お疲れ様。」

よっ！といたげに隼人は小狼に労いの言葉をかけたが、その様子からは全く誠意を感じられない。

「お前！アキトとの温度差激しすぎだろ!?助けたのは俺だぞ?少しは讚えようとか思わねえのか？」

「でも君が生きてたのも彰人兄さんの改修のおかげだよね。」

「それを言われたらそうだけどよ……。」

「俺は小狼が居てくれなかったら死んでた。だからありがとな。小狼。」

「ま、まあアキトが十分強いのは分かったし、俺もこうして帰ってこれたからいいぜ。これで貸し借り無しだな。」

素直に褒められたのが照れ臭いのか、小狼は横目のまま答える。

「本当に助かった。」

「彰人兄さん。生きててくださって良かった……本当に良かった。とりあえず今夜はもう休んでください。」

「隼人もフランも早く休めよ。ふあくあ。眠い。しばし寝る。」

彰人はベッドに横になり始める。

「ハヤト。俺も今夜はここに泊まらせてもらうぜ。そのくらいはいいだろ?」

「ああ小狼。君はその床でゆっくり休んでくれ……いや嘘嘘。そんな顔をするな。ベッドでゆっくり寝てくれ。」

「明日また詳しく話そう。それにフラン。君も今夜は良く頑張ってくれた。休んでくれ。」

「はい。ハヤト様。それでは私はこれで失礼します。」

「フランそこはじゃあ私に頑張ったご褒美を下さいといって爪先立ちになってキスをせが」

「アキト様はおとなしく寝てて下さい!!良いですね。」

「は〜い。」

おやすみくと言いい残り布団を被る。彰人自身、隼人達の前では心配かけまいと気楽に振舞っていたが、内心疲れ果てていた。囚われていた時に隼人達は無事なのか、現実世界はどうなっているのか、そして自分はどうなるのか。そんな不安が押し寄せていたが、こうして無事に帰ってこれたのは僥倖だった。

(母さん、文香、総一郎、エリック。みんな大丈夫なんだろうか？俺の体はどうなっているんだろうか。)

不安に押しつぶされそうになるのを必死で抑える。彰人は心身共に疲労が溜まっているのを感じていた。

第17話に続く



## 第17話 『サイコ・デバイス』

「もう一つの世界……ですか？」

総一郎は柊の話聞き終えると、思わず尋ねた。

そんな事はある得ない。そう頭では判断するものの心の何処かで否定しきれない自分がいた。

彰人や隼人は意識だけが別の次元に行っているのでは無いかと。総一郎は幼い頃に読んだ外国の小説で意識だけが別の宇宙に飛び立ってしまった男の話の思い出していた。だがそんな非現実的な事が実際にあるのかと。その不安を読み取ったのか、柊は総一郎の目を見据えながら静かに語り始めた。

「ええ。もう一つの世界です。私の半身も行っていますよ。君達が遊ぶGBAの様な仮想の現実世界。とでもいいましようか。」

「先生の話は疑わしいのはこの際置いておきます。立証のしようがありませんから。ただそれだと余計に柊先生の目的が分かりません。何故彰人をその別世界に連れて行ったのですか？」

「ふむ。では説明しましょう。総一郎君はノストラダムスの大予言をご存知ですか？」

「1999年から2000年にかけて世界が滅ぶといわれたあの俗説ですよ。勿論知っています。オカルトは嫌いではありませんでしたから。」

「その俗説が実は現実起こっていたとしたら君は信じますか？この世界の崩壊を防ぐ為に戦った者達が居たとしたら。」

「ははは。先生。それこそ先生こそ小説家に向いていますよ。あり得ない。」

柊の話に思わず苦笑する。ノストラダムスは実際にいた人物だが、まさか異世界などは。かのイエス・キリストが実はニュータイプだったと言われるような物だ。そうした荒唐無稽な話が好きな者なら食いついただろうが、残念ながら総一郎はそういった話は信じない男だった。

「不思議ですね。ではそのあり得ないとする根拠はあるのですか？いや、ではここからは私の想像だと思って聞いて下さい。」

結論から言えば、柊の話は面白かった。と総一郎は考えていた。

柊の両親はノストラダムスの予言を防ぐ為に闘い命を落とした事。ノストラダムスの予言に登場する大魔王の正体とは巨大な隕石であつた事。その隕石が地球に降り注いだ場合人類は滅亡する事。先生はその予言を防ぐ為に――異世界。柊の故郷にこちらの世界の人間を送り込んでいた事。

その目的は隕石……コロニー落下の阻止。あちらの世界とこちらの世界はリンクしており、向こうの世界が滅ぶ⇨こちらの世界の滅亡である事。

支離滅裂。架空の小説としては割と面白い話ではあるなと総一郎は思った。思うと同時に――事実なのでは無いか。という気持ちの心の片隅をよぎる。事実、彰人がまだ眠ったままのに加え、柊先生は先生が本来知るはずの無い天音隼人を知っていた事。そして彼が今も眠りについていた事を言いあてた。

(偶然にしても、出来過ぎている?)

別れる前、柊先生は最後にこういった。

「僕は両親が命をかけて守ったこの世界を守りたいんです。彰人君もー彼なら無事に戻りますよ。ああそれと。」

もし君が僕の話を通じてくれるのなら、ここの会社を試しに訪れて下さい。と紙を渡された。その紙にはプラフスキー粒子技術を独占する企業であるイルミナカンパニーの住所が書かれていた。

「イルミナカンパニーか……。」

確か彰人の父親が働いていた会社だ。この企業の名前を知っていること、先生の紹介として入れる事もこの事実を裏付けるには十分なのかも知れなかった。

プラフスキー粒子。ガンプラを動かす粒子。彰人は幼少の頃からビルダーとしてもガンプラバトルにしても強かった。実はそれには理由があつた。

彰人はプラフスキー粒子の流れを直感的に読むことが出来る。

総一郎も組んでいて度々驚かされた事がある。彰人があそこから敵が来ると言うのと、本当に敵が現れるのだ。無論マップには何も表示されていないにも関わらずだ。総一郎はただ弾き金を引くだけで良かった。ミラージコロイドで隠れ、敵が来たら強襲する。トラップをしかける。その戦術は面白い様に当たった。彰人が自覚していたのかはわからないが、彼が強い理由はそこにあると総一郎は予想していた。

(まあ、行くだけならタダだしね。企業見学として行くなら不審に思われないだろう。)

終先生との話が終わった週末。総一郎はイルミナカンパニーを訪れていた。

都内某所にあるためわざわざ上越新幹線を使い新潟から東京都内

に来た。

(これで収穫無しだったら笑えるな。)

山手線を降りイルミナカンパニーに辿り着く。イルミナカンパニーは流石に大企業だけあってか会社も立派だった。総一郎にとってはその立派さが大人の象徴の様に思えた。やや緊張しながらイルミナカンパニー内に入る。

受付で柘の紹介で企業見学に来たと伝えると、受付係はにこやかな笑顔を浮かべながら総一郎を別室へ案内した。案内された部屋の中は明るく清潔に掃除されており、まるでG B Aの中の一流の部屋の様  
に思えた。

(いや、今はゲームの話は無し無し。)

ソファに腰掛け担当の人間が来るのを待つ。数分後、爽やかな男が部屋に入ってきた。年代は神城や柘と同じくらいだろうか。黒髪にブラウンの瞳。身長は総一郎よりもやや高い。紺色のスーツに赤いネクタイが様になっていた。

「総一郎君。待たせて申し訳無い。担当の榊原海斗(さかきばらかいと)と申します。柘先生の紹介という事で来たんだよね。遠い所から来ていただき、誠にありがとうございます。」

丁寧なお辞儀をされ、ついっつられて礼をする。こういう時に備えてのマナーを幼少時から仕込まれていたのは幸いだった。必要以上に物怖じすることがない。

「初めまして。僕は桐谷総一郎と申します。総務院高校から参りました。本日はどうかよろしくお願い致します。」

「硬い挨拶はいいから。でも柗先生から聞いた通りの礼儀正しい子の様で安心したよ。下手な社会人よりも礼儀はなっているね。」

「いえ、お褒めに預かり光栄です。本日は社会見学として伺いました。」

「ああ。聞いているよ。でも君の目的はざり別の所にあるんじゃないかな？」

「ご存知でしたか。実は。」

「異世界ね。あれ、実際にあるから。」

「……それは、冗談ではなく」

「そう。本当の話。ただね。行く方法が分からないんだよねー。たはは。」

頭をかきながらそう答える榊原は嘘や冗談をついている様には見えなかった。

「僕の友達が、その世界に行っているかも知れないんです。もしも情報があるなら、どうか教えてはいただけませんか？」

「うん。いいよ。ここじゃないんだから、研究室に行こうか。」

そういつて榊原は総一郎を案内する。2人は長い廊下を歩いて他の棟に行き、突き当たりにある階段を降りていく。長い階段を降りた後に部屋につくと、そこはまさに総一郎がイメージした通りの研究室がそこにはあった。

「っ、これはすごい！」

「すごいだろう？真面目に異世界に行こうとする暇人達の集まりだけどねー。でも能力は保証するよ。」

「で、僕達が開発したシステムがこれ。名付けて  
Psychoid device!カッコいいでしょ。」

「これは何なのですか？」

「ん。かいつまんでいうと、大量のプラフスキー粒子をこのデバイス上に集積して適正のある人を繋ぐと、その人の意識だけが別世界に行けるとい装置さ。」

「ただ適正のある人がいないんだな。たはは。昔は神取主任という立派な人がいてね。その人が行ってたんだけど。」

「僕も、試してもいいですか？」

「いいよ。その為に君をここに連れてきたんだからさ。ささ、被りなよ。」

榊原に促され、総一郎はサイコデバイスを被る。だが。

「反応しない……？」

装置は全くといっていいほど反応しなかった。

「たはは。やはりそう簡単にはいかないか。気を落とすちや駄目さ。  
総一郎君。」

「もう一度お願いします！」

何度もサイコデバイスを起動させるが、やはり異世界には行けそうにない。残念なことに、総一郎に適性がないのは誰がみても明らかだった。

「何でだよ。・・・彼が苦しんでいるかも知れないのに。」

悔しさのあまり拳を握る。ここに手がかりがあるのに、何も出来ない自分に腹が立つ。

「総一郎君。こればかりはしようがないさ。君のせいじゃない。」

「んんんでもやっぱり、適正のある人を見つける必要があるよね。総一郎は何か心当たりはない？」

「心当たりなんて・・・あ！」

「お、あるのかい!?あるだけでも良い事さ。」

「榊原さん!僕にこの装置を貸していただけませんか！」

「んん本当は駄目なんだけど、柊先生の紹介だし、君も悪いことしそうには見えないし。いいよ。」

「ありがとうございます!!」

「ただ、流石に今すぐというわけには行かないから、君の住所に送つてもいいかな。二週間くらいかかるけど、その間君にはその適性があると思われる人を説得してもらおうとして、さ。」

「本当にありがとうございます！」

「若者の人を助けたいという思いは好きだよ。」

榊原と別れた後総一郎はとんぼ返りで新潟に戻り、ある場所へと走る。彰人と同じ瞳を持つ人物といえば、柘先生以外に1人だけ心当たりがあった。

その人物の元へと総一郎は走る。この時間ならまだ居るはずだ。総一郎はタクシーを使い、電車を使い、十和田神社へと走る。

「沙雪！沙雪！！」

彰人の従兄弟であり、同じ瞳をもつ女の子。  
彼女ならばもしかしたら。

「む。どうしたのだ。まさか私に会いたくなつたのか？」

沙雪は力強く腕を組んだまま総一郎を見つめる。

総一郎は事前のポイントも無しに突然会いたいとメールをしたのだが、沙雪は特別嫌な顔はしていない。

「そうーそうなんだよー僕は君に会いたくてここまで来たんだ！」

「そ、そうなのか。気持ちはありがたいがとりあえず落ち着いてくれないか。」

興奮した様子で沙雪の肩を掴み、ぶんぶんと揺らした。

「ごめん。つい。」

調子に乗りすぎたかと総一郎は肩から手を離し、



こほんと咳払いをした。

「どうやら並々ならない事情があるようだな。中で詳しく話を聞こう。」

沙雪に促され部屋の中に入る。彼女に茶を入れてもらうのももどかしい。総一郎は部屋に入るとすぐに沙雪に理由を話した。最初の頃は話を聞いてくれてはいたが、次第に彼女の表情が曇っていく。

「総一郎……君は大丈夫か。疲れているのか？」

話を終えた後、沙雪はかなり心配そうな表情を浮かべながら総一郎を眺めた。明らかに不審者を見るような目つきが彼の繊細な心をえぐる。

（しまった。沙雪はガンプラを仕事として知ってはいても詳しくは知らないんだった！）

相当焦っているのか、そんな簡単な事にすら頭が回らない。

「沙雪、あり得ない話なのは分かる。君に本当の事を話さない事も出来たけど、僕はそれをしたくない。」

「その装置が来たら試しに付けてみてくれないか。」

「……いや、君の話を疑うわけじゃない。ただ理解が追いつかないのだ。この世界以外に別世界があるなどは。」

「沙雪！君の瞳を見せてくれ！」

「な、何をする……んんっ！」

総一郎は沙雪の両肩を強く掴み強引に彼女の瞳を見つめる。やはり、沙雪は彰人と同じ瞳をしていた。あの初詣の時に見た瞳だ。透き通った光を放つ美しい瞳。

(僕の予想が正しければ沙雪は向こうの世界に行けるんだ。沙雪なら彰人に会えるはずなんだ。)

薄氷の様に薄い根拠だが、確信めいた何かがある。総一郎にはあった。ただし見つめられる方の沙雪は心中穏やかでは無かった。

あの時一線を超えかけた男がまたもや自分のもとを訪れこうして部屋の中で自分を見つめている。意識しないはずがなかった。むしろ彰人の話は全くの出鱈目で自分をこうするのが目的だったので無いかと疑うには充分だった。

沙雪の肩を掴む総一郎の力は強く振りほどけない。もしも彼が“本気”であればこのまま押し倒されたとしても抵抗は難しい、幼馴染とはいえ、一度自分に対して欲情した男を部屋に入れた自分にも落ち度はある。

(もしここで総一郎が私のことをどうにかしたとしても、彼を責めるのは筋違いかも知れないな……。)

思考は冷静だった。沙雪はある意味では覚悟を決めていた。ただしその覚悟は全くの勘違いで終わったのだが。

あの後、結局総一郎は何もせず帰った。本当に何もせずに。総一郎が去り一人部屋に取り残される中、沙雪は安堵したと同時にどこか物足りなさを感じていた。無論、彼自身に沙雪を襲う度胸も甲斐性もないことは分かり切ってはいたのだが。

(女の部屋に押しかけて何もしないのか。あいつは。)

彼らしいといえれば彼らしいが、それでも心の何処かでは進展を望んでいた自分がいた事に苦笑する。

(全く、彰人が床に伏せてからあいつはどこかおかしい。)

さっきの態度といい、突然別世界に行つて欲しいなどと沙雪に理解出来ないことを話し出す。

(一体どうしたというのだ。全く。それにしても……別の世界か。その話が本当なら彰人はそこにいるのか。)

はあ。とため息をつき布団に横になる。

まだ神社の仕事は残っていたが、総一郎の相手をして疲れたいた。

(今日はもう休んで、仕事は明日にするか。)

色々と不満はあつたのだが、今は忘れることに決めた。精神的な疲労から来る疲れで頭が回らない。

その一方で、総一郎は久々にぐつぐつと眠れていた。榊原という男から聞いた異世界という話には当初驚いたものの、彰人や隼人の件で目処が立ったのは本当に幸いだつた。

(早くあの装置が来るといいな。)

そんな事を考えながら総一郎は眠りに落ちていく。

第18話に続く

## 第18話 『君の横顔』

「来た！サイコデバイス!!」

届け物の包み紙を外し、総一郎は喜びの声を出した。銀色に鈍く輝くサイコデバイス。目の前のそれは彼にとって希望の象徴に思えた。

(後は、これを沙雪に付けて貰えば。)

“彰人に会える”かも知れない。

その一点の希望が総一郎を駆り立てる。彼はポケットから携帯電話を取り出すと、珍しく微笑を浮かべながらメールの文面を打った。

“この間の話だけど、今日行っても良い?”

沸き立つ思いを抑えきれずそのまま沙雪にメールを送る。すると、意外にも直ぐに返事が来た。

“構わない。”

たった一文のみのなんと簡素なものだったが、それが尚更沙雪らしかった。

(…よし!)

手応えを感じ、携帯を握り締めながら静かにガッツポーズ。今の彼の心の中は高揚感で満ちていた。

「お兄ちゃん?何してるの。」

いつの間にか、部屋のドアを開けたのだろう。雛美が不思議そうな表情を浮かべている。ガッツポーズを取ったままの兄の姿。彼女が

向ける眼差しはまさしく不審者を見る目である。その視線にたじろぎながらも、総一郎は兄の威厳を保つべく動いた。

「うわっ！なんだ雛美か。部屋に入るときはノックしないと駄目だよ。」

「ごめんなさい。でもお兄ちゃんの楽しそうな声が出たからつい。」

「そうか。なら許そう。」

「やった！……で、何してたの？」

「ああ、これはね。」

総一郎は雛美に事の経緯を説明した。勿論、ある程度脚色を加えた上ではあったが。

「ふうん。彰人さんの手がかりなんだ。」

何も知らない者からすれば実に怪しい説明だった。しかし雛美は納得してくれたようだった。彼女は鈍く輝くサイコデバイスを手に取り、不思議そうに眺めている。

「そう。この装置が何かしらの手がかりになるかも知れないんだ。だから調べる必要がある。」

「そうなんだね。彰人さん。まだ寝てるけどどうする？お兄ちゃん顔見に行く？」

「いや、いい。僕はこれから出かけるから、留守は頼んだぞ。」

「はい。行ってらっしゃい。暖かくなつたつて言うけど、今日はまだ寒いから気をつけてねー。」

「ありがとう。それじゃあ行くよ。」

鞆にサイコデバイスを入れ、神社へと向かう。護国神社の境内には雪がうっすらと積もっており、そのせいか空気が澄んでいる。冬の神社らしい荘厳な雰囲気醸し出していた。この神社を継ぐ神田沙雪。彼女が彰人と同じ瞳を持っていたのは本当に幸いな事なのだと、総一郎は改めて嬉しく思った。

「沙雪、入るよ。」

一言断りを入れた後、総一郎は境内の扉を静かに開け中へ入る。中は静かで物音一つしない。総一郎は事前にこの時間に神社を訪れると沙雪に伝えていた。だから誰もいない、というのはいささかおかしい話だった。

「沙雪ー？いるのかい。」

改めて声を掛けてみるも、返事は返ってこない。

(何処に行ったんだ?)

不審に思い、もう少し部屋の奥へと踏み入る。もしや不法侵入になるかと不安が脳裏をよぎるが、彰人の件で来た以上是が非でも沙雪に会わないと行けない。総一郎は沙雪が仕事の際に仮眠部屋として使っている部屋の前へ足を運び、ドアの前で立ち止まると、念の為にとんとんとノックをする。返事は無い。

「沙雪……中にいるのか?」

襖を開け、部屋の中に入る。部屋の中は一見誰もいないように見えたが、奥に人影が見えた。

(沙雪?)

何か様子がおかしい。慎重に近づく。恐る恐る近づいて目を凝らしてみると、沙雪が畳の上に倒れるように体を横たえていた。

「沙雪! どうしたんだ!？」

そう様子に異様な物を感じ取り思わず駆け寄る。倒れている沙雪に近づき額に手を当てた。

(……なんて熱だ。)

額が燃える様に熱い。沙雪が体調を崩している事は火を見るより明らかだった。

「……………総一郎なのか?」

「ああ! 僕だよ。沙雪! 何でこんなに熱が!」

「実は最近、体の調子が良くなかった……だが、君の話を通りたくは無かった。彰人の……手がかりなんだろう?」

総一郎の持つ鞆を指差してまた力なく倒れる。慌ててその身体を支える。とても軽い。幾らなんでも軽すぎる。無理をしていたというのがはつきりと分かった。

(どうしてこんなに調子が悪いのに、断って休めばいい筈なのに。ど

うして。)

「馬鹿！とにかく休め！今運ぶから！」

「……ああ、済まない。」

沙雪の身体を運び布団に寝かせる。すぐに押入れを開け、氷枕と熱冷まし用の手拭いを用意し彼女の額に当てた。

「ほら、無理するな。……少しは楽になった？」

「あ、ああ。すまないな。来てもらったのに。」

布団から上目遣いで恥ずかしそうにする沙雪を見ると、その艶かしさに胸が高鳴るのを感じた。不謹慎だと視線を逸らし動揺を悟られないように、彼女に不安がられないように努める。

「いいさ。後お腹空いてる？喉乾いてない？……いいや何か買ってくるから！沙雪は寝てなよ。」

「いや……こ、ここにいて、欲しい。」

「えっ？」

「……一人は心細い。」

(そ、そんなに弱った身体で言われたら駄目だ。)

総一郎の心のダムが決壊した瞬間だった。気の強い沙雪が弱った姿を見て、気の優しい総一郎は断ることなんて出来なかった。そのまま畳の上に座り沙雪の様子を見る。



「心細いんじや、僕がそばにいてあげないとね。」

“一人は寂しい”というのは、総一郎が誰よりも一番理解していたことでもあった。だからこそ彼は沙雪の側にいようと決めた。

「……済まない。」

「だから謝るなよ。幼馴染なんだから。」

「……幼馴染。だからなのか？」

「え？」

「いや、何でも無い。」

そう言い残すと、沙雪は疲れたのか布団を被り直しすうすうと寝息を立てる。だいぶ辛かったのだろう。

(幼馴染だからかって?)

総一郎はその言葉に疑問を持った。あの気の強い沙雪が、誰よりも男らしかった沙雪が自分に対して弱みを見せてくれていたのは、一人の男として嬉しかった。

——幼馴染。という言葉を口にした時に一瞬切なそうな表情を浮かべたのが気になる。

(そんな。まさか、沙雪も僕のことを?)

思わず赤面する。自分の思い上がりでなければ、沙雪と自分とは、

一瞬考えてやめた。今それを意識するのはあまりにも心臓に悪すぎたからだ。

(僕の片想いだと思っていたのに。)

改めて総一郎は沙雪の顔を眺める。熱のせいだろうが、赤い顔で時折はあはあと辛そうに呼吸する沙雪を見ると、助けたいと思う反面……色っぽいと思ってしまう。沙雪の雪のように白い肌に対し紅潮した頬。抵抗する力無く横たわる身体。

(……って、何を考えているんだ僕は！)

自分を叱りつける。不謹慎だ。と思うものの、身体の芯から熱が沸き立つのは抑えようがなかった。

両手で頬を叩き、そんな邪な考えを持つ弱い自分を無理矢理にでも抑える。

「やっぱりお粥作ってくるよ。大丈夫。直ぐに戻る。だからゆっくり寝てて。」

「君の好きな梅干しを刻んで入れたお粥だから、楽しみに待ってるんだよ。」

沙雪には聞こえていないだろうが、一言そう言い残し総一郎は部屋を出た。あのまま部屋にいたら自分自身が持ちそうに無い。総一郎は台所へと向かった。

総一郎が台所に行ってから数時間後、沙雪は目を覚ました。

(あいつは何処へ行った?)

きよろきよろと辺りを見渡すが、姿が見えない。

頭を上げ時計を見る。時間は15時を過ぎようとしていた。

(随分長い間眠っていたのだな。私は。)

総一郎が部屋に入る。

「沙雪、起きたんだね。ご飯食べる?」

「何から何まで……本当にすまないな。」

「いいよ。今お粥を持ってくるから。」

総一郎は両手で鍋を持ち部屋に入ってくる。

温め直したのだろう。お粥からは梅の良い香りが漂い、沙雪の食欲を刺激した。思わずぐう、とお腹がなる。彼が鍋を置きレンゲを沙雪に渡す。

「ほら、食べられそう?味には自信があるんだけど。」

「ああ。とても美味しそうだ。」

湯気が濛々とたつ総一郎が作ってくれたお粥。それをレンゲで掬い一口食べる。

(これは美味しい。)

お粥は梅干しの塩味が効いており、更に刻んだ香草が香りを引き立てていた。身体が暖まる。

「ありがとう。とても美味しい。」

思わず笑みが零れた。こんなに美味しいおかゆを食べるのはいつ以来だろうか。

「ふふっ。それなら良かった。これでまずいつ！と言われてたら僕はシヨックで寝込んだじゃうよ。」

「……私は、そんなこと言わない。」

「……知ってる。」

総一郎が優しいげな眼差しで沙雪を見つめる。

中性的で整った顔。しかし子供の頃の思い出とは違い、大人びた男の顔をしている彼の顔。

「……君は綺麗だな。」

沙雪が総一郎の艶やかな髪に触れる。柔らかい髪感触が手のひらに伝わる。

彼女に触れられると、くすぐったく感じた。

「えっ？」

総一郎は突然の沙雪の行動に驚き固まる。彼の白い肌が赤く染まるのを、沙雪は見逃さない。彼の表情の変化には慣れていた。慣れていたからこそ、からかうのが面白いし、彼の男らしからぬ所が堪らなく可愛く思える時もある。

「優しいし、こんなに美味しいお粥も作れる。髪だつてさらさらだ。女が放っておかないのではないか？」

「ぜんぜん。クラスの女の子達はみんな彰人やエリックしか見てないよ。僕、あまり背が高くないから。」

そう言つて沙雪から離れようとする彼の手を沙雪は掴む。

総一郎は驚いた。病人のはずなのに、なんと強い力なのだろうと。

「そんなことは無い。君はいい男だ。」

ぐつと力強く手を掴んだまま、総一郎の目を真つ直ぐ見つめながら静かに言い放つ。きらりとした輝きを放つ瞳から目が離せない。総一郎はまたも戸惑つた表情を一瞬見せたが、すぐに優しい微笑みを浮かべた。

「ありがとう……沙雪。その。」

少しだけ間があつた後、一瞬迷つた表情を浮かべたまま、総一郎は沙雪の頬に軽いキスをした。驚きのあまり固まる沙雪を前に彼はなおも言葉が続ける。

「……好きだよ。」

一瞬。部屋の中に静かな沈黙が流れる。

「……総一郎。」

今度は沙雪が驚く番だった。同時にまた彼の顔が近づき、沙雪の唇に柔い感触が触れる。恋人同士がするような、深く、熱い、情熱的な口付け。

——初めてのキスは梅の香りがした。

貪る様に、決して離さないかの様に、総一郎が沙雪を抱きしめた。何度も、何度も、逃がさないと言わんばかりに唇を重ねる。

時が止まったかのような錯覚を覚えるほどの長い時間から覚め、互いの唇を離す。ほお、と惚ける二人。二人の入り混じった唾液の糸がつう……と垂れた。

「ば、ばか。風邪がうつるぞ。君らしくもない……。」

興奮冷めやらぬ様子ではあったが、恥ずかしいのか、沙雪が真っ赤になった顔を背けた。対する総一郎も自分からあんな事をしておいで顔が赤い。互いに赤面する2人。また沈黙が流れる中、不意に総一郎が口を開く。

「……他人に移したほうが、治りが早い。それに君が治らないと彰人を助ける事は出来ない。」

ぽつりぽつりと話す総一郎だが、それが照れ隠しのための理由であると沙雪は見抜いていた。

「嘘だな。君は、顔にでるタイプだからな。」

「うん。だから両方。君も、彰人も、どっちも大事だから。」

「……総一郎。君が彰人を助けたいのは分かる。」

「ありがとう……彰人はね、僕の大事な親友なんだ。本当は僕が今すぐにも行きたい。だけどそれは叶わない。自分の無力さを痛感させられるようでもどかしいんだ。」

「それは……君が前に話したあの時のようにか。」

「ああ。そうだ。きつと同じ、なんだ。」

「僕はもう、誰かを失うのは嫌なんだ。1人になるのが耐えられないんだ。」

「嫌なんだって、はつきりと分かった。僕がこれまで人を遠ざけていたのは、また離れるのが怖かったからなんだって。」

そう言っつて総一郎は沙雪の細い体を強く抱きしめる。ああ、君の体は冷たいな。とぼんやりとした頭で沙雪は考えていた。こうして抱き合うことで、触れ合うことで分かる。昔の細かった頃より筋肉がつき、がっしりとした彼の身体。それは何よりも時の流れを感じさせた。

——総一郎はもう、守られる対象じゃ無い。

「……私は決めたぞ。」

彼の腕に抱かれたまま、沙雪が答える。

「私は完治したら彰人を助けに行く。必ずな。君にもう誰かを失わせたりはしない。」

きっぱりと言い放つ。頭はまだ痛むが、なんて事は無い。一日休めばなんとかなるだろうと考えていた。

(……今は総一郎の助けにならなければ。)

沙雪は決意を新たにした。サイコデバイスが何なのかはまだ分からないし、総一郎の話も完全に信用は出来なかったが、それでも彼女は総一郎の事を信じようと思った。

「はは、それは頼も……し……いや。」

だが、当の総一郎の声が弱々しく途切れていく。  
その急な様子の変化に戸惑う。一体どうしたのだろうか。

「総一郎！どうした!？」

「あー……ごめん。僕にもうつつたみたい。風邪。」

「……！とにかくこれを使え!」

沙雪は自分の頭にあったタオルを水に浸し冷やした後、総一郎の額にぴたりと着ける。

「ありがとう。あ、これ冷んやりして気持ちいい。」

「はあ。本当に君は、こういう大事な時にはてんで駄目だな。」

「でも元はと言えば君の風邪が。」

「うるさい。人に恥ずかしい思いをさせたお返した。」

そういつてまた彼の唇にお返しとばかりに唇を重ねる。何度も何度も繰り返し続ける。

「今日は泊まっていけ。その身体で新潟の冬の夜を歩くのは無謀だ。」

「ん。分かった。」

「……だけど沙雪、へんなこと、しないでね。」

冗談めいたように笑うが、沙雪はその冗談をある意味で一蹴した。



「分かった。だが……風邪が治ったら嫌という程してやる。覚悟しておけ。」

「……え？」

自分で言ったにも関わらず、総一郎は驚愕の表情を浮かべる。余程恥ずかしいのか、耳まで真っ赤に染めていた。

「何だ？君の方から襲っておいて、今更尻込みするのか。」

「……はい。」

「良い返事だ。」

沙雪はまた笑う。先程とは違い、気の強い女の顔をして。総一郎が今後一生沙雪の尻に敷かれ続けることが確定した瞬間だった。沙雪はもう一枚布団を敷き、そこに総一郎を寝かせる。自分の布団を合わせて二人一緒に横になる。丁度、向かい合わせになる形だ。

「とりあえず今夜はもう寝るぞ。明日熱が下がっていたら、そのサイコなんたらを付ける。良いな？」

「……ありがとう、沙雪。」

「気にするな。その、総一郎。」

「君の人嫌いが治ってくれて、私は嬉しい。」

「……うん。僕も意外だった。」

「おやすみ、総一郎。」

「おやすみ、沙雪。」

電灯を消し、暗闇の中で二人は一緒に寝る。幼馴染じゃない。もつと進展した関係として。総一郎は熱の残る朦朧とした意識の中、母や沙雪の事を考えながら眠りについた。

(な、何してるのお兄ちゃん達は。)

雛美が両手を口に当て絶句する。夕方、沙雪から総一郎は今夜神社に泊まるとメールで知らされ気になった雛美は神社を訪れた。挨拶をしようと思いい神社の中に入る。見るとひとつだけ開け放たれた部屋の中に兄の姿が見えた。そこで帰ればよかったものの、好奇心に負けた雛美はつい部屋を覗いてしまった。二人で布団に入り眠る総一郎と沙雪。その様子は幼馴染の関係には到底見えない。間違いなく男と女の関係にしか見えなかった。雛美は思わず感涙に咽びながら心の中で讚える。

(お兄ちゃん……童貞卒業おめでとぅ!!)

あの人嫌いで童貞道真つしぐらだった兄が女性とこういう関係になったのが素直に嬉しかった。童貞卒業、というのは盛大な勘違いだったのだが、あながち間違いではなない。明日は赤飯を炊こう。と思いつながら雛美は神社から立ち去る。まだ暗い冬の夜だった。

一方その頃、赤の国城内。

「ぶえつくしよっい!!」

「うわ彰人様汚ないっ!!城を汚染しないで下さい!!」

壮大なくしやみをした彰人をフランが諫める。

フランも彰人にいじられ過ぎたのか、こうして時々彰人の行動に対

して良い反応を見せる時がある。

「なんか嫌な予感がするんだよなあ。」

鼻をすすりながら彰人が答える。その予感間違いでは無かった。

第19話に続く

## 第19話 『最後のピース』

——赤の国 城内。

薄暗い城の中、陽の光だけが部屋の中を煌々と照らす。時刻は15時をまわっているだろうか。フランが木製のテーブルの上に地図を広げ、部屋に集まる各国のパイロットの目を見据えながら口を開いた。

「作戦を説明します。」

フランのよく通る声が室内に響いた。コロニー落下阻止のプランを各国家のガンダムパイロットに説明する。

「コロニーの落下を阻止するため、可変機構を持つオルタナガンダムとムラサメガンダムを宇宙に打ち上げます。」

「まず始めに、この赤の国において宇宙への打ち上げは未だかつて前例がありません。」

「……だからこそやるしか無い。あのコロニーが落ちればアリアンも他の国も全滅は避けられない。必ず、必ず成功させよう。」

彰人がみんなを鼓舞する。その様子を見て隼人は満足げに目を細めた後、フランが更に説明する。

「宇宙への打ち上げには可変形態に固定したアキサザメをムラサメガンダム、オルタナガンダムの後部ブースターに接続、白の国にあるとされるマスドライバーと呼ばれる施設を使い、成層圏まで打ち上げた後に切り離します。」

「ムラサメガンダム、オルタナガンダム両機は宇宙に向かいコロニーの支柱を切り離す、若しくは姿勢制御の点火ブースターを起動させコロニーの軌道を変更させて下さい。」

「俺たちは何すればいいんだ？」

小狼が口を挟む。疑問に思うのも当然だろう。大破したツアールやカイネのファルシオンでは宇宙には行けない。何故この場に呼ばれたのか、小狼もカイネも不思議そうにアキトを見つめた。

「君たちは、俺達が宇宙に行っている間は黒の国を押さえておいて欲しいんだ。既に敵のパイロット一人は小狼が倒したが、ガンダムテンペストのパイロットは生きている。自己再生能力があるからだ。」

「やっぱりあの男は生きているのか。面倒な奴だぜ。」

小狼がやれやれ、と呆れたように答え、カイネもどこか腑に落ちないような表情を浮かべていた。腕を組み、考えこんでいる。

「アキトさんのオルタナガンダムやボクスのファルシオンの相転移粒子の突撃でも倒しきれないなんて……。」

カイネの独り言を補足するかのよう彰人が説明する。

「良いニュースとしてガンダムテンペストの解析が完了した。この国の技術者達によってな。奴の再生能力はナノマシンによるものだ。このナノマシンによる再生能力は脅威だが完璧じゃ無い。」

「何故なら、ガンダムテンペストは外側の装甲や武装は再生出来るが、中の機械部分は再生が効かない。単純な構造の弾や質量剣は再生出来る一方で、複雑な機構を持つ装備はナノマクロファージと呼ばれるナノマシンの改良型でも対応しきれない。」

彰人が復帰した事により、ガンダムテンペストの解析が完了したこ

とは、コロニー落下阻止に向けて大きな足がかりとなった。壊れても再生するナノマシン機能。これをオルタナガンダム、ムラサメガンダムの可変部分の素材に組み込む事により少々の破損でも可変機構を失わずに済む。

仮にコロニー落下阻止に成功したとしても、可変機構が無ければ大気圏突入は出来ないからだ。MS形態でも不可能では無いのだが、空力加熱による破損のリスクが大きすぎる。

「つまり、中の機械部分の修理や交換が終わるまでは戦線に復帰出来ない。宇宙に行っている間は攻撃しては来れないだろうが、部品が治ったら妨害してくる可能性が高い。」

「だからカイネや小狼は、普段どおりでいい。黒の国からこの国や自分達の国を守ってほしい。小狼にはガンダムテンペストから入手した素材を元に新しいMSを用意した。——これだ。」

彰人は窓から場外に見える滑走路を指差す。そこには、黒と金色を基調としたカラーリングのMSが立っていた。両手には大振りの黒色に輝く太刀を持ち、いかにも接近戦用。といった風貌だった。

「こいつは？」

「こいつは、ガンダムモナク（モナクとは君主の意味）だ。テンペストと同じく再生機能はある。大太刀だけだがな。」

「大太刀だけかよ……。」

「不満か？」

「いや、十分だ。」

「なら良かった。モナクとファルシオンが要になる。頼んだぞ。」

「はい！アキトさん、ハヤトさんも頑張ってください！」

カインが明るい顔で答える。こういう素直なところもアキトやハヤトは嫌いではなかった。彼の様子に場の空気を和ませる男が白の国の王子で無ければ、この三国同盟は険悪になっていただろう。

「ああ、カインも元気だな。大丈夫、俺達なら直ぐに戻る。」

「はいー。」

カインが威勢良く返事をする。どうやらやる気は十分の様だった。

「ではこれで説明を終わります。ガンダムパイロットの皆様には軽食を用意してありますので、慎ましくはありますが、御歓談下さい。」

はきはきとフランが淀みなく答える。彼女にしては珍しく少しだけ、頬が緩んでいた。何故ならこの軽食はこっそり彰人と隼人が作ったものだったからだ。異世界という事実は伏せたが、別の大陸の料理としてフランには説明をしていた。

フランは当初懐疑的ではあったが、料理を一口食べた途端にその態度は崩れた。美味しいです。と本当に喜んだ表情には彰人も隼人も作ってよかった。そう感慨深く思ったものだった。

作戦の説明が終わり、和やかな雰囲気は城内に流れる。宇宙へ行く前のささやかな楽しみだった。

「小狼、これ美味しいぞ。食うか？」

彰人が皿に乗った天ぷらを差し出す。魚は新鮮だが、衣はいまいちだった。

「いらん。飯よりも俺は早くあのMSを見たい。駄目か？」

小狼は食べ物には全く目もくれず、ちらりとガンダムモナクを盗み見る。その様子は新兵器が待ち遠しい男の子の態度そのものだった。その子供っぽい様子に彰人は思わず笑みをこぼす。

「何がおかしい。」

「いや、小狼らしいと思ってな。」

「馬鹿にしてんのか？」

「違う。嬉しいんだよ。こっちにもモビルスーツ馬鹿がいてさ。向こうにもお前そっくりな顔で、モビルスーツが好きな奴がいるのさ。」

小狼の背中をバンバンと叩く。彼とはあのテンペストとの戦い以降、打ち解けることが出来たのだ。小狼も彰人の強さを認めていた。だからこうして軽口がたたける。それは素直に嬉しいことだった。

「やっぱ馬鹿にしてんじゃねえか。」

そう言い返す小狼の顔も柔らかい。昔の彼ならば、突つかかるだろうが、それをしない。認め合った男同士の友情がそこにはあった。

「む？なんだここは？……ここが異世界？というものなのか。」

彰人と小狼がじやれていたその時、突如女性の声が赤の国の城内に響く。声の方を見る二人。きよろきよろと辺りを見渡すその女性は彰人がよく知る人物の姿だった。彰人は一瞬目を疑う。ありえない。何故？そんな疑問ばかりが彼の頭をよぎる。



その疑問が思考に留まらず、つい声に出てしまう。

「は？・沙雪？」

「ん、どうした？……!!!」

突然の来訪者を受け入れられない彰人と、沙雪の姿を見て立ち尽くす小狼。彼の端正な顔が赤く染まる。

「おおく！彰人！彰人じゃないか。本当に居たんだな！」

沙雪がにこやかな笑顔で手を振りながらこちらに駆け寄って来た。しかもこの世界では見慣れない着物姿だ。呆気に取られた彰人が対応する暇も無く小狼が彰人の横を駆ける。彼はそのまま脱兎の如く沙雪の前に近づくと傅き言い放った。

「……惚れた。結婚してくれ。」

「はあ!？」

小狼に傅かれた沙雪が驚きのあまり呆然と立ち尽くす。一方その頃、フランは隼人が作ったたこ焼きを私のですから！私のですから！と主張し、誰にも渡さず頬張っていた。しかし小狼の光景を見て不覚にも吹き出してしまふ。床に飛び散るたこ焼き。その様子を見て食べ物で粗末にされたと感じた隼人が静かに怒りを込めながらフランに近づいた。

「フラン。行儀が悪いのは良くないね。どうしたのかな？……な、ななな。あの方はまさか。いや嘘だ。」

フランに注意しようとした所だったその時、突如現れた沙雪の姿を

見て固まる。彼にとって沙雪は近所の怖いお姉さんの存在であり、彰人が一緒でなければあまり積極的に関わりを持ちたく無い女性だった。しかし当の沙雪本人はそんな彼らの思惑を知ってから知らずか自己紹介を始める。

「彰人に他の皆さん。はじめまして。私は十和田沙雪。護国神社の一人娘で訳あってここに来た。よろしく頼む。」

「神社？」

小狼が疑問を口に出す。普段飄々と人の意見を流す彼が他人に対して質問するという行為は珍しいことだった。

「神を祀る宗教施設だ。私は……そうだな。巫女のようなものだ。」

（おいおい、何が巫女だよ。お前は鬼女だろ。）

心の中でそう呟くも決して顔には出さない。気の強い彼女にそんな野暮な突っ込みを入れるのは自殺行為に等しいと彰人は考えていたからだ。

彰人は幼い頃の思い出を回想する。

新潟には「はんごろし」という餅がある。これは良くついた餅。という意味である。ちなみに中に餡が詰まった餅を「みなごろし」という。

彰人は幼少の頃沙雪と喧嘩した際、沙雪が怒りの表情を浮かべたま糶刀を持ち。「これではんごろしにするか……」と、呟いていたの思い出した。あの頃は何かあると良くはんごろしにされそうになったものだ。

「巫女……その、なんだ、つまり伴侶はいないのか？」

小狼が尚も引き下がらず沙雪に質問する。

「ああ。今はな。だが、近い奴はいるぞ。」

沙雪は言い終えると小狼に顔を向けて笑う。彼女なりにさり気なく釘を刺したのだが、小狼は気にしていない様子だった。

「良い女に男がいるのは当たり前だ。それを踏まえた上で俺と結婚してほしい。約束する。俺は全世界を敵に回しても君を守ると誓おう。」

そう宣言すると小狼は沙雪の手の甲に軽いキスをする。みんなにも見せたことの無い態度で沙雪に迫る小狼。ギャップのありすぎる光景に彰人達は吹き出しそうになるが、彼は心底真面目なのだ。仮にも一国の王子なのだ。こうした口説き文句は意外にも様になっていた。それがかえって面白いのだが。

(ふむ。どうしたものかな。あいつには無い強引なアプローチだが……。)

沙雪は一瞬腕を組み考え込む。小狼の見た目は彼女にとっては好ましいが、獲物を狙うかの様なその肉食獣めいた瞳は好きになれそうに無かった。

「申し訳ないが、やはり私は君の申し出を断るよ。」

沙雪は小狼の顔を見ながらきっぱりと答える。

「なら、ここに居る間だけは好きでいても良いか？」

小狼が尚も真面目な顔で食い下がる。その真剣な眼差しは沙雪を

一瞬だけどきりとさせた。が、先日の総一郎の顔と唇の感触を思い出して冷静になると沙雪は小狼の威圧的な態度に屈せずに言葉を絞り出した。

「構わないが、私の気持ちは変わらないぞ。」

その言葉には多少の毒があったものの、どうやら小狼は納得してくれた様だった。

—— 赤国 城内 夜

宇宙への旅立ち前の懇談会が終わり時刻は夜になっていた。赤の国は気候上強く冷え込むことは無いが、それでも時々はこうして冷たい風が吹く。

そんな冷たい風が吹く夜のバルコニーで隼人とフランの二人は一緒に歩いていた。

「最近夜風が気持ちようございますね。ハヤト様。」

フランが風に靡く髪に触れながら、隼人に問いかける。

「ああ、そうだな。」

彼女の言葉に答えるも隼人は心中穏やかでは無かった。

(元の世界か……姉さんは、どうしてるのだろうか。)

姉の文香の事を思い出す。優しかった姉。いつも自分の事を第一に考えてくれた家族。あの柔らかな笑顔が隼人は今更になって恋しくなった。

沙雪がこちらの世界に来たことにより、サイコデバイスの話を聞いた隼人。この世界と元の世界を仮に行き来出来るのなら。

「ハヤト様?どうかされましたか?顔が暗いですが。」

「フラン。話を覚えてなんだが……君はこの世界が好きか？」

隼人が真面目な表情でフランに問いかける。

仮に元の世界に戻れるのなら、帰れる方法があるのなら、せめてフランだけは隼人がいたあの世界で生きていて欲しいと隼人は願った。いつ命を落とすか分からないこの世界よりも平和な日本で生きていて欲しい。そう考えていた。言葉については隼人が日本語を彼女に教えていた。生活するだけなら問題は無いはずだ。

「随分と突然な質問ですね。そうですね……私は好きですよ。」

歩みを止め、フランが考えている。隼人の質問に多少面食らった様だったが、気を取り直してゆっくりと答えた。思慮深い彼女なりの意見だった。

「もしもの話なんだが、仮にこの世界よりも平和で技術も進んでいて人々が安心して暮らしている世界があったとしたら……君はそこに行きたいか？」

「それは、ハヤト様の元の世界の話でしょうか？」

「……!?まさか、君は。」

仮定の話を見透かされたかのように返答されたので思わず驚く隼人。

「ふふ。冗談ですよ。でも時々ハヤト様もアキト様も、まるで別の世界から来たかのような話をされますから。あの女性の方も、ハヤト様がいた大陸から来られたのですよね。本当に愉快な方。」

まさか、あの青の国の王子が求婚するなんて。一言付け加えながらフランは楽しそうに答える。隼人が久しぶりに見るフランの笑顔

だった。

彰人が来て戦力的に余裕が生まれてからというもの、時々フランがこうした顔を見せてくれるのは良い傾向だった。

「でも、そうですわね。仮にその世界があつたとしても、私はこの世界が嫌いになれません。」

「……だって、ハヤト様が守って来られた世界ですから。」

そう言つてフランは隼人に近付くとそのまま体を優しく抱き締める。フランの柔らかい体と、健康的な女性の香りが隼人の鼻をくすぐった。

隼人は嬉しかった。彼女の笑顔を見ていると、自分の今日までの頑張りが無駄では無かつたと思えた。その笑顔を見た瞬間、彼の決意は固まる。迷う余地など無かつた。

微笑みを浮かべ、フランに優しく語りかける。

「君のおかげで、覚悟が固まつたよ。」

隼人は覚悟を決めた男の表情をしていた。

この世界で生きると決意をした以上、出来る事をやるしかないのだ。彼がこの世界ではじめてしまったことは、彼自身の手で終わらせなければならぬ。

「ふふ。久しぶりに、笑ってくださいましたね。……ハヤト様には笑顔が一番似合います。」

隼人の瞳を見つめながら答えるフランの表情は柔らかい。それは従者という関係や、恋人という関係を超えた繋がりがあつた。4年。敵を殺し、仲間が殺され、戦争という命のやり取りを潜り抜けた隼人

とフランだからこそ築けた関係だった。

(隼人も大人になったか……!)

(あの少年が、あんなに精悍な男になるとはな。男子三日会わざれば刮目して見よ、だな。)

城の壁に隠れる様に彰人と沙雪がバルコニーにいる二人の逢瀬を覗き見る。決して盗み聞きをしようとしたのでは無い。彰人と沙雪が小狼のアップローチをのりくらりと躲しながら歩いている時にたまたま二人の逢瀬を見てしまった。そんな時に言葉をかけるほど沙雪は野暮では無かったし、また彰人も隼人が女の子と一緒にいる時どんな話をするのか気になったのだ。

……この時の彰人と沙雪の表情はそっくりだった。

流石、従兄弟同士と言えただけはある。

赤の国の夜は長い。明日宇宙へと旅立つ隼人にとっては決戦前夜だ。無事に帰って来られる保証もコロニーを破壊できる確証も無い。しかしこの国に来てから、隼人とフランの関係を見続けていた彰人にとっては彼らの間に「そういう事」が起こると期待していた。実際には純粋な二人の間に進展は見られない。

勿体無いな。と思いつつも彰人は向こうの世界にいる文香と総一郎、エリック達の事を思い出していた。この世界のコロニーが落ちれば技術情報部のみんなや地球の人にも影響が出るかも知れない。

(必ず、必ずあのコロニーを壊す。絶対に。)

彰人もこの世界における自分の役割というものを自覚しはじめていた。

第20話に続く

## 第20話 「青空の彼方」

「あれがマスドライバーか……随分と大きいな。」

彰人達の目の前に荒野が広がる。

マスドライバーと呼ばれる宇宙へと向かうための施設を眺めながら、彰人はオルタナガンダム（ハミングバード形態）のコックピットの中で呟いた。

沙雪が持ってきたペーネロペーとその余剰パーツで組み立てられた追加装備は、オルタナガンダムとムラサメガンダムに宇宙へと旅立つための翼を授けた。

ハミングバードとはガンダムセンチネルに登場するMS「Zプラス」に追加装備を施した機体である。

本来は武装の追加と機動力の向上を図られた機体だが、その過剰とも呼べるブースターとスラスターの追加は、宇宙に打ち上げるには最適の装備といえた。白い翼を持つ3機が大陸の空を駆ける。

赤の国を出発してから数時間。白の国へ向けて3機のMSが発進した。オルタナガンダム、ムラサメガンダム、ペーネロペーの各機はマスドライバーを目標とし青空の中を飛び続ける。

「はい。かつてガンプラバトルが行われていた頃に宇宙へとガンプラを飛ばすために作られたそうですよ。」

彰人と同じくハミングバード形態になったムラサメガンダムに乗る隼人が答える。その口振りは軽い。宇宙へと向かうのが楽しみなのだそうだ。

「この国の技術力も侮れないな。」

「はい。もう少しで白国に着きます。既にカイネを通して話をつけて



ありますから、このまま離陸しましょう。」

「それにしても……。」

彰人はちらと視線を移す。2機に随伴するかのように横にいる白鳥の様に白く美しい機体、ペーネロペーを見る。気にするのはその機体では無い。問題はパイロットの方だ。

「何だ？私がいるのが不満か？」

その視線を感じたのか、沙雪が不満の声を漏らした。

「いや、まさかペーネロペーが付いて来るなんてな。そのペーネロペーはまさか……。」

「そのまさかの総一郎が作った機体だ。性能は十分だろう。私にはガンプラバトルの経験は無いが、任せておけ。」

沙雪は何時ものような自信のある口調で答える。

恐らくコックピットの中では腕を組んでいるに違いない。と彰人は思った。

「本当に大丈夫なのか？今ならまだ……。」

「くどい。どの道、敵が来ないとも限らない。味方の量産機とこのペーネロペーで、君達の機体を宇宙に上げる手伝いをしなければならぬだろう？。」

「ありがとうございます。沙雪さん。」

隼人が沙雪に礼を述べる。こういう年上に対する敬意を彼は持ち

合わせていた。

(なんだ、隼人の奴、沙雪とも普通に話せるようになったか。……少し見ない間に、大人になりやがってまったく。)

彰人が心の中で感心する。幼い頃の隼人はもっと大人しい少年だったのだが、四年という歳月は少年を大人にするのには充分な時間だった。苦手だった沙雪とも臆する事なく会話が出来ている。

「ほら、予想通り敵がいたようだ。君達は任務に集中しろ。」

見ると、白の国の国境周辺ではガフランと白の国の量産型MSであるニベアルが戦闘を行っていた。マンロディを白く塗装した外見のニベアル。

ナノラミネート装甲を持ちビームに耐性があるニベアルは、黒の国のガフランと良い勝負をしていたビームが主武装のガフランではニベアルを撃ち抜かず、ニベアルも両腕に装備したサブマシンガンではガフランに有効打を与えられない。そこへ揉み合いになった両機の間隙を縫うかのように沙雪のペーネロペーがファンネルミサイルを放つ。

機体各所から射出されたファンネルミサイルが滑らかな軌道を描きガフランを墮としていく。

優秀なビルダーである総一郎作のペーネロペーと、バトルのセンスがある(と思われる)沙雪の組み合わせは中々に相性が良かった。

「頼んだぞ。沙雪。」

「お願いします。どうか御武運を。」

オルタナガンダムとムラサメガンダムの両機はマスドライバーへと進路を向け加速する。

ハミングバードの両脚にはアキサザメが追加ブースターとして備え付けられ、暴力的なまでの航行速度に至っている。この二機に追いつける機体はこの世界にはないだろう。数十分の後、両機はマスドライバーへと辿り着いた。

「よし！マスドライバーに到着！離陸準備だ。隼人！」

「はい！ムラサメガンダム、オルタナガンダム！マスドライバー接続完了！行きます！」

マスドライバーへと到着した両機は減速したのち、カタパルトへ着地すると同時に宇宙へ向けカタパルトが唸りを上げ両機を宇宙へと打ち上げる。

打ち上げられた両機は更にブースターを吹かす。地球の重力を振り切らんと加速する両機。もはや目で追う事すら難しい速度だった。

「コロニーは任せたぞ。二人とも！」

宇宙へ向け離陸した2機を横目で見ながら、沙雪はマスドライバーへと向かう敵機に向けて続けざまにファンネルミサイルを発射した。

射程範囲内にいる迂闊なガフランを次々と火球に変えていく。サイコミュ対策のないこの大陸のMSでは、ペーネロペーの相手は不可能だと言えた。

一方その頃、地球の重力を振り切り成層圏を抜け、惑星の重力から解放されると共に二人の目の前に真っ暗な宇宙が映る。――光、音、空気といった生命が生きる要素は無く全てを飲み込む暗黒が辺り一面に広がる。

「太陽の方は見るなよ。隼人！目がやられるぞ。」

「分かりました。」

念の為、太陽の方は向かない。失明の可能性があるからだ。宇宙は2人にとつては生まれて初めての世界だが不思議と恐怖はなかった。2人の背後には惑星が見える。青く美しい星。その星は地球によく似ていた。宇宙から地上を眺めると、隼人達の住む大陸がとても小さく見える。

「これが僕のいた世界……！」

隼人が感嘆の声をあげた。この世界の宇宙空間はGBAでの仮想空間である宇宙ステーションとは大きく勝手が違う。

機体各所に備え付けられた姿勢制御用スラスタターがオートで作動したおかげで2人は宇宙という海原で溺れずに済んだ。そんな中、彰人はオルタナガンダムのモニターを確認する。

モニターを覆い尽くすほどの巨大な反応。

——目標のコロニーが表示されていた。

(壊せるのか？こんな大きなものを……いや、弱気になるな。やるしか無いんだ。これを壊して、僕はみんなの所に帰るんだ。)

隼人は圧倒されていた。本来は人が何千万と暮らせるはずのコロニー。これを破壊しないといけないのだ。方法はあるとしても、実行可能なか不安がよぎる。失敗すれば確実に大勢の命が失われるだろうという責任が2人の背中へのしかかる。

「隼人！時間が惜しい！やるぞ！」

「はい！彰人さん！」

2機がコロニーに侵入せんと接近する最中、突如MSが姿を現した。急停止する2機。恐らくはコロニー内部に潜んでいたのだろう。

ハミングバード形態の2機とほぼ同速で近づく機体。機体が近づくとはつきりとそのシルエツトが露わになる。ストライクフリーダムをベースにしたカスタム機。彰人はこの機体に見覚えがあった。

「この機体は……まさか!？」

忘れてたくても忘れられない。彰人の脳裏にべったりとこびり付く苦い思い出の象徴。世界大会優勝者の使用した機体――Hi―Sガンダム（ハイエスガンダム）

ストライクフリーダムにッガンダムを彷彿とさせる白と黒の配色を施したモノトーンカラーの機体が目の前に立っている。

その佇まいには強者の余裕があるが、傲慢さは感じられなかった。純粹に強さを求めた機体。無駄を削ぎ落とし、勝利という唯一の目的のために研ぎ澄まされた美しい機体。

「世界チャンピオン！未来さんなのか!？」

驚く彰人だが無理も無い。世界大会優勝者は大会の後、意識不明となった筈だ。

（……意識不明？まさか、そんなまさか。）

「久しぶりだね。準優勝君。」

オルタナガンダムのコックピット内に聞き覚えのある声が響く。思わずビクリと身構える彰人。

そんな彼の様子を知ってから知らずか、世界チャンピオン――遠野未来は彰人へ言葉を投げかけた。

第21話へ続く

## 第21話 『得た者、失った者』

「未来さん……！」

思考がまとまらず、思わず口走る。遠野未来。ガン普拉バトル世界大会優勝者にして伝説とも呼ばれたビルダー。天から二物の才能を与えられた男と評された。その名の通り、「未来を創る男」としてガンプラの世界に彼ありと言われる優秀な人物だった。ある日彼はイルミナカンパニーで行われた実験の際、突如意識を失ったとマスコミに報道されてからは姿を現さなかった。

「まさか……貴方までここに来ていたなんて。いや、頭の片隅では想像はしていました。」

冷や汗をかきながらも彰人は目を瞑った。薄々、彼が予想していた通りだった。ガン普拉バトルの後、突然意識を失った男。隼人や彰人と同じ経緯を辿った未来。そんな彰人の思いとは裏腹に、彼の疑問に答えるかのように未来は口を開いた。

「そうだよ。久しぶりだね。数年振りかな？大きくなった……。少し声も低くなつたね、彰人君。」

遠野はまるで数年ぶりに会う家族へ語りかけるかのように優しい声で話しかけて来た。この人を包み込むかのような穏やかな雰囲気、幼い頃の彰人は憧れ、父と同じ様に信頼を抱いた。

「……俺の質問に答えてください。貴方がここにいる。それはつまり、貴方は俺の……。いや、隼人達の敵なんですネ。」

黒いガフラン。異世界から来たと揶揄されるモデラー達。そして

黒国のあの男。未来がこの世界にいるという確信に至るには充分と言えよう。

考えたくは無かった最悪のシナリオ。そうであつては欲しく無いという期待を込め、彰人は言葉を発する。

「察しが良くなつたね。いい傾向だな。やはり君も——アリスタの適正を持つ者として適応しつつある様だ。」

見る者によつて様々な光を写す瞳。世界を渡る瞳。異世界に至る“アリスタ”をその瞳に宿す者達の総称。それこそがプリズムの瞳。それは彰人だけでなく、未来も持っていた。

「……未来さん、聞かせてください。貴方はあのコロニーをどうするつもりですか？」

「もちろん落とすよ。」

未来はコロニーの方を向きながらさも当然の事のように冷たく言い放つ。彰人にはドラグーンの銃口を向けたまま。その行動には明確な否定の意思が表れていた。

「何故……ですか。」

彰人は言葉を失う。この先の展開を想像したくは無かつた。ぎゅつと操縦桿を握つたまま、未来を静かに見つめ答えを待つ。

「……見たまえ、あの世界の大陸を。此方の世界と彼方の世界は繋がっている。という事は、君達が居た大陸は？あの世界で国が点在出来るほどの広い大陸を持つ大陸は我々の世界ではどこにあると思う？」

「アフリカ大陸？いや、違う。ユーラシア大陸ですね。」

そう苦々しく呟く彰人の言葉に隼人がハッと気づく。その答えに満足すると、未来は尚も説明を続けた。

「そうだ。そしてこのコロニーはユーラシア大陸に落とす。コロニーの進路は既に定めておいた。中国にロシア、更に北朝鮮が国を構えるあの大陸にね。」

「まさか……。」

隼人が言葉を失う。恐らく想像がついたのだろう。

彰人は隼人を尻目に言葉を続けた。

「貴方はこのコロニーを落とす事で間接的に彼方の世界のユーラシア大陸に損害を与えるつもりなのですね。……此方の世界のコロニーは向こうでは隕石、人工衛星？とにかく理由は何でもいい。ユーラシア大陸に何かが起こる。そこに”ある国に打撃が与えられる何か”が。」

「ご名答。あのコロニーは我々日本人にとっては有益なんだよ。かつてのノストラダムスの大預言と呼ばれる事象がこの世界で実際にあったようにね。残念ながら前回は失敗に終わったが、今回はどうだ。何処の国にも責任を問われる事なく、ただ日本の敵対国が損害を受ける。素晴らしいと思わないか？」

やや芝居がかった様子で未来が語りかける。その自信に満ち溢れた態度は、今の彰人には不快に思えた。思ったからこそ、言葉を未来に返す。

「……違います！それは……そんなことは……素晴らしいもなんともない！貴方は大事な事を見落としている！」



「見落としたって？なら、君の考えを聞かせてもらおうか。」

そういうと、Hi-Sガンダムは動きを一旦止める。その意外な行動に一瞬彰人は戸惑ったが、ふと思いついた。懐かしい光景が頭をよぎる。未来は人の考えに耳を傾けられる人だった。昔からそうだった。未来のその態度に彰人は幼い頃、未来と遊んでいた時を思い出した。

「未来お兄ちゃん。お父さん。これは何？」

御台場にあるガンダムベースの展示場の中で、幼い頃の彰人がショーケースに華々しく飾られたプラモデルを指差した。瞳はらんと光り輝いている。

「彰人君。これはね、ガンダムというおもちゃだよ。……カッコいいだろう？」

学生服を着た高校生くらいの男、遠野未来が棚に飾らせたガンダムを手に取り、彰人にほらと手渡す。

「うん。とってもカッコいいです！」

ガンプラを受け取ると、目をキラキラと輝かせながら答える。どうやら気に入った様だ。その様子を見て少しだけ未来は微笑ましそうに笑った。

「はは、彰人もガンダムが好きになったのか。全く、男はみんな単純だなあ。」

長身の男が嬉しそうに目を細める。白衣を着た男の名は神取貴明。

彰人の父親だった。彰人と同じく赤色調の瞳をしている。貴明はよいしよと彰人を持ち上げると、多数のガンプラが飾られている棚を見せる。

「それで、彰人はどのガンプラが好きなんだ？」

数百体はあるだろうか。ガンダムにザクといったオーソドックスな機体に加えて、MSVなどの各作品のMSも展示されている。大人でもこの中から一つを選ぶのは難しいと思えたが、意外にも彰人はすぐに一体のMSを指差し、これが好きだと言う。

(まさかデルタガンダムとは。)

未来が値段を見るや否や腕を組み、うーんと頭を抱えた。デルタガンダムはHGの中でも良いお値段をするのだ。

「金色の機体が好きなんだな！父さんも好きだぞこの機体！変形するしなー！」

「うん！飛行機の時もかつこいいよ！」

彰人が食いつく様にデルタガンダムを眺めている。本当に好きになったんだなあ。と未来の顔に改めて笑みが浮かんだ。

「貴明さん。これ、買いましょうか僕。」

未来が財布を見ながら貴明に耳打ちする。

「ん？いやいや！息子の分は俺が買う！未来君は……。」

「いや、息子さんの人生初ガンプラを買う権利が僕は欲しいんです。」

「そうか……なら悪いな！」

本当に申し訳無さそうに貴明が答えるが、当の貴明も未来の贈りた  
い。という気持ちは分かっていた。何故なら貴明もまた重度のガン  
ダムマニアだったからだ。

「ほら、未来に礼言えよ彰人！」

「うん。未来お兄ちゃん!!ありがとうございます!ぼく、がんばって  
作ります。」

彰人は未来に対し、ペこりと頭を下げる。

それから数ヶ月もの時間をかけて、彰人はデルタガンダムを完成さ  
せた。8歳という幼い子供がパーツ数の多いHGのデルタガンダム  
を完成させたのも末恐ろしいが、その出来栄もこれがまた悪くな  
かった。数年後。ビルダーとしてもファイターとしても成長した  
彰人は悠々と地区予選大会を優勝し、日本代表となり、世界大会に出  
場を果たした。

世界大会でも彰人はエジプト・中国・フィンランド・イギリスといっ  
た強豪国を打ち破り、ついに決勝戦。相手はメイジン候補である遠野  
未来。憧れの遠野と戦えると知り嬉しがる彰人。本当に心の底から  
ガンダムとガンプラが好きだったあの頃。その矢先の事だった。

一瞬、深呼吸をして気分を落ち着けた後、未来に説明する。

「まず始めに、中国からいきましようか。あの国は日本と貿易を行っ  
ています。チャイナ・リスクはありますが、その収益は日本の貿易収  
支の約4割を占めています。中国に打撃を与える事は、防衛上は有益  
ですがそれでも長い目で見た場合、リスクが大きすぎます。」

「次にこの国が仮に損害を受けた場合、その損害を補填するために日  
本を侵攻する可能性は低くありません。一带一路構想。仮に、日本を

押さえた場合、日本海、太平洋、インド洋といった海産資源が得られるだけでなく、アメリカ侵攻の足がかりにも出来るからです。」

「更に原子力潜水艦だってあの国はある。加えて戦略核兵器を搭載可能な戦闘機、ミサイル発射兵器も開発中だと聞きます。僕らで言うフリーズダムやGPO2以上に脅威の兵器が、現実の世界では既に開発が進んでいます。」

「いや、そんな事よりも肝心なのは中国・ロシア・朝鮮・韓国にだってガン普拉バトルが好き仲間がいます。確かに思想や文化は違うのかも知れない。しかし同じガンダムを愛すその仲間を“殺す”のですか？いや、貴方は出来ないはずだ。だって貴方は……。」

優しい人の筈だ、という言葉は、伝えられなかった。だから、彰人はつらつらと持論を説く。彼なりに考え学んだ知識を総動員。現代史を根拠としたこれからの世界の防衛、貿易、技術の発展。

仮に彼がガン普拉バトルのみにしか興味のない少年だったら、隼人の様にこの世界での知識しかない少年だったならば、未来に対し持論を展開させる事など到底不可能だった。

これらの知識を語る事が出来たのは、ガン普拉バトルだけに拘らず現実の世界を堅実に生きて来た彼だからこそ出来た。彰人が一通り持論を捲し立てると、未来は拍手をしてその持論を讃える。

「彰人くん。いや凄いや。君がここまで知識があるなんてね。正直ガン普拉バトル好きのただの子供だと侮っていた。すまなかった。」

「……俺は馬鹿で、子供ですよ。ですが……技術情報部のみんなや……貴方がいたから変わったんです！」

「なるほど、それはいい傾向だね。だがそれはあくまで僕等の世界の過去の話。……こうとも考えられないか？あのコロナーが地球に

落ちた場合、あれだけの質量が地球に落ちたのならばそれこそ世界が滅ぶ。滅びを迎えないためには各国が一つになり協力する必要があると。」

「新世界秩序による統一政府構想ですね。ですが……本気で信じているのですか？その方法では両方の世界で確実に大量の命が失われる。犠牲になる人が大多数を占めるはずだ。」

「だが苦しみはない。一瞬さ。コロニーの落下ならば一瞬で痛みも苦しみも無く消える。現実には蝕まれこのままゆつくりと確実に先細りする世界と、可能性は低くとも変化せざるを得ない世界。何方がマシなのだろうね？」

共通の敵や目標があれば人々は協力しあうという関係も、悲しいが今日に至る歴史で証明されていることだった。人類の滅亡を防ぐためには協力せざるを得ない。それは石油や海産資源の確保などといった類の話ではない。手を取り合わなければ滅ぶ。単純な理屈だった。

しかしそれは個人が決める事では無い。決める権利など誰にも無い。あの優しかった未来は、そんな簡単なことすらも考えられ無くなってしまったのだろうか。彰人はかつて憧れた彼が変わってしまった事を悟り、一瞬うつむいた後に言葉を続ける。

「未来さん。現実には確かに不完全で、理不尽で、救い難く厳しい。貴方の指摘の通り、どちらの世界も何も変わらないのかも知れない。」

「だけどそれでも……俺は。」

力強く拳を握りしめ、目を瞑る。人が人に対して命を選別するという行為に納得など出来なかった。

「俺は貴方の考えには賛同できません。俺はもうこれ以上、誰かを喪

う世界なんて嫌なんです。他人を犠牲にする事で得られる成長や発展に意味なんてありません。……人の命も、繋がりも、失ったら二度とは戻らない……! だから!」

これまでの数ヶ月の出来事が頭を過る。

総一郎との再開。エリックとのバトル。人形供養祭で見た炎の輝き。そして……文香の肌の温もりや唇の感触。それら全ての経験が彼の糧となり、その一つ一つ積み上げて来た思い出が彼に力を与えた。

「だから……俺は貴方と戦います!!」

「君は本当に変わったね。素晴らしいよ……なら、もはや言葉は不要だ。」

その言葉を皮切りに、遠野未来が彼の愛機であるHi-Sガンダムから蒼い光を放つビームサーベルを抜く。優し気な雰囲気は失われ、殺意を明確にする世界チャンピオンの機体。オルタナガンダムとの性能差は歴然だった。

ストライクフリーダムとHi-レガンダムをミキシングビルドした宇宙世紀、C・E世界に登場する最強の機体の組み合わせ。ビルダーとしての腕の差もガンプラの出来栄も性能も、彰人が未来に勝るところは何一つ無い。

だがオルタナガンダムと彰人はその光に、未来の放つ殺意に屈しない。屈するものか。と彰人は決意していた。

——他人を犠牲にして得た未来なんて認めない。

遠野未来が持つ本来の優しさを取り戻さなければならぬ。彰人はオルタナガンダムの右手を上げムラサメガンダムを制止させると、隼人に冷静に語りかける。

「隼人。君は手を出すな。……コロニーの方を頼む。」

「了解しました。……兄さん。どうか御武運を。」

隼人のムラサメガンダムが可変し巡航形態になるとコロニーへと先行する。コロニーを内部から攻撃し壊すつもりなのだ。

「無駄な事を。もうコロニーの落下は始まっている。阻止臨界点はとうに超えている。無駄な足掻きだよ。」

「まだ終わっていません。いや——終わらせない！」

「貴方を倒してコロニーを破壊して……帰るんだ。みんなのところに！」

オルタナガンダムが腰部からそれぞれ羽々斬刀とビームサーベルを抜き携える。更にビームサーベルの出力は最大限に引き上げる。振り切れてもいい。

武装を構えると頭部のデュアル・アイが真紅に光輝く。まるで彼の怒りが体現したかの様だ。彰人は臨戦態勢を取り未来を力強く睨みつける。

正対する二機のガンダムが衛星軌道上を漂う。

「来なさい。昔みたいに遊んであげるよ。」

——最後の戦いが始まろうとしていた。

第22話に続く

## 第22話 『激突する宇宙』

——戦闘が始まった。

抜刀したオルタナガンダムと未来のHi-Sガンダムが睨み合う。両機の戦闘力の差は歴然としていた。

彰人は牽制にイーゲルシュテルンを発射し距離を詰める。意外にも未来は引かず真っ直ぐ突っ込んできた。背部に搭載されたドラグーンも展開させていない。オルタナガンダムはHi-Sガンダムに斬りかかるが、相手もラケルタ・ビームサーベルでオルタナガンダムと同じく斬りかからんとする。ビームサーベル同士が鏝迫り合いになり粒子が爆ぜる。ビームサーベル同士が拮抗する中、未来が唐突に口を開いた。

「二つ面白い事を言っておこうか。君の父親が職を失った理由は何故だと思う?」

「何!？」

「貴明さんは実に息子思いだった。向こうの世界とこっちの世界を繋ぎ合わせるサイコデバイスの設計者。……はあ、困るんだよね。安易に世界を繋がれたら、こっちと向こうの世界を行き来できるのは——僕ら瞳”アリストラ”を持つ者だけの特権だと思わないかい?」

Hi-Sガンダムが頭部から頭部バルカンを放ち、彰人は思わず後方へ下がる。鏝迫り合いが解け、その間隙を縫うかのようにビームライフルを放った。しかし、Hi-Sガンダムには全く当たらない。極限までに運動性を高めたストライクフリーダムに、サイコフレームによる共振で反応速度も底上げされた機体。

光の速さで迫るビームですら、目視で回避出来る程の化け物じみた動体視力。これらの要素が合わさり、未来とHi-Sガンダムはもはや誰も攻撃を当てることが出来ない。そう巷のガンプファイター



達の間では囁かれていた。

「どんなに速くたって……こいつのミサイルならどうだっ!!」

オルタナガンダムは尚も諦めず、ハミングバードの両肩部に搭載されたファンネルミサイルを放つ。

全弾発射。唸りを上げたファンネルミサイルが未来に襲いかかる。彰人にサイコミュの適性は無いが、今は真つ直ぐ飛ぶだけで構わない。放たれたミサイルに向け百雷でビームを撃ち爆散させる。爆散したミサイルの破片がH i i Sガンダムを襲うが、未来はH i i Sガンダムの腕に搭載されたM X | 2 2 0 0ビームシールドを展開。その全てを防ぎきった。

余裕綽々。未来は挑発するように彰人に対して語りかけて来る。その声色には嘲りの色が混じっていた。

「実に、君の父親を陥れるのなんて簡単だったよ。他人の個人情報も抜き取ったように彼のパソコンに履歴を残しただけで、無能な警察は君の父親を逮捕した。……更にいえば、君が世界大会で使用したデバイスに細工したのは僕さ。チートで君のガンプラを強化させてもらったよ。あの時の君に勝つのは骨が折れたよ。何しろ君は元から強かったからね、本当にぎりぎりだった。」

未来はドラグーンを起動させオルタナガンダムの四方からオールレンジ攻撃を繰り出す。黒いドラグーンが獲物を見つけた蛇の如く執拗にオルタナガンダムに迫った。

「ツ……い……手強いツツ!!」

四方八方から繰り出されるドラグーンの攻撃を彰人はバーニアとスラストターを我武者羅に吹かしながら回避。更に宇宙空間を上下左右に素早く移動しながらイーゲルシュテルンとライフルで応戦する。

ドラグーンを数機は落としたが、何発か喰らってしまった。ミサイルポッドに誘爆する前に両肩からファンネルミサイルのポッド部分をパージする。

（ハミングバード装備のオルタナガンダムに攻撃を当てるなんて……！）

未来の強さは圧倒的だった。ドラグーンのエネルギーが尽きる前にH i | Sガンダムの後部にドラグーンを格納すると同時に、ミサイルポッドを失い制圧力が落ちたオルタナガンダムに高速で迫る。彰人も慌てて二刀流で応戦するも羽々斬刀に何度もビームサーベルを集中的に当てられる。このままでは耐ビームコーティングがされているとしても、実体剣の羽々斬刀では刃が持たない。

彰人はイーゲルシュテルンを撃ち距離を取ると羽々斬刀を背中に格納し代わりにビームサーベルをもう一本携える。その隙を狙わんと迫り来るH i | Sガンダム。ビームサーベルが振られオルタナガンダムも負けじとサーベルで応戦し鏝迫り合いになる。チャンピオンの攻撃一つ一つがオルタナガンダムにとっては致命傷となる攻撃であり、全く隙が無い。イーゲルシュテルンを放つが、数発しか弾が出ない。ついに弾も切れたようだ。

「はははーイーゲルシュテルンにばかり頼るからさ。そんなレベルで接近戦特化だなんて、笑わせる。」

「それは……どうですかね。」

「何っ！……ぐうっ!？」

H i | Sガンダムのビームサーベルを持つ左腕付近にミサイルポッドの誘爆による衝撃が走る。未来はビームシールドでそれを受けると体勢が崩れたその一瞬の隙を彰人は見逃さない。一瞬で可変し距離を詰め、再度人型に可変しなおすとオルタナガンダムの左脚で

H i | Sガンダムの腹に思い切り蹴りを入れる。それはH i | sガンダムのV P S装甲で受け止められ致命傷にはならないものの、後方に大きく吹き飛ばす事に成功した。

「……まさか。この僕に当てただと？ 彰人が？」

信じられない。といった顔で未来はオルタナガンダムを見る。幼い頃に見た金色の機体が猛烈なプレッシャーを放って自身に敵対している。生意気、と感じた。未来は苛立ちと同時に、全身の血管が波打つのが分かった。

「やっと一発！……初めて、初めて貴方に当てられましたよ。」

ぜいぜいと息を荒げながら彰人は答える。

「なるほど。パージしたファンネルミサイルを利用したか……やるじゃあないか。」

未来も悔しそうに、だが少しだけ弟分の成長に嬉しそうな表情を浮かべつつ彰人とオルタナガンダムを目を細めながら見つめた。

「たまたまです。子供の時、貴方に教えてもらった通りの戦い方、二重三重に意表を突く方法。それを応用しただけです。」

「……そうかい。なら僕も“本気”を出さないとあつ!!」

H i | Sガンダムの機体各所から装甲が開き、開いた箇所からは蒼く輝く光が溢れ出す。更に背部のドラグーンが起動しH i | Sガンダムの両手、両足に取り付いた。

(あの光は……プラフスキー粒子による機体の強化だけじゃない。ド

ラグーン機動兵装ユニットをスラストーとして応用するつもりなのか!?)

オルタナガンダムのハミングバードと同速、いやそれ以上の速度でHi-Sガンダムがオルタナガンダムに迫る。圧倒せんとする速度で真正面からHi-Sガンダムがオルタナガンダムのコックピットを切り裂いた。……ように見えた。

「残像だとツツ!!」

Hi-Sガンダムの周りを数十台のオルタナガンダムが囲む。

「いいだろう……来いツツ!!」

未来も覚悟を決め、Hi-Sガンダムのビームサーベルを連結させると一本の両刃剣にした。

「うおおおおおおお!」

彰人も分身したオルタナガンダムに向けビームを放つ。オープリズムコンセントレート。剥離したヤタノカガミによって乱反射したビームが360度のあらゆる方向からHi-Sガンダムに迫る。Hi-Sガンダムもそれらの攻撃を器用にビームサーベルで防ぎ、更にビームシールドで受け止める。だが爪先や背中のブースターユニットにビームがかする。擬似的とは言えど、光の速さで迫るオールレンジ攻撃を防ぐ未来。その動きはまさに世界チャンピオンそのものだった。

「負ける訳にはあああああッ!」

Hi-Sガンダムが光に包まれまいと抗う。Hi-Sガンダムに

は何十体ものオルタナガンダムがモニターに表示されるが、その分身を一つ一つ攻撃し消していく。分身が消えるごとに、ビームの攻撃も少しずつ減っていく。

「まだまだ!!ビット……オールレンジ攻撃!!」

だが、そこに更にオルタナガンダムの背部からビットが射出された。ビットから放たれたビーム攻撃がヤタノカガミに反射し、更にオルタナガンダムのビームライフルから放たれたビームが迫る。

乱反射に次ぐ乱反射。宇宙空間という暗黒の中に光の嵐が煌めき吹き荒れていく。光の奔流がぶつかり合い、輝きが増していった。

「うおおおおおっ!ドラグーンツ!」

未来もHi—Sガンダムの機体各所に取り付けたドラグーンを機体周囲に展開させバリアを張りオルタナガンダムの乱反射による猛攻を防ぐ。青の光と赤の光が互いに拮抗しせめぎ合い、形を変えていった。

しかし唐突にオルタナガンダムの分身が止むと同時に光の嵐がおさまる。

「はは。残念だったね。どうやら僕の勝ちのようだね。君の渾身の特技……防いだよ。」

金色の装甲が剥がれ落ち白い機体となったオルタナガンダムを眺めて勝ち誇る未来。だがしかし。

「いいえ!貴方の負けです!未来さんツツ!!」

Hi—Sガンダムに向け彰人は背中に携えた羽々斬刀を手に持ち替え投げる。右腕に渾身の力を込め、ただ一点にのみ集中。

「うおおおおおっ!!」

唸りを上げた銀色に輝く羽々斬刀が質量の塊となってH i | Sガンダムに迫る。

「……動けないだど?」

動けなかった。本来、当たらなければ良しとする思想で作成されたH i | Sガンダムの素体であるストライクフリーダムは被弾に弱い。ビームによるダメージが蓄積した結果、未来の反応に対して咄嗟に動くことが出来ないH i | Sガンダム。そこへ鈍い音を立て羽々斬刀がH i | Sガンダムの腰に僅かではあるが突き刺さった。だが、V P S装甲により阻まれ当然それは深手とはならない。

「歯あつ! 食いしばれえええええ!」

だが白く輝く鳥ー可変したオルタナガンダムがH i | Sガンダムに向かつて突っ込む。宇宙では慣性が効かない機体がそのままの速度を維持しながら羽々斬刀が突き刺さった箇所にも機体ごと体当たりを仕掛けた。

変形部分の機種に該当するオルタナガンダムのシールドが激突の衝撃で碎け散るが、その衝撃はH i | SガンダムのV P S装甲すらも破壊。腰に突き刺さった羽々斬刀が強引にH i | Sガンダムの腰から下を分断する。

「ぐっ!ぐおおおおおっ!!」

衝撃にバイザーが割れ血反吐を吐く未来。

咄嗟に、操縦桿のあるボタンに手をかけていた。

「…………ツ!!この光はっ!?!」

彰人が気づいた瞬間、Hi-Sガンダムの腹から閃光が放たれる。一瞬でオルタナガンダムを人型に変形させ回避するも、その光はオルタナガンダムの右腕を掠め蒸発させた。

だがその一発で出力が落ちたのか、ダイアクティブモードになるHi-Sガンダム。もはや、抵抗出来ない事は明らかだった。彰人は残った左腕でHi-Sガンダムの体を掴む。

「未来さん。もう止めましょう。勝負は着きました……貴方の負けです。」

接触通信により未来に投降を呼びかける。危なかった。最後の最後まで油断出来ない男。それが遠野未来だった。一派間違えば、オルタナガンダムなど瞬殺されていただろうと言うことは想像に難くない。

「はは、そのようだね。君は……勝ったんだ。コロニーを落とす”悪者”の僕にね……!」

自嘲気味に呟きながら、モニター上に腹を抑えながら苦しそうに喋る未来の姿が映った。先ほどの衝撃で至る所に破損箇所が出たのか、コックピット内部もボロボロに見える。

「未来さん!痛むのですか!?!……諦めないでツツ!!」

「はは……きつと僕はバチが当たったんだね。恥ずかしいけど、実は体がね……。こちらの世界では普通に動けるけど向こうでは、ね。万全とはいかないのさ。みんなを失望させたく無かった。」

「未来さん!もう喋らないで下さい!!」

「……忘れるな。世界は……世界は君が信じているほど単純では……  
いずれ君も知ること……。」

「だが彰人君……君は勝ったんだ。だから最後まで、コロニー落とす  
の……阻止……し……。」

その言葉を最後に、未来は喋らなくなった。かつて未来を創ると言  
われた男の呆気ない、最期だった。彰人は目から涙を流す。ぽろぽろ  
と零れ落ちる涙がコックピット内を濡らしていく。

（未来さん……あなたの言いたいこと、伝えたいこと。俺はわかりま  
すよ。貴方のことを許してはいけないのかも知れない。でもそれで  
も俺は……貴方が好きでした。尊敬していました。）

貴明も、彰人もこの男に狂わされた。だがその一方で、幼い頃の楽  
しい思い出を作ってくれたのもこの未来だった。一生懸命鍛えてく  
れたのも、ガンプラを褒めてくれたのもこの未来だった。

だから、彰人はこの男が嫌いになれなかった。

だからこそ、嘘だと言って欲しかった。この状況全てが冗談で、目  
が覚めたら学校で技術情報部のみんなと遊んで。そんな妄想が頭を  
よぎった。が、打ち消す。

（いや、妄想に浸るな。考える事をやめるな。神取彰人!!やれること  
をやるしか無いんだ!!）

両手で頬を叩き気を取り直す。オルタナガンダムで未来のHi—  
Sガンダムを掴み、そのまま加速してコロニーの内部に入ろうとす  
る。見ると、コロニーの外部には四角い扉の様な進入路が見つかり、  
そのままコロニーのドッキングベイの中から内部へと侵入する。数  
分後、視界が開け、コロニー内部の姿が目の前に広がった。



——コロニーの内部は美しかった。

誰の手にも触れられておらず、廃墟の様な独特な美しさを保っていた。ここは居住区エリアなのか、様々なビルやショッピングモールに加え、バトル用の施設を思わせる建物が見える。

しかし、これらの景色もあと数時間後には消える。

H i | Sガンダムをコロニーの中で自爆させるためである。別段おかしな話ではない。元々S E E Dに登場するフリーダムは最終回で自爆しプラントを守るという役割があった。その設定がストライクフリーダムをモチーフとし作られたH i | Sガンダムに受け継がれていても不思議では無い。

最後に未来がいい残したように、このままH i | Sガンダムをコロニー中枢で自爆させる。自爆にはオルタナガンダムをケーブルを通してH i | Sガンダムに繋ぎ、遠隔操作で自爆装置を起動させるつもりだ。オルタナガンダムはコロニーの中を進み続ける。すると、目の前にコロニーの居住区ブロックと外部ブロックを繋ぐ連結部が見えてきた。

(ここならいいかもな。)

彰人は運んで来たH i | Sガンダムを連結部に設置すると、オルタナガンダムと同期させる。

(これなら……自爆コード！)

H i | Sガンダムから送られて来た自爆コードを見て驚く彰人。驚くのも無理はなかった。何故なら、自爆コードは「0514」とオルタナガンダムのディスプレイに表示されていたからである。

その数字は彰人の誕生日と同じだった。

(ほんと、あの人は……。)

涙がこぼれそうになるのを堪え自爆装置を震える手で起動させた。残り数十分でHi-Sガンダムは自爆する。彰人と未来の思い出が消える。

(後は隼人を探して帰らないとな。)

仕事を終え、ようやく一息つく。これで終わったのだ。全てが。

――その時だった。

「彰人君く！ここに居たんだね探したんだよ。」

聞き覚えのある声がコロニー内に響く。

「まさか!?!」

彰人は悪意を感じるとオルタナガンダムに急いで乗り込む。頭部のデュアルアイで索敵を実施する。

「見つけた！……隼人!?!」

黒いガンダムにムラサメガンダムが抱えられていた。逃げられないようにするためなのか、両脚はもぎ取られ更に頭部をはじめとする機体各所にも大きな損傷があった。

「彰人君と僕の邪魔をするこの子にはお仕置きしてあげたんだよ。ねえく隼人君!」

「隼人!!」

「彰人さん。逃げて……ください。その状態の機体ではいくら彰人さんでも……がはっ!」

「邪魔なんだよね。君のそれムラサメでしょ？雑魚の量産型如きがこの僕のガンダムグレモリーに傷をつけるなんてさ。生意気だよねえ〜!!」

「お前……何なんだ！なぜ俺達に付きまとう！」

「僕は君が好きただけなんだよ彰人君……殺したいほどにね。」

「おまえ……まさか。柊先生なのか？いやまさか？そんな馬鹿な。」

「違うよ。柊は合ってるけど、僕はあいつのお兄ちゃんさ。双子のね〜!」

「お前も世界を滅ぼしたいのか!？」

「違う。僕は君と一緒に居たいんだ。君に恋したんだよ。この人誑しのお茶目さんめっ!」

まるで話を通じなかった。何故なのか。あの柊の兄だとするのならば尚更可笑しい。柊先生はもつと理知的な男だったはずだ。どちらにせよ、この男を生かしておく理由はない。

「お前に一つだけ言う。隼人を離してここから消えろ。」

片手でライフルを突きつけ、黒国の男を脅す。

「つまらないな。そんなこというと、この子殺しちゃうよ。」

グレモリーと呼ばれた機体が右手を振り、ムラサメガンダムの機体を激しく揺らす。機体にダメージは無くとも隼人に被害が行くのは

確実だった。

「隼人！大丈夫か。必ず助ける！待ってる！」

オルタナガンダムに無線を飛ばしたのか、隼人の様子がオルタナガンダムのコックピット内のモニターに表示される。息も絶え絶えに弱る隼人の姿が映る。肋骨が折れたのだろうか。脇腹を抑え、苦しうに呻きながら隼人は一言一言ゆっくりと話す。

「はあ……はあ……彰人さん。僕は前にいいましたよね。僕は……人殺しです。この4年間で……大勢殺しました。大人も、子供も、女も男も関係無く。どんな理由だとしても……殺しているんです。だからこうやって……殺されもしますよ。」

「だけど彰人さん。貴方は違う。貴方は僕が出来ないことをして欲しいんです。生きて……下さい。生きてこのコロニーを壊して、向こうの世界に……。」

隼人はそういい放つと、ムラサメガンダムの背中からビームサーベルを抜き、そのまま自身を切り裂いて行く。自爆。嫌なイメージが彰人の頭をよぎる。

「そんなっ……隼人っ！やめろッ!!やめてくれ!!お前が死んだら文香やフランはどうなる!?!待っているんだろう!お前の帰りを!」

最大限の笑顔で、彰人の言葉を遮る隼人。

「に……兄さん。どうか御武運を。」

「ーフラン、姉さん。約束守れなくて……ごめん。」

融合炉が耐えきれず、大きく爆発するムラサメガンダム。隼人の思

い出が、決意が、この世界を守りたいという願いを込めた男が爆発に飲まれ、ばらばらに碎けて消えて行く。この世界から、彼の存在がいなくなる。

「あ、ああ、ああああああ!!!」

思わず絶叫する彰人。彰人の脳裏に幼い頃の隼人の姿がよぎる。病院の中で大好きなガンプラと一緒に作った時。野菜が嫌いだった隼人が、彰人が作るグラタンなら食べられると言って食べてくれた時。小学生の頃の夏休みで一緒に花火を見た時。それらの楽しい思い出を共有した男が消えて行く。

“大人になってもガンプラを作ろう!”

あの日交わした約束は虚しく碎けて散った。

「あれれ。自爆しちったか。全く。安い死に方するねえ〜!ま、そんなもんだよ。モブの最期なんて。」

黒の国の男が挑発めいた物言いで隼人を侮辱する。

——許せなかった。理解出来なかった。

「おまえ……おまえ……!消えろおおお!!」

怒りのあまり我を忘れる。ライフルを乱射し黒の国のガンダムグレモリーを殺そうとする。しかし、当たらない。先ほどの戦闘でのダメージが大きすぎた。

「消えるのは君さっ!!ここで大好きな君を殺す。それが僕の愛!!受け取ってええ!!」

両手に構えた大きな鎌からはビームの刃が展開された。ガンダムグレモリーが唸りを上げてオルタナガンダムに迫った。

――命を刈り取る漆黒の機体が迫る。

第23話に続く

## 第23話 『命尽きるまで』

「僕の愛！受け取ってええ！」

満身創痍のオルタナガンダムに黒い悪鬼ーガンダムグレモリーが迫る。シールドも無く、右腕も無く唯一の武器であるビームサーベルもエネルギー残量は残りわずか。状況は絶望的だと言えた。

(こいつは……殺す！)

彰人は負けるなどとは少しも思わなかった。怒りが、殺意が、憎しみが彼とオルタナガンダムを強く動かしていた。ガンダムグレモリーが大きく振りかざした鎌を振り下ろす前にブースターで加速し体当たりを仕掛け、大きくよろめかせる。

大きくたたらを踏むガンダムグレモリーの間を見逃さず左腕で殴りつける。何度も何度も、ボクサーのように殴り続けた結果アンテナをはじめ破損するガンダムグレモリーの頭部。だがその傷も瞬時に治っていく。やはりナノマクロフアーシ機能を有しているようだ。

「うふふふ。無駄だよ彰人君。どんなに攻撃を重ねようと僕の機体には効かない。」

「ああ。だが」治ってくれて嬉しいぜ。これで何度でも。」

いつもの彰人から想像もつかない。まるで猛禽類を思わせるかの様な、凶暴な顔つきだった。

「お前を殴れるからなあ!!」

「……何っ!？」

オルタナガンダムが脚で大地を踏みしめ跳ぶ。そのままの勢いでガンダムグレモリーに接近し敵が反応できない速さで何度も殴り続ける。左フック、回し蹴り、頭突き。左手で体を掴み地面に引き倒し蹴り続ける。頭を蹴り壊し、腕を引きちぎり鎌を奪い、片手で持ち胴体に振り下ろし続ける。

その戦い方はもはやMSの戦闘ではない。さながら子供の喧嘩であった。

「なっ……!?うあああああああ!」

黒の国のガンダムパイロット——柊は生まれて初めての恐怖に怯えていた。蹂躪しデータを奪い敵パイロットの恐怖に怯える顔を見るのが何よりもの生き甲斐だった柊。向こうの世界に行った弟を臆病者だと見下していたが、今は自分が目の前のこの機体に怯えている。

「何故だ!何故勝てない!反応が遅い!スペックも機体の状態もこっちが上のはずだっ!」

「教えてやるよ!お前はなあっ!」

攻撃を続けながら彰人が叫ぶ。その叫びはこれまでの理不尽に対する怒り。命を奪われたもの達の呪詛が、怨念が執念が形となりそれが彰人の体を通して強烈なプレッシャーとして放たれていた。

「本来、遊びであるガンプラバトルを貶め命を玩具にしたからだ!正に因果応報!機体の性能に頼り切ったお前が!」

「俺に勝てるわけねえだろうがあああっ!」

オルタナガンダムはガンダムグレモリーを持ち上げると背中から圧し折ろうとする。バックブリーカーが炸裂。機体がぎしぎしと悲鳴を上げ、ダメージに耐えきれずガンダムグレモリーの上半身と下半身が千切れ二つに分かれる。尚も再生しようと機体がびくびくと動くが、彰人は更に追撃を重ねる。

オルタナガンダムの各部の装甲がスライドし全身が夕焼け空の様に赤く光り輝く。いや、性格には違う。『燃えているのだ』

「システム Overheat 起動っ!!」

そう叫ぶと同時にコックピット内で操作を行う。コンソールにOverheatと文字が表示されオルタナガンダムの頭部に組み込まれたバイオセンサーが発動した。頭部のマスクが開き、その姿がまるで怒りの形相を思わせると同時にオルタナガンダムの全身から蒼い炎が吹き上げ燃え上がる。

蒼蓮の炎を纏ったオルタナガンダムが夕陽の様に美しく煌めき輝き辺りを照らしつける。見る者を失明させるほどの強すぎる光。

——オルタナガンダムの最終形態。だが、その大きすぎるエネルギー



ギーに機体が耐えられる筈が無い。太陽の様な高熱を発するあまり内部フレームが炎色反応で徐々に歪み始めるが、今の彰人には関係が無い。ある筈が無い。

「お前はここで終わりだあああ!!!」

ガンダムグレモリーを持ち上げ両足からブースターを噴射し空へ飛び上がる。飛び上がる中ガンダムグレモリーをコロニーの外壁に投げつける。コロニーの外壁が砕け宇宙へと飛び出る両機。それでもなお彰人の追撃は止まない。投げ飛ばしたガンダムグレモリーの上半身を片手で掴み機体から溢れ出す蒼い炎で燻す。再生機能があるとはいえ熱による苦痛は感じるだろう。そのままあらん限りの力を込めた。オルタナガンダムの左腕が光輝く。

「ここから消えちまええええ!!」

力の限り叫ぶとオルタナガンダムの左手が高熱の余り大きく膨らみー爆ぜた。ガンダムグレモリーを掴んだままの左腕が本体から勢い良く切り離されそのまま柎の機体を押し出す。押し出し続けたまま、速度を増していく。

「と、止まらない!止まらないよおおお!」

後方で赤々と燃え上がる太陽へとガンダムグレモリーが押され続ける。下半身がちぎれ飛んだ為、ブースターもAMBACも使えない。正に絶望的だった。再生能力を有していたとしても、全てを無に還す太陽の熱にガンダムグレゴリーが呑まれ、焼かれていく。

「あっつ!?!熱い!嘘だろ!?!熱いよおおお!彰人おおお!僕は!お前は!ぼくのおおお!」

太陽に呑まれたガンダムグレモリーが再生しつつもゆっくりと溶解していく。恐らく、完全に溶けきるまでは苦痛を味わい続けるのだろう。

向こうの世界に干渉し続けた男の、戦争を楽しみ殺戮を繰り返したこの世界の柎の最期だった。

「終わったか……。」

彰人がそう呟くと、役目を終えたオルタナガンダムがゆっくりと灰色のディアクティブモードに姿を変える。更に後方で爆発による衝

撃が走り、機体を揺らす。どうやらHi-Sガンダムの自爆によるコロニーの崩壊が始まった様だ。

(隼人、未来さん……)

彰人は心の中で礼を、散っていった者達に最大限の敬意を払った。――彼はまだ生きなければならぬ。恩人や友人がいなくなつた現実の世界を。

感傷に浸りきる前に彰人はオルタナガンダムのスラスターで惑星近くに移動する。このまま惑星の引力に引かれれば降りられる計算だ。

(頼みの可変機構は無いがやるしか無い……!)

彰人はスラスターを器用に使いオルタナガンダムの大気圏突入角度を合わせる。すると、視界の隅に偶然赤い機体――ムラサメガンダムが見えた。爆発により両手両脚がちぎれ、各部もぼろぼろだが、かろうじて原型は残っている。

(お前も帰りたいんだよな。……一緒に帰ろうぜ。)

紅龍が宇宙と大陸の狭間をゆらゆらと漂っている。この大陸を守る為に戦い続けた隼人のムラサメガンダム。その機体が眠りについた幼子のように揺られていた。そこにオルタナガンダムがスラスターを吹かし近づくと、後ろからムラサメガンダムを優しく抱き抱える。

一機なら大気圏突入は無謀でも、二機の耐久力を合わせれば可能かもしれない。いや出来るといふ根拠の無い確信があった。彰人はオルタナガンダムの脚部を畳み、少しでも空気抵抗を抑える。

惑星の引力に引かれながら大気圏突入を図る二機のガンダム。空力加熱により機体の各所から悲鳴が上がる。フレームが軋みぎしぎしと嫌な音を立てながらも惑星の空をゆっくりと降下し続ける。

「もう少しだ。あと少しで……!」

彰人は独り言を呟きながら空を眺める。上空では幾多ものコロニーの破片が大気に焼かれていく。まるで流星のようだ。真下には真っ赤な荒野が広がる。しかし見とれている暇はない。彰人はコックピット内の計器類を注意深く眺めながら突入角度を調整する。例

えるならばブレーキの無い車で急勾配を下るようなものだ。一步間違えば大破は免れない。大気に抱かれながら落下し続ける。

その頃、大陸では各国の国民がコロニーの破片を眺め、喜びに満ちていた。破滅論を唱えていたもののどこか心の奥底では死ぬ事を恐れていた者。仕事をしていた者、友と遊んでいた者、愛するものと過ごしていた者。それぞれ境遇は違えど死滅を免れた、という点では喜ぶ者が多数を占めた。例えばどんなに辛い世界だとしても、人は生きていたのだ。

白国ではマスドライバーでの戦闘を終えたカイネと沙雪が旗艦ニュークリアスの中で休息を取っていた。艦内は戦闘後の興奮も冷め、穏やかな時間が流れる。

(やったのか……彰人。)

椅子に座ったまま窓から空を眺めながら沙雪が心の中で呟く。月明かりに照らされながら落下するコロニーの破片。その一つ一つがキラキラと光り輝く。その光景を見て確信したその時、向こうから白国の少年が歩いてくる。

「サユキさん……でしたっけ？ありがとうございます。おかげで助かりました。」

てくてくと歩いてきたカイネが沙雪の前で立ち止まり、丁寧に頭を下げた。彼が沙雪を見つめる瞳には尊敬の念が込められていた。

「いや、私は……。」

沙雪は最後にそういいかけて再度窓から外を眺めた。何も無い荒野の上空に星々の瞬きが見える。

ニュークリアスが赤国に向けて静かに夜空を飛び続ける。

その頃赤の国では、フランが城のバルコニーで1人黄昏ていた。そのたたずまいは空へ向かった隼人を案じているかのように暗い。穏やかな夜風がフランの髪を撫でる。

(……ハヤト様。)

心配そうに空を眺める。夜空では星がちかちかと輝いている。あの輝やきの中で2人は戦っているのだとフランは確信していた。この赤国だけに限らない。この大陸全ての命を守るために。フランに

は、ただ隼人の安否を祈ることしか出来なかった。その身を慈しむように夜風が彼女の柔らかな髪を撫でると、フランは気持ち良さげに瞼を閉じた。

(彰人……。)

文香が彰人が眠る病室の中で彰人の手を握る。大きくてごつごつとしていて、文香が大好きな彰人の手だ。眠り続けたせいで少し筋肉は落ちたものの、がっしりとした逞しく均整の取れた体。またあの手で触れてほしい。抱きしめて欲しい。起きて名前を呼んで欲しい。そう願いながら文香は病室で祈り続ける。その病室の外からは総一郎と雛美が心配そうに覗き込んでいた。

総一郎は部屋を覗き込むのをやめ、病院の窓から外を眺めた。空では非現実的な程に流れ星が幾度も落ち続け、幻想的な美しい光景が広がっている。

(あの流星……まさか?)

その光景を眺めていた総一郎は確信めたものを心に抱く。その予感は――正しかった。

その頃、大気圏内でまだ彰人は戦っていた。空力加熱に燻され続ける機体。失敗すれば確実に死亡する過酷な状況の中、機体を制御し続ける。

隼人のムラサメガンダムも熱に軋みをあげながら大気圏の摩擦熱に焼かれ装甲が剥げていく。次第にぼろぼろになる二機。数分がまるで数時間の様に感じる長い時を経て、ふっと機体からアームが消える。どうやら大気圏を抜けた様だ。

(何とかバラバラになるのは避けられたか……だが。)

真下には赤の国の街明かりが見える。後はどう着陸するか、それが問題だった。既に機体のバランスも狂いフレームがむき出した各部では着地の衝撃に耐えられないとは思えない。減速を試みるも機首にあたるシールドが無いせいで機体がふらつき安定しない。かと言って無理に減速すればバランスを失い真つ逆さまに落下するだろう。それは避けたかった。

(くっ………ここまで来て打つ手なしか!どうする?)

彰人が諦めかけたその時だった。

暗闇の世界に、突如白い光が走る。

(ツ………あれはニュークリアス!!)

彰人が気付くと同時にニュークリアスの後部ハッチから数機のMSが発進したのを確認した。

白鳥の様なMS——ペーネロペーが両翼を広げオルタナガンダムに近づいてくる。そのままオルタナガンダムをゆつくりと支え機体の速度を落とすと同時に姿勢制御ブースターでペーネロペーが微調整をかけた。

「全く、お前は本当に凄いやつだ。」

微調整をしながら、接触回線で沙雪が笑みを浮かべながら話しかけて来た。数時間ぶりに見る顔だが、まるで数日はたったかの様に思えた。懐かしい顔だ。

「沙雪……ありがとうな!助かった。」

彰人はモニターに映る沙雪の顔を眺めながら、礼を言った後にオルタナガンダムの脚部を展開させ着艦の準備を行う。

「礼を言うのは後だ。取り敢えず降りるぞ。」

「ああ。」

ゆつくりとニュークリアス上部に降りると、そのまま後部ハッチから中へと入り格納庫内部へと丁寧に機体を運ぶ。

「酷い有様だな。」

機体から降りた沙雪が格納庫内に立たされたオルタナガンダムを見て呟く。

「……激しい戦いだった。」

彰人もかつて無いほどに損壊した愛機を眺めながらそう答えた。この損壊具合から見積もると、もうオルタナガンダムは直せないだろうという予感が頭をよぎるが、不思議と後悔は無かった。

(オルタナガンダム、お疲れ様。今までありがとうな。)

役目を終えぼろぼろになった灰色の機体。父と自分の思い出が詰まった機体を眺め、労いの言葉をかける。

「彰人、そういうえば……隼人はどうした。」

不意に、聞かれたく無い名が呼ばれ、思わず動揺する。その動揺が表情に表れたのか、その表情を読んだ沙雪が目を伏せ、顔を背けた。  
「隼人は、あいつは……最後まで強かった。」

それでも、ゆっくりと言葉を口に出す。口に出すと同時に涙が出て来た。この世界で今まで戦ってきた隼人がいない。その事実打ちのめされる。弟の様に可愛がっていた。向こうの世界で文香と会わせてやりたかった。どんなに自身の無力さを痛感したところでその願いが叶うことは無い。

「そうか……。」

その悲しみが沙雪にも伝わったのか、それ以上の追求は無かった。後悔と達成感に浸りつつ、ガンダムパイロットを乗せたニュークリアスが赤国へと飛び続ける。

コロニー落下阻止のニュースは、白国の伝令から数日間で各国へ伝わり、国民は歓喜の声を上げた。

人類の破滅という最悪のシナリオは回避したが、それに伴う犠牲は計り知れなかった。

第24話へ続く

## 第24話 『決意と別れ』

「隼人……！」

ニユークリアスの冷たい格納庫の中で、物言わぬ残骸と化したムラサメガンダムを眺めながら彰人は呟いた。いつも真面目で、でもどこか不器用な隼人を弟の様に可愛がっていた。再開できた時は本当に嬉しかった。

「お前……まだ……まだこれからだっただろ！ フランも赤国も、お前を必要としているんだぞ!!」

脳裏に隼人の笑顔がよぎる。震え声のまま嗚咽を漏らし続ける。彰人は悔しかった。隼人を守れなかった自分が、何よりも情けなかった。コロニーを壊せたとはいえど素直に喜べるはずがない。近い友人を失ったという現実を受け入れるにはあまりにも辛かった。

「彰人、あまり自分を責めるな。君はこの世界でやれる事をやったんだ。隼人だつてそうだ。彼もこの世界の人を助ける為に……。」

嗚咽を漏らし続ける彰人のそばに沙雪が近づく。

彼の心情を慮るように沙雪がフォローしようとするが、沙雪の言葉を遮るかの様に、彰人は手で沙雪を制止する。まるでもう喋るな。と言わんばかりの態度だ。彰人が久々に見せる拒絶に対し沙雪は一瞬驚き目を見開き、思わずかけろべき言葉を失った。

沙雪自身もこの世界の事を詳しくは知らない。自分が部外者であることは百も承知だったが、——それでも彰人の支えになりたいという考えが頭の片隅にあった。しかし、それを今の彰人に話しても通じないだろうということは、彼の従兄弟だからこそ分かっていった。

「もうすぐ赤国に着く。とにかく今は休んでくれ……難しいだろうが

な。」

沙雪はかろうじて一言伝えたと踵を返し部屋へと歩きだす。後ろからはああ、という彰人の弱弱しい生返事が虚しく響いた。

ニユークリアスが赤国に到着すると、カイネは彰人と沙雪の2人を出入り口から外へと案内する。

外の空気を吸うと、宇宙でのあのふわりとした無重力から解放されたという実感が湧いた。

城下町では、沢山の赤の国の人々が彰人たちの凱旋を祝っていた。それはささやかではあったものの、この国の人々を守ったのだという感慨を与えるには十分だった。彰人は赤の国の人々に対して手を振り、せめて顔だけは笑顔を浮かべてみせる。それがこの世界の人々に対する誠意のつもりだった。だが彰人はこの世界の人々の命の重みを隼人ほど知らない。彼自身もこの世界ではあくまで部外者でしか無かった。

この声援を受けるのは、本来赤国をこれまで守って来た隼人が相応しいのは一目瞭然だった。

(隼人、本来はお前が讃えられるべきだろ。)

心の中で再度嘆く。彰人がぼんやりと滑走路を歩いていると、向こうからフランが走ってくるのが見えた。息を切らしながら、一生懸命に走る彼女の小さい姿を見ると、ちくりと心が痛んだ。

「はあ、はあ……皆様、ありがとうございます。コロニーの破壊が地上からも確認出来ました。」

「ああ。終わったんだ。」

「はいー本当に、本当にありがとうございますー！」

皆様はこの国にとっての英雄ですー！」



フランが満面の笑顔で彰人達を出迎える。辺りをきよろりと見渡ししながら、

「……ところでハヤト様はどちらに?」

早く彼に会いたい。そんな年相応の少女の表情を浮かべるフランを眺めていると、本当にこの場に隼人がいたなら。と彰人は改めて後悔せざるを得なかった。

「フラン。落ち着いて聞いてほしい。」

「ああっ!あれはムラサメ!……ハヤト様!」

フランがニユークリアスから外に運び出されたぼろぼろになったムラサメを見ると同時に駆け出す。

その必死な様子に、彰人も沙雪も声をかけるタイミングを逃した。彼女の後を慌てて追いかける二人だったが、フランは意外にも足が早かった。とても追いつけそうには無い。

フランがムラサメのコックピットに近づき、ハッチを開けるのが見える。外装は熱と衝撃で歪んでいたが、意外にもすんなりとコックピットハッチは開いた。まるで最初からフランを招き入れるかのよう。

「フラン!やめろ!見るなっ!!」

中に入ろうとする姿を見て彰人が叫ぶが、もう遅い。二人もムラサメに駆け寄るとコックピットに近づく。

「……!?!」

フランに遅れてムラサメの中を覗き込むと、そこには彰人が想像だ

にしていなかった光景が目映った。

「隼人？生き……てるのか？そんな馬鹿な。」

コックピットの中には、傷だらけになった隼人の姿があった。本来隼人がいるはずが無い。だが彼はシートに横たわり、その体にフランが涙を浮かべながら覆いかぶさっている。見たところ服もぼろぼろだが、コックピットの中には自爆した際に本来あるはずの血も肉片も無い。馬鹿なと思った。

（あれだけの爆発で、何故？）

どう考えてもおかしい。あれだけの爆発なら機体もコックピットの中も無事では済まないはずだ。

——まるで“再生”したかのような。

そんな考えが彰人の頭をよぎる。彰人は目を瞑り落ち着いて思考を一つにまとめる。

（……機体はおろかパイロットすら修復する機能を持つターンAガンダム、ナノスキンに加えてムラサメはSEEDの機体。）

（そしてーC・Eのガンダムパイロットは自爆では死なないというジンクス……まさか、隼人。）

彰人は一つの結論を下した。

（お前もそのジンクスにあやかっただのか？）

恐る恐る隼人の頬に触れる。暖かい。この手のひらに伝わる感触

と熱は確かに生きている人間の温もりだった。触れると同時に今までぴくりとも動かなかった隼人が瞼を開いた。

「……は？僕は生きているのか？」

瞼を開いた隼人は、起きたばかりで頭が回らないのか不思議そうに辺りを見渡す。

「騎士様……ハヤト様!!」

貴方のおかげです。とフランが涙ながらに訴え隼人の体を強く抱きしめた。彼女の細腕が出来る最大限に力強い抱擁。

「こんなにもぼろぼろになって……本当に貴方という人は……でも！でも！」

「生きていてくださって……ありがとうございます。」

隼人の体を抱きしめたままのフランが、彼の耳にそう囁くのが彰人と沙雪にも聞こえた。その声にくすぐったそうに隼人が目を細め、フランを見つめる。見つめ合う二人。その目は主従という関係を超えた強い繋がりを感じさせた。

お邪魔虫だと感じたのか、彰人と沙雪は互いに目配せしコックピットから離れた。

数時間後、華やかな雰囲気のまま夜を迎える城下町。コロニーの落下阻止成功の祭りが開かれていた。その祭りの喧騒の中を彰人達は歩く。

様々な品を取り扱う出店が街を賑わす。果物、肉、酒と物資の少ない赤国にとっては豪華な出品だった。人々が幸せそうに城上町を歩いている。

この人達の命を自分は救ったのだと思うと、彰人は自分が誇らしく

なった。以前隼人がこの世界に恋をした。という気持ちがあつて理解出来た。彰人は隣を歩く沙雪に問いかける。彼女は祭りの出店に気を取られていたのを一旦やめ、彰人の方を向いた。

「俺たち、“向こう”に帰れるのかな？」

「ああ、当然だ。帰れるさ。」

「だといいたが……隼人はどうするだろうか。」

「彼はこの世界で生きるだろうか。」

「……だよな。」

「彼はこの世界に必要なだ。何より、あの子にとつてもな。」

そうやって二人で会話をしながら歩いていると、向こうにフランと隼人の姿が見えた。隼人は傷一つない身体で元気そうに見える。服も替えていた。二人の楽しそうな、そして心から幸せそうな様子で歩く姿を見ていると、彰人は複雑な心境になった。

（文香に会わせてやれないだろうか。）

隼人がこの世界で居場所を見つけたのは嬉しい。だが心の何処かで彰人は二人の再開を願っていた。

弟の帰りを待つ文香を慰めてあげたかった。そんな事を考えていたら、隼人が彰人達に気づいたのか笑顔のまま手を振りながら此方へとやって来る。

「彰人さん！沙雪さん！探しましたよ。」

「お二人には、お見苦しい所を見せて申し訳ございません。」

隼人の隣でフランが少しだけ恥じらうかのように顔を俯ける。昼の様子を見られたのが恥ずかしかつたのだろうか。その仕草を愛おしそうに見つめる隼人だが、フランはその視線には気付いていないようだ。

「大丈夫だ。隼人、フラン。色々あったけど、作戦が成功して良かったよ。本当に良かった。」

「……………ここでは驚くことだらけだ。」

彰人も沙雪も、隼人の活躍を喜ぶ。それと同時にどうしても拭いきれない考えが頭をよぎる。

「隼人、今暇か？二人で少し……話さないか。」

その想像を再度確認するために、彰人が隼人に問いかける。いいですよ。という隼人の返事を機に二人で歩き出す。

「フラン。ちょっと大事な話があるから、隼人借りるな。」

後ろを振り向き、フランに一応の断りを入れる。

「はい……………いえ、私に断りを入れる必要はございませんが。」

「フラン君、私もこの世界の事を知りたい。彰人達の話が終わるまで付き合わないか？」

隼人を取られたフランがやや複雑そうな様子を見せる中、沙雪が助け船を出した。人嫌いな印象があった彼女の気遣いに彰人は一瞬

驚くが、今はありがたかった。

フランを沙雪に任せ、彰人と隼人は城下町を歩いた後、郊外に來ていた。備え付けられた長椅子に座る二人。その二人の顔を風が撫でる。

「風が、気持ちいいな。」

「ええ。この時期は寒くも暑くも無い、本当に良い風が吹くんですよ。」

「……この世界の事、本当に詳しくなったんだな。なあ隼人、唐突だけどお前に聞きたいことがあるんだ。話してもいいか。」

「はい。何でしょうか。」

真つ直ぐな視線を向ける隼人。その瞳は輝きに満ちており、この世界に生きる人間の瞳だった。

その瞳を見据えて、彰人は言葉を絞り出す。

「お前、元の世界に帰りたいと思ったことは無いか？」

隼人の態度を見ていれば聞かずとも分かる質問。愚問とも言えだが、隼人は一蹴せず考え込む。その仕草には彼の誠実な人柄がにじみ出していた。隼人が、悩んだ後に答えを出す。

「無いといえば、嘘になりますね。」

「だったら……!」

「彰人兄さんは、この世界が好きではありませんか?……僕は好きです。」

隼人が言葉を続ける。

「確かに、元の世界は平和で食べ物も生きるために必要なものも当たり前のようにあります。この世界では実現出来ない事も向こうでは出来ます。……この世界は彰人さんの目には不毛に映るのかも知れません。」

「……それでも僕はこの世界が好きです。フランや仲間達が命をかけて守った世界だから。僕にとつてはここが守りたい世界だから。というのは、理由にはなりませんか?」

――隼人がこれまでの4年間で出した結論だった。

「姉さんには手紙を書きます。彰人兄さんには、僕の事を伝えて欲しいんです。僕がここで生きる理由を。姉さんは少し変わった所がありますけど、優しくしてあげて下さい。」

一息にそういい終わると、隼人は椅子から立ち上がる。立ち上がるとはにかんだ笑顔を彰人に見せた。その笑顔は幼い頃に遊んだ隼人の笑顔だったが、かつてと違うのはその顔に責任と覚悟が混じり刻まれている。この世界で生きるという覚悟が。

それは彰人にも理解出来た。だが改めて言葉で伝えられ理解出来たからこそ彰人はそれ以上の追求はやめた。隼人が此方の世界で生きる覚悟を尊重するべきだと思ったからだった。

「分かった。隼人……お前はすごいよ。」

素直な気持ち言葉を表す。隼人もその答えを聞いて思わず嬉しそうに目を細める。

「彰人さんほどじゃ無いですよ。彰人さんも向こうの世界で生きてく

ださい……姉さんをどうかよろしくお願いします。もしも泣かせたら、彰人さんでも許しませんから。」

その眩しい笑顔を目に焼き付けた。彰人はここで別れたら、もう隼人と会う事は無いのだと直感した。

(世界は違っても互いの現実を生きること。それが大事なんだな。)

隼人の言葉を聞いて、彰人の中でも覚悟が決まる。彼にも、もう迷いはなかった。

次の日、赤国の城内で各国のガンダムパイロット達が一堂に会していた。カイネや小狼も本来は任務があったのだが今日彰人達が帰る事を知り、赤の国に遠くからわざわざ来たのだ。

「折角面白い奴が居ると思ったら、もう帰っちゃまうのか。」

小狼が頭をかきながら優しい声で話す。どうやら、コロニーの一件から、本当の仲間として認めてもらったようだ。沙雪の方をチラチラと見ながら話をするのが気になるが、あえて深くは追求しない。

(ちよつと面倒。と思うのは悪いだろうか。)

沙雪は小狼の好意を嫌がりはしないものの、少し面倒だと思うのも事実だった。その様子を知ってか知らずか、次にカイネがのんびりとした声で話す。

「アキトさん。サユキさん。今までありがとうございます。僕も白国の王子として頑張ります。」

カイネはこの数日間です少背が伸びたように見えた。何にせよ、カ



イネが今後白の国にとって未来を背負っていく重要な人物になるだろうという事は想像に難く無い。その自覚がこの数日でできたのか、それは判断ができないが、泣き言を訴える少年には見えなくなっていたのは事実だった。

「二人ともありがとう。短い間だったが、俺も二人とも一緒に戦えて光栄だった。」

彰人は二人と握手をする。握手という文化がこの二国にあったのは定かでは無いが、どうやらニュアンスは伝わったようだ。

「私からも一言、言わせてくれ。」

沙雪が男同士の友情に割って入るかのように言葉を発する。

「私がここに来たのは偶然に近い。だが、こうして共に戦えたのを嬉しく思う。」

あの人嫌いで、こうした場でも話す事が無かった沙雪がこうして喋るのは意外だったが、何か変わるだけのきっかけがあったのだろうか  
と彰人は考えた。

あの頑なな沙雪を柔らかくした人物―そこまで考えて、ある答えを予想したが、それを確認するのは向こうに帰ってからになるだろう。

「小狼。君のことは……すまないが。」

「それ以上言うな。分かっている……だが、それでも俺はお前を愛している。この気持ちが変わる事はない。」

真剣な眼差しで沙雪を見つめる小狼にはある種の美学を感じざる

をえなかった。最初の頃は粗野な男だと思っていたが、知れば知るほど彰人は小狼の事を気に入っていた。

(俺も帰ったら、きちんと自分の言葉で伝えないとな。)

小狼は表現が不器用だからこそ、素直に伝える事をあえて選んでいくように見えた。

「彰人様、そろそろお時間が。」

フランが長引きそうな会話に釘を刺す。彼女には事前にも元の世界に帰る方法を沙雪から伝えている。勿論、異世界という情報はフランにのみ伝えていた。彼女も最初は信じなかったが、彰人と沙雪の“ガンダム”やプラススキー粒子。そして何より隼人の事を説明すると、合点がいった様だ。

「既に準備は済ませてあります。後はお二人の話を信じるしかありませんわ。」

フランに促され、城内から外にある滑走路へと向かう。沙雪が総一郎から伝えられた方法は、意外にも単純なものだった。

プラススキー装置を向こうの世界で起動させると同時に、沙雪の持つサイコデバイスを同期させる。

後は適正を持つ人間の意識が肉体という“座標”を通じて世界を渡るそう。サイコデバイス以外には、ガンプラという“器”が更に必要であり、今回は大破したオルタナガンダムの代わりにペーネロペーを使用する。白く翼が生えた美しいペーネロペーの姿は渡り鳥を彷彿とさせた。

「隼人、本当にありがとう。お前がいなかったら、作戦は完遂できなかった。世界を救ったのはお前だ。」

「僕は、僕にできる事をしたままでですよ。」

そう言っただけに向かい合う。思えば長い旅だった。隼人が生きていたことも驚きだったが、恩人であった未来を倒しその結果として二つの世界を救えた。という事実も、彰人を一回り成長させるには十分だった。

感傷に浸っていると後ろから歩いてきた沙雪が最早慣れた様子でペーネロペーのコックピットハッチを開き、中に入れと彰人を手招きする。

「名残惜しいが、そろそろ時間だ。」

隼人の目を見据えながら、彰人は言う。

「はい。本当にありがとうございます。手紙も、どうかよろしくお願いします。」

隼人も彰人の目を見つめながら答えた。

オープリズムの様に澄んだ瞳。ガンダムに憧れた男。そんな純粋な心の持ち主の瞳だった。

最後に二人は思い切り強い握手を交わした後、彰人はコックピットの中へと入る。もういいのか。という沙雪の言葉に軽く返事をしペーネロペーを空へと飛翔させる。

夕焼けの空に、白鳥が羽ばたく。機体の各部からプラフスキー粒子を発し、更にサイコデバイスを起動させる。蒼い光が辺りを優しく照らす中、彰人は彼方の世界への帰還を願うと同時に、隼人の行く末を案じていた。

(どうか、幸せになってくれ。)

彰人は最後まで、後ろを振り向かなかった。

ペーネロペーが空の彼方へ消えるのを見届けたガンダムパイロット

ト達。小狼とカイネが何が起きたのか理解できずあっけに取られている中、隼人とフランは将来を考えていた。

「お兄様、行ってしまいましたね。」

フランが目を細めながら話す。

「ああ。最後まで、強い人だったな。」

「ええ。ハヤト様が憧れたのも理解出来ます。」

「僕も彰人兄さんみたいに、みんなを引っ張れたらいいんだが。」

「……ハヤト様なら、出来ます。」

フランが覚悟を決めたかの様に両手を組みながら隼人に微笑む。

「私も、最後まで貴方のそばにいます。」

隼人の目を見つめながら強くはつきりと答えた。

その言葉には多数の意味が込められていたが、隼人がその意味を理解するのは、まだ先の話になりそうだ。

「うん。これからも宜しく。フラン。」

その言葉と共に天音隼人は将来を決めた。

彼等の長い長い戦いは、これから始まるのだ。

プラフスキー粒子の蒼い光が唐突に消え、辺りが暗黒に包まれる。必死で手を伸ばすが、何も触れる感触は無い。まるで暗い夜の海に突然放り出されたかのような猛烈な不安と恐怖が彰人を襲う。

(ここは？まさか失敗したのか？)

周囲を見回すも、手がかりも何も無い。沙雪の姿も、ペーネロペーのコンソールも見当たらない。

「沙雪!? 一体どうしたんだ?」

暗闇に彰人の声が響いた。だが返事は無い。

時間も空間も全てが暗黒に支配される中で、彰人はひたすら手掛かりを探す。向こうの世界に帰る何かを。すると、彰人の頭上から一筋の光が降りてきた。その光に近づき手を触れる。暖かく、柔らかい熱を持った光。彰人はこの温もりに覚えがあった。

(この感触と温もりはまさか……。)

エリックと喧嘩した日、供養祭で触れた温もり、そして初めて結ばれた時の柔らかな感触。男には無い触れるだけで安心する肌の柔らかさと暖かさ。この感触を、彰人は知っていた。懐かしさのあまり涙が出ると同時に、その光に手を伸ばした。

瞬間、暗闇が晴れ光が辺り一面を照らし出す。

天照の様な光の奔流に包まれ、あまりの眩しさに瞳を閉じた。

「文香……?」

目を開くと、そこには見覚えのある世界が広がっていた。白く清潔な部屋だ。恐らく病室だろう。辺りを見渡す前に、彰人は手に温もりを感じていた。

その温もりに顔を向ける。

「彰人くん……おはよう……! おかえり……なさい!」

文香が彰人の顔を覗き込んでいる。文香の目からは涙が流れ、流れ落ちた涙が彰人の頬を濡らす。

「文香……俺は……。」

寝たきりの体でうまく動かせないが、それでも文香に手を伸ばした。伸ばした手が優しく包まれる。

「帰って来たんだよ……また君に……会いに。」

掠れた声を無理やり絞り出す。身体は相変わらず動かないが、それが何だと言うのか。彰人は両手を広げ文香の体を強く、強く抱きしめた。

（ああ……ここだ。ここが俺の生きる世界だ。帰ってこれたんだな。）

彰人は文香の温もりを感じながら意識が途絶える。身体を無理に動かすすぎたのだ。力を無くした身体が彼女に寄りかかるが、文香も彰人の体をベッドに優しく横たえた。

「こんなに待たせるなんて……ばかじゃないの。本当に……心配したんだから。」

すうすうと寝息を立てる彰人の横顔を見つめながら、文香は泣きながら笑った。文香が浮かべるその笑顔は、かつて彰人が求めた笑顔だった。



## 最終話 『プリズムの瞳』

冬の寒さが僅かに残る3月。道路を覆っていた積雪が徐々に溶けていき、新潟市内でも各地で桜が咲き始めていた。春の匂いが花をくすぐる。冬が終わり春という新たな年の始まりが訪れる。それと同時に瞳を持つもの達の一つの旅が終わりを迎えようとしていた。

1-3月の春、神取彰人は将来を考えていた。

「はい。それでは進路表を後ろから集めてくださいね。」

彰人は柘先生が進路相談のために配布したプリントを集め眺めた。彰人達は春から高校3年生になる。進路を決めるにはやや遅かったが、彰人にとっては丁度良かった。「こちらの世界」で彰人が目覚めてから数週間が経っていたためである。倒れてから数週間、この大事な時期の遅れを取り戻すための労力は相当なものがあつたと後に彰人は総一郎達に語る。

目覚めてからも、色々なことがあつたと彰人は振り返る。彼が目覚めたことを知り子供の様に泣きじやくるエリックと文香を精一杯慰めたこと。母からももう帰ってこないのでは無いかと泣かれたこと。

そして何よりも、総一郎が自分のために奔走しサイコデバイスと柘先生の繋がりを教えてくれたこと。特に最後の話を知った時はずっと驚いたのを覚えていた。

先生は、向こうの世界で先生の半身を殺した事を特に気にしてはいなかった。というよりも、むしろ胸のつかえが取れたと感謝してくれた。

今にして思えば単純な話ではあつた。黒国を始めとした向こうの世界の異変に気付いた柘が、適性のある彰人を向こうの世界に送るために最初から計画していたのだという。というよりも、そもそも技術情報部を立ち上げた本来の目的も異世界へ渡る適性を持つ人間を探



すためだった、というのだから彰人達はなお驚いた。

「そんなラノベみたいなのがあるのですか!？」

「ラノベも何も、君は経験したじやありませんか。それが事実ですよ。」

柊は腹をかかえて心の底から楽しそうに笑っていた。本当に楽しそうな、彰人達が初めてみた柊の笑顔だった。

「いずれ、サイコデバイスが完成の暁には異世界へ渡る事も不可能では無くなるかも知れませんね。そうなれば、是非私も里帰りしたいものです。」

懐かしそうに目を細めた後、また柊は笑った。ちなみに、エリックが総務院高校に留学して来たのは偶然だったのだそうだ。向こうは彰人に会いたいと来たのだが、これも柊にとってはチャンスだった。エリックをあてがい、ガン普拉バトルを辞めかけていた彰人をガン普拉バトルへ引き込むため、あえて泳がせていたのだと言う。

「ボクは彰人とまた戦えて良かった。父親の事を聞いた時、君には済まない事をしたと本当に反省したよ。」

昼休み。エリックが教室の中で椅子に座り、牛乳を飲み申し訳なさそうな様子で彰人達にそう話した。

「また君が倒れたと聞いた時は焦ったサ。“色街”に繰り出していたのを予め知っていたのは不幸中の幸いだった。」

「ん？エリック。なんでお前がそんな事を知っていたんだ。まさか……？」

本来自分と文香しか知らない情報を何故かエリックが持っていることを不審に思う彰人の後ろで、総一郎が飲みかけの牛乳を猛烈な勢いで吹き出した。視線でエリックに何言ってるんだお前！と抗議する。その血相にエリックは慌てた。

「い、いや、偶然さ！文香君から連絡があったのさ！」

「ふーん。文香とお前って、連絡先交換してたんだ。いつの間に。彼の俺が知らないところで。」

彰人が察したかのかの様に冷たい表情を浮かべ、エリックを睨む。とても機嫌が悪い様に見えた。

「この……馬鹿野郎!!」

総一郎がエリックの失態に耐えきれずインフィニットジャスティスを髣髴とさせる蹴り技をエリックに繰り出す。腹を蹴られ、後ろにくの字型のまま吹き飛ぶエリック。見事な回し蹴りだった。

「ごほおあつ!!そ、総一郎くん。暴力は……良くない。」

蹴り飛ばされたエリックが悶絶しながらも総一郎に抗議した。背中を打ったのか、側から見てもかなり痛そうに見えた。

「この間投げ飛ばした礼だ。悪いか？」

「滅相もございませぬ。」

いつの間に覚えたのか。床に頭をこすりつけ土下座の姿勢で謝り倒すエリック。

「あは、あは、あはははは！おかしい！あー！もう無理！あははは

!!」

土下座の姿勢で総一郎に謝るエリックの姿を見て、教室の隅から見ていた椿が笑い転げた。何ごとかとクラスメイト達が振り向くが、椿は笑うのをやめない。その様子を見て、彰人達も思い切り笑った。

エリックが笑った所をまたも総一郎に張り倒され、それに対し抗議したエリックが総一郎の股間を握る。

「おごおおおお!! たまがああああ!!」

総一郎は股間に備え付けられた天然の太陽炉を握られ悶絶する。側から見ても相当に痛そうだ。

「いいじゃん総一郎。どうせ使わないんだし。」

「使ってるよ!!!」

「「え?」」

「あ!! い、いや……。」

総一郎が失言をした瞬間、教室の外から沙雪の大きなくしやみが聞こえた。彰人とエリックと椿はまさかと思いい総一郎の方を向く。顔を茹で蛸の様に真っ赤にした総一郎が、もじもじと恥ずかしげにしていた。何とも気持ち悪い様子だ。

「まさか、お前……!」

「童貞卒業」おめでどう!! お兄ちゃん!

彰人達が衝撃の真実を目の当たりにする直前、教室にある意味で夕イミングよく入ってきた雛美が彼の人に聞かれなくなかった痴態を

叫んだ。

「馬鹿な！総一郎が？あのいるかいないか分からない陰キャ代表のあの桐谷が!？」

「嘘！私、桐谷君は絶対に童貞だと思ってた！」

「これじゃあ“陰”じゃなくて“淫”キヤじゃねえか！」

「何にしろおめでとう！おめでとう!!」

——童貞卒業というパワーワードに教室がどよめく中、クラスメイト達も驚愕の表情で思い思いに彼を眺める。大スキャンダルだった。どちらかというとクラスの中ではおとなしい彼が、女性と関係を持った。という事実を周囲をざわめかせた。

「誰か！誰か助けてください!!」

総一郎が床に手をつき涙ながらに叫んだ。彼の心からの叫びだった。

「どうした総一郎!」

総一郎の声を外で聞いたのか、沙雪が血相を変えて教室に飛び込んだ。だが、それは火に油を注ぐ結果となった。沙雪の姿を見て、まともや教室中がどよめく。

「おお。……こ、この方が。」

「黒髪ロングに黒タイツだと!……素晴らしい。」

「総一郎君の初めてを奪うなんて……！」

教室の男子や女子達が息を飲む。沙雪が誰しも認める美少女だというのが、せめてもの総一郎の救いだっただ。

「お前、大人になったんだなあ……。」

彰人が腕で顔を覆いながら泣いている。心からの男泣きだった。彰人は友の成長に心底感激したと言わんばかりに泣き笑っている。

「あーあ。また僕か。ま、〃彰人よりは〃遅くなっただけどね。」

彰人の様子に対し。不貞腐れたかの様に総一郎が嘆く。彼は彰人を道連れにせんと爆弾発言をかました。一瞬の間を置いた後、彼が発した爆弾発言がクラスの空気という注がれた油に引火し、クラスターのような連鎖反応を起こす。

「なん……だと？神取彰人も卒業していたのか？」

口に手を当て、信じられないと言わんばかりにクラスメイトが驚いている。

「おいおい。まさか父親を亡くして落ち込んでた彰人がそんな不謹慎な事をするわけないだろう？冗談はよすんだ総一郎。」

「証拠なら……ここに……！」

クラスメイト達の声に合わせるかの様に、エリックがある写真を取り出した。その写真は、彰人が2月にホテルへと入っていった姿だった。驚き慄くクラスメイト達。その姿をエリックは眺めていたが、後ろに猛烈な殺気をさつきから感じていた。後ろを振り向くとそこに

は全身から強烈なプレッシャーを放つ2人の姿があった。

「どうやら、マヌケは見つかつた様だぜ。エリック。屋上へ行こうぜ、久々にキレちまったよ……。」

「どうもこの外国人はガンプラバトルの前にリアルバトルをお望みの様だね。」

腕組みをする彰人と総一郎。それに対してエリックも構える。腕を大きく開き、鷲の翼の様に広げる。テレビで見た次元霸王流の構えだ。

「フフツ……雌雄を決する時が来たようだね。」

構えをとりながらエリックが答える。臨戦体制のまま睨み合う両者。その瞳に一寸の曇り無し。

――祭りが始まろうとしていた。

「何を騒いでいるのですか？」

突然、騒ぎを聞きつけた柊が教室の中に入る。何ごともなかったかのようにクラスメイト達は椅子に座っており、沙雪や雛美もいつのまにか姿を消していた。構えたまま固まる3人。

「君達3人は、放課後指導員室に来るように。」

――祭りは終わった。

放課後、柊にしこたま叱られた3人がとぼとぼと新潟市内を歩いていた。部活も休みになり、エリックは父に電話で更に叱られ、総一郎は沙雪に叱られた。

とぼとぼと負け犬の様な3人が、ある場所へと足を運ぶ。その場所とは桐谷脳外科病院だった。中に入ると、総一郎が受付を済ませある部屋へと向かう。

明るく清潔な病室の中に3人が探していた女子が居た。ベッドに横たわり、眠り続ける少年の横に立つ少女。彰人達はその少女に声をかけた。

「文香。学校終わったよ。」

「いろんな意味でね。」

「待たせて申し訳ないサ。」

三馬鹿が文香に声をかける。振り向く文香。その目には、涙の跡がうつすらと残っていた。うつ。と思わず後ずさる三人。流石に先ほどのコミカルな雰囲気を引きずるのは躊躇われた。

「隼人は、どうなんだ？」

「うん。いつも通りだよ。心配してくれてありがとう。」

彰人が文香を気遣う。文香の目を見つめたまま肩に手を触れ、そのままひしと抱きしめる。2人がいようが関係なかった。

「文香に、どうしても話さないといけないことがあるんだ。聞いてくれるかな？」

「うん。何かな。でも彰人、ちよつと恥ずかしいから離れて。2人が見てるから。」

いきなり抱きしめられても困るのか、彰人を引き離すと、3人を部屋の隅に備え付けられたソファに座わせる。ソファのやや硬い感触に尻が痛むが、気にしない。要件は別にあるのだ。彰人は隼人から託

された手紙を手にしていた。あの時あの世界で彼に託されたもの。彼が伝えたかったことがここに記されている。

「文香。もしも隼人が、ここでは無い別の世界にいたと言ったら、信じられるか?」

「……え?急にな何を言ってるの?」

文香には異世界のことをまだ話していない。隼人の事があつたからだった。文香に話を聞いてもらうにはタイミングが重要だった。

「信じてくれなくて良い。この手紙を読んでもくれないか。」

彰人はそう言って鞆から隼人の手紙を取り出し、文香に渡す。独特の便箋で綴られた手紙に、一瞬だけ文香は怪訝な顔をした。

「……分かった。読んでみるね。」

文香が黙々と手紙を読む。読み続けるうちに、明らかに驚愕の表情を浮かべていた。

姉さんへ

姉さん。お久しぶりです。貴方とこうして手紙でやり取りするのは初めてですね。僕は貴方の弟の天音隼人です。今年で16歳になります。彰人さんから話は聞いているでしょうか。突然いなくなり、本当にごめんなさい。

僕は今、姉さんの世界とは別の世界にいます。こちらの世界では元の世界とは大きく勝手が違います。仲間に支えられながら何とか楽しくそして元気に毎日を過ごしています。

幼い頃、姉さんと一緒に食べた東洋堂の草餅の味が忘れられません。喉につまらせた餅を掃除機で吸われたのを僕は未だに覚えてい



ます。僕には今とても大事な人と、家があります。僕にとつては大切な居場所です。恐らく、姉さんの世界には戻れないかも知れません。だけど、どうか心配はしないでください。僕はどこにいても、姉さんの弟です。それだけは変わりません。どうか父さんや母さんにもよろしくお願いいたします。

天音隼人

「この字……隼人の字だ。でもどうして？何でこの手紙には隼人と私しか知らないことが書いてあるの？」

「文香。落ち着いて聞いてほしい。」

動揺する彼女を彰人が優しく手を握り落ち着かせた。立ち上がるうとする文香だったが、落ち着いたのか再びソファに座る。彼女が気を落ち着かせようと、大きく深呼吸をした。

「隼人は、生きているんだ。ここではない別の世界で。」

「嘘？」

「嘘じゃない。」

「でも隼人はここにいるよ。」

「隼人は特殊なんだ。それも含めて説明したい。いいかな。」

「うん、大丈夫。ちゃんと最後まで聞くから。」

彰人達は話し続けた。この世界とは別の世界で生きる隼人のことを。向こうの世界を平和にするために日々戦い、生きていたこと。共

に戦う仲間がいたこと。

ーそして、大事な女性がいたことを。

全て話し終わると、文香の瞳から涙が一筋流れた。腕で目をこすり、これ以上泣かないように努める文香だったが、彰人が優しく彼女に触れると、堰を切ったように泣き出す。そのまま彰人は文香を抱きしめ、気の済むまで泣かせた。総一郎とエリックが空気を読んで病室から外へ出る。文香のことは彰人に任せておけば良い。2人は彰人を信頼している。

病室の廊下でエリックと総一郎が佇んでいた。廊下は少しだけ冷え、寒い。総一郎が自販機でホットコーヒーを買い、ほらとエリックに差し出す。ちよつとした気遣いだった。

「すまないね。」

「いいよ。これぐらい。それよりもエリック、彰人が目覚めて良かっただろ。」

カシユ、とプルタブを開けコーヒーを飲む。舌に苦味と優しい温もりを感じ、体の硬さが取れるような気がした。エリックはコーヒーを飲みながら総一郎に向き、彼の本当に嬉しそうな表情を眺めながら答えた。

「ああ。そうだね。本当に良かったよ。彼がいないと、技術情報部は始まらないからね。」

「エリックは留学が終わったらどうするのさ。またイギリスに帰るの？」

エリックはこれまでの付き合いの中で、人に興味がないと思っていた総一郎からの唐突な質問に、少しだけ面食らった。一瞬の沈黙の後に考えをまとめる。

「……ん。そうだな。ボクは帰るつもりでいるよ。ファミリーにも会いたいしね。」

「そっか。あと数ヶ月だけど、最後まで宜しくね。」

「君、少し変わったんじゃないかな？」

エリックが不思議そうに総一郎を眺める。その視線には驚きと喜びが入り混じった不思議な眼の色をしていた。

「そうかな？」

「そうサ。会ったばかりの頃と比べて、明るくなった。」

「僕も彰人みたいに、変わろうって決めたからね。」

「……そうか。」

エリックも総一郎から渡されたコーヒーを一口飲む。舌に感じる苦味が心地よかった。彼の気遣いを嬉しいと素直に思う事が出来た。二人で話していると、病室の中から彰人が顔を出す。どうやら話は終わったようだ。

「終わったの？」

総一郎が彰人に尋ねると、彰人は無言で頷く。その様子を見ると上手くいったようだ。

「僕らでも最初は信じられなかったのにね。」

総一郎がエリックを見て呟く。当初はエリックも目覚めた彰人から話を聞いた時は半信半疑だったのだが。まさか世界が二つあるなどとは。しかも、その異世界に行くための装置が開発中なんて。だがエリックは柙と総一郎の3人から話を聞き、信じるしかなかった。

「向こうに行けないかな。」

総一郎がぼつりと呟いた。

「……厳しいな。あの世界には、あの世界のルールがある。」

彰人が少しだけ、俯いたまま話す。隼人のことやあの世界の行く末を考えているのだろうか。険しい彼の表情からはその胸中を窺い知ることは出来ない。

天音隼人があの世界でどう生きているのか。それは彰人の話からでしか知ることが出来なかつたが、少なくとも平和では無い様だ。

しかし天音隼人がいくらかあの世界で生きていくという覚悟を決めていたとしても、遺されたこちらの世界の家族には辛すぎるのでは無いだろうかと総一郎は彼なりに考えていた。

「そういえば彰人、その話なんだけど……。」

突然、総一郎が何かを思い出したかの様に彰人に話す。その話を聞いて、彰人は少しだけだが希望を持つことが出来た。

病院で2人と別れた後、彰人は夜風が吹く新潟の冬の道を1人歩いていく。春になっているとはいえまだまだ風は冷たいが、この寒さは慣れると心地よい。

突然彼は立ち止まり、1人思いに耽る。

（サイコデバイスか……またあの世界に行けるのなら俺は……本当の意味であいつを助けられるだろうか。）

あの世界での日々が頭を過る。隼人やフランに加え小狼やカイネなど、彼等との戦いの日々を懐かしく感じていた。彼等は、あの戦いが続く世界を生きなければならぬ。ガンブラが戦争の道具としての役割しか果たさない世界。作ってバトルするという楽しみが無い世界。

(あの世界を戦いから解放出来るのなら、大事な人を失う残酷な世界を変えられるのなら。俺に出来るのがまだ何かあるのかも知れない。)

別れたはずのあの世界に想いを馳せる。遠野未来の事も、あの人が最後に託したかったものの重みも確かにこの手に感じていた。

総一郎から参考にもらった、大学の案内を眺める。

――神取彰人は、将来を決めた。

それは1人の男としての責任の取り方だった。

始めたことは、終わらせなければならぬ。

次の日、彰人は再び学校を訪れた。ネクタイを締め、襟を正し制服をきちんと着用している。鏡に映る自分の表情はまるで憑き物が落ちたかのような。服装をすっかり整えるのは彼の変わらない流儀だった。家を出て学校に向かう。

通学路にはほつりと土筆が生えており、春の訪れを感じさせた。学校では3年生達の卒業式の準備が始まっていた。準備をする中には彰人の見知った顔もちらほらといたため、軽い挨拶を済ませ教室に入る。

(来年の今頃は……卒業なんだな。なんか不思議な感じだぜ全く。)

まだ一年という猶予はある。しかし、時が過ぎるのはあつという間

だろう。学生のモラトリアムなど一時に過ぎない。教室に差し込む春の日差しが眩しい。その眩しさに、彰人はほんの少しだけ目を細めた。

「おはよう彰人。突然なんだけど……久々に部活、やろうよ。」

教室に入るなり総一郎が話しかけてくる。学校に戻ってからというもの、彰人は部活動に暫く顔を出していなかった。勉強が忙しかつたのに加え、料理同好会の文香も気がかりだったからだ。だが今はその心配は無い。

「いいね。久々の部活だな。放課後、よろしくな。」

「うん！今は一応僕が部長代理だから、鍵用意するね。」

「ああ、ありがとな。」

放課後、彰人は技術情報部の部室の前に立つ。来るのは実に数週間程度だが、何故か懐かしく思えた。総一郎が持ってきた鍵で錠を開け中に入る。

誰かがクツキーを焼いたのだろうか、部室内に仄かに甘い香りが漂う。懐かしい部屋の匂いだ。部屋を見渡すと、GBAのVR用装置に加え新たに購入されたプラスキー粒子発生装置が教室の隅にある。

その中から、彰人はVR用のヘッドセットを手に取りおもむろに被った。そのままGBAの世界にアクセスする。GBAの懐かしい画面が目の前に展開し、思わず彰人はその懐かしさで胸が一杯になった。本当の意味でこちらの世界に帰ってきたのだという実感が湧いたのだ。

(ただいま、GBA。)

同じくG B Aにログインした総一郎が彰人に顔を向けた。一瞬、彼の体が輝き彼の新たな機体がG B Aに立つ。黒と金で豪華に装飾された機体だ。シビュラブリッツガンダムによく似ているが、何処と無く違う。新たな彼の愛機だろうか。

「これが僕の新しいガンプラ！名付けてシビュラブリッツ ゴールドフレーム 改！……なんてね。」

総一郎が満面の笑みを浮かべる。手に持つのは彼の新たな機体。ベースはシビュラブリッツだが、バックパックを始め各所にアストレイゴールドフレーム天ミナの要素が取り入れられていた。武装には沙雪の趣味だろうか。大太刀が握られている。

「中々、シツクで良い機体じゃないか。」

彰人は満足げに目を細めながら、画面に表示される機体一覧から、ある一体のガンプラを選んだ。彰人の身体が輝き、彼のガンプラがG B Aに降り立つ。金と青を基調とした爽やかな色合いの機体。

「これが俺の新しいガンプラ！名付けて……。」

「ちよつと待ったあ!!」

言いかけていたところで、唐突に声が走る。この声には聞き覚えがあった。声の方に振り向く2人。

「ボク達を忘れて2人で楽しもうなんてね。本当に君達は水くさいのサ。」

エリックをはじめとして、彼の後ろには文香、椿、雛美、沙雪などの見知った顔ぶれがG B Aの世界に降り立っている。

「何で……みんなが。」

総一郎が面食らっている。無理もなかった。沙雪が腕を組んでにやにや笑っている。

「この私以外はみんな技術情報部の一員なんだ。このG B Aという世界に来ていてもおかしくは無いだろう？総一郎、君は私が放課後仕事をしている間にも、こんなに楽しそうな事をしていたのだな。」

「ち、違うんだ沙雪！」

「心配するな。今日は私も君の趣味を見てみたくて来たのだ。だからよろしく頼むぞ。」

そういうとまた沙雪はにっ。と笑った。総一郎が趣味の世界でも沙雪に主導権を握られるのは変わらない様だ。

(どんまい。)

彰人は心の中で親友に同情した。

「みんなでボードゲームで遊んだ時、楽しかったよね。だから今日はみんなでG B Aで遊ばないかって、私がエリックさんに相談したんです。」

雛美が慣れないG B Aの世界に戸惑いながらも話す。

総一郎が話すには、雛美はゲームをやったことが無いそうさ。

「今日は彰人が好きなガンダムの世界に私も来てみたの。意外と怖くないんだね。」

「まあ、ガンプラ以外は普通のM M Oだからな。」



彰人にとっては、文香がこの世界にいるのは新鮮に映った。リアルの世界でもG B Aの世界でも、彼女の可愛さは変わらないと彰人は改めて思っていた。

その表情を読まれたのか、総一郎がニヤついているのを彰人は見逃さなかった。刹那、彼の頭をヘッドロックする。

「じゃれつくのは後サ。今日のミッションは……！」

「いやエリック。技術情報部の部長はこの俺だ。」

エリックの言葉を遮り、彰人が主導権を握る。技術情報部部长としての誇りだった。彰人はすう、と一呼吸起き、言葉を発する。

「みんな！これより技術情報部はG B Aでの活動を開始する！準備はいいか！」

みんなが一斉に準備完了と知らせ、その言葉を合図に彰人達はガンブラを起動させる。なお、ガンブラは男女1組で乗ることにした。G B Aという舞台で、彼等の新しいガンブラが空を駆ける。仮想空間だからこそ誰にも縛られない自由な世界。その世界はどこまでも広がっていた。

(ここが俺の生きる世界。)

文香の横顔を眺める彰人の瞳がきらりと輝く。

その瞳の色は、まるでプリズムの様に綺麗だった。



「フラン！敵はどっちの方角だ!?!」

異世界の真つさらに晴れた大空を、紅龍が駆ける。

「騎士様！北に3！南東に2！距離は……!!」

「了解！それさえ分かればっ！」

——紅龍、ムラサメガンダムは人型に変形すると、両手でライフルを構え敵を狙い撃つ。ライフルの弾に胴体を穿たれ、地上へと落下する敵機。技量の差は歴然としていた。

「騎士様！後ろです！」

ニュークリアスからの回線越しにフランが叫ぶ。後方に迫るガフランがムラサメガンダムを切り裂こうとビームサーベルを展開する。

「させるかよっ！」

そのムラサメガンダムを護るかのように、黒の機体——ガンダムモナクが大太刀でガフランを袈裟斬りにした。二つに両断され爆発するガフラン。

「油断すんなッ！」

大太刀を振り回し、再度構え直すと共に小狼が吠えた。

「助かった！すまない！……だが。」

言い終わる前にムラサメガンダムが手に持ったビームサーベルで、ガフランのコックピットを貫く。沈黙する敵機体。

「行くぞ！まだ敵が残っている！」

「ハッ!!すぐに片付けてやるぜ!」

「二人とも!僕も忘れないで!行きますよ!」

紅と青と白の機体が異世界の空を飛ぶ。この世界はまだまだ戦いが続きそうだ。

鏡合わせの様に、二つの世界は営みを続けていく。2つの世界が交わる日はそう遠くないのかも知れない。だが今はそれぞれがそれぞれの現実を生きようと強く誓い、そして願う。二つの世界をプリズムの光が照らす。その煌めきは命が照らし出す光であり、未来という可能性を持つ光だった。

――未来は、ここから始まる。

プリズムの瞳 第一部 完

Ex. story……「After light」  
Side Story 「遅咲きの春」

「はあ。」

放課後、僕は帰り道を歩きながらため息をついた。4月になって日が長くなったのもあってか、夕日が眩しい。僕は眩しさから逃れるためにうつむく。

「大丈夫か？」

溜息を聞かれたのか、沙雪が僕の顔を心配そうに覗き込んでくる。とても距離が近い。恋人になってからというもの、彼女は以前よりも距離を詰める様になった。

……彼女の白い肌とはつきりとした目鼻立ちは、とても綺麗だ。彼女の瞳を見つめるたびに思う。彰人が眠っていた時、僕の周りの全てがまた壊れてしまいそうになったあの日、沙雪の優しさに甘えてしまった時のことを。

臆病なくせに、弱いくせに、勢いに任せたまま行動してしまう無鉄砲さも僕は持ち合わせているのだと自覚させられた。

「随分と顔が赤いな……ふむ、少し休むとしよう。」

「いや、これは……。」

君のせいだよ。という言葉は僕はぐつと飲みこむ。沙雪と付き合いだしてからというもの、彼女にはどきどきさせられっぱなしだ。女子に免疫が付いたと思っていたのに。ようやく人との付き合いに自信がついてきたというのに、全くこの人は。と思考だけが先走るのを抑えながら僕は沙雪に言った。

「大丈夫。それにもうすぐ家に着くか……。」

途中で言葉が途切れる。一瞬視界が暗く濁り、倒れそうになるのをぎりぎりのところで踏みとどまる。

「……総一郎！」

倒れそうになった僕を見て沙雪が血相を変えてこちらへ駆けてきた。

彼女の冷たい肌が体に触れて少し心地よい……なんて不謹慎な考えを頭から拭い去ると、また気分が少し悪くなってきた。

(駄目だ。ちよつとふらつく。)

3月に彰人が復帰してからというもの、彼と僕は大学進学に向けて必死に受験勉強に取り組んでいた。それこそ、ガンプラバトルなんてしている暇が無いくらいに。何よりも彰人は文系だと思っていたのに、急に理系の方面の大学に進路を変えたと聞いて、僕は驚いたと同時にあの出来事が彰人を変えてしまったのではないかと心配していた。

——異世界。言葉にすると馬鹿らしい。自分で調べるまで、現実にあるのだなんてと僕も疑っていた。

まあ、彰人なら大丈夫だろうとは思うけど、やはり勉強はしないといけないから、彰人と僕は受験勉強に取り組んでいる。かくいう僕も脳外科になる、なんて父さんと約束したものだから、それに沙雪との関係もすっかりしたいから……所謂一つのけじめとして勉強に毎日取り組んでいる。その疲れがこうして時々出てしまうこともある。

「駄目じゃないか！ちゃんと休まないと！」

「う、うん。ごめん沙雪。でも……やらないと。」

よろよろと歩こうとするが、やっぱり駄目だ。足腰に力が入らない。

「ほら、せっかくだから休んでいくといい。」

沙雪が僕の顔を見つめながら、神社の離れの方に僕を引っ張っていき。その手に引かれながら、僕はふらふらと離れに行くのだった。

「どうだ？少しは楽になったか？」

中で横になると、確かに疲れがすう……と引いていくのが自分でもわかる。離れの中にある座布団に体を横たえる僕。どうも少し眠ってしまったようだ。中はひんやりと冷たく、少しだけ寒さを覚えるが、後頭部に柔らかい感触が……感触？

「うわっ！」

「ごらっ！急に動くな！」

びつくりした。沙雪の太ももが直に頭に触れている。俗にいう膝枕だ。制服のスカートから覗く健康的な太腿が妙に色っぽい。

(……なんて冷静に分析している場合じゃない！)

「ありがとう沙雪。体の具合もよくなったし、そろそろ……。」

「まて。」

「はい？」

恥ずかしさのあまり帰ろうとした僕の腕を沙雪が引つ張る。力が強い。彼女の常日頃の薙刀の稽古の成果が、否応なく僕の腕に発揮されている。振り解く事が出来ない。

「君は最近、私に構ってくれないな。」

「……そうかな。いや、沙雪の言うとおりだね。ごめん。」

「謝らないでくれ。私たちは付き合っているのだから。君が勉強で大変なのも分かる、だが少しは相談してはくれないか？」

「……うん。」

確かに沙雪と付き合い始めてから1か月が経つ。それなのにあの日以来、肉体的な接触は持っていなかった。キスどまり。もちろんタイミングは何度かあった。僕の方からそれと無く求めた時もある。だけど沙雪の体の……女性の生理上の問題から先送りするうちに今に至っていた。彼女には悪いと思う。だけど勉強に集中しすぎるあまり性欲が沸いてこないというのも事実だった。

(駄目だな、こんなんじゃない。)

もう一步踏み込むべきなのかも知れない。

「沙雪。」

「どうした？」

彼女の瞳が僕を見つめる。その意志の強さを感じさせる赤い瞳に僕は強く惹かれていた。僕にはない強さを持つ人。それでいて、母の面影を思わせる優しさを持つ人。

内心自問する、僕はこの人に嫌われたくないから一線を越えることを拒んでいたのではないかと、勇気が無かったから勢いで押し切ろうとしていたのではないかと。そんな自分の気弱さが心底嫌になる。

「僕は、君とそういうことが出来るほど立派な人間じゃない。」

「……藪から棒にどうした？」

「……君に、いや君だからこそ聞いてほしいことがあるんだ。」

僕は沙雪の透き通った瞳をまっすぐに見つめながら、言葉を探した。

「……総一郎？」

不思議そうな顔で沙雪が僕を眺める。この瞳に嘘はつけない。事実を明かして嫌われるもの怖い。だけど、僕が彼女と付き合うには、決して避けることは出来ないことだ。それは、父や妹にも誰にも明かしていない秘密、決して許されない僕の罪の意識。

「僕は……母さんを“見殺し”にした。」

「……!？」

沙雪の表情が一変する。無理もない。沙雪と僕の両親は知り合いだからだ。沙雪も僕の母に会ったことがある。母の死を深く聞かなかったのも、彼女の優しさだなんて事は知ってる。

「……僕の母さんの心臓が、昔から弱かったのは沙雪も知っているだろう？」

「詳しく、聞かせてくれ。」

——12年前、僕がまだ5歳だったころ。

「母と僕は一緒の布団で寝ていた。母さんは本当は病院に行かなければならなかったんだけど、僕があまりにもぐずるから、仕方なく一緒に寝てくれていたんだ。僕も母さんがいて安心だった……だけどね、その夜、狭心症の発作が来たんだ。」

話しながら彼女の顔を見る、表情が強張っているのがはつきり分かる。僕は言葉を続ける。

「本当ならすぐに救急車を呼ぶか薬を飲ませれば、母さんは助かったかもしれない……いや助かったんだ。僕は怖かった。痛みにのたうち回る母さんが、うめき声をあげながら苦しそうにする母さんが。」

沙雪が、目を瞑った。その行動に、僕の胸が締め付けられる。

「……僕は逃げたんだ。笑っちゃうよね？僕が臆病なせいで母さんは病院にも行けず、その時助けを呼べばなんてこともない症状で亡く

なっただ。」

「僕は、苦しむ母さんをほおつておいて自分はこのうとうと寝ていたんだよ……次の日、母さんはこと切れていた。苦しうに目を開きながら、胸を抑えたままで。父がその姿を見て慌てて救急車を呼ぶ間も、僕は何も出来なかつた。」

「沙雪、君が好きだと言つてくれた男は……こんな奴なんだ。」

後半は涙声になりながら、僕は沙雪にすべて明かした。これも逃避かもしれない。自分だけ明かして、楽になりたいだけなのかも知れない。だけど、彼女と付き合うのに隠しておく事だけは出来なかつた。「……そうか。」

沙雪は腕を組みながら、瞑っていた目を開け僕の目をまっすぐ見つめている。その瞳が、怖い。すべてを見透かすかのようなその眼差しが、痛くて堪らない。

「君の考えは分かつた。だがそれは……本当に君のせいなのか？」  
「え？」

意外な言葉に思わず僕は固まる。何がなのだろうと疑問に思う僕に構わず彼女は言葉を続けた。

「私も君の母にお会いしたことがある。君に似てとても上品で、お優しい人だつた。」

沙雪が静かに語り始める。僕は黙つてそれを聞くことにした。

「君はお母様を見殺しにしたと言うが、偶然が重なつた事故ではないのか？」

「事故……？」

「君の身を案じて病院に行かなかつたと判断したのもそうだが、そもそも……5歳の子供だつた君に適切な対応を求める事自体が酷な話だ。」

沙雪が気の毒そうな目で僕を再度見つめる。それは哀れみじやない。本当に他者を労わる時に浮かべる彼女の表情だつた。沙雪は言葉をつづける。

「私は、君の社交不安障害の原因が分かつたよ。総一郎……恐らくそれは罪悪感だ。君は母親を見殺しにしてしまったという強い罪悪感



を覚えている。呪いの様にな。それが君を縛り付けている。」

「……僕のせいではないと？」

「一概には言えないかもしれないが、私には君が母を見殺しにしたとは思えないし、お母様が君を恨むとは思えない。」

沙雪が、僕に近づいてくる。僕は動けない。彼女の瞳に吸い込まれてしまったかのような。まるで人形になったかのように身動きが取れず、僕は彼女から目が離せなかった。

「私は……君のそういう情けないところも、隠さない強さも……好きだ。だから、今こうしてここに君と居る。」

沙雪が、僕の体を抱きしめる。ふんわりと、優しい感触と香りが僕の鼻をくすぐる。

「……沙雪。」

「君のせいじゃない。」

沙雪が僕の耳元で囁く。僕の所為じゃない。彼女のその言葉で、僕の心の中の霧が晴れていくかのようにだった。目に涙が滲んできたが、そこまで情けないところは見せられまいと堪える。

「もう一度言う。お母さまが亡くなったのは、君のせいじゃない。」

「……」

駄目だ。と思ったと同時に涙が溢れてくる。止めようと堪えるがダムが決壊したかのように涙が止まらない。

「全く……本当に君は情けないな。」

彼女に抱きしめられたまま、僕は泣いた。情けない姿だが、何故か彼女には見せてもいいと思えた。

ひとしきり泣いた後、僕は沙雪に抱き合ったまま沙雪の耳元で囁く。

「沙雪……今度の休みの日……しよう。」

僕の発言に部屋の中がしんと静まり返る。言ってしまった。言い切ってしまった。自分で言っておいてなんだが、恥ずかしさのあまり顔が熱くなる。僕はその表情から意図を察したのか、一瞬沙雪は驚いた後、また表情を戻す。

「急にどうした。」

彼女は一瞬苦笑いを浮かべた後、下を向いた。

「その……僕たちは付き合ってるんだから。いや、違うな。」  
違う。こんな後ろ向きで一般的なことじゃない。

それはもつとどろどろとした欲望。ガンプラバトルと同じくらいに強い欲求。僕は自身の感情を偽らず、素直に表現すべきなんだ。だから僕は。

「……僕は君とだからしたいんだ。君が好きだから。」

僕は頭の中で言葉を言いかえる。素直に、直球に、好きな人を抱きたい。その欲求をストレートに沙雪にぶつける。嫌がられるかもしれない。変に思われるかもしれない。それでもいい。彼女の顔を眺める。

(この人に釣り合う人間になりたい。)

僕はこの時から、他人の顔色を窺って生きていくのは止めようと決めた。

「やつと言葉にしてくれたな。」

体を離すと、沙雪がほほ笑んだ。その笑みを見ていると、とても癒される。

「嬉しいよ。君のその言葉が聞けて。」

照れたように笑う彼女を見ると、かわいい。と思えた。この人を好きになって良かったと、そんな素直な感情が僕の心を包む。

「……あのさ、今日は。」

「ああ、今日はもう帰って休むといい。ちよつと寂しいけどな。」

「うん。そうする。だけどその前に。」

僕は沙雪にゆっくりと近づいて、もう一度彼女の体を強く、強く抱きしめる。柔らかい彼女の体の感触と僕に比べてひんやりした体温と、何よりとても。

「いいにおいがする。」

「急になんなんだ……全く。」

その言葉を聞きながら、彼女の体を抱きしめたまま彼女のおいをかぐ。僕は女の子に免疫がない。僕はおいに弱い。だから彼女の

においが、温もりが、彼女の全てが愛おしいと思う。

「君が私のことを好きなのは分かったから、離れてくれないか。その……。」

彼女の言葉を聞いて思わず体を離れた。良く見ると、沙雪も顔が赤くなっている。その様子を見ると僕も嬉しかった。

「ごめん。ちよつと調子に乗りすぎた？」

「そんなことは無い。むしろ君は私に対してそういうことをしなさいぎだ。」

「雛美とも話したが、本当に君は私のことが好きなのかちよつと不安だった。」

「……そ、それは、いや確かに僕が気弱すぎたのは自覚してるし悪いとも思っているし。」

「言い訳はいい。全く、私じゃなかったら愛想を尽かされていてもおかしくはないんだぞ。」

「申し訳ございません。」

「だから謝るな！そういう所だぞ。」

まずい。スイッチを入れてしまったかと後悔するころにはもう遅い。

「総一郎。ちよつと座れ。帰る前に君に言いたいことがまだある。」

「……はい。」

沙雪の剣幕に押され、しぶしぶとその場に正座する僕。ああ、さつきまでいい雰囲気だったのにと後悔しながら僕は沙雪のお説教を聞いた。

……僕が解放されたのは、もうすっかり日が沈んで暗くなったころだった。明日も学校があるから泊っていくわけにもいかず、しぶしぶと帰り道を歩く。

（彰人が時々言っていた、現実には救いがたいというセリフが身に染みるなあ……。）

沙雪は怖いところもあるけど、クラスメイトから尻に敷かれていると噂されているけど、それでも僕は彼女の事が嫌いになれなかった。彼女の温もりと感触がまだ手に残っている。

(これって、惚れた弱みって奴だよな。)

新潟の春は暖かい。その暖かさと同じくらい僕は胸がほんのり暖かくなるのを感じていた。おそらくこれが人と関わる。ということなんだろうなと一人納得する。

(僕は君と出会えて良かった。)

雪が解け、春が始まる。遅咲きの春でも春が訪れることは良いことだ。未来はどうなるのか分からない。だけど、だからこそ、誰かと一緒に過ごせるのが嬉しいことなのだ、と思う。僕は顔をにやけさせながら帰路を急いだ。

遅咲きの春 完

## Side Story 「あの日、あの時」

「何なんだ？全く。」

ボクは愛機のシルベリアアストレイの表面処理をしながら一人呟く。総一郎曰く、彰人がバトルの途中に変な目にあつたらしい。何でもバトルの最中に体がしびれたあの、感覚が狂わされたのだそうだ。「ハッーそんな馬鹿なことが。」

流石にジョークの類だと思つたが、ボクは昔ガンプラバトルをやつていたという男から不思議な話を聞いたことがある。‘アシムレイト’という現象に似ているなどボクは思った。何しろ勘は鋭い方だからね。

「アシムレイト……か。」

何でもバトルの最中にガンプラと自分の意識が繋がり機体の操作が敏感になるのだという。馬鹿な話だ。と最初は笑い飛ばしたが、何でもガンプラバトルの初代チャンピオンをはじめ、そういった能力を持つ人間は多々いるらしい。何より昔はガンプラバトルの為の強化人間紛いの技術まであったというのだから驚いた。そんなアニメみたいなことが現実にあるなんて！

話を聞いた時、ボクは興奮したのを覚えている。そして興奮しているところを椿に見られて引かれたのも覚えている。全く嫌な思い出だ。

（ふう。これでよし、と。）

ボクはシルベリアアストレイの改修を終える。ガンプラバトルで傷ついた機体の修復にはパテとプラ板で補修。剥げた塗装を再塗装。さらに隠し腕と各関節の可動域を拡大するためにやすりで装甲を少しばかり削り整える。彰人との再選に備えて作った機体。名付けて、シルベリアアストレイ・改だ。

（ふふ。次こそはボクが勝つよ彰人。だから君が消耗することは無いんだ。）

「何を一人でにやにやしているのですかエリック。気持ち悪い。」

「うっ！っ、椿ッ！いつからそこにいたのだい？気持ち悪いとは失礼

じゃないか。」

誤算だった。まさかガン普拉を、しかも彰人のことを考えているところを椿に見られるとは。

「椿、まさか君はミラーージュコロイドを習得したのかい？」

「は？馬鹿な事を言っていないでそこどいてください。掃除の邪魔です。」

椿は無表情のまま冷たく僕をあしらうと掃除をはじめ。くっ！こ、この女。許せん！と思うのなんて嘘嘘。ボクと椿の間柄だからこそ、こういったやり取りが出来るのさ。それに何よりボクは気が長いからね。この程度で腹を立てるほど馬鹿じゃないさ。

椿の両親が事故で無くなつて以来、ボクのパパが彼女を養子として引き取ってから彼女とは本当のファミリーの様に接しているつもりさ。だけど彼女が頑なにメイドとして働きたいなんて言うものだから、こうして疑似的に雇用しているというのに。椿のわがままを黙認しているというのにこの女は全く。

許せないけど、ちよつとかわいいからつい許してしまうなんて事は断じて無い。実際彼女の家事のスキルは高いから、こうして大目に見てあげているだけなのさ。ボクは器の大きい男だからね。ボクは掃除を続ける椿に話しかける。仕事中に声を掛けられるのを嫌がる彼女だけど、ボクにも引けない理由がある。

「椿、君の頼みでも今はどけないのさ。ボクは彰人との再戦の為に機体をつくらないといけないからね。」

「またガンプラですか。いいですけど、ほどほどにして下さいね。」

「ああ。理解してくれて嬉しいよ。」

「はいはい。」

「……椿。」

「何ですか？」

「彰人の事、どう思う？」

「彰人様……ですか。まあ、いい男の子だと思いますよ。顔も、性格も。エリック様と違って女の子のために何が出来るかを考えることも出来ますし。」

「最後のは心が痛むから記憶から消すとしても、やはり君から見ても良いやつに見えるか。」

「ええ。彼は良い男です。この間はつきりと分かりました。」

「あの変なボードゲームの時か。」

「あの時、冗談で彰人君に色仕掛けを掛けてみたのですが、彼は私の意図を理解した上で拒んでいましたよ。それはきっと文香さんを愛しているから。」

「彼は一人の女の子を愛せる男です。誠実で、それでいて優しい。女はそういう優しさを持つ男に惹かれるものです。」

「そ、そそそそそ、そんなことしてたのかい!!?」

「気づかないあたりが、貴方と彰人君の違いですよエリツク。」

くつくつと椿がおかしそうに笑う。その悪戯つ子の様な表情がボクを狂わせるのに、当の本人はその事に気づいていない。

（く、くそう。ガン普拉バトルだけでなく、女の子の扱いでもボクは彼と同等だというのか。流石はボクのライバル……器が大きいのさ。）

この話は深入りするとやけどしそうなので、話を変えることにした。

「椿、実は彰人が困っているらしいんだ。」

「また貴方のせいではなくて?」

「その話はやめてくれ。その話はボクの心に効く。」

「反省しているんですね。彰人君に怒りをぶつけたこと。」

「ああ。まさかあんな事情があるなんて知らなかったのさ。」

「反省が出来るところは、私は好きですよ。」

「嬉しいけど、今はそういう話じゃない。」

ふう、と一息つく。ちよつと休憩しようかなと思った矢先に、椿が紅茶を煎れてくれた。こういうさりげない気遣いが本当に優秀な女なんだという気がする。椿の煎れてくれた紅茶を一口飲む、ダージリの香しい香りがボクの鼻を刺激する。ボクの好きな紅茶だ。そしてボクの好みを知ってくれているのも、とても嬉しい。紅茶を飲みながら、ボクは考える。

（彰人の体の電流……まさか、アシムレイトなのか?）

ボクは思い立つと同時にグランパに電話を掛けた。グランパもガンプラバトルの経験者だったから、昔の事情にも詳しいだろうと思っ  
て色々尋ねた。結果から言えば、アシムレイトという眉唾な能力は現  
にあつたらしい。グランパが言うには、ボクのシルベリアアストレイ  
も接近戦特化機だから、もしもボクがアシムレイトを使えたら更に強  
くなるのだそうだ。だけど。

「ボクはそんな能力に頼らなくても君に勝つつもりさ。そうだろ？」

愛機のシルベリアアストレイを眺めながら呟く。もちろん椿に聞  
こえない声で。アシムレイトなんてレギュレーションぎりぎりの能  
力に頼るまでもない。ボクはボク自身の力で純粹に君に打ち勝ちた  
い。それが彰人のオルタナガンダムに対する敬意だ。

そんな事をのんびりと考えていたところが懐かしい。人形供養祭の  
前日、ボクは目の前にいる変わった格好をした少年を眺めながらこ  
う言った。

「君が夜のGBAの支配者と言われている……ん。なんて読むんだい  
？」

「燈夜。トウヤといいます。エリックさん。」

「なぜ僕に興味を持ったのだい？」

「貴方のシルベリアアストレイのフルアーマーが好きだからです。僕  
の、憧れだからです。」

「そうか……。嬉しいさ。それなら、一緒に戦うかい？」

「ええ。是非。神取彰人さんとも戦ってみたいです。」

「君も同じなんだな。」

何故トウヤと名乗るこの少年が人形供養祭に来ているのか、そして  
何故ボクに興味を持っているのかは謎だが、その意志の強い瞳は信じ  
るに足る人物であることは分かった。少なくとも、ボクが嫌いなタイ  
プでは無い。だから一見怪しく見えるこの少年を信じようと決めた。

人形供養祭から数日後、今度は、彰人が眠ったまま目覚めないとい  
う話を総一郎から聞いた。まあ、ボクは既に彼らが一線を越えたのを



知って所謂そういうこと何だろうなと思っていたが、どうも事態は重かったようだ。

文香クンの弟さんの隼人クンと同じように、眠ったまま目が覚めない。植物状態になってしまったのだろうが、ボクは信じている。彰人は目が覚めてまた何時もの様にボクとバトルしてくれるって。確信なんてない。根拠なんて微塵もない。

(だけど、彰人は強い人だから。きつとまた、戻ってきてくれる。)

あの世界大会で彼が見せてくれた強さ。ガンプラバトルだけじゃない。彼はどんな状況でも諦めない強さを持っている。だから、きつと彼は戻ってくる。ボクは確信していた。そしてその確信は間違っていないかった。

彰人が目覚めてから数日。ボクは彰人が療養している桐谷脳外科病院に足を運んだ。この潔癖なまでの清潔さは総一郎らしいなと思う。廊下を歩いていると、偶然総一郎と会った。この間投げ飛ばしたせいでちよつとだけ会うのが

気まずかったけど、ボクは先にその事を総一郎に謝る。大人だからね。

決して椿にきちんと謝るべきですよとかあんなに真面目に取り組んでいる総一郎君に対してなんて対応を取るのですかとか怒られたからじゃない。ボク自身の意志さ。

「総一郎。この間はごめん。ボクもどうかしていた。」

殊勝な気持ちでボクは総一郎に謝る。総一郎は一瞬驚いた顔をした後、やさしく微笑んでこう言った。

「僕のほうこそ、いきなり掴みかかってごめん。彰人と君の関係は知っていたはずなのに。だからさ、今度彰人とまたG B Aで遊ぼう。」

な、なんて良いやつなんだ。ボクは内心感動する。あのおどおどしていた総一郎がこんなにはつきりと意見が言えるだなんて。流石彰人の友人だとボクは感心した。総一郎に案内されてボクは彰人の病室に向かう。病室では、文香クンが彰人の顔を愛おしそうに撫でていた。そして穏やかな寝息を立てながら眠り込む彰人。その表情は満ち足りている。

彰人と文香クン。二人の関係は本当に愛し合う恋人そのものだ。一緒に来た椿がはつと口に手を当てている。分かる、分かるよ椿。あの二人に僕たちが入り込む余地なんてない。

ボクも君とあんな風になれたらいいなと思うけど、きつとボク達は今の関係の方がいいのだろうね。ボクは抜けているけど、それくらいはわかるさ。

「総一郎。ありがとう。彰人の顔が見れたから帰るさ。」

「え？いいの。まあ今は……文香さんが来ててあんな感じだからね。」

「入り込めないさ。あの空気は。」

「だよ。椿さんはどうするの？」

「私は、二人の元気そうな顔が見れたので十分ですよ。」

椿も空気を読んでくれたのか、帰ることに賛同してくれた。いや。ボクが空気読めていないと彰人に言われたこともあったけどさ、今はちよつとは変わったかな？

病室の帰る途中、頬を撫でる風が暖かい。どうやら春の兆しが表れたようだ。椿が昔言っていたが、日本の四季は確かに美しい。椿の名前の由来も、花が由来なのだと聞いたことがある。

「イギリスの景色も美しいですが、日本もなかなかのものですよ。」

昔ボクにぽつりと漏らしたことがある。椿のその表情から彼女がややホームシックになっているということは察することが出来た。だからボクは日本に来た。彰人にも会いたかったし、この四季も見たかった。そして何より……。

「日本の景色は綺麗でしょう？」

椿の髪が、美しい黒髪が風になびいている。確かに美しい。日本の四季もそして何より君も。

「エリック？どうしました？ぼんやりして。」

椿のまつすぐな視線がボクに突き刺さる。

「ああ、ちよつと彰人やガンプラのことを考えていてね。帰ろうか、椿。」

「ええ。帰りましょう。」

ボク達はそうして帰り道を歩き出す。日本にいられる時間は少な

いけど、けど、この美しい景色は一生忘れないだろう。イギリスに帰っても、また日本には遊びに来よう。ボクは改めて決意した。

完

## Side Story 「バトルフェスタ 開幕」

次雪が溶け暖かくなり始めた5月の頃、唐突にその事件は起きた。彰人が放課後に部室でVR機材の調整を行なっていると突然がらりとドアを開けたと同時に、総一郎が息を荒げながら部室に飛び込んできたのだ。

「GBAの大型バトルイベント？」

突然の事態に呆気にとられる彰人を尻目に、総一郎が早口でイベントの概要をまくし立てる。

「そうだよ彰人!!GBAの公式サイトが久々に更新したんだよ!」

「そ、そうか……。」

彰人は目の前で興奮冷めやらぬ様子で熱く語る総一郎に改めて苦笑する。この総一郎がここまで興奮するなんていつ以来だろう、と。彼の話聞きながら手元のガンプラを弄る。あの戦い以来に大破したオルタナガンダムをかううじて復旧させると共に、彰人は新たなガンプラを作りあげた。

名付けて「プリズムガンダム」

眩い金色のフェネクスに蒼い輝きを放つG―セルフのパーフェクトパックを装備させた機体。同じ宇宙世紀の機体同士をミキシングした機体だけあってか、全体的にバランスが整っているのが特徴である。

装備はビームマグナムに加えて近接戦闘用に備えて両腕部にビームトンファー。背部にはビームサーベル2本。後は追加装備に実体

剣のガーベラストレートを装備している。

オルタナガンダムの大きな特徴だった可変機構を廃して機体全般の強度を底上げし、敵のビームを反射するミラーコーティングも施している分、オルタナガンダムよりも頑丈に出来ている。敵のビーム攻撃を数発まで耐えることが出来るがその一方で、サテライトキャノンやバスターライフルといった照射系のビームは防げないのが大きな欠点であった。

(満足のいく機体は出来たが、財布は軽くなつたな……。)

手元の財布を眺めながら呟く。悲しいかな、1000円札が一枚に小銭が少しあるだけだった。HGの機体がぎりぎり買えるかどうかもあやしい。

「で、そのイベントバトル……面白いのか？」

「面白いだけじゃないさ!!今回はGBAで使えるポイントもあるんだよ!優勝チームにはなんと100万ポイント!」

「100万ポイントだって!？」

100万ポイント。確かにそれは魅力的な話だった。GBAの中でしか使えないポイントとはいえ、リアルマネーに換算すると10万円。彰人達のような未成年者の無課金勢には喉から手が出るほど欲しい。総一郎が興奮するのも理解出来た。

「なるほど。」

参加する意味はあるだろう。彰人は腕を組みながらそう結論付けた。

（確かにこの時期、受験があるのに”ガンプラバトル”だなんて不謹慎だとも思うが、それはそれ。息抜きには丁度よさそうだな。）

「よし！参加するか！」

「彰人ならそういうと思ったよ！いいよね文香さん？」

そう言うと総一郎は急に文香の方を振り向きそう伝える。驚いた文香が持っていた筆箱を落とした。

「別にいいよ。私の許可なんて求めなくても……。」

文香が落とした筆箱を拾いながら総一郎に申し訳なさそうに答えた。

「何を言うんだい！彼女さんの許可がないと満足に戦えないだろう！」

「……そういうものなの？」

「そういうもの！」

相も変わらず彼は一人で興奮している。そのどこかおかしい様子を見て彰人は珍しいなと考えにふけた。彼が不審に思うのも無理はない。普段の総一郎はどこか冷めているというか、何事においても我関せず。みたいな所があったのに、沙雪と付き合いだしてから本当に総一郎は変わったなと彰人はぼんやり考えている様に見えた。それから数週間後。

彰人は総一郎、エリックと共に例のバトルイベントに来ていた。椿には嫌な顔をされたが、折角のバトルイベント。ということもありエリックも誘っていた。……だが肝心の彼の姿が見当たらない。

「で、一体この状況は何なんだ？」

2人の目の前には敵、敵、敵。ありとあらゆる敵のガンプラが所狭しと宇宙フィールドで戦いを繰り広げていた。まさに壮観、いや地獄絵図だ。

「おいおいおい！何十体いるんだこれはっ!？」

彰人はビームサーベルを構え、目の前に迫る00クアンタをベースにしたと思われる敵の胴体にビームサーベルを突き立てながら総一郎とエリックに問いかけた。

「す、すごい数だ。ざっと1000体近くは居るはずだ……!？」

総一郎もライフルを乱射しながらいっばいいっばいに応えた。彼のシビュラブリッツ改も本来は乱戦向きでない機体のはずだが、以外にも乱戦に対応できている。というよりも、総一郎は一对一に持ち込むのが得意な様だ。

多数の敵に囲まれても、独特のマニューバで敵を分断し、手に持った大型の鎌で敵を切り裂いている。

「シビュラブリッツ2型改……といったか？」

総一郎曰く、デスサイズとアストレイブルーフレームとブリッツガンダムを組み合わせて作り上げた総一郎のオリジナルの機体だそう。ブリッツのミラーージュコロイドを機体だけではなく、何を思ったのか武装にも搭載させた。そのために手元には一見何も武装が無く丸腰の見える。しかし、対艦ライフルとデスサイズの鎌、そしてビームライフルにランサーダートと武装は豊富だった。非武装だと油断した迂闊な敵を、その見えない鎌で切りつけ撃破している。敵は

自分のガンプラに何が起きたかすらわからないだろう。

「相変わらずやるな総一郎！」

「ありがとう……でも君の方こそ！」

「キミ達！ボクの事も忘れてもらっては困るな！」

突然後方から来たエリックがシルベリアアストレイの下部スカートから隠し腕を伸ばした。前面の隠し腕から展開させたビームサーベルを大きく振り回しながら、嵐の様に敵の渦中に突っ込んでいく。全く恐ろしい。あれは真面目に相手するだけ時間を無駄にするタイプの厄介な敵だろうと2人は思わず苦笑する。

このバトルイベントは時間無制限。およそ1000体のガンプラが宇宙フィールドで入り乱れ最後のチームになるまで殺しあうという凶器のバトルだと公式サイトでの宣伝にはあった。まさかそれがただの謳い文句では無かったとは。

（いやほんと狂気じみているよ。良くサーバー落ちないとか純粹に疑問だよ全く。）

「おおっとお!!」

そんな風に彰人が一人考えに耽（ふけ）っていると、敵のAGE―FXなガンプラがバーストモードのまま彰人達に呐喊して来た。青色の綺麗な、それでいて殺意にあふれた閃光を間一髪の所で避ける。

（危ない危ない。）

AGE―FXはガンダムAGEに登場する最強格のMSだけあって早い、強い、見栄え良しと三拍子そろった機体だ。彰人はAGE―



FXから目を逸らさずプリズムガンダムのスラスターを稼働させ、直撃を避けるべく機体を動かし敵の突進を避ける。時折、隙が生まれた時には反撃のビームマグナムを放つ。だが悔しいことに何度やっても結果は同じだった。

AGE—FXの機体各所から伸びたビームサーベルの回転に阻まれ致命傷どころかかすり傷一つすら与えることが出来ない。あの可動域、頑強性の高さ。あれほどの完成度の高いガンプラは、彰人自身殆ど見たことが無かった。

今一つお互いに致命傷を当てられないまま、時間だけが無意味に過ぎて行く。その間にもAGE—FXの突撃に巻き込まれた不運なMSが機体を斬られ、抉られ次々に爆散していくのを横目に思わず彰人は総一郎に言葉を投げかけた。

「総一郎！このガンプラは俺が相手する！」

「分かったー！こっちもギリギリだけどね！」

総一郎の方は、見たこともないMSと交戦しているのが見えた。だが彰人はこのAGE—FXの相手でいっぱいだった。というよりもなんでこの敵は執拗に彼ばかりを狙うのか。彰人自身にもそれは理解出来ない様だった。

「くっ！しまった!？」

迂闊にも敵のFXバーストの直線状に入ってしまった事に慌てて気づく。彰人は咄嗟にシールドとリフレクターで受け止めるが、予想以上に衝撃が強すぎた様だ。撃力を真正面から受け止めたシールドがみしりと悲鳴を上げる。これでは長くは持たないだろう。彰人はシールドが完全に破壊される前にを手から離し、機体の軌道を反らす。紙一重だが避けることが出来た。しかし次は無いだろうという事実が彰人を焦らせる。

「良く避けたな。流石だよ神取彰人。”ブレイクデカール”なんか使わなくても強いじゃないか。」

彰人へと声をかける敵のプレイヤー。その声色は懐かしさと苛立ちが交じりあつた様な複雑な心境を慮らせた。

「お前……まさか？」

彰人自身、この声には聞き覚えがある。かつて彼のチームメイトだった男だ。名前はなんと言っただろうか。彰人はどうしても思い出せない。確かに覚えていたはずなのに、それなのにまるで記憶が霧に包まれたかのように曖昧だった。

「今更俺に何の用だ……っつと!!」

先程から馬鹿の一つ覚えの様に繰り返される突撃をぎりぎりで躲しつつ、振り向きざまにビームマグナムを放つがやはり効果は薄い。

(流石はAGE―FX……だなんて感心している場合じゃない！)

「お前がチームを辞めてからさ……散々だったんだぜ。」

「悪かった!!俺の事情に巻き込んでしまったのは本当に済まないと思っっている!」

「謝って済むとでも思ってるのか?本当にお前にはイライラさせられるな。」

「くっ……!」

「またお前に会えて良かったよ……お前のこの手で”やれる”のが

さあっ!!」

そう言い終えるとまたもAGEーFXが突撃してくる。高速軌道による一撃離脱戦法。シンプルだが、一番有効的な攻撃の仕方であると敵も理解しているようだ。

(なるほど。大きい口を叩くだけはある。だからこそ本気で挑まなければこいつには勝てないだろう。)

彰人はビームマグナムを背中にマウントし直すと、真っ向からAGEーFXのFXバーストを両手のビームトンファアを展開させると同時に受け止めた。

ビームトンファア越しに伝えられるビームの熱で装甲がぎしりと音を立てて軋み、プリズムガンダムの両腕のミラーコーティングが徐々に剥がされていく。

「どうした?このままじゃ機体は持たないぜ?」

「ああ。だがこれでいい。これがいいんだっ!」

彰人はプリズムガンダムを更に加速させAGEーFXの突撃速度を弱らせると同時に、バックパックをリフレクター状態に切り替えた後に切り離れた。

切り離れたリフレクターパックにビームマグナムを放ちビームを拡散、反射させる。反射されたビームがAGEーFXの背中に直撃。狙い通りメインブラスターを破壊。機動力を失い更に動きが鈍っていく敵のガンプラ。

「なっ……!?!リフレクタービッド無しで反射攻撃だ!!……最初からこれを狙ったか!」

動きの鈍ったAGE―FXにビームトンファーで更に追撃を仕掛け、少しづつではあるが敵の装甲を削る。

敵もビームサーベルを抜き反撃するものの、もう遅い。――ここは彰人の得意とする距離だった。

「あの時、お前らに疑いを持たせたのは悪かった。」

「彰人おおおおお!!」

「だけどよ……負けられないんだっ!!」

最後の攻撃といわんばかりにガーベラストレートで大きく敵機を切りつけた。

――居合切り。渾身の一撃が胴体を袈裟斬りにし、それが致命傷となったのだろうか。AGE―FXが完全に沈黙する。

「……はは。やっぱりお前、強いな。」

負けを悟ったのか、敵のパイロットが口を開く。

「今更なんだ。」

「お前がブレイクデカールに頼る奴じゃないってみんなわかった。だが……みんな誰かのせいにしたかったんだろうな。」

「俺の方こそ悪いな、あの時は酷いこと言っただけ。」

「……大和。」

大和と呼ばれた男の機体が臨界点に達したのか、AGE―FXが青色の輝きを失い、爆発に伴い火花を散らしながら宇宙に融けていく。

あの様子では大破は免れないだろう。

(思い出した……藤堂大和。)

「大和!!」

「馬鹿だな……そんな顔するなよ。悪いのはお前を一方的に傷つけた俺た……。」

最後まで言い終わらないうちに大和の機体が大きく爆発を起こす。GBAではガンプラにダメージが入らない分、機体が大破した場合はその機体のデータはロストする。どんな出来栄えの機体でも一度大破してしまえばその機体を使うことは出来ない。加えてこの戦闘は完全匿名性を保っているためプロフィール交換すら出来ない。

(ガンプラバトルを続けていたら、また会えるよな。いや、今度は俺の方から……必ず。)

彰人は正々堂々戦い抜いた大和に敬意を表した。右手をぴんと伸ばし額の前で揃える。敬礼のつもりだ。彼なりの、不器用な気遣いだった。それが大和に伝わったかは分からない。

(敵の反応が消えた?)

彰人たちの戦闘が終わったのか、画面上から敵の機体の反応が消えた。そのことに総一郎は安堵しつつも、目の前の敵に対して思考を巡らせる。彼自身見たことのないガンプラだった。体は非対称で歪なデザイン。頭は剣道のお面の様な不思議な被り物をしている。更に機体を変形させると、まるで「手」のような独特のフォルムに姿を変えた。

その不審な様子を観察していると、あろうことか敵はこちらを睨み

つけたまま突進する。厄介なことにビームサーベルのような光が機体各部から伸びているおかげで、この接近戦に向かないシビュラブリッツでは分が悪い。おまけに、Iフィールドでも積んでいるのかビームライフルの直撃を与えても不気味な程に手応えがない。

(なんなんだこのMSは。不自然な動きだ……！見たことのない武装……駄目だ、強い！)

総一郎は内心焦るが、焦ったとしてももこいつには勝てない。迫りくる敵のガンプラの攻撃の直線状に入らないようにシビュラブリッツを動かし敵の追撃から逃れる。こいつは強い。悔しいが防戦一方だ。敵の詳細が分からない以上こちらからも迂闊には攻撃できない。ブリッツの左手のランサーダートを半ばがむしやらに放つ。実弾が放たれ、敵の一瞬だけ動きが止まった。その隙を見逃さず、鎌で敵のガンプラを切りつけようと試みたが鎌を掴まれてしまう。

(なんて反応速度だ！だけどこれならどうだ！)

咄嗟にイーゲルシユテルンで鎌を撃ち破壊する。砕けた鎌の破片が飛び散った。だがこれは狙い通り、砕けた破片が敵に当たったようだ。敵の装甲とモノアイ稼働部に傷が入り、モノアイの動きが僅かながら遅くなった。

(よし。当てることが出来たぞ。)

「……桐谷総一郎君。随分と姑息(こそく)な真似をするじゃないか。」

「……!?なんなんだ君はっ!?僕を知っているのか?」

突然の敵の声に思わず総一郎は驚く。明らかに彼を知っている様だ。だが総一郎の方は心当たりがない。

(いや、何か聞いた事があるようなないような?)

「沙雪の彼氏だろ? お前イラつくんだよね。ああいういやいやしたの見せられるとさあつ!」

「あ、あてつけなのかつ!」

「悪いか!! ええ? 毎日毎日いやいやいやいやが。何が淫キヤよ! この勝ち組があ! 死ねや!」

「うおおおおお危ないっ!!」

敵のガンプラが手に変形すると同時にビームを放って来た。総一郎はそれをシールドで受け止めお返しに対艦ライフルを撃ち込む。読み通り、手に変形しているときはライフル弾が多少だが効くようだ。

「き、君も沙雪が好きなのか?」

「ああ! そうだよ!! 俺も子供のころからずっとあの子が好きだった! だからしたんだ! 7歳も10歳も12歳も15歳の時もだ!」

「な、何を?」

「愛の告白だろ!!!」

「こ……告白う?」

「それをお前はあ! 横からかつさらっていった! お前は俺の全てを奪ったんだ! どうせお前も彼女持ちというステータスが欲しかった

「んだらう！」

「ふざけるな！僕はそんな理由で沙雪を好きになつたんじゃない！」

「黙れえっ！」

「手」が怨嗟の炎のような怪しく煌めく炎を放ってくる。その執念じみた熱がシビュラブリッツの装甲を燻（いぶ）し、焼いていく。冷静さを失ったのか先ほどとは違い我武者羅な攻撃だ。だがその激しさの中に我を忘れた物特有の煩雑さが見て取れる。

（隙だらけだ……今ならっ!!）

シビュラブリッツはミラーージュコロイドを纏い敵のガンプラの背後の死角から対艦ライフルを放つ。一発一発では致命傷にならないかも知れない。だがそれすらも見越して同個所を連続して狙い撃ち続ける。少しづつだけど、衝撃に耐えられず装甲がひしゃげているようだ。

「調子に乗るな！」

手がぐるりとこちらに向き直り、再度ビームを放つ。その攻撃が運悪く対艦ライフルに当たり、総一郎は慌てて手から対艦ライフルを離すと同時にビームサーベルを抜いて手に斬りかかった。賭けだ。このビームサーベルが効かなければ、彼は負ける。だけど、たとえ負けるにしてもこの敵には真正面から斬りかかるのが礼儀だと思つたのだらう。どんな形であれ、この敵も沙雪が好きだったのだ。そんな人に対して姑息な戦いを仕掛けるのは何か嫌というか拭えない違和感を総一郎は覚えた。

真正面に切りかかった総一郎に対して「手」から展開された数本のサーベルがシビュラブリッツの肩に喰い込み、少しづつではあるが装



甲を溶かしていく。このままでは持たない。

だが、総一郎もビームサーベルを敵に突き刺し敵の装甲を溶断する。この距離ではIフィールドも効果は無いようだった。それが幸いしたのか、敵のガンプラのモノアイが光を失い、身体から力が抜けていくのが見て取れる。

間一髪だったが、総一郎は勝利したのだ。

「はあ、はあ、はあ……。」

理由はどうであれ、強敵だった事に変わりはない。勝てたのが幸いと言うべきだ。だが、勝利の余韻に浸る暇なんて無い。直ぐに戦闘の終わりを察した数体のジェガンが卑怯にも総一郎の方にビームライフルを放って来た。

(漁夫の利を狙うつもりか！こいつら……！)

残念だが、シビュラブリッツの装備は心許ない。総一郎はライフルの弾を避けた後にランサーダートをジェガンに放ち、動きを止め爪先にあるダガーナイフを即座に展開させそのままコックピットを貫いた。

(君たちにかまっている暇はないんだ！)

苛立ちを抑えながらも冷静になる様に努めた。敵のジェガンのビームライフルを奪い取り迷わず撃つと、ビームライフルの光に飲まれジェガンの上半身が蒸発する。どうやら、まだまだ戦いは続きそうだ。

戦闘開始から数時間後。

「はあく。何とか終わったか。」

「ど、どうやらその様だね。」

ひたすらに戦い抜くと、気づいたら辺りに敵の姿は見えなくなつて

いた。あれほどまでにいた数のMSの姿は無く、幾多ものガンプラの残骸が宙にゆらゆらと漂っている。

「彰人、本当にこれで終わりなのか？なんだか雰囲気を変ただけど。」

「ああ、何かおかしい。バトルが終わったならアナウンスが流れてもいいはずだ。それにエリックは……。」

「ボクは……。」

通信が入ったのち、彼等の下方からエリックの機体、シルベリアアストレイがこちらに接近して来る。ゴールドクレイドルと呼ばれる自慢の外装はぼろぼろに剥がれ素体だけの様だ。何とも痛ましい。

「大丈夫かエリック。」

彰人は満身創痍のエリックに声をかける。プライドの高いエリックに聞くのも野暮ではあるのだが、流石に気遣うのだろう。

「ああ、大丈夫さ。流石にあの数は辛かったけどネ。」

エリックが被弾したと思われる箇所をマニピレーターでさすりながら答えた。どうやら見た目以上にダメージは深刻そうだ。

「だけど見た感じ、もう僕らしかいないね。これなら戦いは終わったんじゃないのかな？」

総一郎の言葉に彰人は辺りを見渡す。確かに、敵影は既に見当たらない。あれほどまでにいた数のガンプラとログアウトしたのか、火線の光すら見当たらなかった。この状況に違和感を覚える。何故なら、通常バトルが終われば公式からアナウンスが流れるはずだからだ。

こうして敵影一つ見当たらないというのに、何の放送も流れないのは不自然極わりのない。隠れている敵が居ないか索敵しようとしたその時。不意に後ろから声が聞こえた。

「すみません。まだここに一人います……。」

「ええ!?!」

突然聞こえた声に驚くと同時に後ろを振り向き、その敵の様相に改めて驚きのあまり声をあげてしまう。当然だった。何しろこの敵は。

「HGUCネオ・ジオングだと!?!しかも黒い!!なんだこれは!」

「すみません……影が薄くて。僕、友達が居なくて、一人でこのネオジオングで来ました。」

「嘘だ!?!この大きさに気付かないはずが?後ろ?にいたのか!今の今まで!?!」

「すみません。本当にすみません……。僕の機体に近づく人はみんな灰にしてしまいました。」

「ごいつは驚いたネ。確かに、黒は宇宙のフィールドだと迷彩になるのかも知れないけど。」

「はい……隠れているつもりは無かったです。ただ、無我夢中で暴れていたらみんな粉々になっていました……。」

「格闘戦特化のネオ・ジオング!!何とも酔狂な機体だ。三代目メイジンが居たらお喜びになっただろうに。」

「どうする彰人？戦うしかないだろうけど。」

「どうするって……やるしか無いだろ。」

彰人は目の前の黒いネオ・ジオングを眺めながら、コックピットの中で苦笑いした。あまりにもでかすぎてこのオルタナガンダムのコックピットからでは全体を伺うことが出来ない。

「すまないが、ボクは離脱させてもらうよ。この機体では役に立てそうにないからね。」

突然、エリックが棄権を宣言した。

「エリック!?君がそんな弱気になるなんて!」

「総一郎……大丈夫だ。エリックは、後方に下がって、くれ!」

「……ああ、了解サ!」

「話し合いは終わりましたか?それなら僕も抵抗させてもらいますよ。この拳で、ね。」

「行くぞ総一郎!プリズムガンダム!」

「……やるしかないか。分かった!。」

彰人はプリズムガンダムのブースターで機体を加速し、ネオジオングに肉薄する。すぐさま数本の腕が殴りかかってくるが、それらを間一髪で避けながら攻撃を仕掛ける。一発一発が致命傷となりうる攻撃だ。油断は出来ない。

(こうした大型の機体とは何度かやりあったことがある……だが！)

彰人自身「接近戦に特化」したMAなんて化け物じみた色物とやり合うのは流石に経験が無い。懐に飛び込みビームトンファーで斬りつけるが、やはり表面の傷つけるだけで有効打は与えられない。余りにも装甲が厚すぎるからだ。

(なんだあれは……？ぐっ!?)

機体に大きな衝撃が流れたと思った途端、プリズムガンダムの左腕がもぎ取られる。確かに攻撃は避けたはずなのだが、先程の戦いのダメージが駆動系にも来ているのか。どちらにせよ不可解である事には変わらない。

「彰人！大丈夫!？」

「問題無い！」

この目の前の巨体は2人の攻撃にびくともしない。確実にダメーヅは与えているのだろうが、敵のネオ・ジオングが繰り出す打撃の連続技が激しすぎる。

迂闊に近づけばやられるが、かと言ってビームライフル等の飛び道具はIフィールドで防がれてしまう。シビュラブリッツの対艦ライフルも効果はあるようだが、致命傷を与えるのは難しいようだ。

(まるで象にナイフとピストルで戦いを挑むのと同じだ……まずいな。このままじゃあジリ貧になる。)

「中々粘りますね。僕が繰り出した攻撃は24発。僕のネオジオングノワールの猛攻にここまで耐えられる人はこれまで居ませんでしたよ。」

「それはどうも。」

「ごめんなさい。このままではフェアじゃありませんよね。どうです。棄権してもらえませんか。GBAでは破壊されたガンプラのデータはもう使えない。その機体が無くなるのは嫌でしょう?」

「重ねてお気遣いどうも……つとー!」

(そんな言われ方をすると腹が立つぜ、全く。)

彰人は6本の豪腕から繰り出される攻撃を避けながら、右手のビームトンファーで腕の基部を狙う。当然阻まれるだろう。それは読んでいた。だから千切れた左腕のビームトンファーを右手で掴んでそのままネオジオングに投げつける。コアユニットのシナンジュに向けて投げつけられたそれを防ごうとネオジオングが腕を二本使い庇う。すると攻撃が少しだけ緩んだ。

「今だ総一郎!」

「言われなくても!……ここだあつ!!」

総一郎が見えないはずの対艦ライフルをシナンジュに向けて放つ。実弾はIフィールドに阻まれず、真っ直ぐシナンジュ本体に向けて飛んだ。だが、その一撃もネオジオングの腕に阻まれる。だがこれでいい。3本の腕と俺が対応している腕の動きが止まった。この状況だけ見れば敵はこちらが打つ手は無いと思うだろう。だが大型の機体というものは死角があるものだ。”どうしても把握できない死角が”

「エリック!!」

「了解だよアキト。これでチェックメイトさ!!」

遙か後方からエリックがヴァルジキヤノンの一撃を放つ。速度を最速に調整され、Iフィールドすらも易々と貫くその一撃。真つ直ぐな起動を描きながら飛ぶその青色の火線。

彰人はプリズムガンダムのバックパックを切り離しエリックの一撃に重ねる様に配置した。狙うはコアユニット、シナンジュの真上。

——腕の防御ももはや間に合わない。圧倒的な火力を持つ必殺の一撃が、コアユニットのシナンジュを焼いた。

ガンプラバトル 後編に続く。

Side story 「バトルフェスタ 閉幕」

「どうだ！直撃だ!!」

コアユニットのシナンジュにエリックが放ったヴァルジキヤノンの蒼い一撃が突き刺さる。大きな爆発と共にネオ・ジオングの巨体が爆炎に吞まれるのが分かった。その様子から伺うに中破、いや大破は確実だろう。

だが、彼等の期待は大きく裏切られる事となる。爆炎が晴れたと同時に、その逞しい腕が彰人達を捕らえようとまともや腕を伸ばして来た。

(……なっ！あの攻撃でも無駄なのか?)

彰人は攻撃を避けながら横目でちらりとネオジオングノワールを眺めた。コアユニットと思われるシナンジュは先ほどの攻撃で跡形も無くなったにも関わらず、あの機体は尚もその動きを止めない。不可解だった。

「そんな馬鹿な!?コアユニットは破壊したはずだ！何故動けるんだ……!?まさか!」

「コアユニットがシナンジュ」だなんて、僕は一言も言っていないませんよ?いやむしろ、シナンジュの方がサブユニットなんです。」

彰人の声に対し、敵のパイロットは冷ややかに返答する。まるでお前は何を言っているのだというように。その声の調子に彰人は軽い苛立ちを覚えるが、努めて冷静になる様子を律した。

「そんな事が……可能なのか?」



彰人が改めて疑問口に出すと同時にはつと結論に至る。GBAでは確かに不可能では無い。ルール上、大型MAの使用はチームを組む事が出来ない代わりに3機分のコストを費やす事が出来るからである。

彰人達は1チーム1000コストでMS3機を賄うのに対してソロで参加している敵のプレイヤーは1000コストを丸々1機に費やす事が可能だ。そして何よりもMAにコアユニットを定めなければならぬというルールは無い。

(盲点だった。コアユニットを倒せば勝てるなんてルールは無いはずなのに……くそっ！)

態勢を立て直したネオジオンが彰人達に迫る。

何か使えるものはないかと辺りを確認するが、ヴァルジキヤノンの余波に巻き込まれた1本以外はほぼ無傷のままだ。近くにいた彰人と総一郎に豪腕が襲い掛かった。

(流石にこれはキツイぜー)

何本もの腕が機体を捕えようと迫る。紙一重で回避するものの、決定打になる攻撃が思いつかない。

何しろビームも効かない。ビームサーベルによる斬撃も有効では無い。ネオジオングの堅牢な装甲は要塞を彷彿とさせる。

だが、一つだけ勝てる方法があるとすれば。あの攻撃しかない。プリズムガンダムに装備している、「Gのレコンギスタ」に登場するあの兵装であれば可能性はある。

「こうなったら一か八かだ!!エリック!また俺にヴァルジキヤノンを撃て!!」

彰人は操縦桿を力強く握りながら叫ぶ。

「!?……正気か? いや分かった! キミを信じる!」

その叫びに答えると同時にエリックは引き金を引く。再度ヴァルジキヤノンから放たれた蒼い閃光がプリズムガンダムに迫る。

「また同じ攻撃をツ!させませんよツ!」

彰人達の動きを察したネオジオングが全ての腕を使つて防御態勢に入る。この咄嗟の判断ができると言う事は、このパイロットも中々の腕前であるという証明であった。

「今だっ!——フォントルピード!!」

着弾する直前、プリズムガンダムが装備するパーフェクトパックの上部から幾多もの蒼い結晶が放たれた。美しい水晶の様な球体がネオジオングノワールに襲いかかる。機体に接触した面はまるで抉られたかの様な傷が付いた。フォントルピードと呼ばれたその攻撃は、ネオジオングノワールの黒い装甲を削り取るだけでは無く消滅させているようだ。

「……馬鹿なツ!? なんですかその技は? 装甲が削り取られたのか!？」

見たことも無い攻撃に大きく動揺した敵パイロット。その動揺が操縦にもあらわれたのか、一瞬だけネオジオングの動きが止まる。そして、その隙を見逃すほど彰人達は弱くは無い。

「もう遅いっ!」

後方のヴァルジキヤノンから放たれた蒼い閃光がプリズムガンダムのミラーコーティングによって大きく拡散された。メガ粒子砲の光が放物線を描き拡散され、何本もの閃光がネオジオングノワールの露わになった可動部及び機関部に直撃する。少しずつではあるが溶

解していくネオジオングの装甲。宇宙世紀において無敵と謳われる機体の最期が近づきつつあった。

「そ、そんなっ！僕のネオジオングが！」

「その機体は確かに強い！けどなっ！」

”1人” ぼっちだけの力じゃあ限界もあるんだよ！」

「ぼっちっ……!!」

ゆつくりと黒色の巨人が力を失い、ゆらゆらと宇宙に漂う。ぼっちという彰人の言葉に心折られたのか、向こうからの反撃は無かった。

(一応警戒はしておくが、これ以上の追撃は無用だな。)

戦いの終わりを悟った彰人がプリズムガンダムの両手を下げる。同時にBattle ended と画面に表示された。バトルが終わった。残ったチームは彰人達のチームのみ。

——つまり、優勝である。

優秀したという実感は後から湧いて来るのか、沈黙の後、勝利を確信した彰人達が喜びの雄叫びをあげた。

「勝った……？勝った！勝ったあああっ!!」

「やった！やったぞおお！賞金は僕らのものだ！」

「よおーしよしよしよし！やったのさ！見てたかい椿！ボク達の勝利を！perfect game!!」

「おめでとうございます！映えある優勝はチーム「技術情報部」に決定いたしました！ーではここからは、チームの中の代表者“1名”に賞金が配られます！」

一瞬、空気が凍る。

——1名。そうアナウンスは流れていた。

つまるところ、優勝チームの中1名に優勝賞金が与えられる。先程まで歓声を上げていた彰人達はその言葉に思わず固まる。

「……1……名？」

困惑の表情を浮かべたまま、総一郎の表情が固まり動かない。信じられないのだろう。何しろあれほどまでに苦戦を重ねた後に掴んだ勝利なのだ。

ましてや10万円という一介の学生には十分過ぎるほどのポイントが手に入るのだ。

「そういうことが、総一郎、エリック……分かったな？」

彰人がある種の覚悟を決めた表情を浮かべたまま、2人に問いかけた。その問いの意味を理解できない2人ではない。

「ああ、分かっているさ。優勝チームの中から1名なら。」

「ボク達の中から1人を決めなければならないというのなら。」

「「生き残った奴にその資格がある！」」

三機のMSが各々の思惑を秘め、ビームサーベルを抜き臨戦態勢を取る。身内同士による最後の戦いが始まろうとしていた。

「で、結局彰人は負けちゃったんだ。」

桐谷脳外科病院の一室で文香は呆れた様子でいいながら、彰人の俯いた顔を眺めた。

「意外にも総一郎の奴が強くてな、負けたよ。」

「ふふ。残念だったね。」

「ああ。不覚だった……いや悔しいな。あいつがあそこまで力を付けているとは思わなかった。」

彰人はそう言うと、心底悔しそうな表情を浮かべる。文香はその様子を微笑ましそうに覗き込むと、

彰人の側に近寄る。身体が密着するほどに近い。文香のシャンプーの香りが微かに鼻をくすぐる。

「そっかあ。でも彰人は頑張ったんだから……えらいえらい。」

文香はそう言って、まるで子供をあやすかの様に彰人の頭を撫でた。

「おいおい、人を子供扱いするなよ。」

まんざらでもなさそうに、だが少しだけ恥ずかしそうな様子で彰人が答えると、彰人は文香の手から流れるべくそっぽを向いた。

「……大きな子供じゃないの。いや、どちらかという子犬に似てる

よねっ。寂しそうな時の顔とかつ、構ってもらえると嬉しそうにする  
とことかつ！」

「うるさいなあもう。」

「……そうだ。そんなことより、おばさんから貰ったりんご剥いてあげるから待っててね！」

そう言うと、彼女は椅子から立ち上がり部屋の外に向かう。りんごを取りに行くつもりなのだろう。

「ああ。なあ……隼人、お前の姉さんさー。何とかしてくれよー。最近俺に対してあたりが強くて困るぜ全く。」

文香を後ろ姿を見送った後、彰人は照れ臭そうに頭をかきながら隼人の顔を眺めた。睫毛の長い整った顔。文香を少しだけ男らしくした、そんな彰人の弟のような少年がすうすうと眠っている。改めてその顔を見る。分かってはいたものの、少しだけ心が痛んだ。

「赤国……か。やはりもう一度、あの国に行かないとな。あいつらのために。」

彰人は隼人の顔を眺めるのをやめ椅子から立ち上がるとそのまま窓から空を仰ぎ見る。ふと何気なく見た空は……不自然なほどに赤かった。夕映えなどという生やさしいものでは無い。

「真っ赤」である。まるで、世界の終わりの前兆の様な、禍々しい空の色をしている。

「何だ……？この空の色は……。」

不思議に思う間もなく、不意に病室が大きく揺れた。震度5か6は

あるだろう。かたかたと病室が揺れ隼人と体と機械を繋ぐチューブが外れそうになる。彰人は慌ててナースステーションへの呼び出しボタン押しと同時に隼人の体を支えようと彼に触れた。

「彰人さん……」

彼の体に触れた瞬間、隼人の声が頭に響いた。

何かあったのか、隼人の不安げな声が妙に脳裏にこびりつく。

(……まさか。向こうの世界で?)

——向こうの世界とこちらの世界は繋がっている。

あの時の未来の言葉が脳裏をよぎった。嫌な空想ばかりが浮かんでは消えていく。仮に向こうの世界で一大事が起きれば、この世界にも影響があるのだ。今までは特に何も無かった。だが、明らかにこの様子は普通では無い。

「……何かあったんだな。よし、待ってる隼人!!」

彰人は文香のりんごを待つ事なく、ある場所へと向かう。そしてその彰人の判断は正しいと彼等は今後知ることになる。

——「プリズムの瞳 最終章」に続く。

# 最終章「Another world」

## 最終章① 「総攻撃」

「黒国の総攻撃？」

赤国、某日。

隼人が哨戒飛行から戻った後、黒国に潜ませた諜報員から報告を受けたのは、夕方になってからだった。

敵国のエースパイロットである遠野未来と柊という2人が葬りさられた事により、暫くの間この3カ国に対しての攻撃は以前よりも取られなくなっていた。その為、隼人も直接的な戦闘は少なく、ムラサメガンダムの修理に専念することが出来た。

ムラサメガンダムは、赤国内においてコロニーから国を救った救国の紅竜として畏怖されているらしい。というのは、隼人が復帰してから知らされた事であった。英雄と呼ばれるのが不服なわけでは無い。ただ、自分の力では無いにも関わらず、そう呼ばれるが少しだけ隼人の胸に引つかかっていた。

小狼、カイン、フラン、そして彰人に沙雪。みんなの力が無ければ不可能だった。といよりも、隼人自身の力では黒国の柊には勝てなかった。その事実が突きつけられ、己の力不足を思い知らされる。

「……もつと強くならなければ。」

隼人は格納庫で整備されているムラサメガンダムを眺めながら、改めて決意を胸に秘める。ムラサメガンダムはあの戦い以降、武装をはじめとする全身が大破。今は青国や白国、さらに鹵獲した黒国のガフランからありあわせのパーツを装着している。規格もスラスターの位置もばらばら。かつての輝かしい愛機の姿とは似ても似つかない



異様な姿に隼人は深いため息を付いた。

(まさに——パッチワーク、だな。)

ムラサメガンダム、パッチワーク。格好はついたが、オリジナルの姿の時よりも性能は更に落ちているだろう。間に合わせのMSの基  
本性能などたかが知れている。

ムラサメガンダムにも限界が近づいている。後数回戦うのが限界  
だろうと隼人は判断せざるを得なかった。

念の為、アキサザメの改良プランも進めてはいるが、何しろ資材も  
人材も資金も、全てが不足していた。ビームライフルの量産化など夢  
のまた夢だった。

白国と青国との共同で開発した実弾ライフル。小狼のMSが何故  
か保有していた対艦ライフルを元に開発は進めていた。そのライフ  
ルは精度も良く、弾の調達も容易い。ガフラン程度の装甲ならば貫け  
るだろう。

「こっちが苦勞してMSを造っても、敵はダース単位でMSを出して  
くるな……。」

思わず頭を抱える。戦闘は専ら隼人の分野とはいえ、MSの操縦訓  
練の計画やライフルの実地訓練。ビームライフルの威力が減衰する  
とされる雨の日以外での戦闘。慣れない事ばかりだった。

外交や内政といった業務にフランやその他の部下が明け暮れる中、  
隼人に甘えは許されない。だがやらなければならぬ。それは彼が  
1パイロットで居た時の方が余程、気軽ではあった。

「お疲れのようですね。ハヤト様。」

隼人に用があつたのか、廊下から歩いて来たフランが声をかけた。  
はいと彼女から手渡された水を受け取る。

「ああ、フランか。ありがとう。」

水を受け取り、一口だけ飲む。疲れた身体に冷たい水が染み渡り、美味かった。渡したフランにも少しだけ疲労の色が見えたので、隼人は飲んだ水の容器を持ち、フランに尋ねた。

「フラン。君も疲れてるじゃないか。口は付けてしまったが……飲むか？」

「いえ……私は。お気になさらないで。」

一瞬動揺した後、フランは断った。その様子に一瞬疲れた頭は追いつかなかったが、さり気無くともでも無いことをしてしまったと隼人は内心慌てた。

「あーいや、その、なんだ。セクハラだったな……。こういうの。」

「セクハラ……とは？」

焦る隼人に対してフランは不思議そうに小首を傾げた。その小動物の様な仕草に少しだけ隼人が癒されたのは、彼の中だけの秘密だった。

あの戦い以降、フランとの距離が近くなった様な気がしていたからだ。隼人自身も、日に日に女らしくなっていくフランに戸惑いを覚えていた。これまでは大事な妹の様な存在だと思っていたのだが、それとはまた違った意味でフランの存在を感じ始めていた。

「いや何でもないさ。それよりも黒国の事なんだが。」

「はい。情報は確かな様です。青国と白国も同様に察知していると。」

「ああ、だが不思議だ。こうも情報が容易く手に入るとは……意図的に流しているのだろうか。」

「作為的な意図は感じます。ですが。」

「仮にその情報が事実なら、守りを更に固めなければならない。……他のみんなは？」

「皆、休んでいます。疲れているでしょうから。……ふふ。お優しいのですね。」

「優しい、か。」

そう呟くと、隼人は少しだけ俯いた。優しいとは言われたが、彼自身はそうは思っていなかった。

優しさは弱さの裏返しなのだ、非情になりきれない自分自身の甘さを自覚していた。だからフランの澄んだ瞳にその弱さが見透かされている様に感じて、つい黙ってしまう。

「……君も優しいよ。今日はもう疲れたろう。おやすみ。」

「はい。おやすみなさいませ。」

フランは丁寧に礼をした後、後ろを向いて去った。その後ろ姿はもう弱々しかつたあの頃の彼女の姿では無い。

(みんな、変わっていくな。僕も……変わらなくては。)

隼人はフランがくれた水をまた少しだけ飲むと、また格納庫に向かった。ムラサメガンダムとアキサザメの装備の状態をこの目で確

認したかったからだ。体は疲れてはいたが、何かしなければというどうしようも無い焦燥感に駆られていた。最後に残った少しばかりの水を飲み干す。喉を伝う水の冷たさが、心地よかった。

次の日、隼人はベッドから起きると同時に仕事に取り掛かる。

(もしも総攻撃が計画されているのなら、あの2人とも話し合わなければならぬ。)

隼人はまだ眠い目を擦りながら、部屋を抜け会議室に向かった。今日は午前中の内に小狼やカイネと話をして防衛線の構築に取り掛かる予定だった。

既にフランが話し合いの場を調整しているため、後は両国が来るのを待たなければならない。

(僕は何をやってるんだろうな。)

昔を振り返る。隼人がこの世界に来て、既に5年近くが経過しようとしていた。後数ヶ月もすれば、彼は17歳になる。

隼人自身はこの世界に来たことを後悔してはいない。いないつもりだが、時折、どうしようも無く姉や彰人との思い出が頭をよぎるのだ。

彼にとって唯一心から楽しいと思えた日々。あの日々を思い返すと、ちくりと胸が痛んだ。

(あの日から……何人殺した。何人殺された?)

本当は誰も死なせたたく無い。だがもがけばもがくほど日々の死傷者は増える一方だ。隼人も報告書で挙がる犠牲者の数に、心を痛めなくなり始めていた。

(数えられるだけ、報告にあがるだけで40万人……か。信じられないな。)

無機質な報告書の数字だけが事実として残っている事に、心がざわついた。死傷者推定40万人。その中には、隼人の恩師や彼を守るために散っていった仲間達も含まれている。自分が守れたはずなのに、守らなければならなかったのに守れなかった。その辛い事実を突きつけられているように感じた。

ガンダムがあれば全てを守れると思っていた。戦いを終わらせる事が出来ると信じていた。そんな幼かった頃の自分自身が心底、許せないでいる。

「いつ……いつになったら!!戦いは終わるんだ!……どうすればいいんだ。」

拳を強く、強く握りしめる。爪が食い込み、血が手のひらを伝って床に落ちた。赤い染みが床に敷かれた絨毯を汚す。その様子を見て悔し涙が滲んだ。

「おいおい、一人で何してんだ。」

不意に後ろから声をかけられ、驚きと同時に振り向く。居たのは小狼だった。いつも飄々とした彼らしからぬ、不思議そうな面持ちで隼人を眺めている。

「あーあ。折角良い素材使ってるのにな。勿体無い勿体無い……と！」

「君か、恥ずかしい所を見られたな。」

小狼にバレないようにそっと涙を拭く。女々しい男だと思われる

のは彼のプライドが許せなかった。

「謝んなよ。なあ……お前はさ、考えすぎなんだよ。」

背中越しに、小狼の声が聞こえた。

「……僕が、か？」

冷静な表情を浮かべて彼に向き直る。目の前の彼は複雑な表情を浮かべていた。

「ああ。まったく、いつもいつも辛気臭そうな面しやがって……ただ、一つ言えんのはさ。」

「なんだ。」

「人は死ぬぜ。俺達が戦おうが、戦わなろうがどっちでもな。黒国が存在する限り。」

「命を張っている以上は奪われるのも奪うのも当然だ。殺し合いの中で死ぬかもしれない。俺も、お前も、あのカインの坊ちゃんも。」

「……理解はしている。」

そう、小狼に言われずとも隼人は理解していた。人を殺すことの重みも、辛さも。虚しさも。そして敵の命を奪った対価として守った者の命の尊さも。嫌と言うほどに知り尽くしていた。だからこそこの不毛な戦いを終わらせたかった。だが根本的な解決策は無い。知恵を振り絞っても、隼人の力で為せることなど、大した事は無い。

「……だからこそ、終わらせたいんだ。」

「それは俺も同じだ。だから戦い抜くしかねえよ。あの黒国を潰して、俺かお前かカイネが生き残って、少しでもマシな世界って奴を作るしかない。」

「ああ……済まないな。小狼、僕は君をMSの操縦が上手いだけの粗野な男だと思っていたが、認識を改めるよ。」

慰められたのが少し恥ずかしく、隼人は茶化した。子供っぽい己を恥じながらも、彼の気遣いは素直に受け取れない。だからこうした憎まれ口をたたいてしまう癖がある。

「あのな。だからそういうところだっつーの！人を下に見やがって！」

「だ、駄目ですよ小狼さん！ハヤトさんも謝って下さい!!」

2人の話を聴いていたのか、扉を開け放ち部屋に入ってきたカイネが小狼を止めている。いつもと変わらない様子に少しだけ隼人は心が安らいだ。隼人が浮かべた微笑を挑発と受け取った小狼が、不敵な笑みを浮かべ帯刀していた刀を抜いた。

「……。貴方達、何をなさりに来たのかしら。」

不意に、静かだが確かに強い殺気の込められた声が3人に投げかけられる。咄嗟に固まる3人。

「ささ、敵は待つてはくれません。今後の方針を話し合いましょう。椅子にお座り下さい。いいですね!!」

「「はっ!!」」

彼女の静かな怒りに為す術はない。3人はしぶしぶ椅子に座る。この世界でも、女が強いのは変わらなかった。

——数時間後。

会議が終わり、3人は疲労のあまり椅子に座ったまま静かにたたずむ。

結論からすれば、有意義な会議だった。

黒国の国家間紛争が終わるまでの間、青国と白国からは武装及びMSの技術提供に加え、アキサザメ量産化の際の資金の補填。ニューヨークリアスの組織編成を約束。その代価として、赤国と隼人が持つMSの知識及びムラサメの可変機構技術の提供。

更に”アリスタ”と呼ばれるMSを浮かすための粒子を各国のガンダムに搭載させる事を確約した。更に更にMSのパイロット同士の連携のための訓練や武装の射撃訓練といった細目に至るまでをみっちり数時間かけて取りまとめた。

「フ、フランは凄いな。」

「これが私の仕事ですから。」

会議の主軸を担ったのはフランであった。隼人も加わっては居たが、各国の条約の細部までの知識で彼女には勝てなかった。カイネも幼いながら、白の国の現状を理解しており、フランと対等に議論を交わしていた。

「MSの操縦だけでは戦争には勝てないな。」

「”ガンダム”は圧倒的な武力ではありませんが、数は少ないですから。戦争は数ですよ。」



「ですがハヤト様。私達は貴方とガンダムの力を信じています。あれは象徴です。私達を護ってくれる力強さを感じます。」

そうはつきりと言うフランの瞳は澄んでいた。美しく眩い光を放つ瞳。隼人は時々、その瞳に吸い込まれそうになる。しかし、それを表に出すほど彼は幼くは無かった。ガンダムは強い。強いが、数は圧倒的に少ない。それが何よりも弱点。

「もしも、ガンダムが100機くらいいたら黒国にも勝てるのでしょうか。」

その時、カイネが沈黙を破った。100機。確かにそれだけいれば黒国が有していると噂される10万機ものガフランも倒せるかも知れない。が、そんなのは夢物語だった。

「あの時のサユキさんやアキトさんでしたっけ？あの人達の力があれ……。」

「それは駄目だ、カイネ。」

期待を込めて話すカイネに対し、隼人がピシヤリとつめたくいい放った。普段の隼人とは違うその様子にカイネはびくりと怯える。

確かに彰人のオルタナガンダムや沙雪のペーネロペーはこの世界では圧倒的な強さだろう。だが、隼人は命のやり取りにまた彼等を巻き込みたくは無かった。彰人のあの金色の機体は目立つ。隼人達もその痕跡を消しさるのには苦労したものだ。あの金色の機体は赤国が所有する隼人の機体。そう国民には説明した。かなり怪しい内容ではあったが、国民は勝利に浮かれるばかりで、肝心の機体にはあまり関心は無い様子だった。

（異世界……僕に取っては元の世界のガンダム。”ガンプラ”確かにあの力があれば。）

勝てる。

頭ではそう確信するが、生の殺し合いに元の世界の人間を巻き込みたくは無。この世界の事は、この世界のもので決着を付けるべきだと隼人は強く拘っていた。がその一方で、隼人の心の隅にある考えもあつた。

仮にあの世界の力で解決したなら、自分や、これまでに死んでいった人達の努力は無駄だったのでは無いだろうかと。隼人はそう考えてもいた。それは不謹慎だと頭を振って消そうとするが、心の中から生まれたその邪な気持ちの芽は少しずつ育っていた。

（またあの世界の力に頼ってしまったなら、僕は何のためにあの時、向こうの世界に帰りたいという未練を捨てた？天音隼人……甘えは捨てろ。）

複雑な表情を浮かべる隼人を心配そうにフランは眺めている。

またも嫌な沈黙が会議室内に流れたその瞬間。  
沈黙を破るかの様に爆音が城外から聞こえた。

奇襲

4人が反応する前に、その巨大なMSが城を壊し、隼人達の眼前に迫る。いや、何も無い空間から姿を突如現した。

炎に包まれながら現れたのは、巨大な黒龍に乗った黒い騎士。その姿は異様と表現せざるを得ない。余りにも現実離れた黒いMS。隼人自身も見た事がないMSの姿が炎に照らされていた。運悪く真

下に居た整備員や城の人間は即死だっただろう。徐々に炎に焦がされた死体の匂いが鼻をついた。

(この機能はミラーージュコロイドツ!?……いや違うっ! そんな生やさしいものじゃない! これはまさかつ! 本物の瞬間移動……!)

焦る隼人に対し、黒い騎士を模したMSが手に持つ剣先を隼人達に向けた。その絶対的な力は、隼人達の完全な負けを意味していた。

次回に続く。

## 最終章② 「激突」

その騎士の姿は、モビルスーツとしては異質だった。龍に跨（またが）った黒い騎士。世界全てを恨むかの様な暗く紅い瞳。左手には巨大な剣。右手には豪華な装飾が施された巨大な盾。あたかも中世の騎士を象ったかのような機体。その姿に隼人は目を奪われる。美しいとすら思った。絶対的な力の象徴が隼人の眼前に広がる。

その力にすがりたい。手に入れたいと彼は思った。思ってしまった。隼人が惚けていると、突如脳裏に“声”が響いた。

“赤国のパイロット。こちらの要求を告げる。その少女の身柄をこちらに引き渡されたい。そうすれば、こちらも無用な殺生をするつもりは無い。”

本国に攻め込んでいるにもかかわらず、淡々とした物言いであった。決まっていることをただ実行する機械の様な声色。脳裏に響くその声色は、隼人を冷静にさせるには充分だった。

「何故だ……?」

“答える必要は無い。渡さない場合は、このままビームサーベルを突き入れる。”

「……っ！畜生。何だっつんだお前は！何か喋りやがれ!!」

「そ、そうですよ！何か言ったらどうなんですか!？」

小狼とカイネが怒りに打ち震え叫ぶが、無視された。どうやら敵の声は2人には聞こえない様だった。しかし聞くまでも無い、と言うその余裕な態度に、誰しもが抵抗出来ないでいた。下手な動きをすればこいつは躊躇いなく自分達を殺すだろう。ということは、隼人自身が肌で理解していた。

「ハヤト様。」

打開策が思いつかず、身動きできない隼人達に対して、彼女がはつきりと隼人の目を見据えて答えた。翡翠色の美しい瞳が、揺れている。

「行って参ります。ですが……無駄死にするつもりはありません。ハヤト様、皆さま、どうかご無事で。」

いつもの様子で丁寧に礼をした。が、足がほんの少しだけ震えているのを隼人は見過ごせなかった。

（小狼とカインには聞こえないこの声が、フランと僕には聞こえている？）

彼女の様子から、どうやらフランも敵の意図を察知しているようだ。彼女は本来、感情を表情には出さないが、こうして仕草の一つ一つに現れる。そういう癖は、付き合いの長い隼人だからこそ知っていた事だった。

堪らず、彼女の手を握ろうとフランに近づこうとするが、モビルスーツのマニピレーターにフランの華奢な体が掴まれ、騎士のコックピットの中へと運ばれていく。運ばれていく最中でも、フランは決して怯えを表に出そうとはしない。

「フラン！フラン！フラーーンッ!!」

フランを載せたまま飛び去っていくMSの背中に何も出来ず、隼人はただただ叫んだ。声が枯れるまで叫ぶ。

「惚けるなハヤトオツ!!追うんだよ！俺達のMSで！あいつを！敵を

墮とすぞ！」

小狼にぴしゃりと頬を叩かれ正気に戻る。いい気つけになったのか、隼人達は格納庫に走った。格納庫内では爆発の余波でアキサザメの残骸があちこちに散らばってはいたが、幸いにもムラサメガンダム、ガンダムモナク、ガンダムファルシオンの3機は無事だった。

(もしもガンダムで無かったら……終わっていたな。)

流石ガンダムタイプの装甲は堅牢だと隼人は少しだけ誇らしく思いつながらコックピットに入る。機内のメインスイッチを押し、ムラサメガンダムを空へと飛翔させた。

空に上がると、赤国の様子がよく見てとれた。あちこちから火の手が上がり、空ではアキサザメとガフランが交戦しているのが目に入る。

ガフランは特務仕様なのか、黒に金色のカラーリングが施され、ライフルも大型ながら邪魔にならない様に持ち手部分が2つ取り付けられている。まるでF91のヴェスバーだ。そこから放たれた赤い閃光が数機のアキサザメを即座に蒸発させた。性能はかなり向上しているはずのアキサザメを瞬殺する敵のガフラン。乗り手もかなりの手練れの様だ。

「ハヤト!!」こいつの相手は俺達がやる！お前はあの機体を追え！」

ムラサメガンダムの前に、青色と黒のツートンカラーが彩られたガンダムモナクを駆りながら小狼が力強く叫ぶ。その声は先程とはまた違う。闘うことを決めた男の声であった。

「小狼……死ぬなよ！」

隼人はそんな小狼の姿を頼もしく感じた。この男が仲間で良かった。

たと。だがつい普段の様に憎まれ口しか叩く事しか出来ない。”この男が死ぬわけが無い”そう強く信頼していた。

「ハッ…この俺が負けるかってんだ！お前こそ死ぬなよ！」

「ああー！」

小狼に促され、隼人は敵のMSを追った。その後ろ姿を目で追いながら、ガンダムモナクとファルシオンは臨戦態勢を整えた。敵のカスタムされたガフランも2人に気付いたのか、アキサザメのコックピットにビームサーベルを突き入れとどめを刺した後、小狼達へと迫る。ガンダムモナクも応戦せんと対ビームコーティングされた黒い大太刀を振り抜きガフランに切り掛かった。真つ向勝負。それが小狼が敵と戦う際の基本スタイルであり、小細工を好まない彼らしさだった。ガフランとモナクの剣先が鏝迫り合う。

(こいつ…速い！)

たかが量産機風情と侮る事は出来ないと瞬時に悟る。モナクが鏝迫り合いの態勢まま、ガフランを蹴り飛ばした。そのまま後方に大きく飛ばされたガフランの先で、いまかいまかと待機していたファルシオンがガフランを削り取ろうと機体を近づける。だが、敵もそれは承知の上だったのか、背部ブースターを勢いよく吹かせ態勢を取り直しつつ2機に対しビームライフルを放つ。威力、範囲共に強力。直撃すればガンダムタイプといえど損傷は免れない。

(動きはいいーだが…俺の方が強ええっ!!)

紙一重。小狼は機体の上体を逸らしビームを回避した。回避すると同時にブースターで加速しながら下から上へと大太刀を振り上げガフランを斬りつけるために空を駆ける。流れる様な蓮撃がガフラ

ンの胴体を斬りつける事に成功した。ガフランは分が悪いと判断したのか更に高度を上げる。逃すまいと追撃を仕掛けるモナク。

「小狼さん!! 駄目です!」

カイネの声が後ろから聞こえる、が無視した。ガフランの胸部の電磁装甲が開き、そこから赤色調の光が顔を覗かせる。その光はこれまでに散っていった死者達の怨念の様に小狼には感じ取れた。

だが死者達に足を引つ張られるほど小狼は繊細ではなかったし、また彼自身幽霊などといったオカルトの類は信じてもいなかった。

ガンダムに詳しいものであれば、ガフランはトランザムシステムを搭載していたのだろうと気づいただろう。高速で動く機体は並のパイロットには脅威だが、生憎、小狼は並のパイロットでは無かった。

そのまま、モナクの振り上げた太刀がガフランを両断する。装甲をコックピットごと切り裂かれ、呆気なく空中で爆発する敵機。敵機を破壊したと確信し、光波推進の帯を少しずつ解きながらモナクは隼人が飛び立った方角を眺めた。その圧倒的な様子にカイネは畏れを抱いた。

いや、——見惚れていた。

その頃、隼人は敵機を追うためムラサメガンダムを最高速度で加速しながら大陸の空を飛んでいた。

パッチワークの機体バランスはお世辞にも良くはなかったが、直線的な動きを取る分には問題はない。

(整備士のみんなはいい仕事をしてくれた。)

改めて仲間がいてくれる事を頼もしく思った。みんなが国を守りたい、という想いが隼人の血肉となってムラサメガンダムを駆ることが出来る。戦争という行為は愚かしい行為ではあるが、こうして仲間



を実感すると、不思議と悪くないと思えた。

ムラサメガンダムのエンジンが唸りを上げながら大陸の空を駆ける。数百キロは飛んだだろうか。ようやく、先程の漆黒の機体の背中が見えてきた。

「見えたっ……追いついたぞ！そのMS！」

追いつかれた事を気付いたのか、黒色のモビルスーツは大きな弧を描きながら人形に変形する。見事な可変機構だった。モニター越しに見ても圧巻される程の巨体。それが軽々と変形して見せる事に、その完成度の高さには隼人は嫉妬を覚えざるを得なかった。

(何だこのモビルスーツは……。さっきはその強さに憧れはしたが……この機体、人の悪意が形になったとでもいうのか?)

飛行形態から人形へと変形した機体を見て隼人は言葉を失う。やはり異様な機体だった。いや、何処か違和感を覚える様相をしていた。

その機体の下半身はガフランによく似ている。それに反して上半身は宇宙世紀……のモビルスーツの特徴を併せ持っていた。隼人の目にはそれが何処かちぐはぐな印象を与える。ガンダムが連邦の白い悪魔なら、この機体は漆黒の悪魔だと。黒国の象徴に相応しい”ガンダム”であった。

「お前は……何だ？」

“天音隼人……やはり追いついたか。”

「お前達は……何故戦争を仕掛ける？それだけの技術があつて、モビルスーツまで保有していて、大勢の人が死んで殺されて、何故だ！何の意味がある!!」

“何故か、か。それは向こうの世界から来た君が一番良く知っていることでは無いのか？”

「……っ!!?どういう事だっ!!」

”遊びだからこそ、本気になれる。ガンダムが好きな子供だったなら、誰もが胸に抱く想像。君も一度は空想した事はないか？退屈な日常から離れて、異世界でガンダムに乗ってバトルをする。私はこの世界で、真正正銘、本物の人命がかかったガン普拉バトルがしたかった”

「……遊び!?正気で言っているのか!」

言葉が出てこない。いや、出るはずが無かった。”ガン普拉バトル”などという言葉は隼人がおおよそ5年ぶりに聞いた言葉だった。だが、久しいと郷愁に駆られる事は無い。あるはずが無い。

“私は、生まれつき身体に障害があつたせいで、子供の頃から気味悪がれ、蔑まされていた”

敵の声を聞き流しながら、隼人は自分がこの世界に来てからの数年を思い返した。

親しい人との温もり、出会い。そして戦いによって訪れる理不尽な別れと寂しさ。自分とムラサメガンダムを庇って倒れたかつての仲間墓前の前でこの戦争を終わらせると誓ったあの日から、隼人の戦いは始まった。だが戦っていくうちに、ある一つの疑問が脳裏を過ぎる。

何故圧倒的な戦力を有しているにも関わらず、敵はこちらを殲滅することもなく、制圧することも無く、ただ散発的な襲撃のみを繰り返すのか。それだけが理解出来ないままだった。だが、その疑問は最悪

の形で知ることとなる。

——ただの遊びだったのだ。

遠野未来の理由はまだ納得は出来た。こちらの世界とあちらの世界はつながっていて、日本のためにコロニーを落とすのだと。歪んではいたが、彼のひととなりも、その葛藤も彰人から聞いていたから、憎む事はしなかった。

だが、隼人の目の前にいるこの男は違っていた。  
楽しみのために、ガンプラを使い、人の命を奪う。

ただそれだけだ。戦いを仕掛ける根拠も、未来の様なある種の情熱も無い。それは虫をバラバラにして遊ぶ児戯。自分が強いと錯覚している人間の所作。

その狂気は現地民を虐殺したベトナム戦争しかり、ナチスのホロコーストしかり、300万の犠牲者を出した朝鮮戦争といった戦争の狂気そのものであった。独裁者が己の嗜虐心を満たしたいがための行為。隼人が苛立つ間もなく、男は声を荒げながら語りかけて来る。

“この世界ではガンプラの強さが力となる！私を蔑むものは誰もいない！！私を救ってくれたのは、この世界とガンダムなのだッッ！”

「……………違う！絶対に違うッッ！！ガンダムはそんな事を為すための力じゃ無い！平和と協調を体現する存在だ！」

この男は狂っている。その一言に尽きた。許しておく事が出来なかった。隼人の怒りはムラサメガンダムのビームサーベルとなり対艦ライフルとなって敵を攻撃するが、有効打を与える事が出来ない。機体は不思議な“膜”に覆われており、実弾もビームサーベルも弾かれてしまう。

(馬鹿な……………あれはフィールドでは無いのか!?)

“そんな情けない、時代遅れのガンダムの攻撃が通じるものかッ！私の太陽炉、核融合炉、エイハブリアクターの複合動力を源としたガンプラに及ぶものかッ！”

「黙れ!!ムラサメは……みんなが作ってくれたこのガンダムは……お前には負けないツツ!!」

隼人の怒りも、悲しみも、無力さも全て軽々と流されていく。命を軽んじる。それは、人が人にして良い事ではない。普段は冷静な隼人ではあったが、流石に頭に血が上るのを抑える事が出来なかった。いや、抑えられるはずなど無い。

隼人とムラサメガンダムの動きが精彩を欠いている事は、MSのモニター越しからでもフランには分かった。あの穏やかなハヤトが怒りに我を忘れ猛り狂っている。ガンプラ、遊び、細かい単語が持つ意味はフランには分からなかったが、敵が放つ一言一言がハヤトの神経を逆撫でしているのだと理解出来た。

(ハヤト様……いけません!)

目の前の男がこの戦争の要因であるなら、自分がこの男を殺すしか無い。フランは覚悟を決め大腿部に仕込んでいるナイフを取ろうとするが、縄で縛られ、身体を動かす事が出来なかった。

彼女の脳裏にはもどかしさばかりがつのる。仮に下手な動きをしている事が露呈すれば、この男は即座に自分を殺すだろう。そう判断出来るほど、この男は狂気に飲まれていた。

「くそっ!くそっ!!何故だ!何故攻撃が効かない!通れ!通れっつ!通れよおとおおっ!ふざけるなっ!ふざけるなっ!!ふざけるなあああっつ!!」

隼人がこれまでに身につけた全ての技術を合わせた渾身の一撃が全く通じない。その力の前には技術の差ではどうしても埋める事が出来ない。その昏い瞳を持つ龍の前では全てが無力だった。

“ふはははは！無駄なことだ！私が作り上げた最高品質のGNフィールドは頑丈だろう？……これだからガン普拉バトルは楽しい！！私の心を昂らせてくれる！”

勝ち誇った男の声が脳裏に響き隼人を苛立たせる。悔しいが、技術も国力も劣る隼人達にはなす術など無かった。ふと空を仰ぎ見ると、空が真っ赤に染まっている。その現実離れした光景は夕映えなどでは無い。

これから起こる事態を予期しているかの様だ。大陸中に血が流れる事態が訪れるのだろうか。

(僕は、僕はまた負けるのか……！彰人さん……！)

その空の色に敗北感と無力さを感じながら、隼人は目の前のモバイルスーツをただ睨みつけるしか無かった。

## 最終章③ 「産声」

「駄目なのか……？ 僕はまた負けるのか？」

頭部バルカンを発射し、対艦ライフルを放ち、虎の子のファンネルミサイルを撃ち尽くしても、そのバリアには擦り傷一つつける事が出来ない。ガンプラの技術の差は歴然だった。可動域に加え表面処理が丁寧に施された黒い装甲はたとえGNフィールドが無くともビームを弾くだろう。絶対的ともいえる機体の性能差は技術の差では覆しようが無かった。

「くっそおおお！ 駄目かっつっ!!」

怒りのあまりコンソールを叩く。だが、いくら猛り狂おうとも現状は変わらない。隼人の努力が、みんなの協力が届かない。通用しない。

全てを否定する圧倒的な力の差の前に隼人はなす術なく、悔しさを噛み締める余り奥歯が欠けた。

“新型ガフランの性能試験。貴様達で試すには丁度いい。今は初期型で単調な動きしか出来ないが、テストを重ねれば更に強くなれるだろう。”

—— だから、踏み台になりたまえ。

男はそう言い終えると、大地を震わす轟音と共に大陸の遙か向こうから何かが見える。いや、何かでは無い。ガフランの群れだった。以前からこうなる事を見越して準備していたのだろう。黒の国の総攻撃が始まろうとしていた。

「諦めてたまるものかッッ！」

隼人は苦々しく目の前の景色を見つめた。フランを乗せたまま、敵が後方に下がる。

(……)いつ！高見の見物を決めるつもりか！)

後方に控えていたガフランの群れはまるで田園を食い荒らす害虫の群れの様だ。

そしてその群れは、今から隼人達の暮らす国を食い荒らすのだろう。それは土地だけでは無い。あの国で暮らす人々の生命、積み重ねてきた伝統と思いい出を蹂躪する行為だ。許してはおけない。と隼人は唇を苦々しげに強くかみしめた。

だが、あれだけの数では相手では抵抗などたかが知れている。理解が追い付けば追いつくほど、隼人は無力さに打ちひしがれる。

「ハヤト様……無事ですか!!」

隼人を追いかけて来た大隊規模のアキサザメの編隊が、最悪のタイミングで追いついてしまった。

ガフランの群れがアキサザメの編隊に向けてビームを放つ。抵抗も虚しく、下蜻蛉(かこんぼ)のごとく次々と落とされていく機体。技術はアキサザメが勝っていたとしても数の差は埋められる程では無い。

「各機！ムラサメガンダムを守るぞ!!ガンダムを墮とさせるな!!ハヤト様はお下がりを！……ここは我々が食い止めます！」

残った精強なパイロットと誇り高い赤国の機体が急増品のビームサーベルを構えガフランの群れに向かって突っ込んでいく。だが悲

しい事に、その数の前では全くと言っていいほど抵抗にはなっていない。なかった。

「お前達！何処にさがれというんだっ！」

隼人は再度対艦ライフルを構え、ガフランの群れに放つ。ライフルから放たれた球がガフランに直撃し落としていく。しかし、一機二機落とした程度では戦力差など埋める事は出来ない。

ライフルの弾を撃ち尽くすと、ライフルを放り投げムラサメガンダムのビームサーベルでガフランの腕を切り落とす。その腕を力強く掴み、敵に向かって僅かに残ったエネルギーを発射した。その実戦慣れた動きは、数十の敵を相手取るには十分だが、いくらモビルドールの単調な動きとはいえど限界があった。

「いくら何でも数が多すぎるっ!!多勢に無勢だ!……アキサザメ各機は後退し編隊を再編成!急げよっ!」

「ハヤト様はっ!?!」

「出来るだけ時間を稼ぐっ!!安心しろ!こちらは“ガンダム”だ!心配するなっ!」

幸い、数の差はあるとは言えどMSの性能ではガフランよりもアキサザメ及び各国の量産機の方が勝っていた。合流し各国間で連携を取ることが出来れば勝機が掴めるかも知れない。瞬時に判断し、少しでも時間を稼ぐべくムラサメガンダムが大陸の空を飛ぶ。

その頃、小狼とカイネが隼人に合流するべく全力噴射で向かっていた。途中、何十機ものガフランを撃退したが、一向にその数を減らさない。

「まるで死者の群れだな。忌々しいぜ。」



「はい！僕達で倒せるかどうか……。」

「弱音を吐くなっ!!やるんだよ！やらなきゃみんな死ぬぞ！」

小狼はカイネを叱責しつつガンダムモナクが大太刀を振り回してガフランを一刀両断した。負けじとガンダムファルシオンもその体をぶつけガフランを消滅させていく。一体一体は弱い。が、数が多すぎ。

何か一掃できる兵装があれば良いのだが、あいにくモナクは一对一の戦い向けな機体で以上そうした制圧力の高い兵装は持っていなかった。カイネのファルシオンも拠点防衛向けの機体であり、多数を撃滅する機体では無い。相性は悪く、多勢に無勢という言葉が当て嵌まる状況であった。

(……ガンダムが100機いたらか！)

頭の中で己を叱咤激励しつつ、モナクが大太刀を再度両腕に構え直し、ガフランに振り下ろす。一回は防がれたが、腰に内臓された隠し腕で大太刀を器用に持ち変え、ガフランの頭部を切り裂いた。

(全く、切れ味の落ちない武器はありがたいぜ。)

この大太刀の出来は素晴らしい、と小狼は感心せざるを得なかった。これを作ってくれたあの彰人という男がまた来てくれたら、と願わずにいられなかったが、かぶりを振って甘い考えを捨てた。

(ん……なんだあの光は?)

光の瞬きの後、上空から多数のMSが現れたのを小狼は確認したが、すぐにガフランの群れが再度襲って来たため、そちらに対処せざ

るを得ない。

「くそっ！キリがない！」

隼人がムラサメガンダムをきりもみ飛行させながらガフランの胴体を切り裂いていく。が、手持ちのビームサーベルのエネルギーも残り少ない。撤退しようにも推進剤も、撤退を援護してくれる味方もいない。

(……まだだ！……ここで諦めてなるものかっ!!)

高みの見物を決め込んでいるあの機体も、フランにも、まだ何も出ていない。全力噴射。加速してガフランに体当たりをしかけ、脆いコックピットをマニピレーターで貫く。衝撃で歪んだが、構わない。貫いたガフランを持ち上げ、例の黒い機体に全力で投げつける。その黒い機体はシールドで防いだ。面倒くさそうにガフランを払い除けると、ついに黒い機体が仰々しくも動いた。己の勝利を確信したのだろうか、傲慢な動作だった。

“もうよい。十分なデータは取れた、な。”

気怠そうに呟きながら、黒龍はブースターを全力で噴射し、光波推進の光を放ちながら目にも留まらぬ速さで加速しムラサメガンダムへと迫る。隼人は残量少ないビームサーベルを構え、黒龍と咄嗟に鏖り合いになる。

「お前っ!!お前はっ!!何故フランを狙う!?!」

“……目的を達するにはこの少女の瞳が必要だ”

「……瞳!?!」

“この世界と我々が住む世界。往来する為に必要不可欠なアリス  
タ。それに似た作用を持つ瞳。この力を解明し独占出来れば、我々は  
まだ強くなれる……そのために大勢の犠牲を払った。これからも辞  
めるつもりは無い”

「……!!もう誰一人殺させはしない!!」

言葉では強がるが、ついにビームサーベルのエネルギーが尽きた。  
黒龍がビームサーベルを振り抜く前に隼人は蹴りを放ち黒龍と距離  
を取る。そしてなけなしの胸部バルカン砲の射撃を頭部に放つ。黒  
龍の視界を防いだ後、ムラサメガンダムがブラスターを全力で噴射し  
勢いをつけ鶏冠の様な頭部を思い切り殴りつけた。ガツンという強  
い衝撃が走り、マニピレーターがついに折れる。

“……つ!!貴様っ!”

「黙れ!僕の命に替えても、お前はここで殺す。必ず殺す……!!」

殴りつけた隼人のムラサメガンダムは腕は根本から折れた。だが、  
満身創痕の機体にも関わらず隼人の闘志は衰えなかった。

彼が本来持つ冷静さなどとうに吹き飛んでいた。頭部のデュアル  
アイが紅く妖しく激しく光る。その気迫に押されたのだろうか、黒龍  
が怖気付いた様に見えた。

“無駄な事を!貴様の機体ではGNフィールドは破れない!その  
折れた腕で何が出来る!出来はしないツツ!!”

「お願いです!逃げてください!ハヤト様っ!」

“この小娘が!黙らないか!”

男がフランの顔を殴りつけるのがモニター越しに見えた。見えた瞬間、隼人は己の中の何かが切れたのを感じた。

怒りは全ての原動力だ。

隼人は自身でも感知する前にムラサメガンダムを可変させ黒龍にぶつめた。衝突に耐えかねぼきりと折れる機首。歪む装甲、ぎりぎりの所で耐えていた電子機器が火花を上げながら弾け飛んだ。だがその怒りの突進の衝撃で黒龍の胴体が少しだけひしゃげ、後方へ勢い良く吹き飛ぶ。追撃をかけようとするが、ムラサメガンダムは動かなかった。隼人の操縦を一切受け付けず、地上へと落ちていく。とうとう限界を迎えたのだろう、隼人にはなす術が無かった。

「畜生……！まだ、まだ僕は。」

地上に激突する寸前。隼人は力強く目を見開き黒龍を睨みつけた。まるで、自分は死んでもお前は許さない。そんな怨念を込めた鈍く淀んだ瞳。

だが、激突の衝撃は一切訪れず、ゆっくりと地上へと降りていく。いや、それも適切な表現では無い。何かに支えられ降ろされているようだ。不自然な浮遊感に身を任せると、不意に聞き覚えのある声が聞こえた。

——隼人、頑張ったな。

「なっ……！！彰人さん!？」

優しい声が、聞こえた。全てを許してくれるかのような、受け入れ包み込んでくれるかのような優しい声。思わぬ登場に隼人が驚きの声を上げる。無理もない。2度と会えないと覚悟していた。それなのに彰人はここにいます。不思議に思わざるを得なかった。

「詳しい説明は後回しだ。俺のオルタナガンダムに乗れ。」俺達は残りのガフランを殲滅する。」

隼人の疑問に対し、彰人の返答はあっさりとしたものだった。

「こいつはお前が倒せ！お前の国はお前が護れ。お前なら出来る！」

話しながらも彰人はオルタナガンダムを下ろし、更にプリズムガンダムが持つビームマグナムを黒龍に向け放った。黒龍のGNフィールドがその火力に大きく揺らぐ。

男も、金色のガンダムの突然の登場に驚いたようだ。あの強力な黒龍とガフランの大群がたつた一機に怯えている。

「……はい……はいッ！」

「彰人君、そろそろ行こうか。あつ、隼人君、君とは後で沢山話そうね。後その機体とオルタナガンダムに面白い機能つけたから使って！」

その黒いガンダムは隼人の対艦ライフルによく似た武装を使い、ガフランを火球に変えていく。驚異的な精度の射撃に隼人は目を見張った。その機体も、プリズムガンダムと共に遠くへと飛び去っていく。

隼人は惚けた頭を無理やり叩き直すと、ムラサメガンダムのコックピットから降り、彰人ともう一機のガンプラを見送る。視線を落とすと、真下には彰人のオルタナガンダムが新しい主人を待ち兼ね、腹を開けていた。そのままコックピットに飛び乗り、コンソールを弄ってオルタナガンダムを起動させた。

「まさかこれは、合体機構!?オルタナガンダムと僕のムラサメガンダムが……?」

隼人は震える手でモニターに映し出されたロック解除のボタンを押す。すると、地上に墮ちたムラサメガンダムの両肩部が外れ、次に背中の両翼が外れ、そして象徴でもある頭部センサーが外れると、それらがオルタナガンダムの外装に装着されていく。

隼人はそれを黙って見ていた。いや、黙らずにはいられなかった。なぜならこのMSは、彰人と隼人が幼い頃に見た伝説のMSに酷似していたからだ。

”懐かしい”と思ったと同時に隼人の目から涙が溢れ出す。

——— 新たな機体が産声を上げた。